松山市文化財調査報告書 131

樽味高木遺跡

－12次・13次調査－

平成17・18年度国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

2009

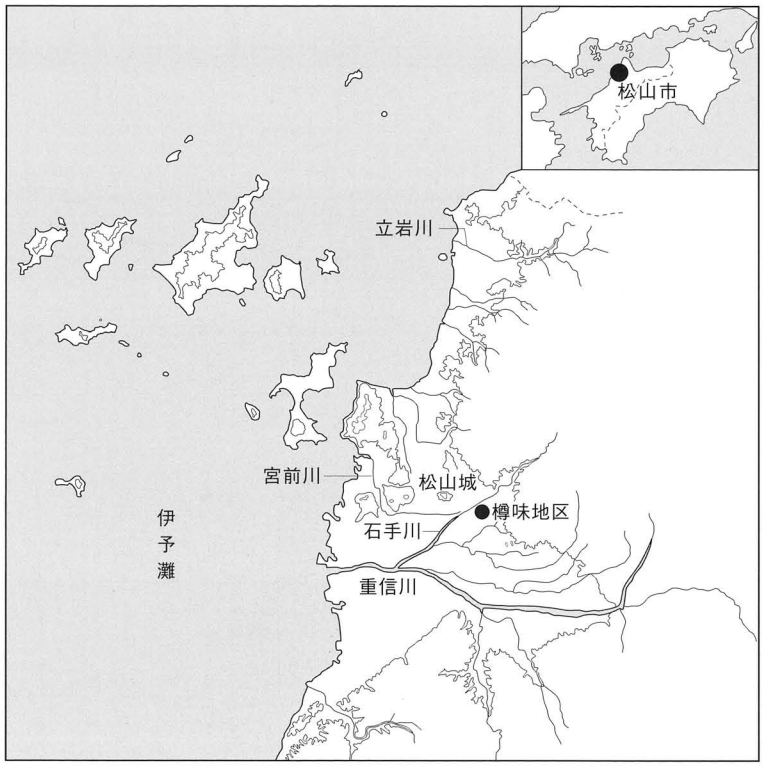
松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

樽味高木遺跡

たるみたかぎ

－12次・13次調査－

平成17・18年度国庫補助市内遺跡発掘調査報告書



2009

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

巻頭図版　樽味高木遺跡 12 次調査　全景（北より）

序

樽味地区は、松山平野を流れる石手川の南岸に位置します。平成10年の松山東部環状線の開通以来、急激に宅地開発が進み、これに伴う埋蔵文化財の発掘調査によって縄文時代から中世にかけての集落の様相を示す数多くの重要な遺跡が発見されてきています。

樽味高木遺跡12次調査は個人開発に伴う事前調査、13次調査は樽味地区における重要遺跡確認調査として国庫補助を受けて実施したもので、西日本有数の規模を誇る弥生時代後期末から古墳時代前期の大型建物3棟が発見された樽味四反地遺跡の北方それぞれ約100mと20mに位置します。調査では、弥生時代中期から古墳時代後期の竪穴住居や掘立柱建物を主体とした集落を形成する遺構や遺物と、古代から近世の集落関連遺構を検出しており、当時の集落構造や変遷を考える上で重要な手がかりとなるものです。

本書が、埋蔵文化財調査研究の一助として、さらに文化財保護思想の涵養とふるさと意識の醸成に寄与できますれば幸甚です。

終わりになりますが、発掘調査および報告書の刊行に、ご協力いただきました地権者ならびにお住まいの皆様をはじめ、関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成21年1月31日

松山市教育長

山　内　　泰

例　　言

1. 本書は、松山市教育委員会と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが、平成17・18年度に松山市樽味地区内で実施した、国庫補助による市内遺跡発掘調査の報告書である。

2. 遺構は、呼称を略号で記述した。ＳＢ：竪穴住居、掘立：掘立柱建物、ＳＤ：溝、ＳＫ：土坑、ＳＰ：柱穴、ＳＲ：自然流路、ＳＸ：性格不明遺構

3. 遺構の製図および遺物の実測･製図は、担当調査員の指示のもと、石丸由利子、猪野美喜子、金子育代、木西嘉子、多知川富美子、西本三枝、丹生谷道代、平岡直美、本多智絵、水口あをい、矢野久子、山下満佐子が行った。

4. 遺物の復元は、青野茂子、西川千秋、松本美代子、渡部英子が行った。

5. 遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

6. 本書に使用した方位はすべて座標北である。

7. 第４章自然科学分析は、株式会社古環境研究所に業務委託した。

8. 本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターが保管・収蔵している。

9. 写真図版は遺構撮影を担当調査員と大西朋子が行い、遺物撮影および図版作成は大西朋子が行った。

10. 本書の執筆は宮内慎一、河野史知が分担し、本書の編集は河野が担当し、猪野の協力を得た。

11. 製版写真図版

　製版　白黒図版－175線
　印刷　オフセット印刷
　用紙　本　　文　ニューＶマット
　　写真図版　ニューＶマット
　製本　アジロ綴じ

本　文　目　次

第１章　はじめに……〔河野〕… 1

1. 調査に至る経緯　2. 整理の経緯　3. 刊行組織　4. 地理的環境　5. 歴史的環境

第２章　樽味高木遺跡 12 次調査……〔河野〕… 9

1. 調査の経過　2. 層位　3. 遺構と遺物　4. 小結

第３章　樽味高木遺跡 13 次調査……〔宮内〕…93

1. 調査の経緯　2. 層位　3. 遺構と遺物　4. 小結

第４章　樽味高木遺跡 12 次調査における自然科学分析…〔株式会社 古環境研究所〕…137

Ⅰ. 試料と目的　Ⅱ. 植物珪酸体分析　Ⅲ. 花粉分析

第５章　調査の成果と課題……〔河野〕…146

挿　図　目　次

第１章　はじめに

第 1 図　調査地と周辺の主要遺跡分布図（縮尺 1：25,000）……4
第 2 図　調査地位置図（縮尺 1：2,000）……5

第２章　樽味高木遺跡 12 次調査

第 3 図　調査地区割図（縮尺 1：200）……10
第 4 図　土層図（縮尺 1：80・1：40）……11
第 5 図　遺構配置図（縮尺 1：100）……13
第 6 図　ＳＢ２測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：60・1：4）……15
第 7 図　ＳＢ６測量図（縮尺 1：60）……16
第 8 図　ＳＢ６出土遺物実測図（縮尺 1：4・1：2・1：1）……17
第 9 図　ＳＢ８測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：60・1：4）……18
第 10 図　ＳＢ９測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：60・1：4）……19
第 11 図　ＳＢ 17 測量図（縮尺 1：60）……20
第 12 図　ＳＢ 17 出土遺物実測図（縮尺 1：4・1：2）……21
第 13 図　周溝１測量図（縮尺 1：60）……22
第 14 図　周溝１出土遺物実測図（縮尺 1：4）……23
第 15 図　ＳＫ３測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30・1：4）
第 16 図　ＳＫ９測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30・1：4）……24
第 17 図　ＳＢ１測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：60・1：3）……25
第 18 図　ＳＢ３測量図（縮尺 1：60）
第 19 図　ＳＢ４測量図（縮尺 1：60）……26
第 20 図　ＳＢ４出土遺物実測図（1）（縮尺 1：3）……27
第 21 図　ＳＢ４出土遺物実測図（2）（縮尺 1：3）……28
第 22 図　ＳＢ４出土遺物実測図（3）（縮尺 1：3）……29
第 23 図　ＳＢ４出土遺物実測図（4）（縮尺 1：2）……30
第 24 図　ＳＢ５測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：60・1：3・1：2）……31
第 25 図　ＳＢ７測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：60・1：3）……32
第 26 図　ＳＢ 10 測量図（縮尺 1：60）……33
第 27 図　ＳＢ 10 出土遺物実測図（縮尺 1：3・1：2・1：1）……34
第 28 図　ＳＢ 11 測量図・出土遺物実測図（1）（縮尺 1：60・1：3）……35
第 29 図　ＳＢ 11 出土遺物実測図（2）（縮尺 1：4・1：2・1：1）……36
第 30 図　ＳＢ 12 測量図（縮尺 1：60）……37
第 31 図　ＳＢ 12 出土遺物実測図（1）（縮尺 1：3）……38
第 32 図　ＳＢ 12 出土遺物実測図（2）（縮尺 1：3）……39
第 33 図　ＳＢ 12 出土遺物実測図（3）（縮尺 1：4・1：2）……40
第 34 図　ＳＢ 13 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：60・1：3）……41
第 35 図　ＳＢ 14 測量図（縮尺 1：60）……42
第 36 図　ＳＢ 15 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：60・1：3）……43

第37図　ＳＢ16測量図・出土遺物実測図（縮尺1：60・1：3）……44
第38図　ＳＢ18測量図（縮尺1：60）……45
第39図　ＳＢ19測量図（縮尺1：60）
第40図　掘立1測量図・出土遺物実測図（縮尺1：60・1：3）……46
第41図　掘立2測量図・出土遺物実測図（縮尺1：60・1：3・1：2）……47
第42図　掘立4測量図・出土遺物実測図（縮尺1：60・1：3）……48
第43図　掘立5測量図・出土遺物実測図（縮尺1：60・1：3）……49
第44図　掘立6測量図・出土遺物実測図（縮尺1：60・1：3・1：2）……50
第45図　掘立7測量図・出土遺物実測図（縮尺1：60・1：3・1：2）……51
第46図　ＳＫ1測量図（縮尺1：30）……52
第47図　ＳＫ1出土遺物実測図（縮尺1：3）
第48図　ＳＫ2測量図・出土遺物実測図（縮尺1：30・1：3・1：2）……53
第49図　ＳＫ4測量図・出土遺物実測図（縮尺1：30・1：3・1：2）……54
第50図　ＳＫ8測量図・出土遺物実測図（縮尺1：30・1：3）……55
第51図　ＳＫ10測量図・出土遺物実測図（縮尺1：30・1：3・1：2）……56
第52図　ＳＫ11測量図・出土遺物実測図（縮尺1：30・1：3）……57
第53図　ＳＤ8測量図・出土遺物実測図（縮尺1：30・1：3・1：2）……58
第54図　ＳＸ2測量図（縮尺1：30）……59
第55図　ＳＸ2出土遺物実測図（縮尺1：4・1：3・1：2）……60
第56図　ＳＸ1測量図（縮尺1：30）……61
第57図　ＳＸ1出土遺物実測図（縮尺1：3・1：2）……62
第58図　掘立3測量図・出土遺物実測図（縮尺1：60・1：3）……63
第59図　ＳＫ7測量図・出土遺物実測図（縮尺1：30・1：3）……64
第60図　ＳＤ1出土遺物実測図（縮尺1：3・1：2）……65
第61図　ＳＤ2出土遺物実測図（縮尺1：3・1：2）
第62図　ＳＤ1～ＳＤ3測量図（縮尺1：100）……66
第63図　ＳＤ3出土遺物実測図（縮尺1：3・1：2）……67
第64図　ＳＫ5測量図・出土遺物実測図（縮尺1：30・1：2）……68
第65図　ＳＫ6測量図（縮尺1：30）……69

第3章　樽味高木遺跡13次調査

第66図　調査地測量図（縮尺1：300）……94
第67図　調査区東壁・南壁土層図（縮尺1：30）……97
第68図　調査区西壁・北壁土層図（縮尺1：30）……99
第69図　遺構配置図（縮尺1：100）……101
第70図　ＳＫ1測量図・出土遺物実測図（縮尺1：30・1：4・1：2）……103
第71図　ＳＫ2測量図・出土遺物実測図（縮尺1：30・1：4）……104
第72図　ＳＫ5測量図・出土遺物実測図（縮尺1：30・1：4）
第73図　ＳＫ6測量図・出土遺物実測図（縮尺1：30・1：4）……106
第74図　ＳＫ4・ＳＫ7測量図（縮尺1：30）
第75図　ＳＢ3測量図（縮尺1：50）……108

第76図　ＳＢ３出土遺物実測図（1）（縮尺１：４・１：２・２：３）……109
第77図　ＳＢ３出土遺物実測図（2）（縮尺１：1）……110
第78図　ＳＢ２測量図（縮尺１：50）……112
第79図　ＳＢ２出土遺物実測図（縮尺１：４・１：２・２：３・１：1）……113
第80図　ＳＢ１測量図（縮尺１：50）……115
第81図　ＳＢ１出土遺物実測図（縮尺１：４・２：3）……116
第82図　ＳＫ９測量図（縮尺１：30）……117
第83図　ＳＫ９出土遺物実測図（縮尺１：4）……118
第84図　掘立１測量図（縮尺１：50）……119
第85図　ＳＤ１・ＳＤ２測量図（縮尺１：30）……120
第86図　ＳＫ８測量図・出土遺物実測図（縮尺１：30・１：4）……121
第87図　ＳＫ３測量図（縮尺１：30）……122
第88図　ＳＰ出土遺物実測図（縮尺１：４・２：3）……123
第89図　第Ⅵ層・地点不明出土遺物実測図（縮尺１：4）……124

第４章　樽味高木遺跡12次調査における自然科学分析

第90図　植物珪酸体分析結果……140

表　目　次

第１章　はじめに

表１　調査地一覧……1

第２章　樽味高木遺跡12次調査

表２　竪穴住居一覧……71
表３　竪穴住居の炉・カマド一覧
表４　掘立柱建物一覧
表５　溝一覧……72
表６　土坑一覧
表７　性格不明遺構一覧
表８　ＳＢ２出土遺物観察表（土製品）……73
表９　ＳＢ６出土遺物観察表（土製品）
表10　ＳＢ６出土遺物観察表（石製品）
表11　ＳＢ６出土遺物観察表（装身具）……74
表12　ＳＢ６出土遺物観察表（鉄製品）
表13　ＳＢ８出土遺物観察表（土製品）
表14　ＳＢ９出土遺物観察表（土製品）
表15　ＳＢ17出土遺物観察表（土製品）……75
表16　ＳＢ17出土遺物観察表（石製品）
表17　周溝１出土遺物観察表（土製品）
表18　ＳＫ３出土遺物観察表（土製品）……76

表 19　ＳＫ９出土遺物観察表（土製品）……76
表 20　ＳＢ１出土遺物観察表（土製品）
表 21　ＳＢ４出土遺物観察表（土製品）……77
表 22　ＳＢ４出土遺物観察表（石製品）……79
表 23　ＳＢ４出土遺物観察表（鉄製品）
表 24　ＳＢ４出土遺物観察表（装身具）
表 25　ＳＢ５出土遺物観察表（土製品）
表 26　ＳＢ５出土遺物観察表（石製品）……80
表 27　ＳＢ７出土遺物観察表（土製品）
表 28　ＳＢ 10 出土遺物観察表（土製品）
表 29　ＳＢ 10 出土遺物観察表（装身具）……81
表 30　ＳＢ 10 出土遺物観察表（鉄製品）
表 31　ＳＢ 10 出土遺物観察表（遺存体）
表 32　ＳＢ 11 出土遺物観察表（土製品）
表 33　ＳＢ 11 出土遺物観察表（石製品）
表 34　ＳＢ 11 出土遺物観察表（装身具）
表 35　ＳＢ 11 出土遺物観察表（鉄製品）
表 36　ＳＢ 12 出土遺物観察表（土製品）……82
表 37　ＳＢ 12 出土遺物観察表（石製品）……83
表 38　ＳＢ 12 出土遺物観察表（装身具）
表 39　ＳＢ 12 出土遺物観察表（鉄製品）……84
表 40　ＳＢ 13 出土遺物観察表（土製品）
表 41　ＳＢ 15 出土遺物観察表（土製品）
表 42　ＳＢ 16 出土遺物観察表（土製品）
表 43　掘立１出土遺物観察表（土製品）……85
表 44　掘立２出土遺物観察表（土製品）
表 45　掘立２出土遺物観察表（石製品）
表 46　掘立４出土遺物観察表（土製品）
表 47　掘立５出土遺物観察表（土製品）
表 48　掘立６出土遺物観察表（土製品）
表 49　掘立６出土遺物観察表（石製品）……86
表 50　掘立７出土遺物観察表（土製品）
表 51　掘立７出土遺物観察表（鉄製品）
表 52　ＳＫ１出土遺物観察表（土製品）
表 53　ＳＫ２出土遺物観察表（土製品）
表 54　ＳＫ２出土遺物観察表（石製品）……87
表 55　ＳＫ４出土遺物観察表（土製品）
表 56　ＳＫ４出土遺物観察表（石製品）
表 57　ＳＫ８出土遺物観察表（土製品）
表 58　ＳＫ 10 出土遺物観察表（土製品）

表 59　ＳＫ 10 出土遺物観察表（石製品）……88
表 60　ＳＫ 11 出土遺物観察表（土製品）
表 61　ＳＤ８出土遺物観察表（土製品）
表 62　ＳＤ８出土遺物観察表（石製品）
表 63　ＳＸ２出土遺物観察表（土製品）
表 64　ＳＸ２出土遺物観察表（石製品）……89
表 65　ＳＸ１出土遺物観察表（土製品）
表 66　ＳＸ１出土遺物観察表（石製品）
表 67　掘立３出土遺物観察表（土製品）
表 68　ＳＫ７出土遺物観察表（土製品）……90
表 69　ＳＤ１出土遺物観察表（土製品）
表 70　ＳＤ１出土遺物観察表（鉄製品）
表 71　ＳＤ１出土遺物観察表（銭貨）
表 72　ＳＤ２出土遺物観察表（土製品）
表 73　ＳＤ２出土遺物観察表（鉄製品）
表 74　ＳＤ３出土遺物観察表（土製品）
表 75　ＳＤ３出土遺物観察表（鉄製品）
表 76　ＳＫ５出土遺物観察表（鉄製品）

第３章　樽味高木遺跡 13 次調査

表 77　検出遺構一覧……96
表 78　竪穴住居一覧……126
表 79　掘立柱建物一覧
表 80　溝一覧
表 81　土坑一覧
表 82　ＳＫ１出土遺物観察表（土製品）……127
表 83　ＳＫ１出土遺物観察表（石製品）
表 84　ＳＫ２出土遺物観察表（土製品）
表 85　ＳＫ５出土遺物観察表（土製品）
表 86　ＳＫ６出土遺物観察表（土製品）
表 87　ＳＢ３出土遺物観察表（土製品）
表 88　ＳＢ３出土遺物観察表（石製品）……128
表 89　ＳＢ３出土遺物観察表（鉄製品）
表 90　ＳＢ３出土遺物観察表（玉類）
表 91　ＳＢ２出土遺物観察表（土製品）……131
表 92　ＳＢ２出土遺物観察表（石製品）……132
表 93　ＳＢ２出土遺物観察表（鉄製品）
表 94　ＳＢ２出土遺物観察表（玉類）
表 95　ＳＢ１出土遺物観察表（土製品）……133
表 96　ＳＢ１出土遺物観察表（石製品）……134

表 97　ＳＫ９出土遺物観察表（土製品）……134
表 98　ＳＫ８出土遺物観察表（土製品）……135
表 99　ＳＰ出土遺物観察表（土製品）
表 100　ＳＰ出土遺物観察表（石製品）
表 101　第Ⅵ層出土遺物観察表（土製品）……136
表 102　地点不明出土遺物観察表（土製品）・

第４章　樽味高木遺跡 12 次調査における自然科学分析
表 103　植物珪酸体分析結果……139
表 104　花粉分析結果……144

写真図版目次

第２章　樽味高木遺跡 12 次調査
図版１　1. 重機による掘削（北より）
　　2. 調査風景（北東より）
図版２　1. 遺構検出状況（北東より）
　　2. 南壁土層（北より）
図版３　1. ＳＢ 11 遺物出土状況（南より）
　　2. ＳＢ 11 カマド検出状況（南より）
　　3. ＳＢ 17 遺物出土状況（東より）
図版４　1. 遺構完掘状況（南西より）
　　2. 遺構完掘状況（西より）
図版５　1. 遺構完掘状況（北より）
　　2. 遺構完掘状況（北より）
図版６　1. ＳＢ６出土遺物
　　2. ＳＢ９出土遺物
　　3. ＳＢ 17 出土遺物
図版７　1. 周溝１出土遺物
　　2. ＳＢ４出土遺物
　　3. ＳＢ 10 出土遺物
図版８　1. ＳＢ 11 出土遺物
　　2. ＳＢ 12 出土遺物
図版９　1. 出土遺物（ＳＢ 12・ＳＢ 15・掘立２・ＳＸ１・ＳＸ２・ＳＤ１・ＳＫ５）

第３章　樽味高木遺跡 13 次調査
図版 10　1. 調査前全景（南西より）
　　2. 西壁土層（東より）
図版 11　1. 北半部遺構検出状況（南より）
　　2. 南半部遺構検出状況（北より）
図版 12　1. 北半部完掘状況（南より）
　　2. 南半部完掘状況（北より）
図版 13　1. ＳＫ１検出状況（北より）
　　2. ＳＫ１断面（北東より）
　　3. ＳＫ２検出状況（北より）
図版 14　1. ＳＢ２・３検出状況（北より）
　　2. ＳＢ３完掘状況（西より）
図版 15　1. ＳＢ３床面検出状況（南より）
　　2. ＳＢ３遺物出土状況（南より）
図版 16　1. ＳＢ２完掘状況（西より）
　　2. ＳＢ１完掘状況（北より）
図版 17　1. ＳＫ９完掘状況（西より）
　　2. 作業風景（東より）
図版 18　1. 出土遺物（SK1・SK2・SK6・SB３①）
図版 19　1. 出土遺物（ＳＢ３②・ＳＢ２・ＳＢ１①）
図版 20　1. 出土遺物（ＳＢ１②・ＳＫ９・ＳＰ 088・ＳＰ 105・ＳＰ 187・第Ⅵ層・地点不明）

第４章　樽味高木遺跡 12 次調査における自然科学分析
　　植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真
　　花粉・胞子の顕微鏡写真

第1章　はじめに

1. 調査に至る経緯

平成17年度と平成18年度に樽味地区における国庫補助事業として発掘調査を実施するにあたり、松山市教育委員会文化財課(以下、文化財課)と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター(以下、埋文センター)は委託契約を結び、樽味地区における本発掘調査と重要遺跡確認調査を実施することになった。

平成17年度は、松山市樽味4丁目247番における個人開発に伴う事前調査として、樽味高木遺跡12次調査を実施し、調査対象地とし、平成18年度は松山市樽味4丁目238番1において、重要遺跡確認調査として樽味高木遺跡13次調査を実施した。

申請地は松山平野でも有数の遺跡地帯で、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『№81樽味遺物包含地』内にある。申請地周辺では、これまでに数多くの発掘調査が行われており、愛媛大学構内の樽味遺跡(1～6次調査)、北東の樽味立添遺跡(1～3次調査)、南の樽味遺跡四反地(1～13次調査)、樽味高木遺跡(1～11次調査)などの調査が実施され、弥生時代から古墳時代にかけての拠点的な集落があることが解明しつつある。特に南約100mには弥生時代後期末から古墳時代前期の大型建物3棟を検出した樽味四反地遺跡の6･8･13次調査があり、松山平野で注目される重要な地域である。発掘調査は、埋文センターが主体となり樽味高木遺跡12次調査は平成17年6月から3ヶ月間、樽味高木遺跡13次調査は平成18年4月から2.5ヶ月間発掘調査を実施した。

発掘調査に至るまでの詳細は第2章以降の各調査報告で行うものとする。

2. 整理の経緯

整理作業は、文化財課と埋文センターが委託契約を結び、12次調査は平成18年4月～平成19年3月、13次調査は平成19年4月～平成20年3月までの間に出土遺物の実測や測量図等の作図等を行い、平成20年度には埋文センター内にて報告書刊行に伴う編集作業を実施した。

表1　調査地一覧

遺跡名	現住所	面積（㎡）	調査期間
樽味高木遺跡12次調査	樽味4丁目247番	517	平成17年6月1日～同年9月2日
樽味高木遺跡13次調査	樽味4丁目238番1	217	平成18年4月17日～同年6月30日

3. 刊行組織（平成21年1月31日現在）

松山市教育委員会　教育長　山内　泰
事務局　局長　石丸　修
企画官　仙波　和典
企画官　古鎌　靖
企画官　岸　紀明
文化財課　課長　家久　則雄
主幹　森　正経
主幹　森川　惠克

財団法人松山市生涯学習振興財団　理事長　中村　時広
事務局長　吉岡　一雄
埋蔵文化財センター　所長　丹生谷博一
次長　折手　均
次長　重松　佳久
調査担当リーダー　栗田　茂敏
教育普及担当リーダー　梅木　謙一
調査担当　宮内　慎一
調査担当　河野　史知
（現在：教育普及担当）
調査担当　大西　朋子
（写真担当）

4. 地理的環境

松山平野は、愛媛県のほぼ中央部に位置し、伊予灘と斎灘に面し、南東部には石鎚山系、北部には高縄山系が聳える。松山平野中央部から東部にかけ一級河川の重信川とその支流である石手川が流れている。この二つの河川は高縄山地と石鎚山に水源を発し、開析谷を形成しながら平野を流れ、平野西部で石手川が重信川に合流した後、西方の伊予灘に流出する。よって平野西部で扇状地堆積物や氾濫原堆積物、三角州堆積物から形成されている。

本遺跡群の所在する桑原地区は、石手川がつくる扇状地の扇央、標高 39 ～ 40m に立地しており、樽味遺跡をはじめとして弥生時代から中世に至る遺跡が数多く存在している。

5. 歴史的環境

本遺跡周辺には、樽味遺跡をはじめとして数多くの遺跡が存在している。主な遺跡についてその概要を時代別にまとめる。

旧石器時代

松山平野においては、旧石器時代の明確な遺構は確認されていない。ただし、樽味遺跡 1 次調査、樽味四反地遺跡 1 次調査には、ポケット状に堆積した AT 火山灰（23,000 年前）が確認され、束本遺跡 4 次調査には AT 火山灰の一次堆積が確認されている。

縄文時代

束本遺跡 4 次調査からは、アカホヤ火山灰（6,300 年前）の堆積が確認され、堆積層直上からは槍先形石器、石鏃、スクレイパーなどの石器類が出土しており、草創期から早期に時期比定される。

樽味立添遺跡 3 次調査や東野森ノ木遺跡 2・4 次調査から晩期の貯蔵穴数基が検出されており、生活関連遺構の初現期を考える上での貴重な資料である。

弥生時代

前期から中期初頭にかけては樽味遺跡 1・5 次調査から竪穴住居や土坑などが検出されており、愛媛大学農学部から西側にかけて当該期の集落が展開していたことが窺える。また、樽味立添遺跡 3 次調査や樽味四反地遺跡 7 次調査からは集落の構造解明に重要な役割をもつ、大溝や小溝が検出されている。

中期後葉から後期は遺跡の数が急増し、樽味遺跡 1 次調査、樽味高木遺跡 2・3 次調査や樽味四反地遺跡 2 ～ 4 次調査、樽味立添遺跡 1 次調査で竪穴住居や溝などが検出されている。

古墳時代

前期では樽味四反地 6・8・13 次調査から総柱構造をとる床束式の大型～超大型の建物が 3 棟検出され、この建物群は当該期の首長階層にかかわる特殊建造物群の存在であることが確定されている。中期では、樽味高木遺跡 7・8・11 次調査、樽味四反地遺跡 7 ～ 9 次調査で多くの竪穴住居から渡来系遺物の共伴がある。中期末～後期は遺跡数が増加し、樽味立添遺跡、樽味高木遺跡、樽味四反地遺跡の多くの地点から竪穴住居、掘立柱建物が検出されている。

古　代

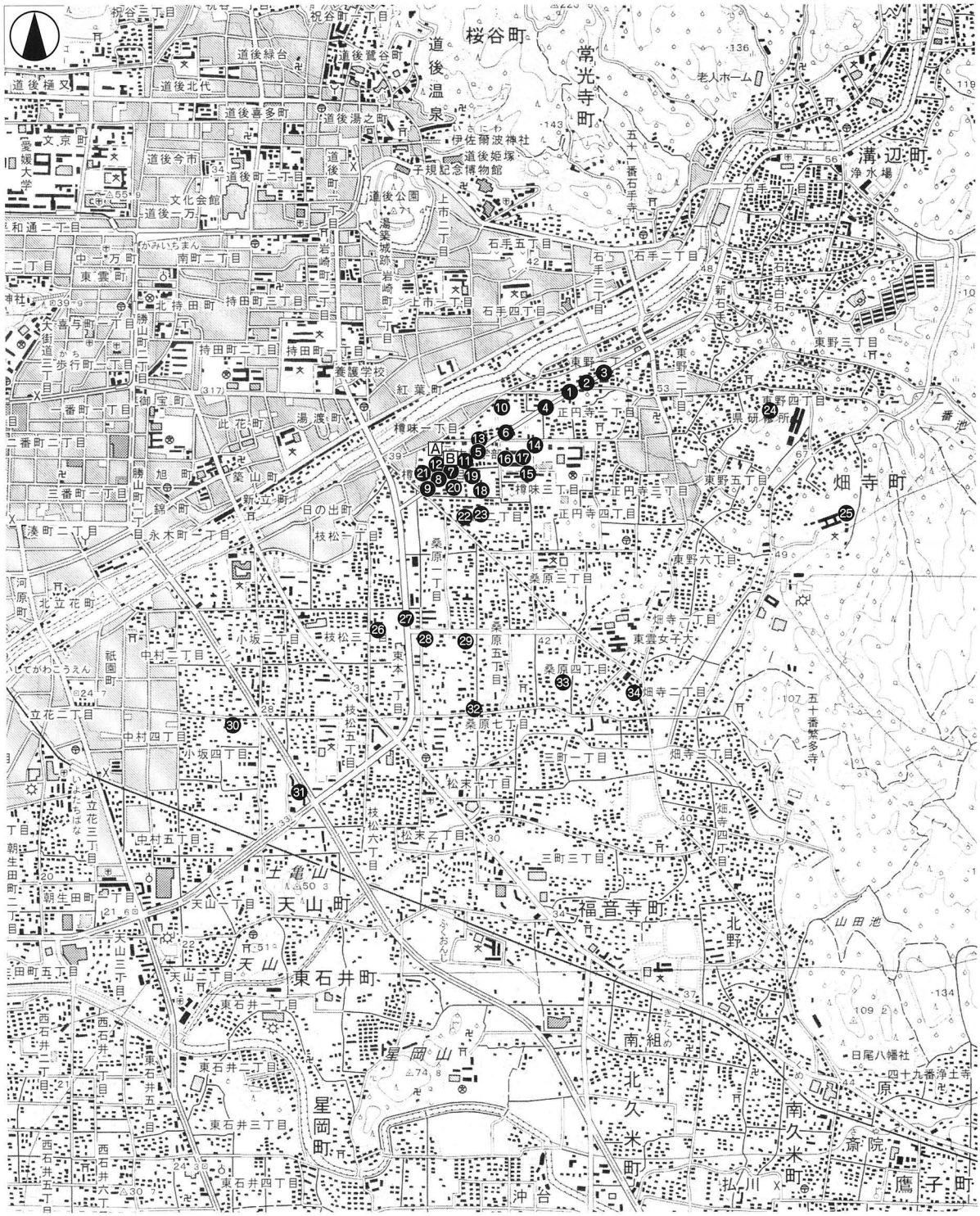
調査例は少ないが、樽味四反地遺跡 1・5 次調査では自然流路が検出され、樽味四反地 5 次調査では円面鏡が出土している。

中　世

樽味遺跡２次調査では14～16世紀の集落関連遺構が検出されており、東野森ノ木遺跡１次調査からは掘立柱建物や溝に伴い、土坑内から白磁四耳壺が埋納された状態で検出している。

【参考文献】

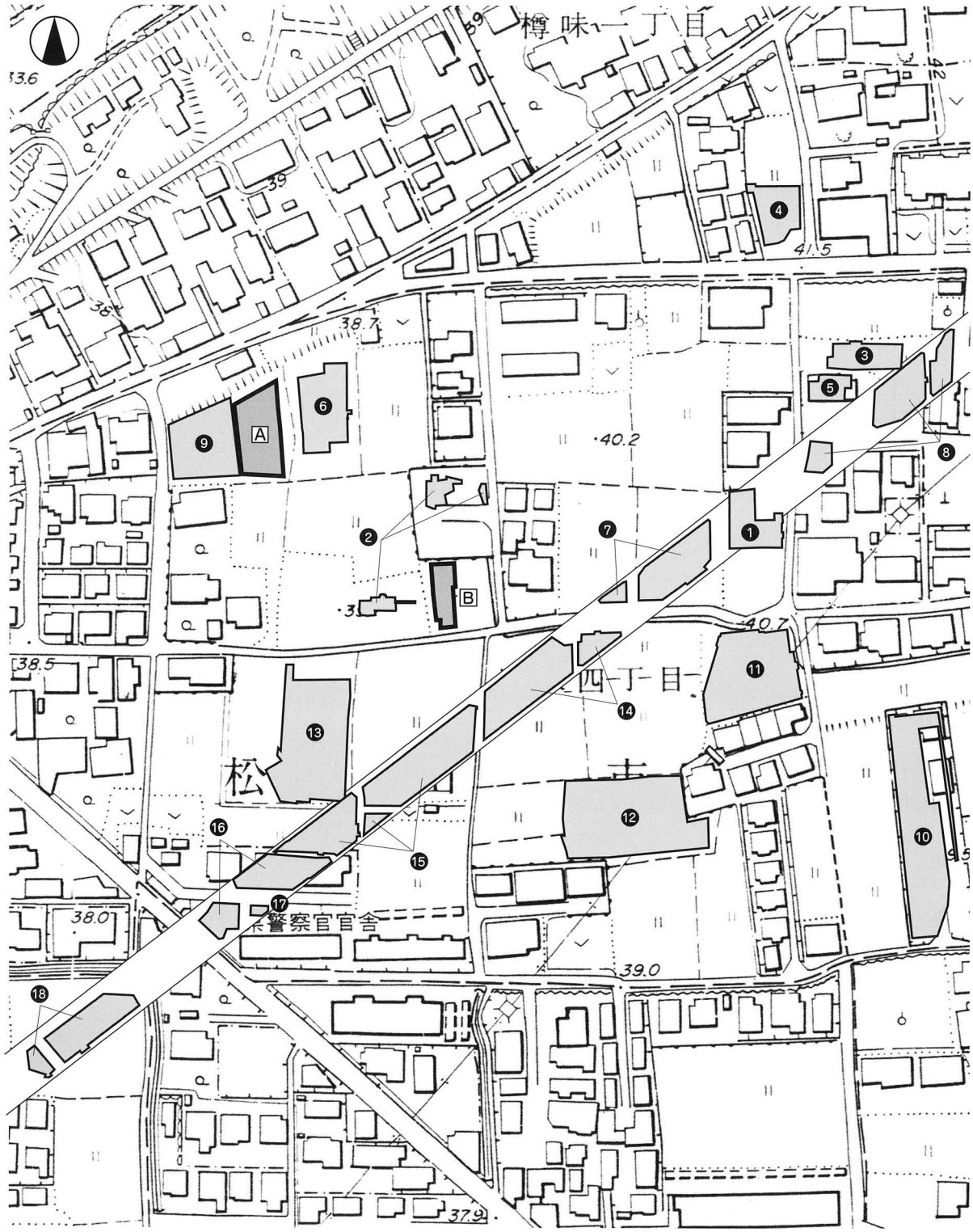
1. 愛媛県史編纂委員会　1980『愛媛県史　古代Ⅱ・中世』愛媛県
2. 宮本一夫編　1989『鷹子・樽味遺跡』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅰ
3. 梅木謙一・山之内志郎　1992「樽味四反地遺跡の調査」『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書26
4. 梅木謙一・宮内慎一　1992「樽味立添遺跡の調査」『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書26
5. 梅木謙一・宮内慎一　1992「樽味高木遺跡の調査」『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書26
6. 田﨑博之編　1993『樽味遺跡Ⅱ－樽味遺跡２次調査報告－』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ
7. 栗田正芳・河野史知　1994「樽味高木遺跡２次調査地」『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書46
8. 梅木謙一・宮内慎一・武正良浩　1994「樽味高木遺跡３次調査地」『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書46
9. 梅木謙一・宮内慎一・武正良浩・加島次郎　1994「樽味四反地遺跡４次調査地」『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書46
10. 田﨑博之編　1997『樽味遺跡Ⅲ－樽味遺跡３次調査報告－』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅵ
11. 髙尾和長編　2002『樽味四反地遺跡５次調査』松山市文化財調査報告書87
12. 吉田広　2003「樽味遺跡５次調査」『樽味遺跡Ⅳ』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅸ
13. 小玉亜紀子編　2003『樽味四反地遺跡－６次調査－弥生時代～古墳時代初頭編』松山市文化財調査報告書94
14. 小玉亜紀子・梅木謙一編　2005『樽味四反地遺跡Ⅱ－６次調査－古墳時代中期～中世編』松山市文化財調査報告書106
15. 髙尾和長編　2007『東野森ノ木遺跡１・２・３・４次調査地　樽味立添遺跡３次調査地　樽味高木遺跡７・８・９・11次調査地　樽味四反地遺跡７・８・９・11次調査地　枝松遺跡６次調査地』松山市文化財調査報告書117



A 樽味高木遺跡 12 次
B 樽味高木遺跡 13 次
❶ 東野森ノ木遺跡 1 次
❷ 東野森ノ木遺跡 2 次
❸ 東野森ノ木遺跡 4 次
❹ 樽味立添遺跡 3 次
❺ 樽味高木遺跡 7 次
❻ 樽味高木遺跡 11 次
❼ 樽味四反地遺跡 7 次
❽ 樽味四反地遺跡 8 次
❾ 樽味四反地遺跡 9 次
❿ 樽味立添遺跡 1 次
⓫ 樽味高木遺跡 1 次
⓬ 樽味高木遺跡 2 次
⓭ 樽味高木遺跡 3 次
⓮ 樽味遺跡 1 次
⓯ 樽味遺跡 2 次
⓰ 樽味遺跡 3 次
⓱ 樽味遺跡 5 次
⓲ 樽味四反地遺跡 1 次
⓳ 樽味四反地遺跡 2 ～ 4 次
⓴ 樽味四反地遺跡 5 次
㉑ 樽味四反地遺跡 6 次
㉒ 桑原西稲葉遺跡 1 次
㉓ 桑原西稲葉遺跡 2 次
㉔ 東野お茶屋台古墳群
㉕ 畑寺竹ヶ谷古墳群
㉖ 枝松遺跡 3 次
㉗ 東本遺跡 4 次
㉘ 東本遺跡 6 次
㉙ 桑原遺跡 4 次
㉚ 釜ノ口遺跡 7 次
㉛ 釜ノ口遺跡 8 次
㉜ 桑原田中遺跡 1 次
㉝ 経石山古墳
㉞ 三島神社古墳

（S＝1：25,000）

第 1 図　調査地と周辺の主要遺跡分布図



A 樽味高木遺跡 12 次　B 樽味高木遺跡 13 次

❶ 樽味高木遺跡 1 次　❷ 樽味高木遺跡 2 次　❸ 樽味高木遺跡 3 次　❹ 樽味高木遺跡 4 次　❺ 樽味高木遺跡 5 次

❻ 樽味高木遺跡 6 次　❼ 樽味高木遺跡 7 次　❽ 樽味高木遺跡 9 次　❾ 樽味高木遺跡 10 次　❿ 樽味四反地遺跡 1 次

⓫ 樽味四反地遺跡 2 ～ 4 次　⓬ 樽味四反地遺跡 5 次　⓭ 樽味四反地遺跡 6 次　⓮ 樽味四反地遺跡 7 次　⓯ 樽味四反地遺跡 8 次

⓰ 樽味四反地遺跡 9 次　⓱ 樽味四反地遺跡 11 次　⓲ 枝松遺跡 6 次

（S＝1：2,000）

第２図　調査地位置図

第2章

樽味高木遺跡
たるみたかぎ

－ 12 次調査 －

第２章　樽味高木遺跡 12 次調査

１．調査の経過

（1）調査に至る経緯

2003（平成 15）年 10 月 8 日、松山市樽味 4 丁目 247 番における個人開発にあたって、埋蔵文化財確認願が松山市教育委員会事務局文化財課（以下、文化財課）に提出された。樽味 4 丁目 247 番は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『№81 樽味遺物包含地』内にあたる。

調査地周辺では、これまでに数多くの発掘調査が行われており、愛媛大学農学部構内の樽味遺跡（1～6 次調査）、北東の樽味立添遺跡（1～3 次調査）、南の樽味四反地遺跡（1～11 次調査）、樽味高木遺跡（1～11 次調査）などの調査が実施され、弥生時代から古墳時代にかけての拠点的な集落であることが解明されつつある。特に南約 100m には、弥生時代後期末から古墳時代前期の大型建物 2 棟を検出した樽味四反地遺跡の 6 次調査と 8 次調査があり、松山平野でも注目される重要な地域である。

これらのことから文化財課は、調査地に弥生時代～古代にかけての集落関連遺構が遺存する可能性があると判断し、埋蔵文化財の有無を確認するため 2003（平成 15）年 11 月 4 日に試掘調査（野外調査）を実施した。その結果、弥生時代から古墳時代にいたる竪穴住居や土坑、柱穴、および中世の柱穴を検出し、調査地に弥生時代から中世の遺跡が存在することを確認した。

試掘調査の結果を受けて遺跡の取り扱いについて協議したところ、国庫補助を受けて調査地内で確認された遺跡に対して記録保存を目的とした発掘調査（本発掘調査）を実施することとなった。調査地は東西に分け、平成 16 年度は西側（樽味高木遺跡 10 次調査）を発掘調査し、平成 17 年度は東側（樽味高木遺跡 12 調査）の発掘調査を行った。

発掘調査は、おもに弥生時代から古墳時代までの当該地および周辺地域の集落構造解明を主目的とし、文化財課からの委託を受け、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となって 2005（平成 17）年 6 月 1 日に開始した。

（2）調査の経緯

平成 17 年 6 月 1 日、重機による表土掘削を開始すると同時に、現場保全のため杭打ち・ロープ張りを行う。6 月 2 日、壁面・床面の精査を開始する。6 月 7 日、重機による表土掘削を終了する。6 月 9 日、遺構検出写真撮影を行い、遺構の掘り下げ・測量を開始する。6 月 10 日、基準点委託業者が、国土座標軸に沿った基準点や水準点を調査区内に設置する。6 月 14 日、調査区の 4m メッシュ杭の打設を行う。8 月 22 日、遺構の掘り下げを終了する。8 月 23 日、高所作業車を使用し、遺構完掘写真撮影を行う。8 月 26 日、測量を終了する。8 月 27 日、発掘調査現地説明会を行い約 150 人の市民が見学する。8 月 29 日、重機による埋め戻しを開始し、同時に発掘機材の搬出を行う。8 月 30 日、調査仮設事務所を撤去する。9 月 2 日、重機による埋め戻しを終了し、本日にて野外調査を完了する。

2. 層　位（第４図）

調査地は、松山平野の北東部に位置し、石手川の氾濫により形成された扇状地の扇央付近に立地し、標高は約 39m を測る。調査以前は水田であった。

基本土層は、第Ⅰ層から第Ⅵ層を検出した。第Ⅰ層は、近現代の水田耕作層。第Ⅱ層は、近現代の水田床土。第Ⅲ層は、古代の遺物を含む包含層。第Ⅳ層は、古墳時代の遺物を含む包含層。第Ⅴ層は地山土で遺構の検出面である。第Ⅵ層は砂礫層であり、一部で遺構を検出する。

第Ⅰ層　灰色（5Y6/1）土で、全域に厚さ 10 ～ 25 cmの堆積を測る。

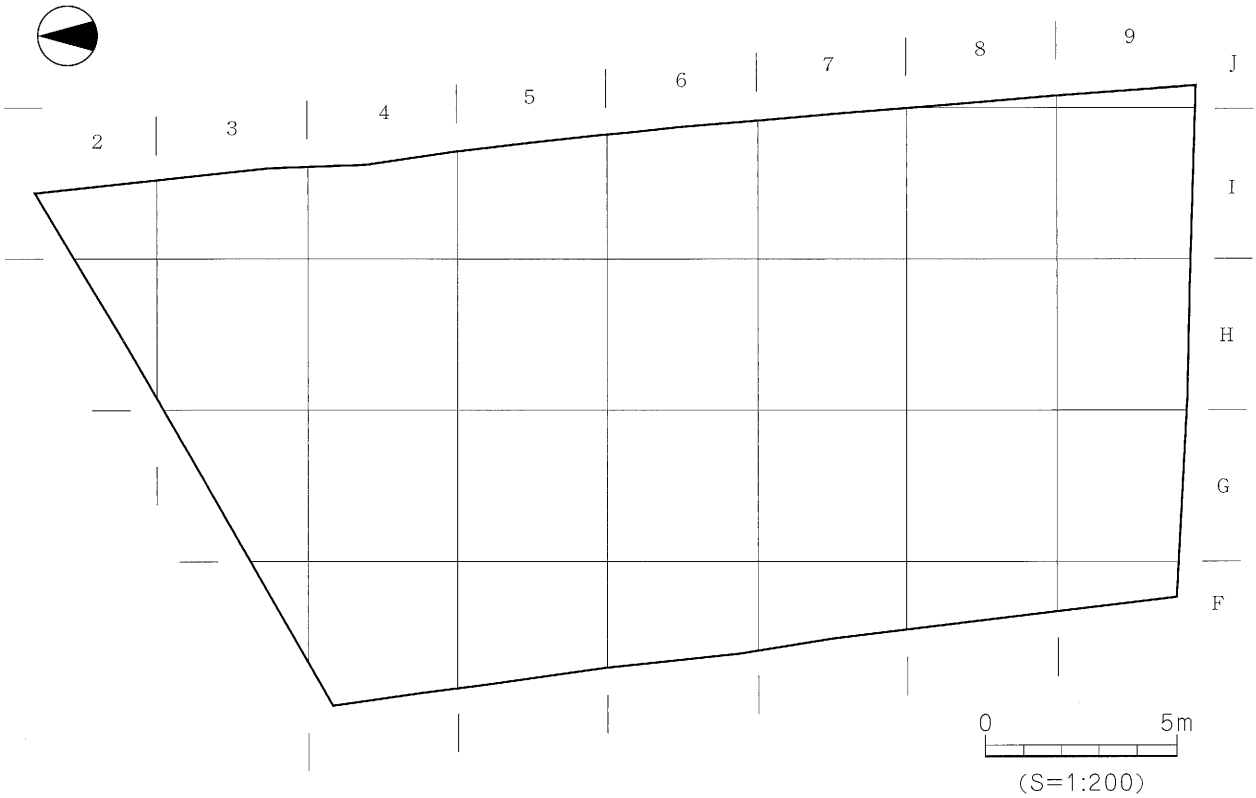
第Ⅱ層　黄褐色　（10YR7/1）土で、全域に厚さ 4 ～ 16 cmの堆積を測る。

第Ⅲ層　鈍い黄橙色（10YR6/3）砂質土で、土師器・陶磁器・瓦を包含する遺物包含層で、調査区南東部付近に厚さ 5 ～ 12 cmの堆積を測る。

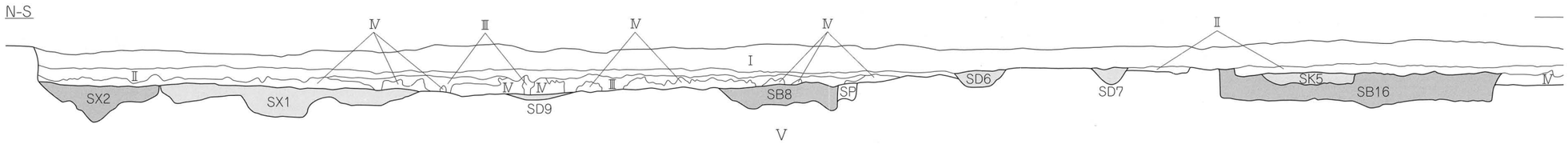
第Ⅳ層　黒褐色（10YR3/2）土で、土師器・須恵器を包含する遺物包含層で、調査区北東部付近に厚さ 3 ～ 12 cmの堆積を測る。

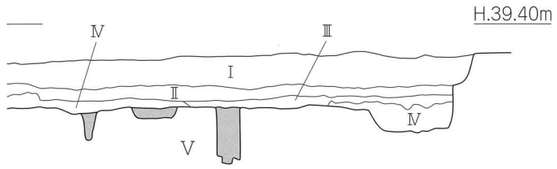
第Ⅴ層　明褐色（7.5YR5/6）土は、地山土とよばれるもので、この層の上面において遺構を検出した。調査区北側の約 1/4 を除く全域に堆積する。

第Ⅵ層　暗褐色（10YR3/4）砂礫は、5 ～ 10 cm大の礫を多含する。調査区北側の約 1/4 では上面にて遺構を検出し、南側では第Ⅴ層の下層に堆積する。

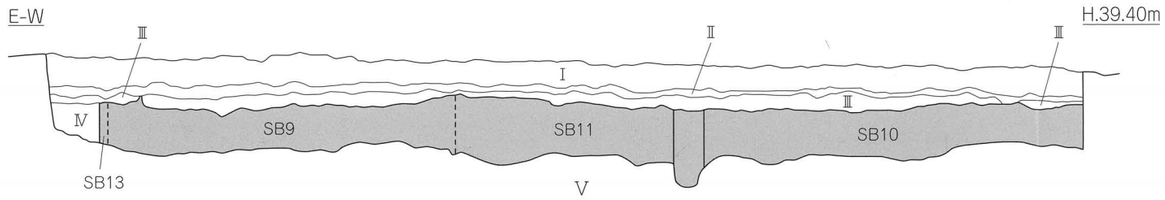


第３図　調査地区割図

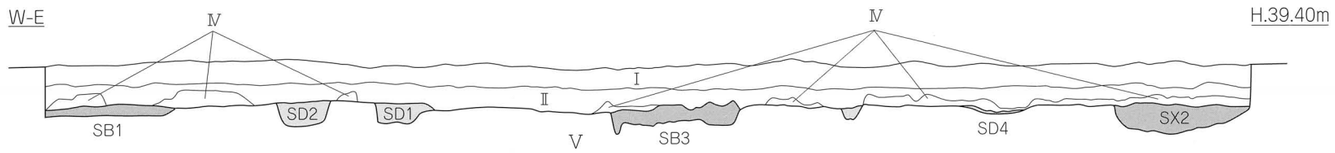




東　壁



南　壁



北　壁

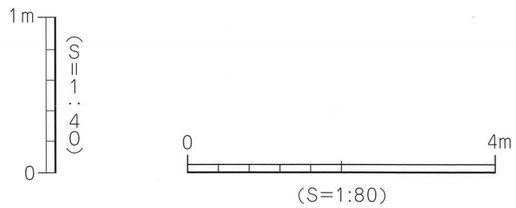
Ⅰ. 灰色土（耕作土）

Ⅱ. 黄褐色土（床土）

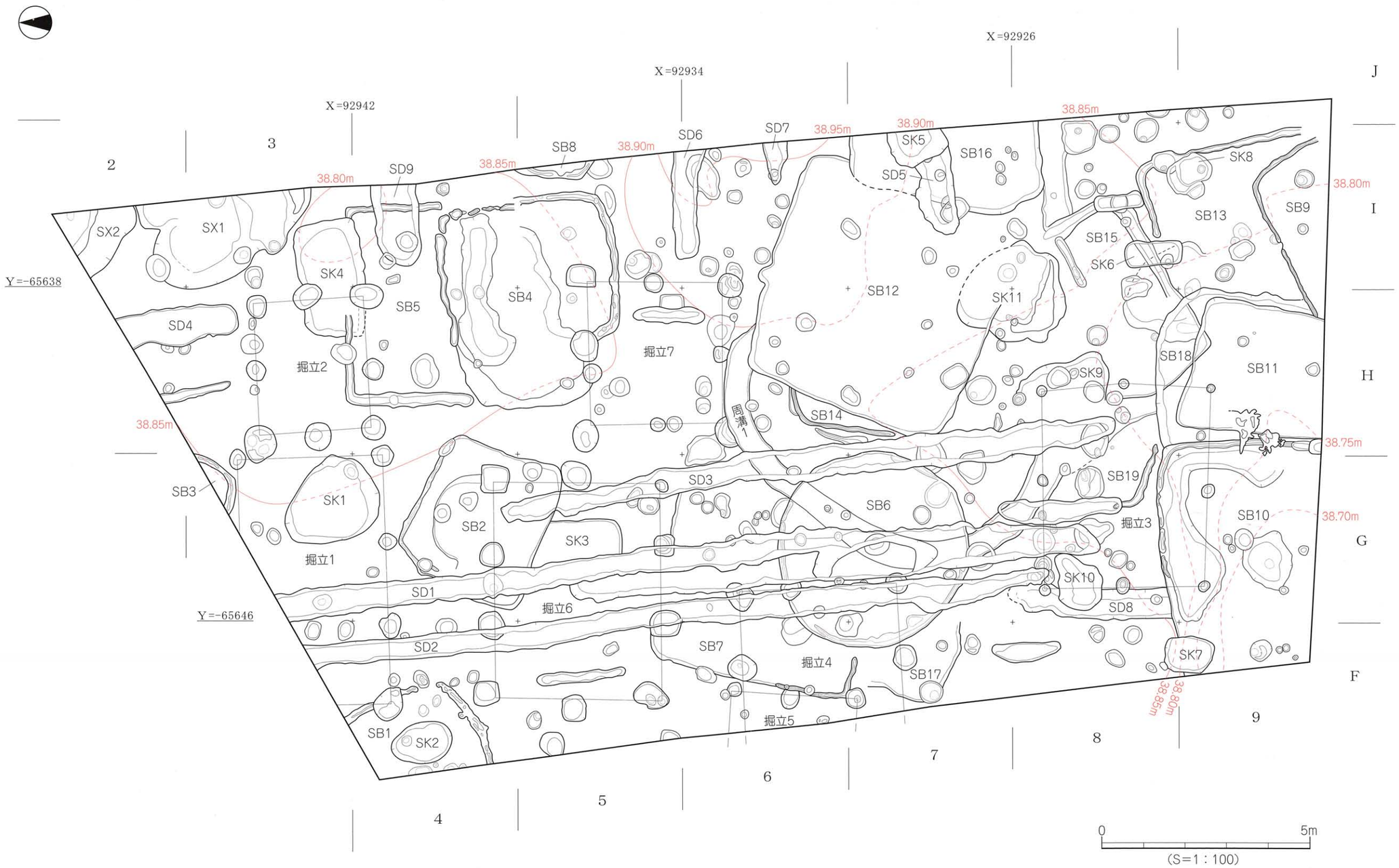
Ⅲ. 鈍い黄橙色砂質土（遺物包含層）：遺構埋土

Ⅳ. 黒褐色土（遺物包含層）　　：遺構埋土

Ⅴ. 明褐色土（地山）



第４図　土層図


X=92926
X=92934
X=92942
J
I
H
G
F
2
3
4
5
6
7
8
9
38.85m
38.90m
38.95m
38.80m
38.75m
38.70m
Y=-65638
Y=-65646
SX1
SX2
SK4
SD9
SB8
SD6
SD7
SK5
SD5
SB16
SK8
SB13
SB9
SB15
SK6
SB5
SB4
SB12
SK11
SD4
掘立2
掘立7
SB18
SB11
SK9
SB14
周溝1
SB3
SK1
SB2
SD3
SB6
SB19
掘立3
SB10
SK3
掘立1
SK10
SD1
掘立6
SD8
SD2
SB7
掘立4
SB17
SK7
SB1
SK2
掘立5
0
5m
(S=1：100)

第5図　遺構配置図

3. 遺構と遺物

本調査では弥生時代～近世の遺構や遺物を検出した。遺構には、竪穴住居19棟、掘立柱建物7棟、周溝1基、溝9条、土坑11基、柱穴148基、性格不明遺構2基がある。遺物は、主に遺構内から弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・石器・鉄器・装身具・銭貨・獣骨・獣歯が出土した。

〔1〕弥生時代

第Ⅴ層上面にて竪穴住居5棟、周溝1条、土坑2基を検出した。

(1) 竪穴住居

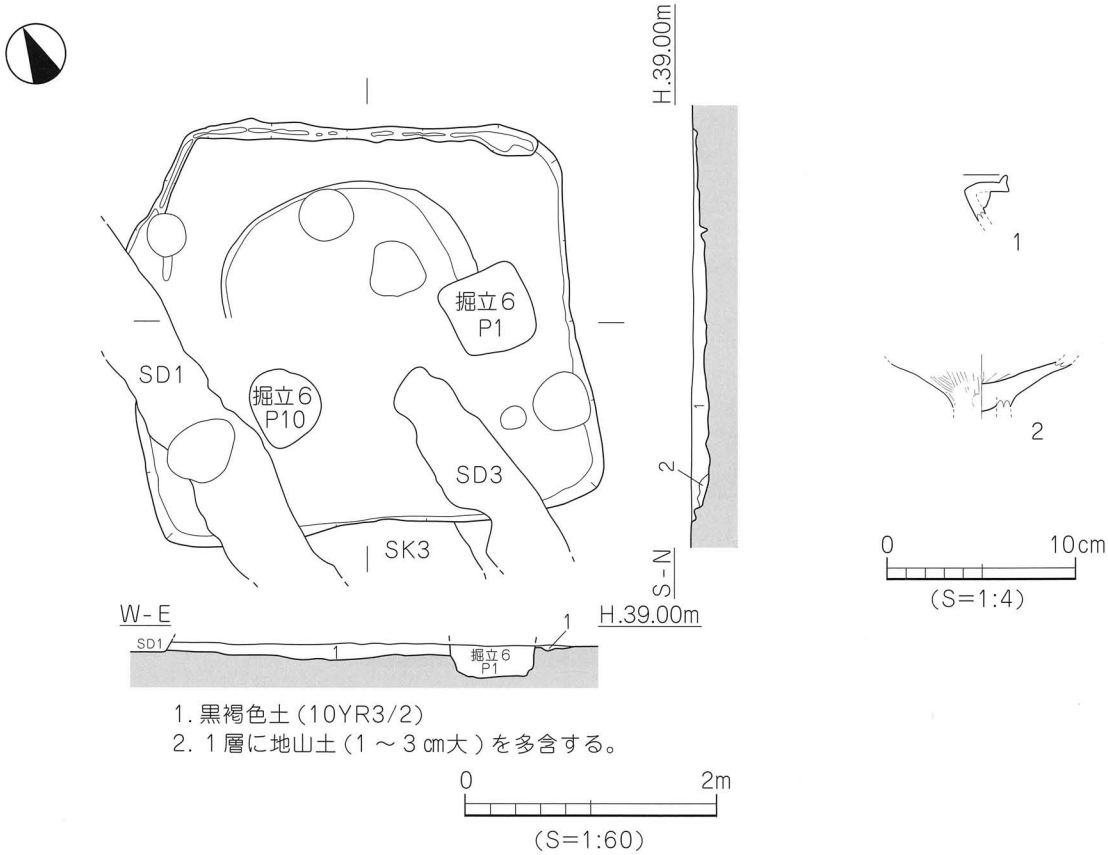
ＳＢ２（第6図）

調査区北側Ｇ～Ｈ･4～5区に位置し、掘立6、SD1･3に切られ、SK3を切る。平面形態は方形を呈し、床面付近での検出である。検出規模は東西3.5m、南北3.1m、深さ13㎝を測る。内部施設は、周壁溝を検出した。周壁溝は壁体に沿って、北壁と西壁の北側で検出した。幅8～23㎝、深さ2～5㎝を測る。住居内の埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は床面付近から弥生土器の甕・壺・高坏の破片が僅かに出土する。

出土遺物（第6図）

1は甕は口縁部である。頸部の貼付凸帯に刻目文がつき、口縁端部は上方へ拡張する。2は高坏の坏部で、内面はナデ調整、外面はハケ後のナデ調整が施される。

時期：出土した弥生土器の特徴から弥生時代中期後葉に時期比定される。



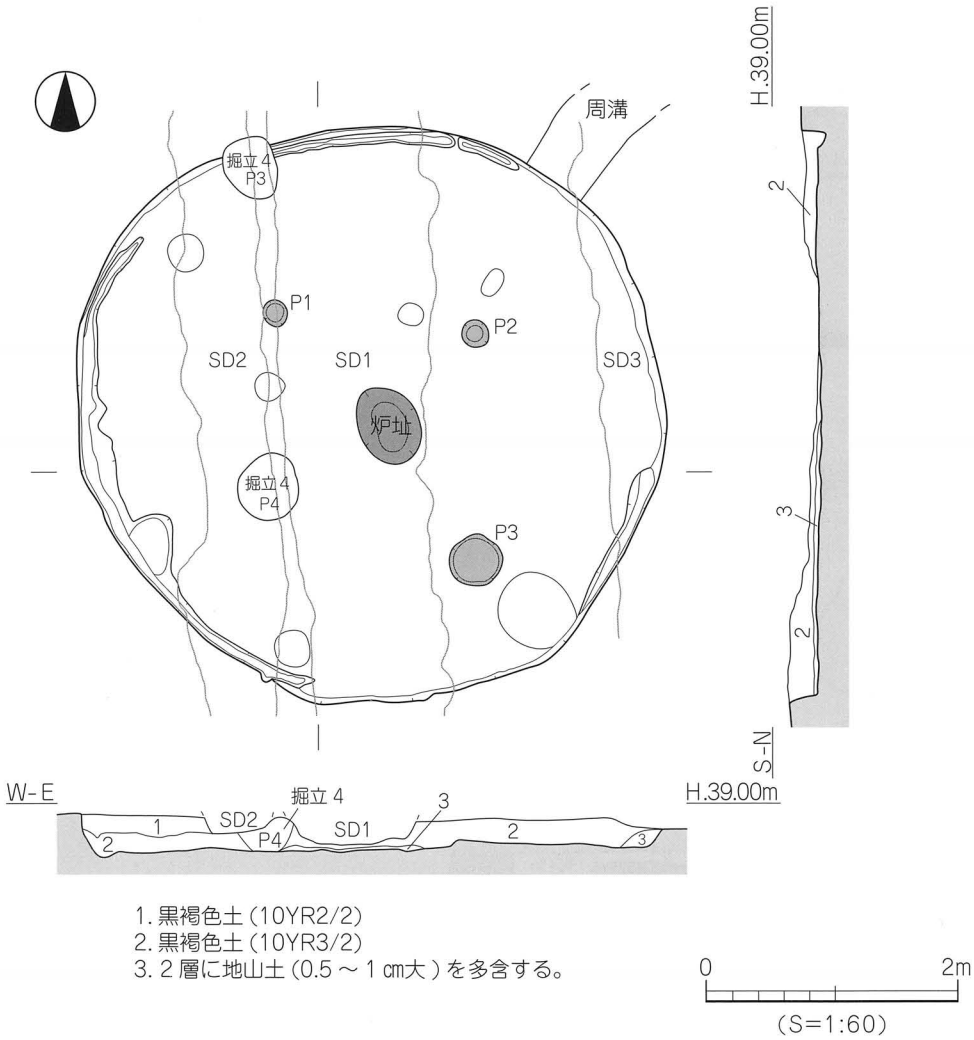
第6図　ＳＢ２測量図・出土遺物実測図

ＳＢ６（第７図）

調査区中央部西寄りＦ～Ｈ・６～７区に位置し、SB7、掘立４、SD1～３に切られ、SB17、周溝１を切る。平面形態は円形を呈し、検出規模は東西4.7m、南北4.6m、深さ23㎝を測る。内部施設は、主柱穴、周壁溝、炉址を検出した。主柱穴は３本分（P1～P3）を検出し、直径20～40㎝、深さ２～12㎝を測る。周壁溝は壁体に沿って、東側の一部を除く全体で検出した。幅16～30㎝、深さ３～８㎝を測る。炉址は住居の中央部で検出し、平面形態が楕円形で規模は長軸64㎝、短軸48㎝、深さ10㎝を測る。炉址内より少量の炭・焼土を検出する。住居内の埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は土器類が住居の床面付近より散在して弥生土器の甕・壺・鉢・高坏が出土し、打製石鏃や磨製石鏃・石庖丁状の収穫具・ガラス小玉・土玉・管玉・鉄滓が住居内の炉址より北側の中位から床面にかけて出土する。

出土遺物（第８図、図版６）

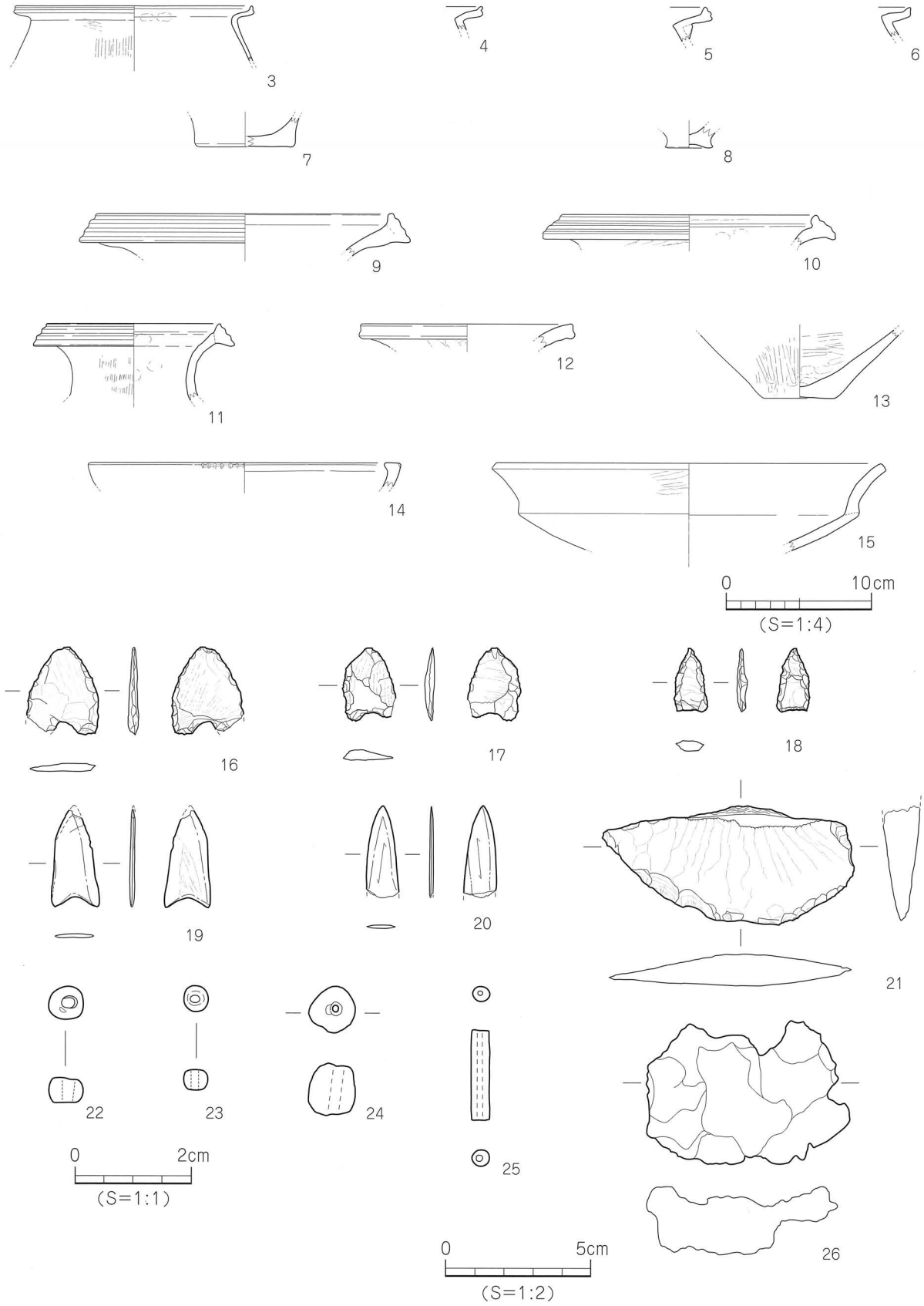
３～８は甕である。３・４は口縁端部に１条の凹線をもち、３は上方、４は外上方に肥厚され、内外面に横ナデ調整が施される。５は口縁端部に２条の凹線をもち、頸部に刻目文凸帯が巡る。６は口縁



1. 黒褐色土（10YR2/2）
2. 黒褐色土（10YR3/2）
3. ２層に地山土（0.5～１㎝大）を多含する。

0　2m
（S=1:60）

第７図　ＳＢ６測量図



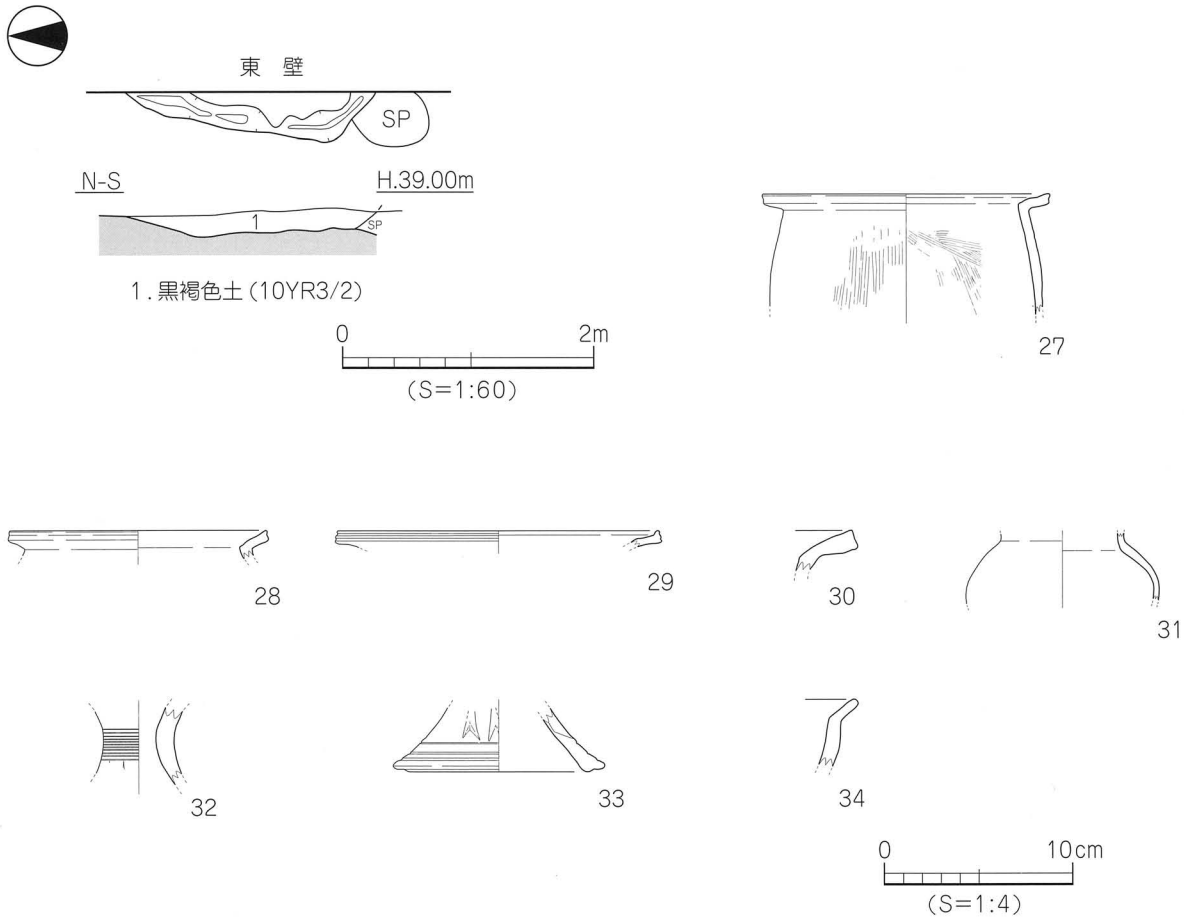
第８図　ＳＢ６出土遺物実測図

端部がやや凹み、上方に肥厚され内外面に横ナデ調整が施される。7 は平底の底部から内湾気味に立ち上がり、内外面に指頭痕が残る。8 はやや上げ底の底部付近はくびれ、内外面に指ナデ調整が施される。9 ～ 13 は壺である。9・10 は口縁端部に 3 条の凹線をもち、端部は上下方に肥厚する。12 は口縁端部がやや凹む。13 は平底の底部付近の内外面にヘラ磨き調整が施される。14･15 は高坏である。14 は内湾する口縁端部は水平な面をなし、内面は肥厚され、外面に刻目文が施される。15 は外反する口縁部の端面は平らな面をなし、外面に磨き調整が施される。16 ～ 18 は打製石鏃であり、16・17 は凹基式で両面に刃をもつ。サヌカイト製。19・20 は磨製石鏃であり、両面が磨かれて 19 は凹基式であり、先端部と基部に鎬がつく。緑色片岩製。21 は収穫具の完存品である。刃部両面に刃が付けられる。全長 8.65 cm、幅 4.1 cm、厚み 1.25 cmを測る。22・23 はガラス製小玉で外径 0.42 ～ 0.58 cm、厚み 0.35 ～ 0.43 cmを測り、色調は青緑色である。24 は土玉であり、外径 1.6 cm、厚み 1.8 cmを測る。25 は管玉である。長さ 3.13 cm、外径 0.64 cmを測る。輝岩製。26 は鉄滓であるが、上層から出土しており混入品と考える。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代中期後葉とする。

ＳＢ８（第９図）

調査区北東部Ｉ・４～５区に位置し、東側は調査区外に延びる。住居南西部の一部だけの検出であり



第９図　ＳＢ８測量図・出土遺物実測図

全容は不明であるが、平面形態は方形を呈するものと推測する。検出規模は東西 0.4m 以上、南北 1.7m 以上、深さ 17 cmを測る。内部施設は、周壁溝を検出した。周壁溝は壁体に沿って検出し、幅 8 ～ 19 cm、深さ 5 ～ 6 cmを測る。住居内の埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は、床面より浮いた状態で出土し、器種は弥生土器の甕・壺・高坏・鉢が少量出土しただけである。

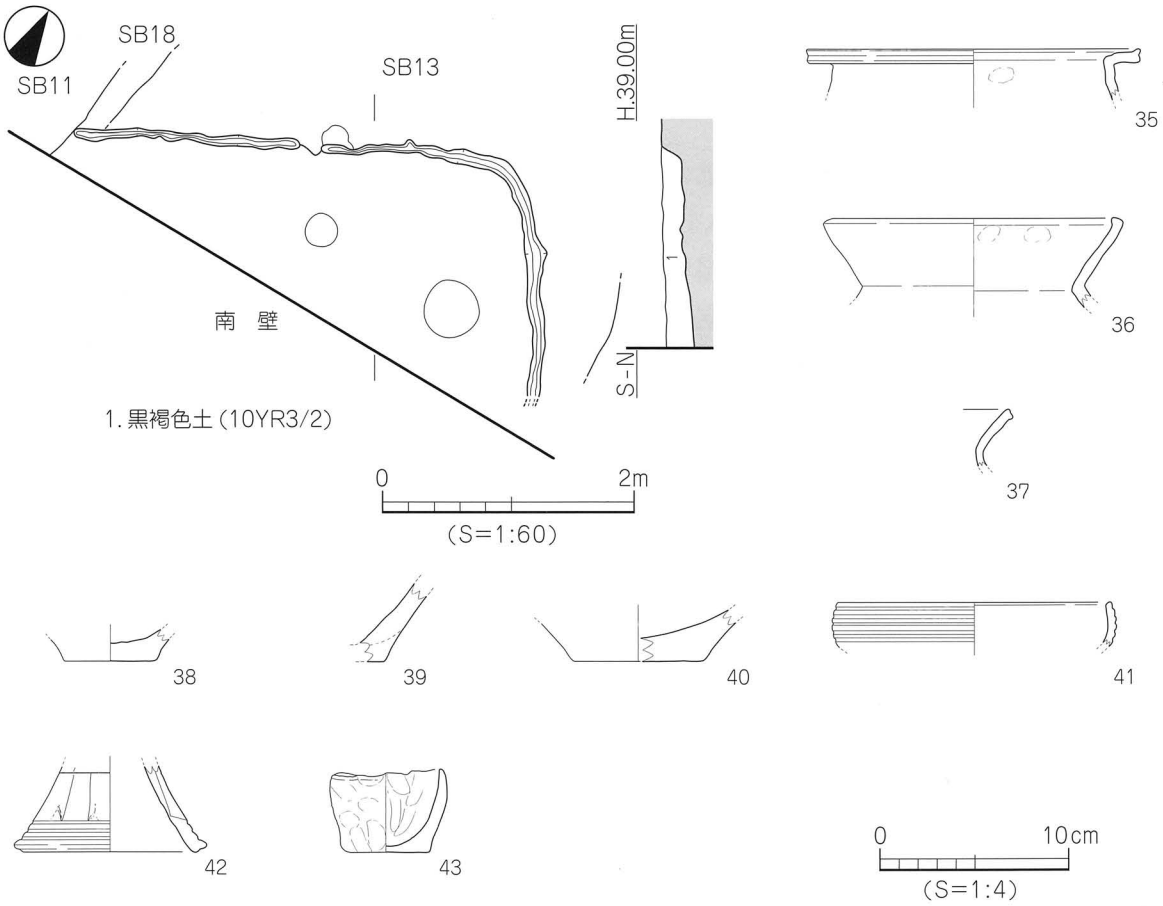
出土遺物（第 9 図）

27 ～ 29 は甕である。27・28 は口縁端部は凹む。29 は口縁端部に 2 条の凹線文が施され、端部は上方に肥厚する。いずれも口縁部の内外面は横ナデ調整、27 の胴部外面はハケ目調整が施される。30・31 は壺である。30 は外反する口縁端部は平らな面をなす。31 は内湾する上胴部の外面に横ナデ調整が施される。32・33 は高坏である。32 は脚柱部に 11 条の直線文と矢羽根透かしをもち、外面にミガキ調整が施され、33 は脚裾部に矢羽根透かしと 3 条の沈線文をもち、内外面に横ナデ調整が施される。34 は鉢であり、外反する口縁部内外面にヨコナデ調整、胴部外面にナデ、内面に指頭痕がみられる。

時期：出土した弥生土器の特徴から弥生時代中期後葉とする。

ＳＢ９（第 10 図）

調査区南東隅 H ～ I・9 区に位置し、SB11・13・18 に切られ、南側は調査区外に延びる。平面形態は方形を呈し、検出規模は東西 3.7m 以上、南北 1.6m 以上、深さ 22 cmを測る。内部施設は、周壁



第 10 図　ＳＢ９測量図・出土遺物実測図

溝・貼り床を検出した。周壁溝は壁体に沿って検出し、幅5～12㎝、深さ2～6㎝を測る。貼り床は床面の凹み部から検出し、厚さ3～7㎝を測る。住居内の埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は住居全体より散在し、中位から床面にかけて出土した。器種は弥生土器の甕・壺・高坏の破片が少量出土する。

出土遺物（第10図、図版6）

35～39は甕である。35は上方に肥厚され、端面は凹む。36は「く」字状の口縁部に端部はやや内方に肥厚される。37は端面が外方に肥厚される。38・39は平底の底部から外反気味に立ち上がり、38は外面にナデ、39はミガキ調整が施される。40は壺である。平底の底部から外反気味に立ち上がる。41・42は高坏である。41は内湾気味の口縁部外面に5条の凹線文が施される。42は「ハ」字状の脚裾部に3条の凹線文と矢羽根透かしが施され、外面にミガキ調整が施される。43はミニチュア土器である。平底の底部より内湾気味に立ち上がり、口縁部は丸くおさまる。内外面共にナデと指押さえによる調整が施される。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代中期後葉とする。

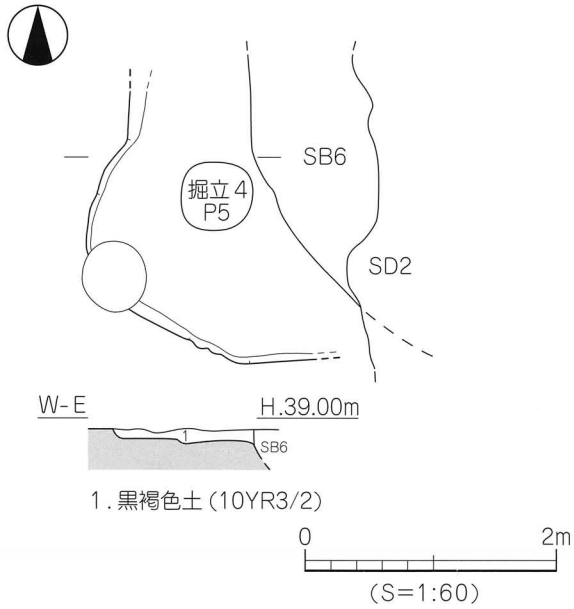
ＳＢ17（第11図、図版3）

調査区中央部西寄りＦ・7区に位置し、SB6・7、掘立4に切られ、住居の南西部だけの検出であり全容は不明であるが、平面形態は隅丸方形を呈するものと推測する。検出規模は東西2m以上、南北1.6m以上、深さ7㎝を測る。住居中央部より西寄りの床面に平面形状が楕円形に焼土の塊を検出する。埋土は黒褐色土である。遺物は床面直上から弥生土器の甕・高坏が割れた状態で出土する。

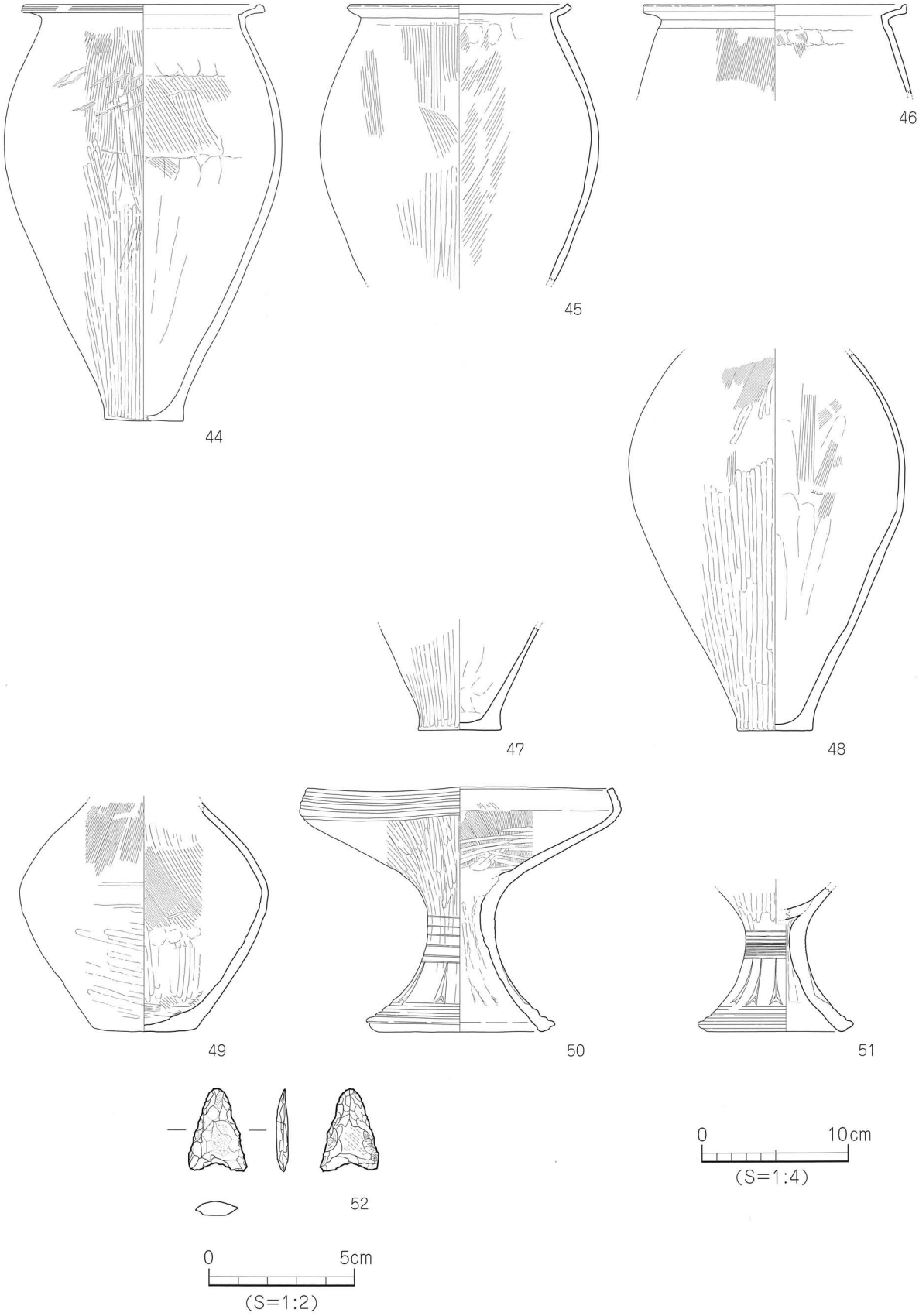
出土遺物（第12図、図版6）

44～48は甕である。44は口縁端部に2条の凹線文をもち、45は口縁端部に凹みをもつ。44・45・48は上胴部にハケ目、下胴部に磨き調整が施される。49は壺である。上胴部にハケ目、下胴部外面に磨き調整が施される。50・51は高坏である。50は口縁部に4条の凹線文、脚部に6条の沈線文、51は脚部に10条の沈線文が施され50・51共に矢羽根透かし、裾部に3条の凹線文が施され内端面が接地する。52は打製石鏃で凹基式で両面に刃部をもち、長さ2.8㎝、幅2.0㎝、厚み0.4㎝を測る。サヌカイト製。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代中期後葉とする。



第11図　ＳＢ17測量図



第12図　ＳＢ17出土遺物実測図

(2) 周溝状遺構

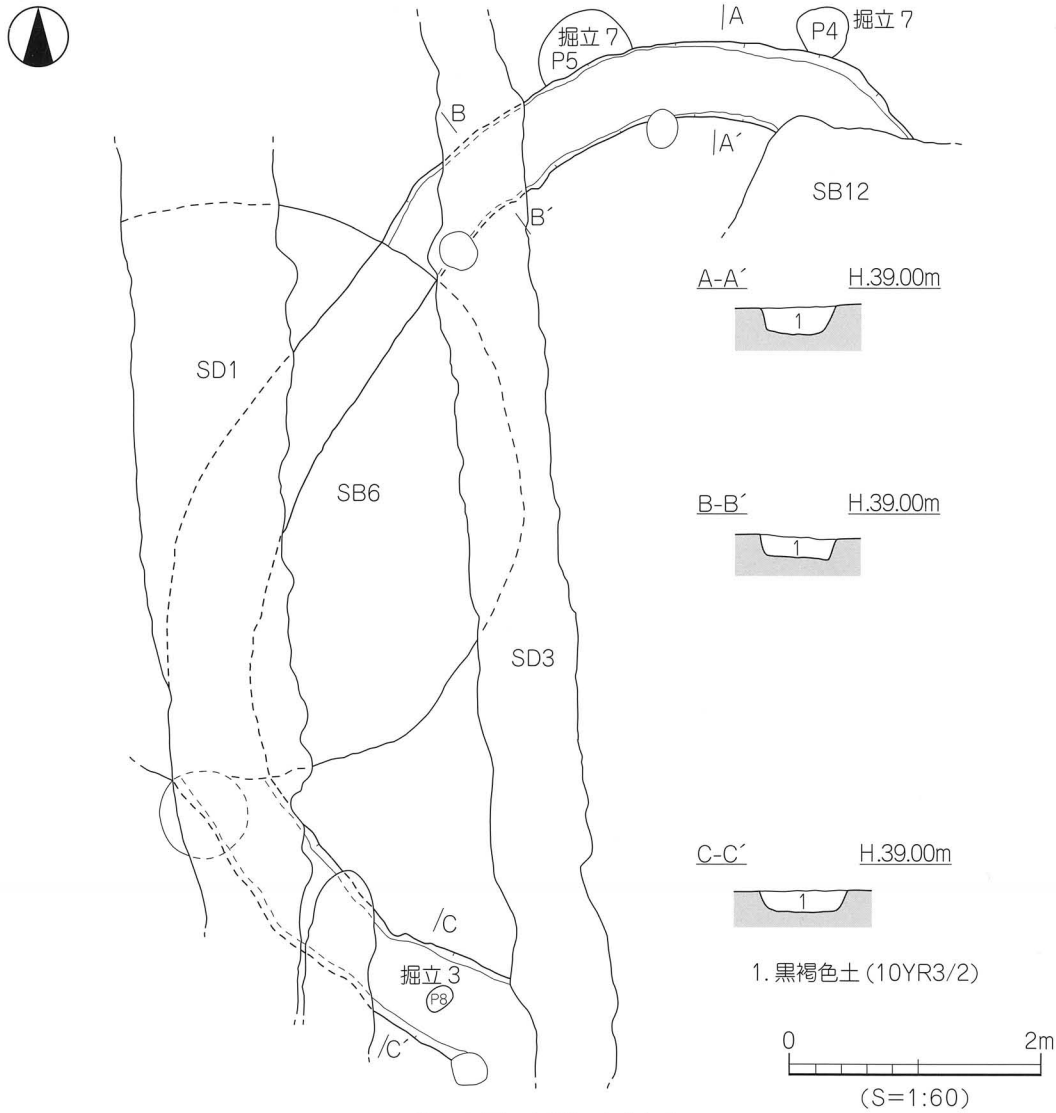
周溝 1（第 13 図）

調査区中央部南寄り G ～ H・6 ～ 8 区に位置し、SB6・7・12、SD1・3 に切られ、遺構の全容は不明であるが、平面形態は楕円形を呈し周るものと推測する。断面形態は逆台形状を呈し、基底面はほぼ平坦である。検出規模は、南北 8.6m、深さ 9 ～ 22 cm、上場幅 57 ～ 78 cmを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は基底面より浮いた状態で弥生土器片が出土する。

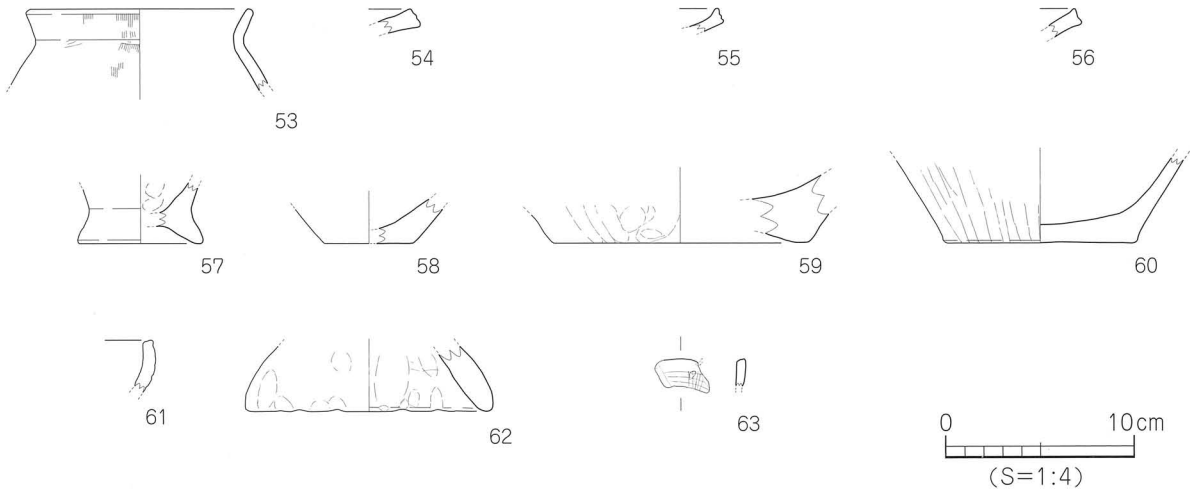
出土遺物（第 14 図、図版 7）

53 ～ 58 は甕である。53 は緩やかな「く」字状の口縁部に端部は丸くおさまる。54・55 は口縁端部に 2 条の凹線文が施され、56 は口縁端部が凹む。57 は上げ底の底部、58 は平底の底部から内湾気味に立ち上がり、内外面はナデ調整が施される。59・60 は壺である。59 はやや上げ底、60 は平底の底部で共に内外面にナデ調整が施され、60 の外面には工具痕がある。61 は高坏であり、内湾する口縁部外面に 4 条の沈線文が施される。62 は支脚の脚部で「ハ」字状の脚端部は丸くおさまる。63 は器種は不明であるが、片面に格子状の線刻と穿孔、端面に線刻が施される。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代中期とする。



第 13 図　周溝 1 測量図



第14図　周溝1出土遺物実測図

(3) 土坑

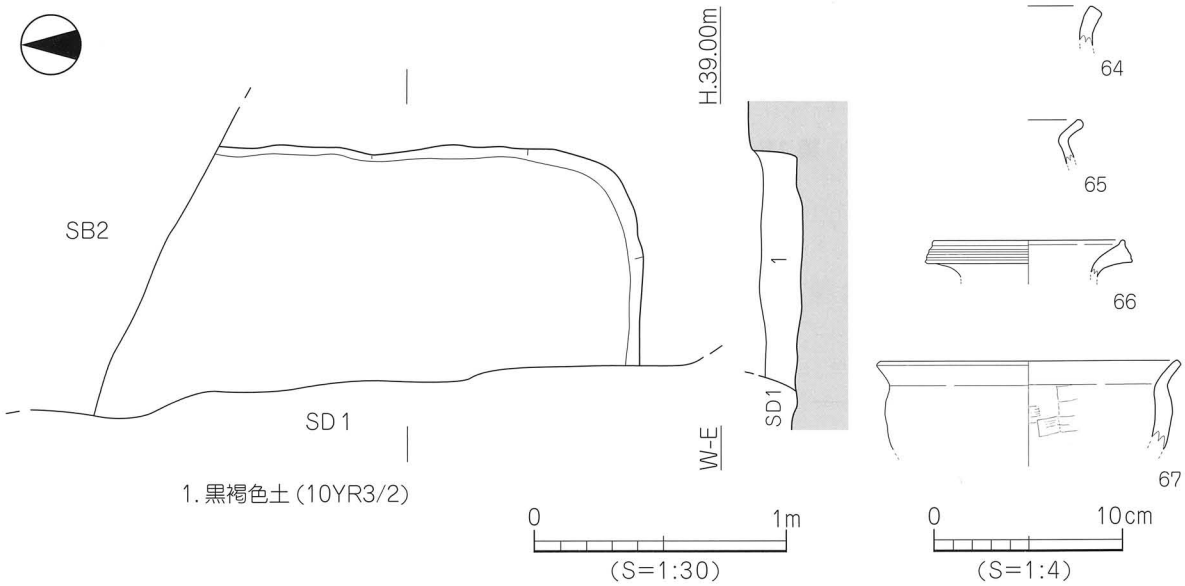
ＳＫ３（第15図）

調査区北西部のＧ・５区に位置する。SB2、SD1に切られ、遺構の全容は不明であるが、平面形態は長方形を呈するものと推測する。断面形態は逆台形状を呈し、基底面は平らな面をなす。検出規模は長軸2.15m以上、短軸0.93m以上、深さ20㎝を測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は上位から基底面にかけ、弥生土器の甕・壺・鉢の破片が出土する。

出土遺物（第15図）

64・65は甕の口縁部で内外面にナデ調整が施される。66は壺である。口縁端面に3条の凹線文が施される。67は鉢であり、緩やかに外反する口縁部に端部は平らな面をなす。

時期：出土した弥生土器の特徴から弥生時代中期後葉とする。



第15図　ＳＫ３測量図・出土遺物実測図

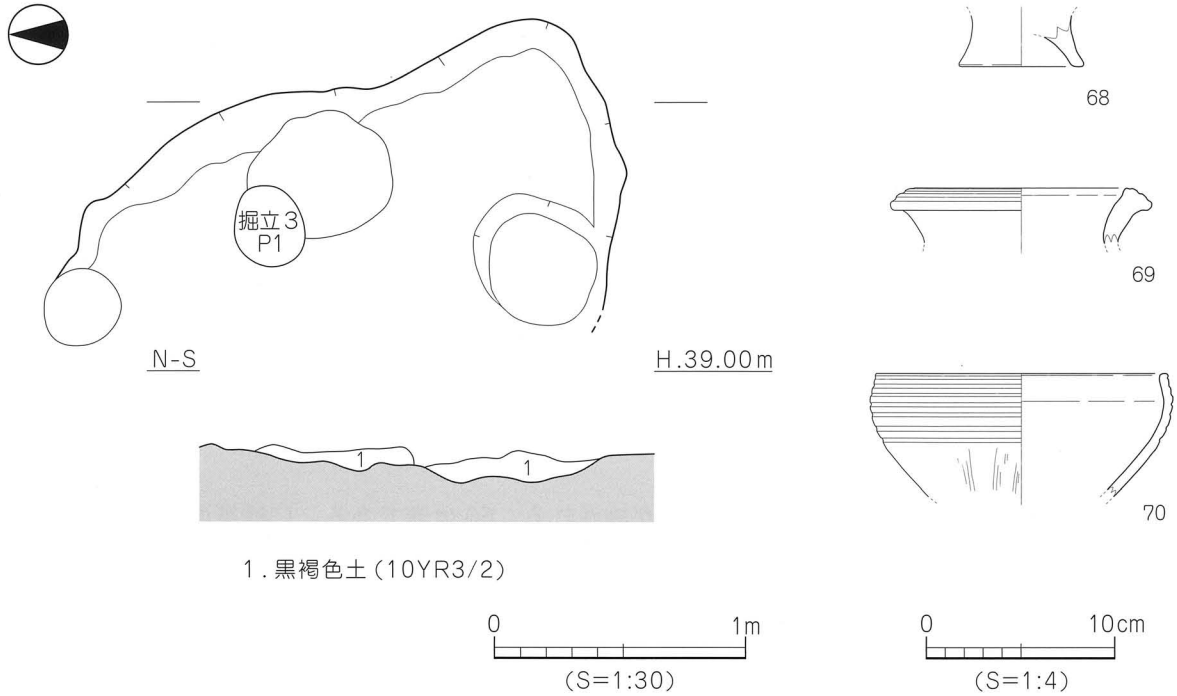
ＳＫ９（第 16 図）

調査区南側のＨ・８区に位置し、掘立３に切られ、SB15 の床面から検出した。平面形態は不整形、断面形態はレンズ状を呈し、基底面はやや凹む。規模は長軸 2.15m、短軸 1.12m 以上、深さ 24 cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は上位から基底面にかけ、弥生土器の甕・壺・高坏の破片が出土する。

出土遺物（第 16 図）

68 は甕の上げ底の底部である。69 は壺の口縁部であり、端面に３条の凹線文が施される。70 は高坏の坏部で、口縁部外面に７条の凹線文が施される。

時期：出土した弥生土器の特徴から弥生時代中期後葉とする。



第 16 図　ＳＫ９測量図・出土遺物実測図

〔2〕古墳時代

第Ⅴ層上面にて竪穴住居 14 棟、掘立柱建物６棟、土坑６基、柱穴を検出した。

(1) 竪穴住居

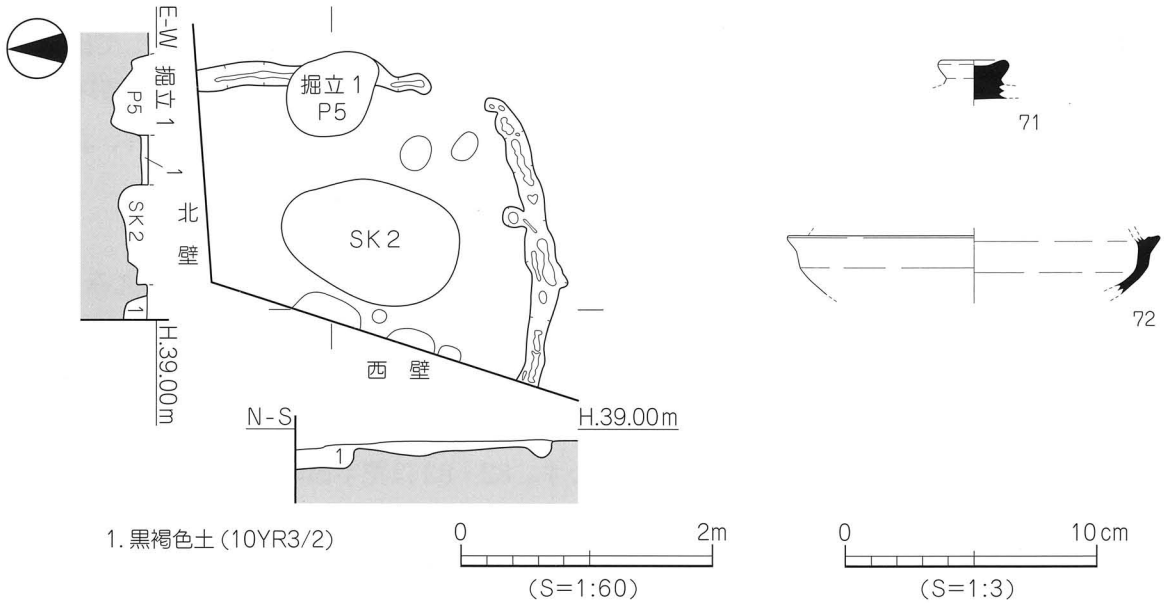
ＳＢ１（第 17 図）

調査区北西隅Ｆ・３～４区に位置し、掘立１に切られ、北・西側は調査区外に延びる。平面形態は方形を呈し、検出規模は東西 2.1m 以上、南北 2.9m 以上、深さ 10 cmを測る。内部施設は、周壁溝、貼り床を検出した。周壁溝は壁体に沿って、東側の一部を除く全体で検出した。幅 10 ～ 18 cm、深さ１～６cmを測る。住居内の埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は住居全体より散在して出土したが、殆どの土器が床面より浮いた状態で出土した。器種は土師器の甕・壺、須恵器の蓋坏・坏身が出土する。

出土遺物（第17図）

71は高坏の蓋のつまみ部であり、つまみ上部が凹む。72は坏身で水平に延びる受部端に凹みをもつ。

時期：出土した須恵器の特徴から、古墳時代後期前葉に比定される。

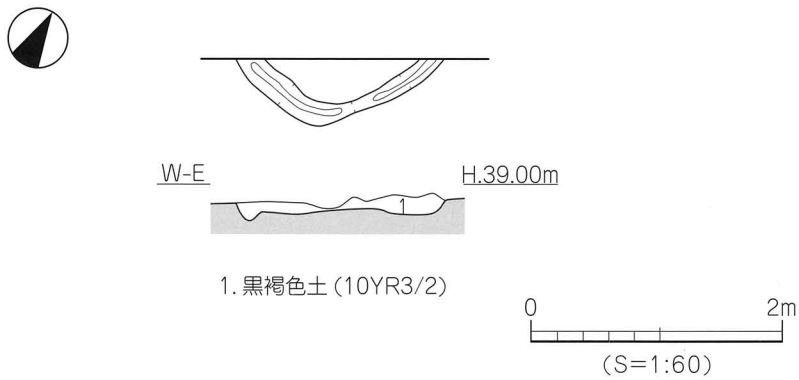


第17図　ＳＢ１測量図・出土遺物実測図

ＳＢ３（第18図）

調査区北端Ｇ・３区に位置し、北側は調査区外に延びる。住居の南西部だけの検出であり全容は不明であるが、平面形態は方形を呈するものと推測する。検出規模は東西0.8m以上、南北1.2m以上、深さ8cmを測る。内部施設は、周壁溝を検出した。周壁溝は壁体に沿って検出した。幅8～21cm、深さ7cmを測る。住居内の埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は床面より浮いた状態で出土し、器種は土師器の胴部片やサヌカイト剥片が少量出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく古墳時代としか判らない。



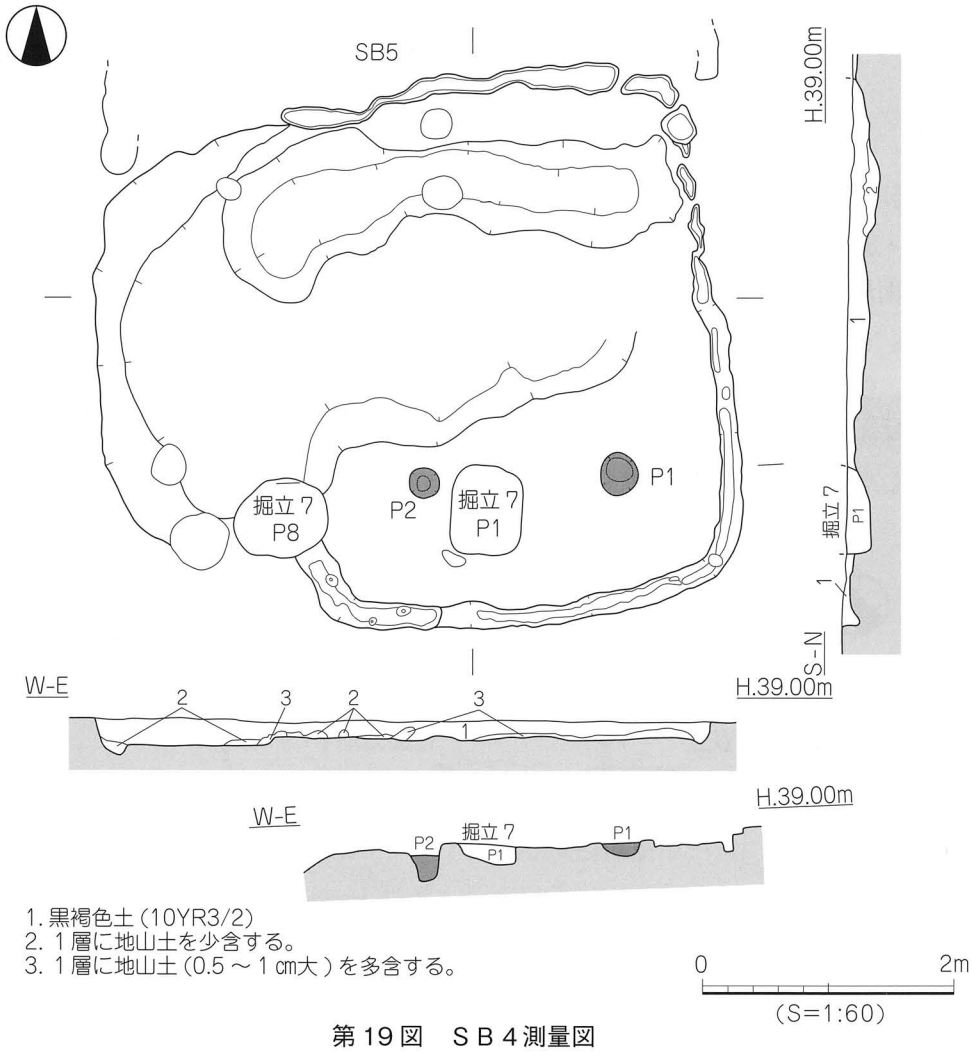
第18図　ＳＢ３測量図

ＳＢ４（第 19 図）

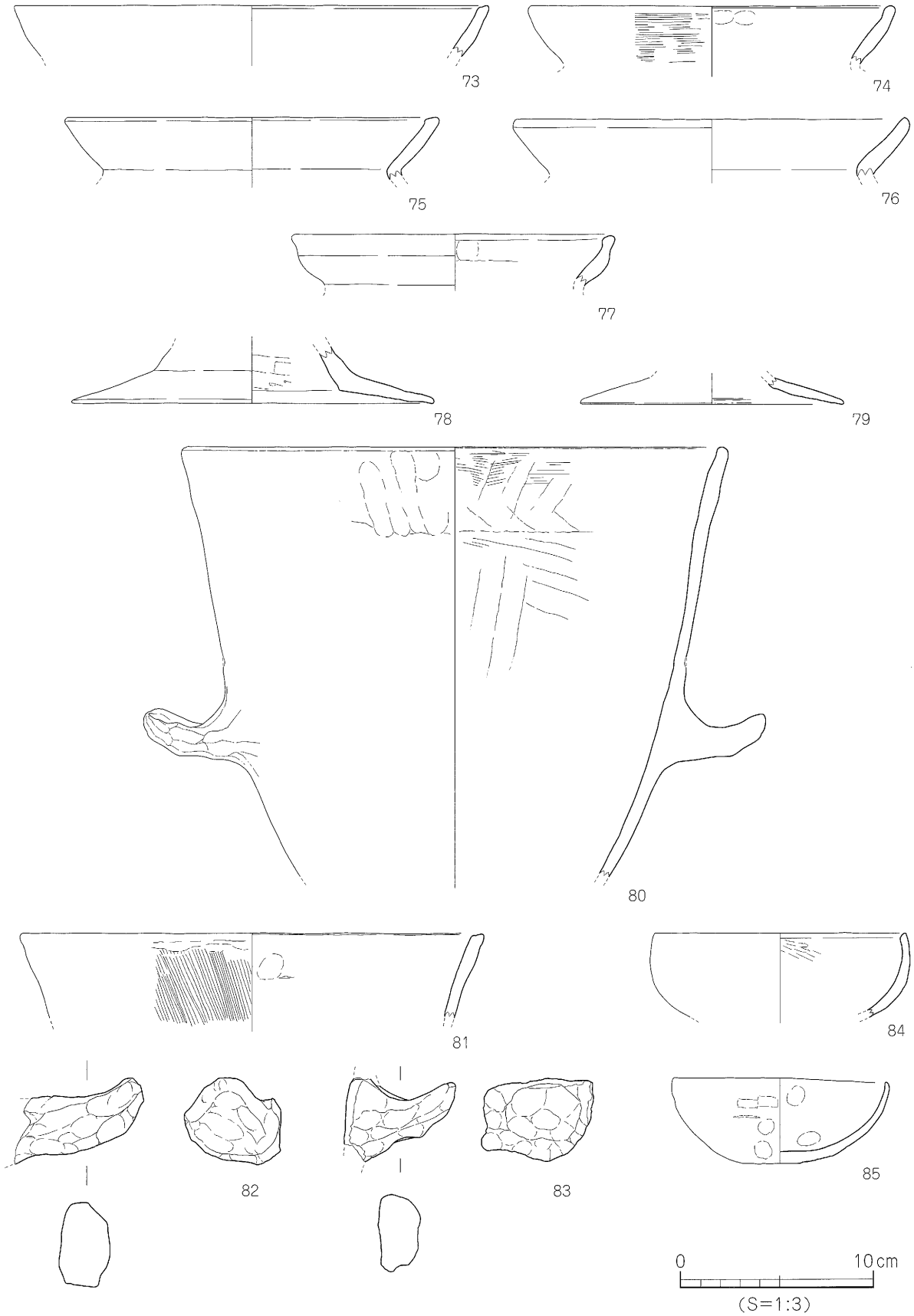
調査区北東部Ｈ～Ｉ・４～５区に位置し、SB5 を切り、床面から土坑状の掘り込みを検出する。平面形態は方形を呈し、検出規模は東西 3.55m、南北 4.4m、深さ 13 ㎝を測る。内部施設は、主柱穴、周壁溝、貼り床を検出した。主柱穴は南側の２本分（P1・P2）を検出し、直径 24 ～ 35 ㎝、深さ 10 ～ 22 ㎝を測る。周壁溝は壁体に沿って、幅 13 ～ 20 ㎝、深さ５～ 10 ㎝を測る。貼り床は床面の凹み部に薄く堆積する。住居内の埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は住居全体より散在して出土したが、殆どの土器が床面より浮いた状態で出土した。器種は土師器の甕・高坏・甑、須恵器の蓋坏・坏身・高坏・甕・提瓶や石鏃、土製の装身具などに混じり、南西部床面より浮いた状態で獣歯片、北東部上位から鉄鏃が出土する。

出土遺物（第 20 ～ 23 図、図版 7）

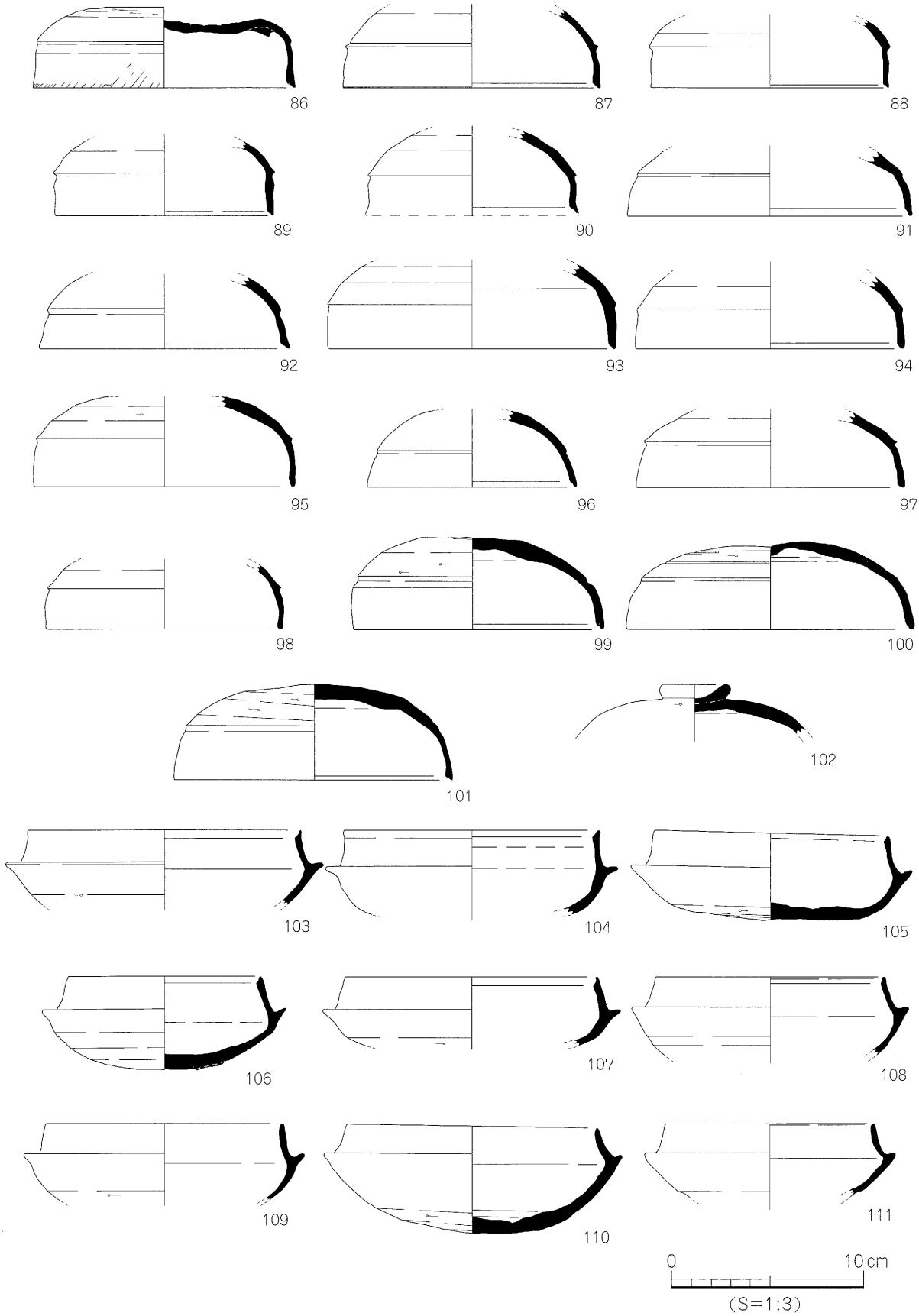
73 ～ 77 は甕である。73・75 は口縁端部は平らな面をなし、74・76 は口縁端部に丸みをもつ。77 は口縁端部は平らな面をなし、その下は僅かに屈曲し、内外面は横ナデ調整が施される。78・79 は高坏の脚部であり、脚裾部は屈曲をもち、裾端部は丸くおさまる。78 は内面にケズリがみられる。80 ～ 83 は甑である。80・81 は外傾する胴部に 80 は口縁端部が丸くおさまり、凹みをもつ把手が貼りつき、81 は口縁端部が平らな面をなす。82・83 は把手部のみである。84・85 は椀



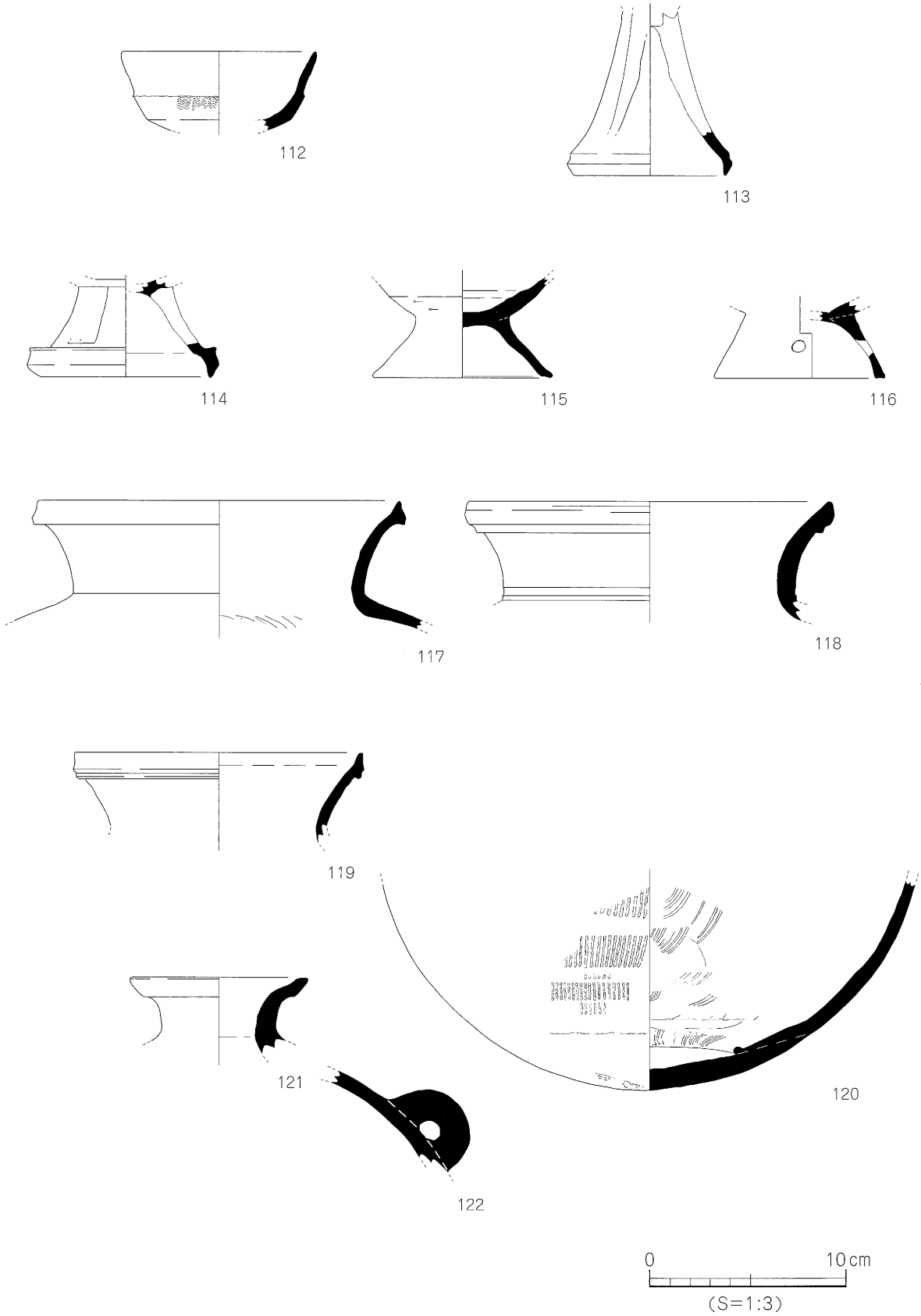
第 19 図　ＳＢ４測量図



第20図　ＳＢ４出土遺物実測図（１）



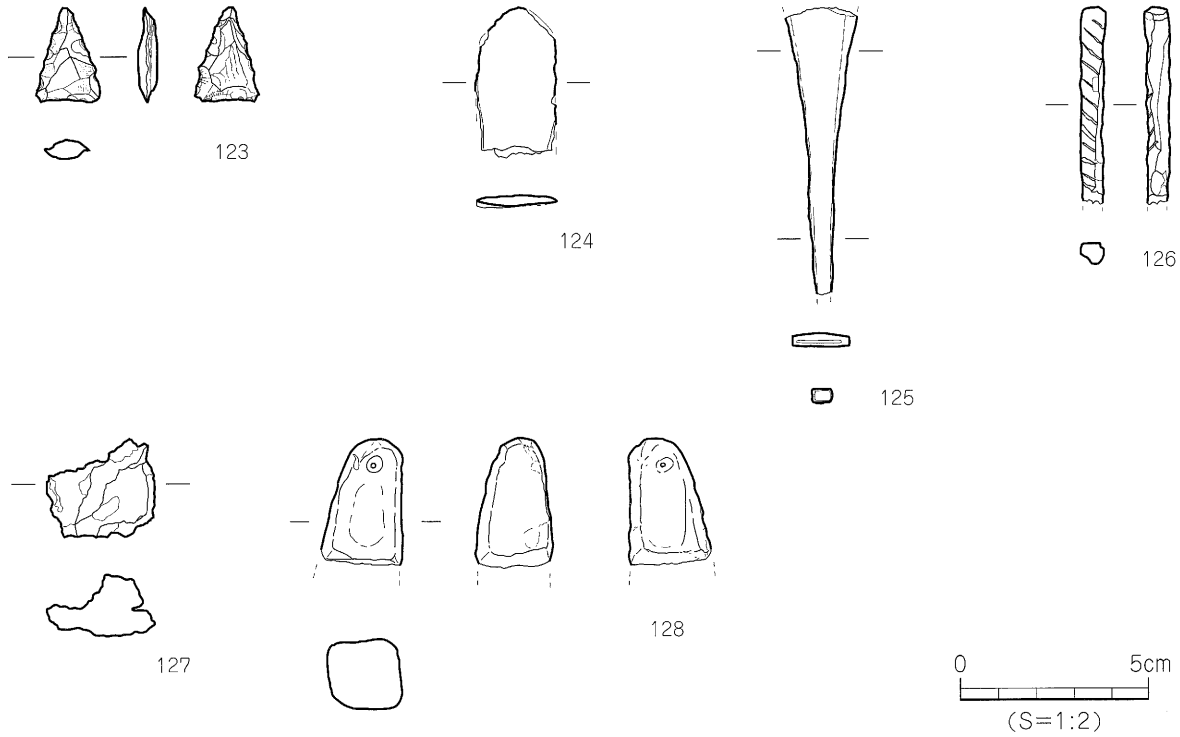
第 21 図　SB４出土遺物実測図（２）



第22図　ＳＢ４出土遺物実測図（３）

であり、内湾する胴部に 84 は口縁端部は内傾する面をなし、内面に磨き調整が施される。85 は口縁端部が丸くおさまり、内外面にナデ調整が施される。86 ～ 102 は須恵器の蓋坏である。86 ～ 98 は口縁部境に断面三角形状の稜、86 ～ 97 の口縁端部は内傾する段をもつ。99 は天井部境が凹む。102 は天井部に凹みをもつ扁平なつまみが貼り付く。103 ～ 111 は坏身である。103 ～ 108 は口縁端部に内傾する段をもち、109 ～ 111 は口縁端部が丸くおさまる。112 ～ 116 は高坏で、112 は坏部に波状文が施される。113 は長脚の脚部で、透かしが施される。114 ～ 116 は短脚で、114 は透かし、116 は円孔が施される。117 ～ 120 は甕で、117 ～ 119 は外方向に肥圧された口縁端部をもち、120 は球形の下胴部には内外面にタタキ調整が施され、底部に粘土の継ぎ目が残る。121・122 は提瓶で 121 は口縁端部は屈曲をもち外上方に延び、122 は肩部に円孔が施された半円盤状の把手が貼り付く。123 は打製石鏃であり、平基式で両面に刃をもつ。サヌカイト製。124 ～ 126 は鉄鏃である。124・125 は柳葉形、126 は茎部に刻み目が施される。127 は鉄滓である。128 は土製の勾玉である。

時期：出土した須恵器の特徴から古墳時代後期前葉とする。



第 23 図　ＳＢ４出土遺物実測図（４）

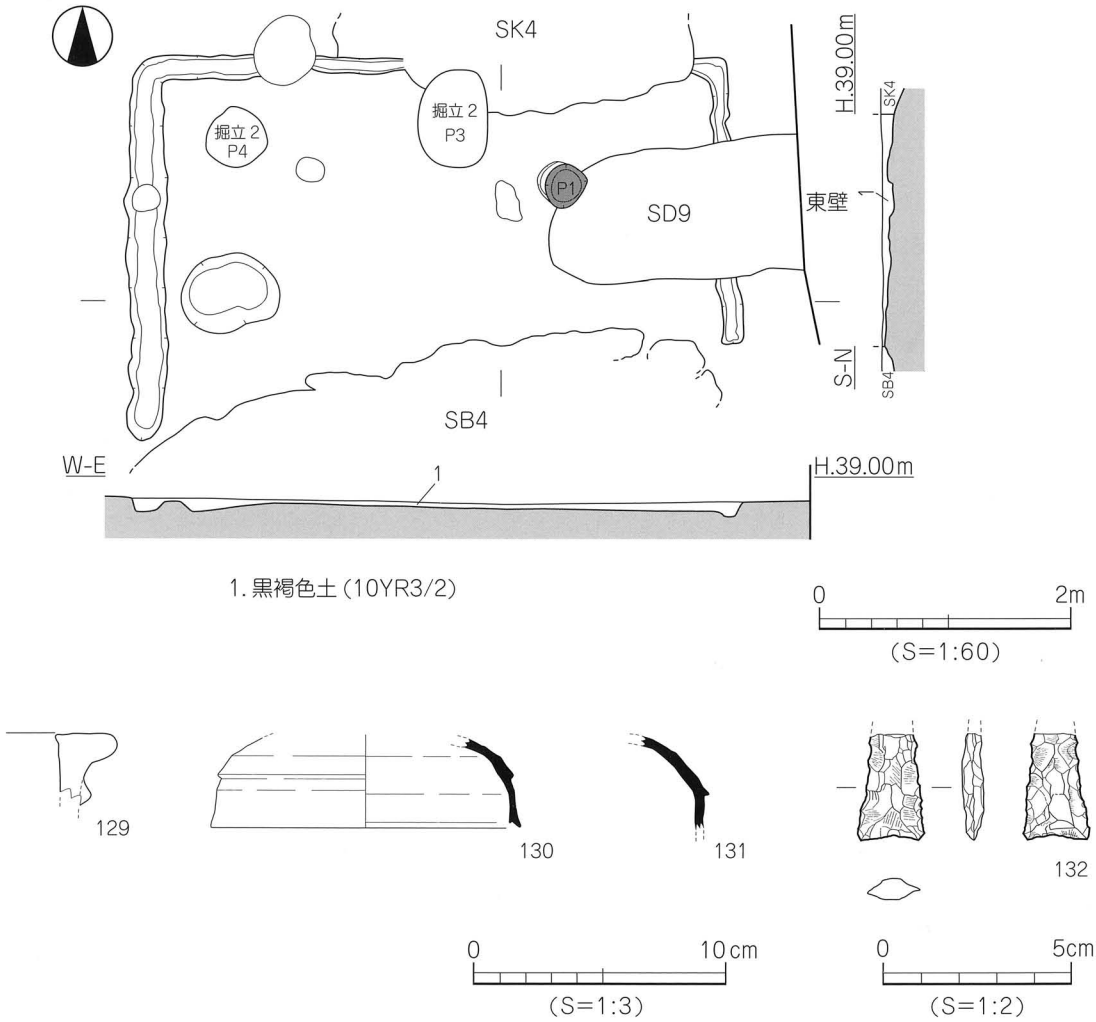
ＳＢ５（第24図）

調査区北東部Ｈ～Ｉ･3～4区に位置し、SB4、掘立2、SD9、SK4に切られ床面付近での検出である。平面形態は方形を呈し、検出規模は東西4.85m、南北3.05m以上、深さ5cmを測る。内部施設は、主柱穴、周壁溝、貼り床を検出した。主柱穴は1本分（P1）を検出し、直径35cm、深さ21cmを測る。周壁溝は壁体に沿って、幅10～33cm、深さ1～4cmを測る。貼り床は床面の凹み部から検出した。住居内の埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は床面より出土し、器種は土師器の甕や須恵器の蓋坏の破片が僅かに出土する。

出土遺物（第24図）

129は甕の口縁部であり、口縁外面に断面三角形状の貼付凸帯をもち、端部は外方に肥厚され、内外面にヨコナデ調整が施される。130・131は蓋坏であり、天井部境に凹みによる稜をもち、130は口縁端部は内傾する段をもつ。内外面に回転ﾅﾃﾞ調整が施される。132は打製石鏃で、基部が僅かに抉られた凹基無茎式鏃で先端部が欠失する。サヌカイト製。

時期：出土した須恵器の特徴から、古墳時代後期前葉とする。



第24図　ＳＢ５測量図・出土遺物実測図

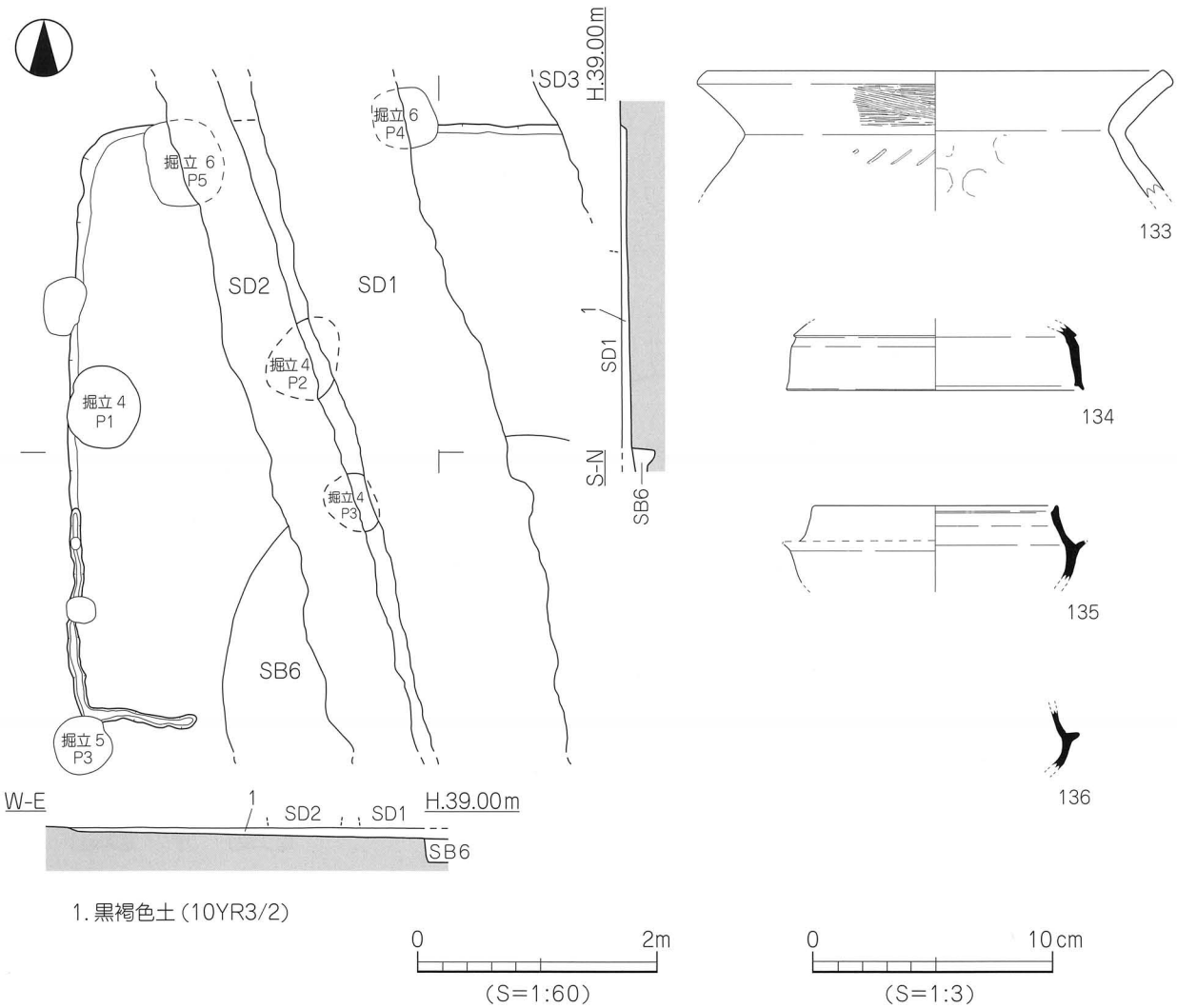
ＳＢ７（第 25 図）

調査区中央部西側Ｆ～Ｇ・５～７区に位置し、掘立４～６、SD1 ～３に切られ、SB6・17、周溝１を切り、床面付近での検出である。平面形態は方形を呈し、検出規模は東西 4.1m 以上、南北 5.03m、深さ４cmを測る。内部施設は、周壁溝、貼り床を検出した。周壁溝は南西隅部だけで検出し、幅７～10 cm、深さ４～13 cmを測る。貼り床は床面の凹み部から検出した。住居内の埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は住居全体より散在して出土したが、殆どの土器が床面より浮いた状態で出土した。器種は土師器の甕や須恵器の蓋坏の破片が少量出土する。

出土遺物（第 25 図）

133 は甕の口縁部であり、「く」字状を呈する口縁部の端面は平らである。134 は蓋坏である。天井部境に凹みによる稜、口縁端部は内傾する段をもつ。135・136 は坏身であるた。135 は受部端に凹みをもち、口縁端部に内傾する面をもつ。136 は水平に延びる受部をもつ。

時期：出土した須恵器の特徴から古墳時代後期前葉とする。



第 25 図　ＳＢ７測量図・出土遺物実測図

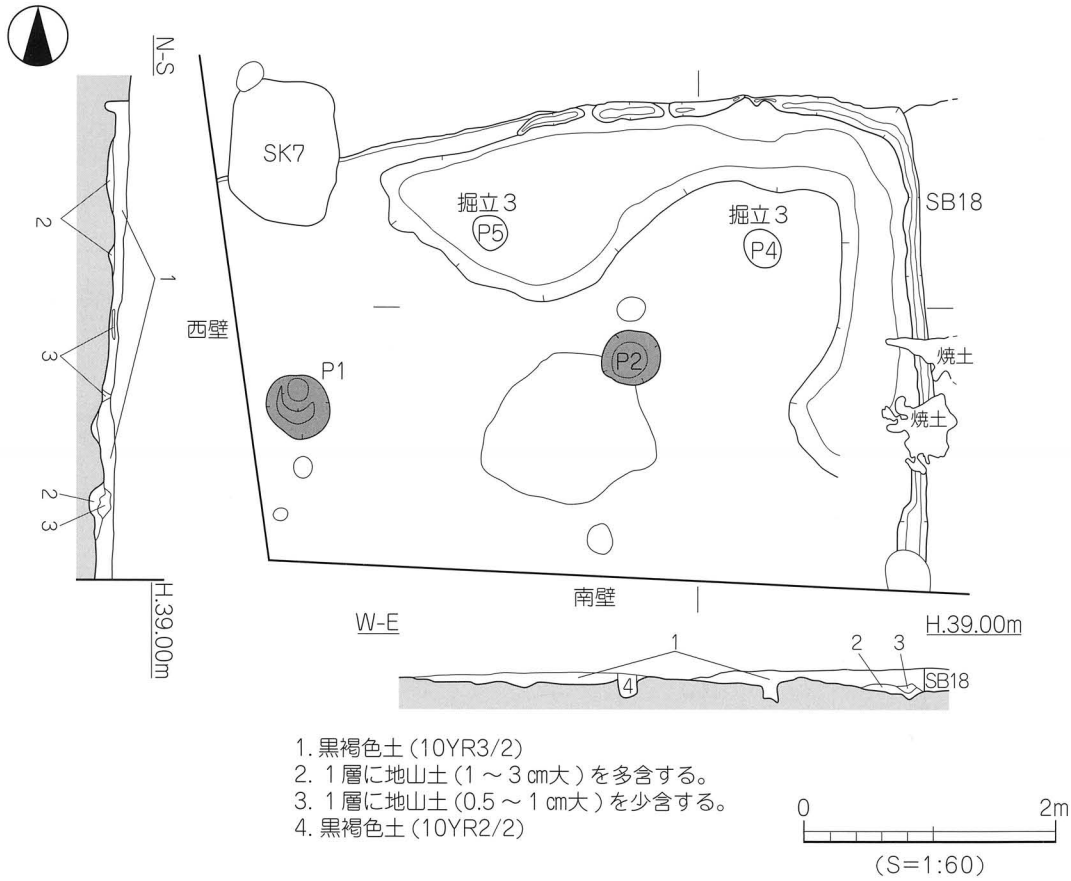
ＳＢ 10（第 26 図）

調査区南西隅Ｆ～Ｈ・8～9区に位置し、掘立３・SK7 に切られ、SB18 を切り、南・西側は調査区外に延びる。平面形態は方形を呈し、検出規模は東西 5.5m 以上、南北 3.8m 以上、深さ 12 cmを測る。内部施設は、主柱穴、周壁溝、貼り床を検出した。主柱穴は２本分（P1・P2）を検出し、直径 45 ～ 53 cm、深さ 22 ～ 34 cmを測る。周壁溝は壁体に沿って検出し、幅 12 ～ 20 cm、深さ２～ 6m を測る。貼り床は床面の凹み部から検出した。住居内の埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は住居全体より散在して出土したが、殆どの土器が床面より浮いた状態で出土した。器種は土師器の甕、須恵器の蓋坏・坏身・甕に混じり、ガラス小玉、鉄鏃・鉄滓、骨が出土する。

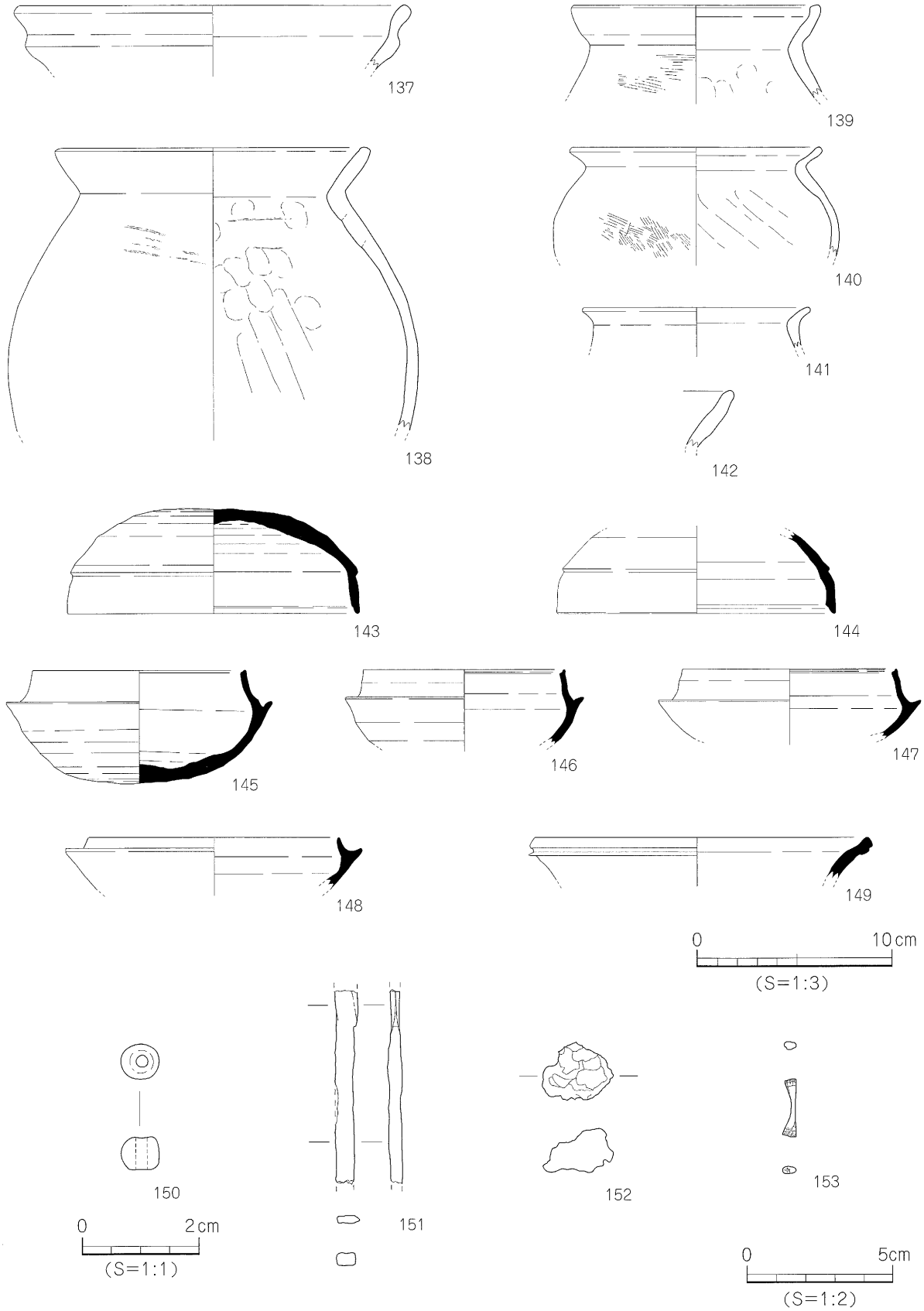
出土遺物（第 27 図、図版 7）

137 ～ 142 は甕である。137 は口縁部に緩やかな段を持ち、内外面に横ナデ調整が施される。138 ～ 141 は「く」字状を呈した口縁部をもつ。143・144 は須恵器の蓋坏で、天井部境に凹みによる稜をもち、天井部にヘラ削り調整が施される。145 ～ 148 は須恵器の坏身であり、外上方に延びる受部に、端部は凹む。148 は受部端は浅く凹み口縁部は内傾する。149 は須恵器の壺で、外反する口縁部に端部は丸く納まる。150 ガラス小玉の完存品である。151 は鉄鏃の茎部であり、断面形状は長方形状を呈する。152 は鉄滓である。153 は骨である。両端はスポンジ状で焼成を受け、薄い緑白色を帯びる。

時期：出土した須恵器の特徴から、古墳時代後期中葉とする。



第 26 図　ＳＢ10 測量図



第 27 図　ＳＢ10 出土遺物実測図

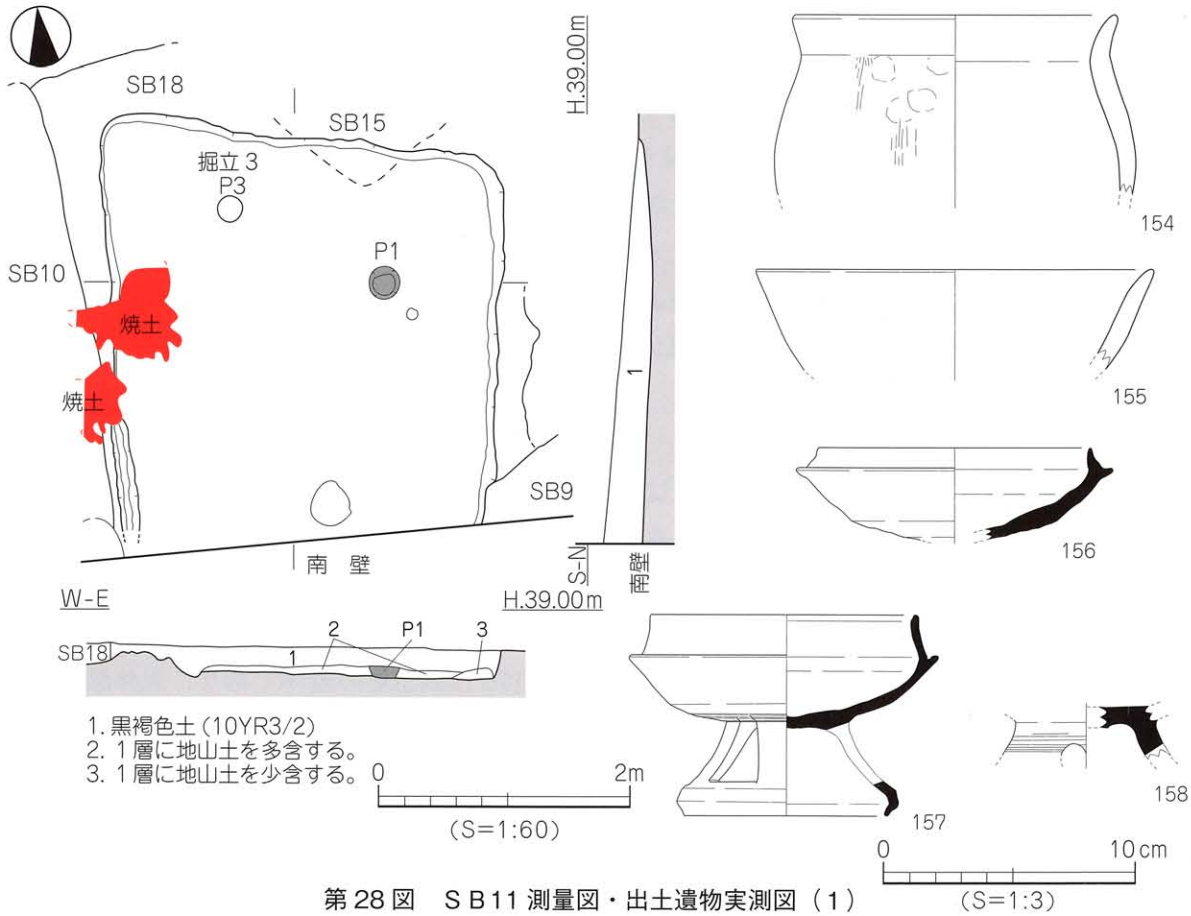
ＳＢ 11（第 28 図、図版 3）

調査区南端 H・8 ～ 9 区に位置し、SB9・15・18 を切り、南側は調査区外に延びる。平面形態は方形を呈し、検出規模は東西 3.1m、南北 3.2m 以上、深さ 24 cmを測る。内部施設は、主柱穴・貼り床・竈址を検出した。主柱穴は 1 本分（P1）を検出し、直径 25 cm、深さ 11 cmを測る。貼り床は床面の凹み部にある。西壁の中央部付近に竈施設の残存とみられる焼土施設をもち、その基底面は僅かに凹む。この焼土の平面形態は U 字形に近く壁体の外側には直径 7 cm大の円筒形の穴を検出する。焼土からは骨の小片が僅かに出土する。住居内の埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は住居全体より散在して出土した。器種は土師器の甕･鉢や須恵器の坏身･高坏に混じり、砥石、ガラス小玉、鉄鏃が出土する。

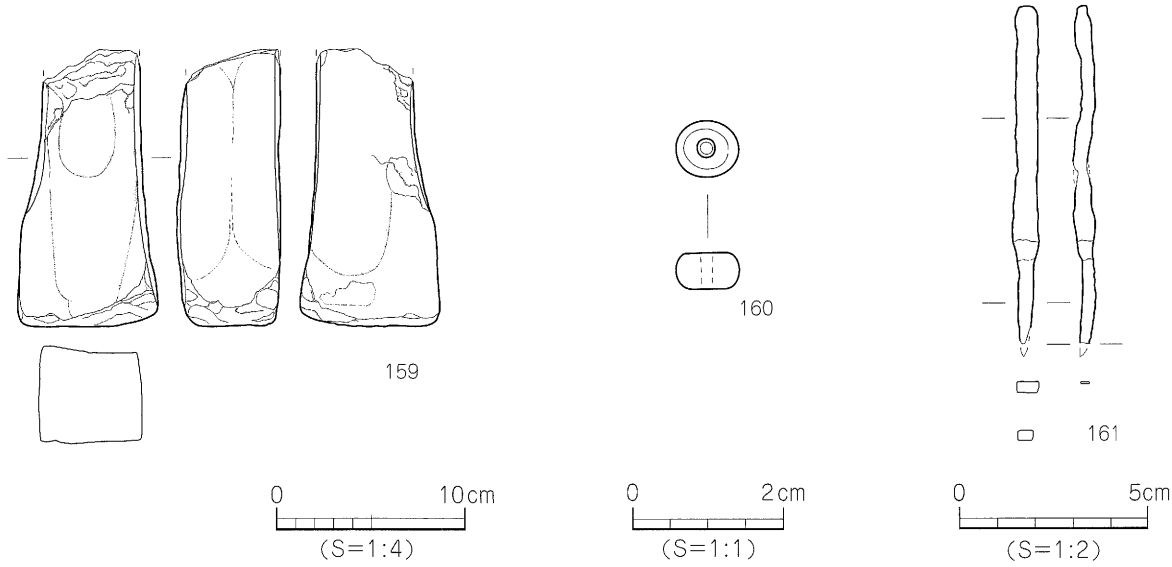
出土遺物（第 28・29 図、図版 8）

154 は甕である。緩やかに「く」字状を呈する口縁部に端部は丸くおさまる。155 は鉢である。内湾して立ち上がり、口縁部が僅かに外反する。156 ～ 158 は須恵器である。156 は坏身である。上方に延びる受部に、口縁端部は丸くおさまる。157･158 は高坏である。157 は坏部の受部端は凹み、口縁端部に内傾する面、短脚の脚部端は内方へ屈曲し、脚柱部に透かしが施される。158 は外反して下がる脚柱上部に 4 方向の円孔をもち、カキ目調整が施される。159 は砥石で 4 面にはよく使い込まれた砥面がみられる。石英粗面岩製。160 はガラス製小玉で直径が 0.75 ～ 0.82 cm、孔径 0.13 cm、厚み 0.48 cm、色調は青色である。161 は鉄鏃の茎部である。

時期：出土した須恵器の特徴から、古墳時代後期中葉とする。



第 28 図　ＳＢ11 測量図・出土遺物実測図（1）



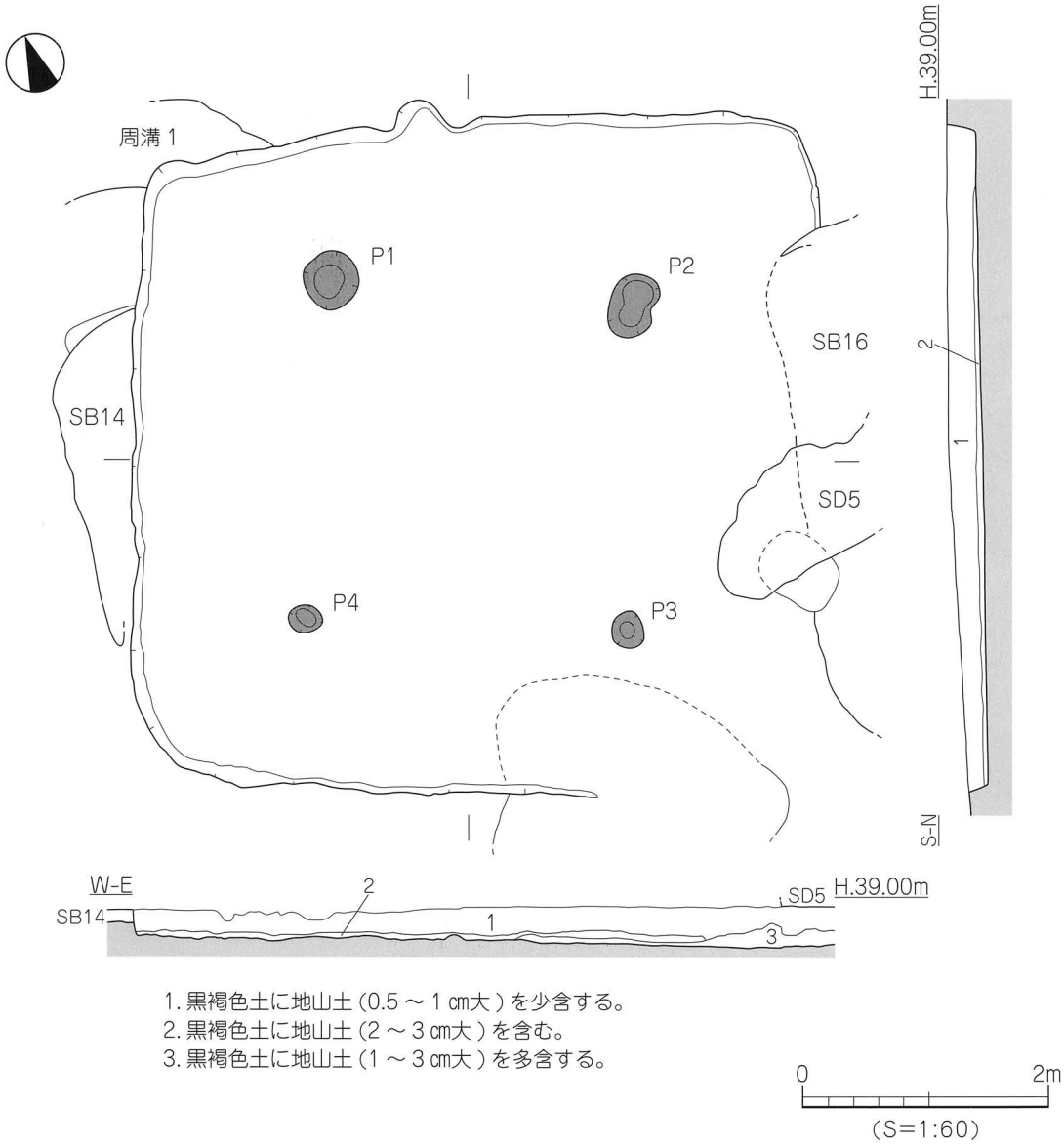
第29図　ＳＢ11出土遺物実測図（２）

ＳＢ12（第30図）

調査区中央部東側Ｈ～Ｉ・６～７区に位置し、SB16に切られSB14・周溝１を切る。平面形態は方形を呈し、検出規模は東西5.55m、南北5.47m、深さ35㎝を測る。内部施設は、主柱穴、貼り床と焼土塊を検出した。主柱穴は４本分（P1～P4）を検出し、直径23～54㎝、深さ30～37㎝を測る。床面全体から黒褐色土に地山土を多含する貼り床を検出し、厚さ３～13㎝を測る。北壁中央部の壁体で外に張り出す凹みをもち、内側には焼土塊を検出する。また、焼土の南隣で上半が潰れた土師器の甕や、口頸部の欠失した須恵器の壺が出土する。埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は住居全体より散在して出土したが、殆どの土器が床面より浮いた状態で出土した。器種は土師器の甕・壺・鉢・甑や須恵器の蓋坏・坏身・高坏・甕・壺・甕に混じり、石錘・両刃磨製石斧・石錐・敲石、管玉、鉄鏃が出土する。

出土遺物（第31～33図、図版８・９）

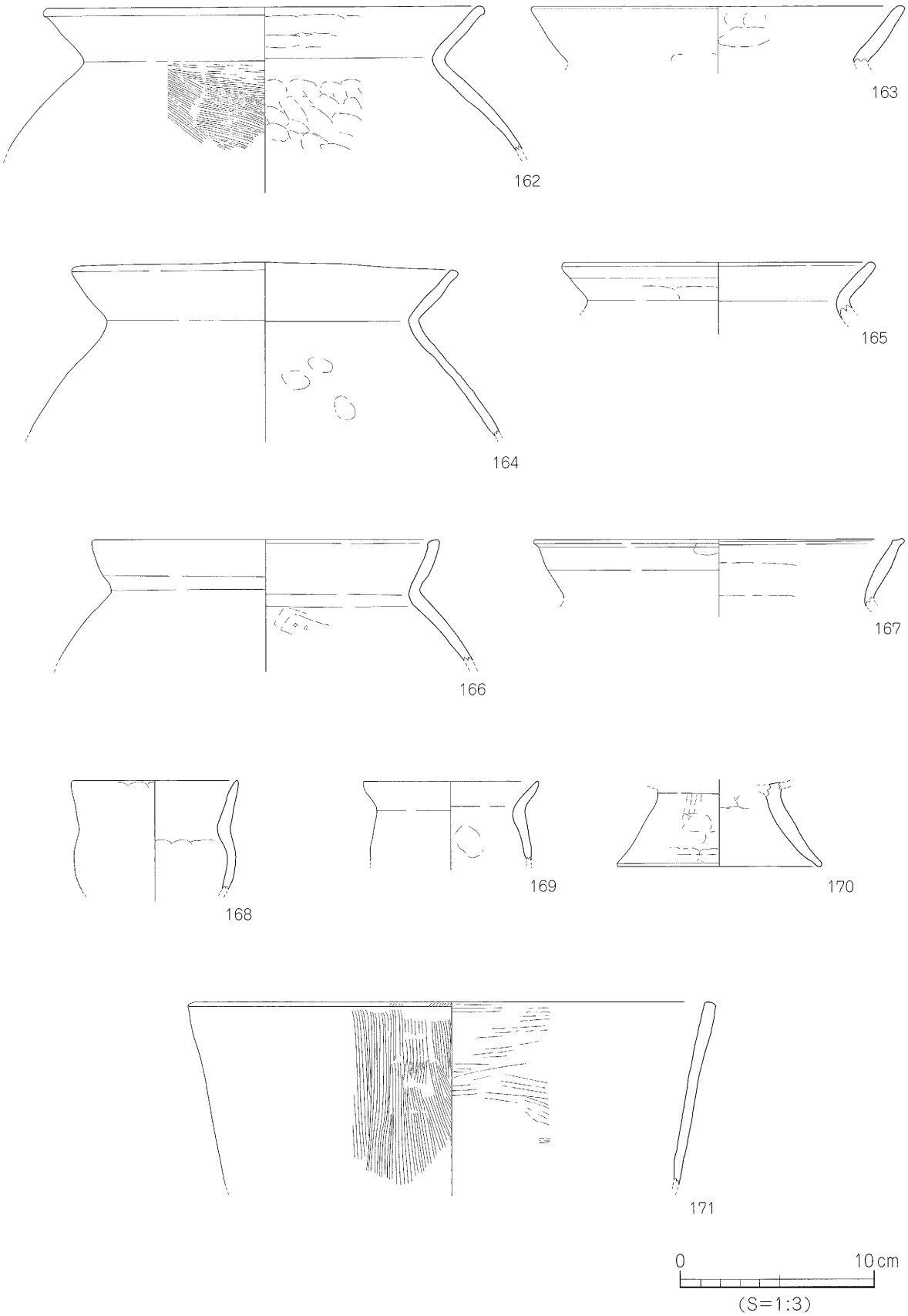
162～167は甕である。162・164・165は「く」字状の口縁部をもち、162・163・165の端部は丸くおさまる。166は口縁端部に内傾する平らな面をもち、167は口縁端部がやや凹む。168・169は壺であり、168は直立気味の口縁部、169はやや外反する口縁部をもつ。170は脚付鉢の脚部で「ハ」字状に外反する脚部の内外面は横ナデ調整が施される。171は甑であり、やや外反する上胴部の内外面にハケ目調整が施される。172～175は須恵器の蓋坏であり、天井部境に稜をもち、口縁端部は172が内傾する段をもち、173・175は内傾する面をなし、174はやや凹む。176～182は須恵器の坏身であり、口縁端部に内傾する段をもつ。183～189は高坏で、183～185は凹むつまみをもつ。186～189は坏部で透かしをもち、187～189はカキ目調整が施される。190～193は甕であり、190～192は口縁端部が上下方に拡張する。191～193は口縁部波状文が施される。194は壺であり、直立気味の口縁部をもち、内外面に回転ナデ調整が施される。



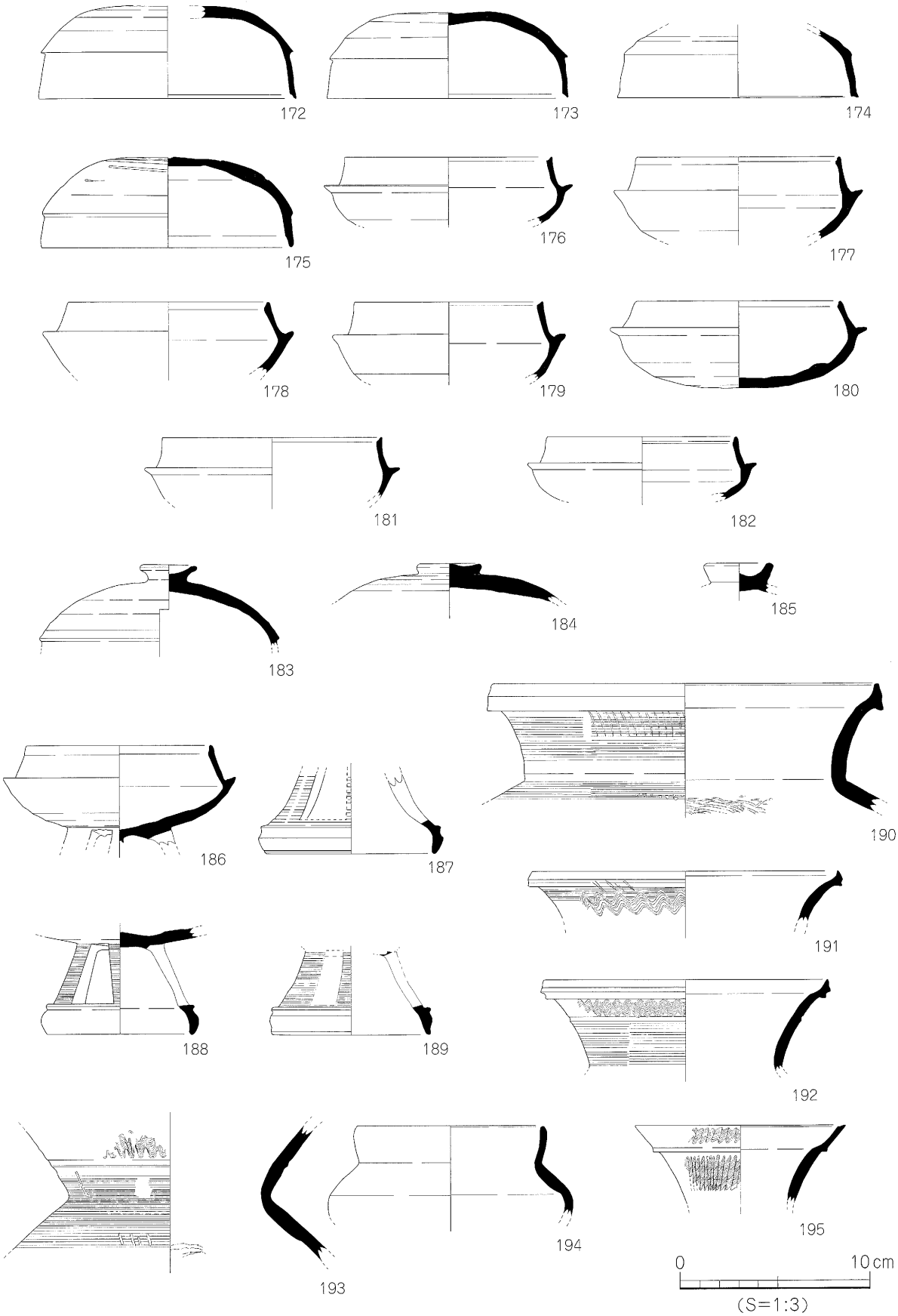
第 30 図　ＳＢ12 測量図

195 は瑳で外反する口縁部は屈曲をもち、波状文が施される。196 は石錘の完存品で、長さ 4.88 ㎝、重さ 42.15g を測り、砂岩製である。197 は両刃の磨製石斧で緑色片岩製ある。198 は石錐でサヌカイト製である。199 は敲石で上端に敲打痕が認められる。石材は玄武岩製である。200 は管玉の破片で、明緑灰色の緑色凝灰岩製である。201 は有茎式の鉄鏃である。

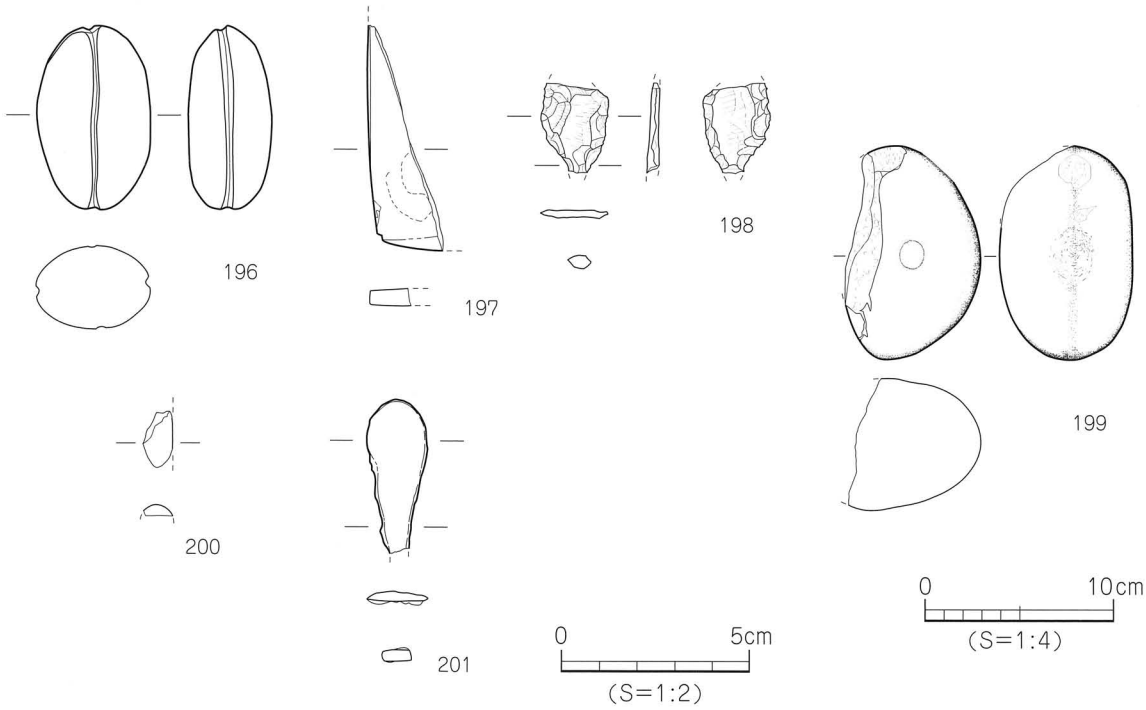
時期：出土した須恵器の特徴から、古墳時代後期前葉とする。



第 31 図　ＳＢ12 出土遺物実測図（1）



第32図　ＳＢ12出土遺物実測図（２）



第 33 図　ＳＢ12 出土遺物実測図（３）

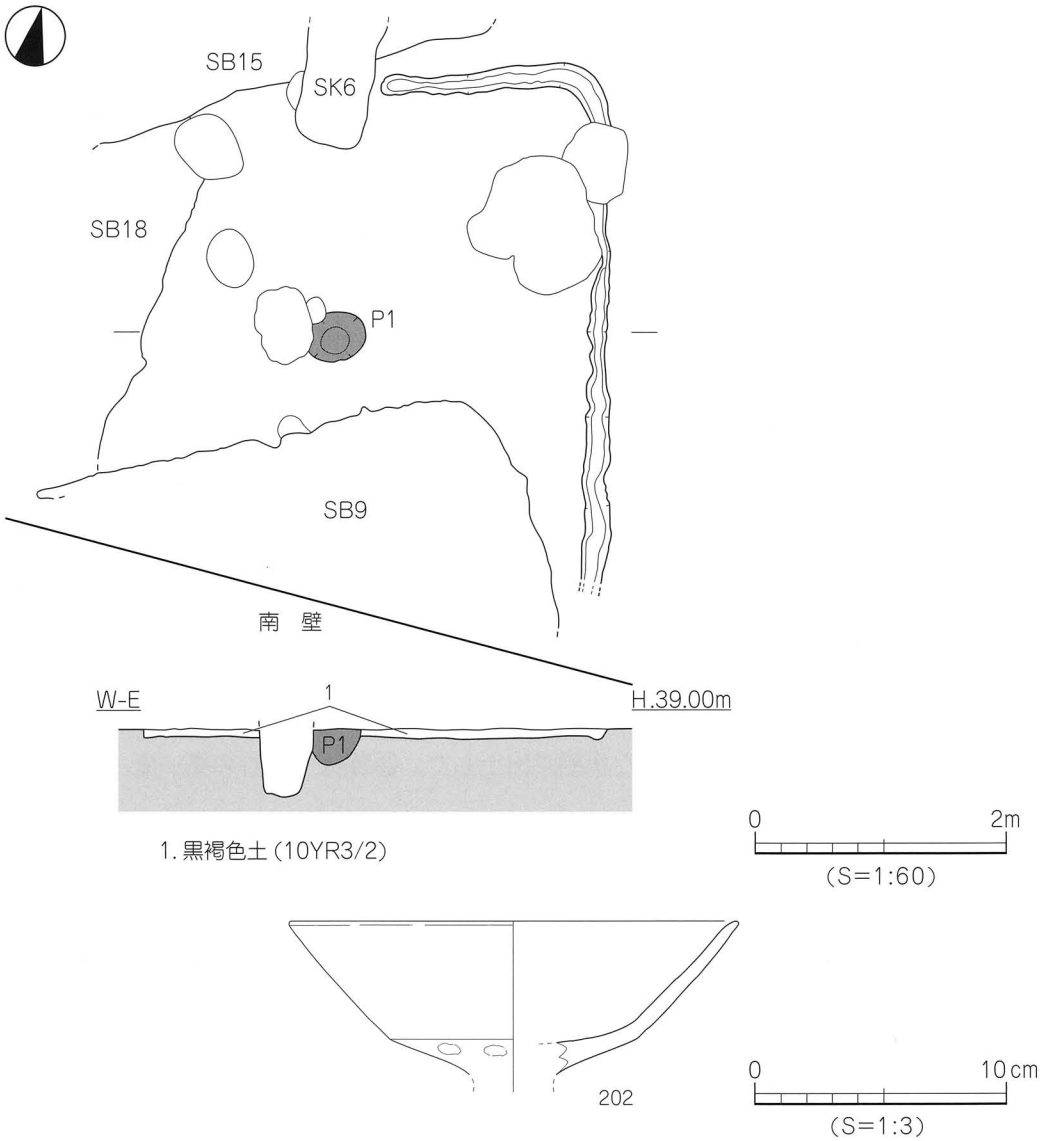
ＳＢ 13（第 34 図）

調査区南東隅Ｈ～Ｉ・8～9区に位置し、SK6 に切られ、SB9 を切り、床面付近での検出である。平面形態は方形を呈し、検出規模は東西 2.3m 以上、南北 4.1m 以上、深さ 6 cmを測る。内部施設は、主柱穴、周壁溝を検出した。主柱穴は 1 本分（P1）を検出し、直径 30 cm、深さ 15 cmを測る。周壁溝は壁体に沿って、東側の一部を除く全体で検出した。幅 10 ～ 19 cm、深さ 2 ～ 13 cmを測る。住居内の埋土は黒褐色土の単一層。遺物は床面付近で土師器の甕や高坏の破片などが出土する。

出土遺物（第 34 図）

202 は高坏で、坏部は底部付近で屈曲し直線的に外上方に延び、内外面はナデ調整が施される。

時期：出土した土師器の特徴より、古墳時代後期前半に時期比定される。

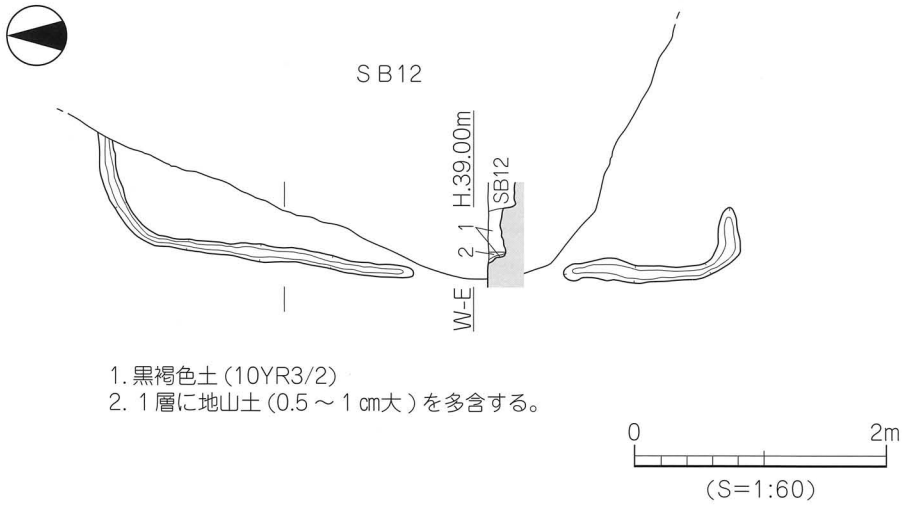


第 34 図　ＳＢ13 測量図・出土遺物実測図

ＳＢ 14（第 35 図）

調査区中央部 H･6 ～ 7 区に位置し、SB12、SD3 に切られており西壁部だけの床面付近を検出する。全容は不明であるが、平面形態は方形を呈するものと推測する。検出規模は東西 0.6m 以上、南北 5.05m、深さ 13 cmを測る。内部施設は、周壁溝を検出し、幅 6 ～ 18 cm、深さ 3 ～ 5 cmを測る。住居内の埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は土師器や須恵器の小片が僅かに出土する。

時期：遺構の切り合いや出土した遺物などから、古墳時代でも SB12 より古い古墳時代後期前葉以前とする。



第 35 図　ＳＢ14 測量図

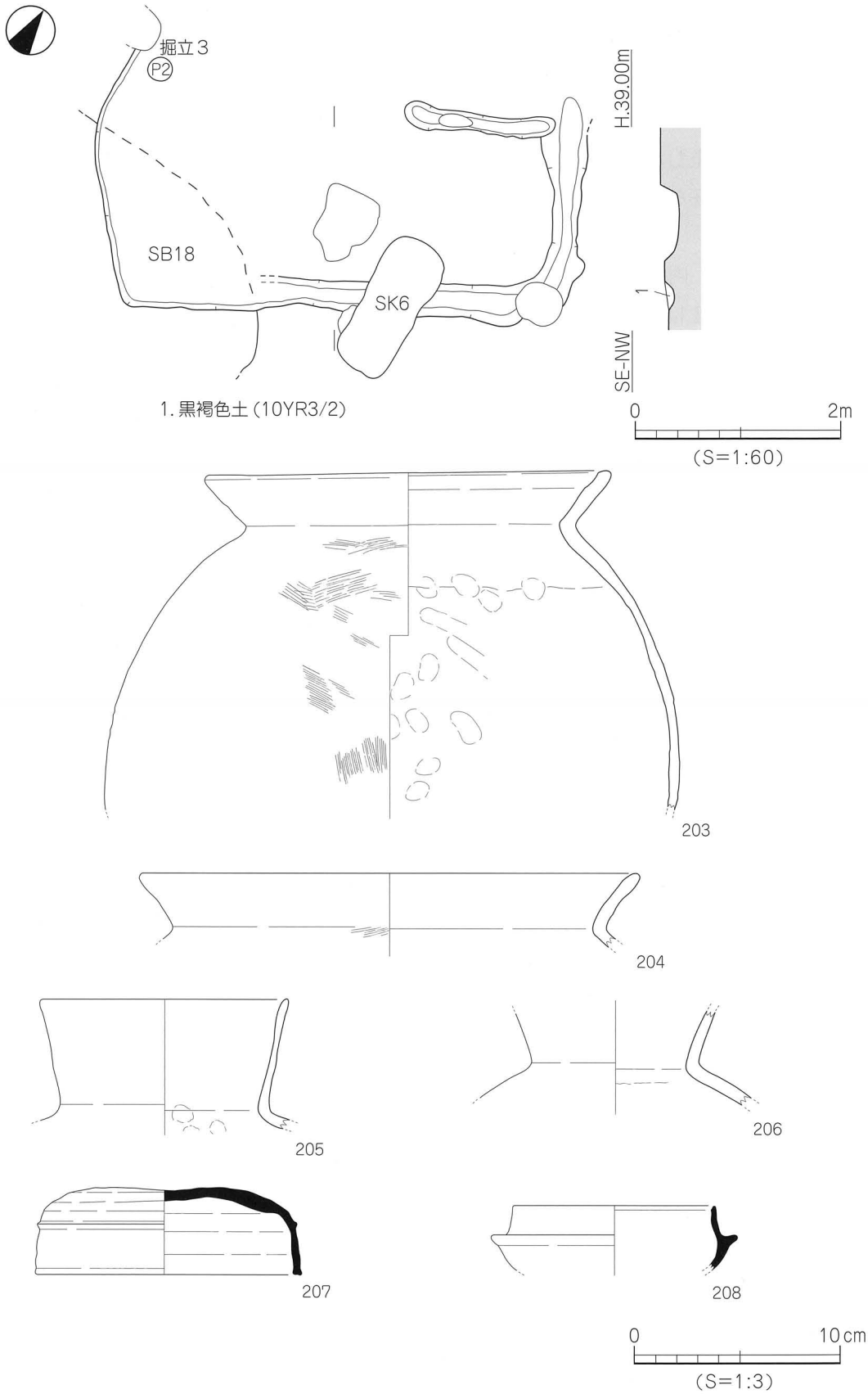
ＳＢ 15（第 36 図）

調査区南東部 H ～ I・8 ～ 9 区に位置し、掘立 3、SK6・11 に切られ、SB18 を切り南側だけの床面付近を検出する。平面形態は方形を呈し、検出規模は東西 4.76m、南北 2.1m 以上、深さ 15 cmを測る。内部施設は、周壁溝・小溝を検出した。周壁溝は壁体に沿って、幅 23 ～ 40 cm、深さ 5 ～ 9 cmを測る。南東部の東西方向に周壁溝から直角方向に直線的に延びる小溝を検出し、長さ 1.3m、幅 16 ～ 20 cm、深さ 4 ～ 6 cmを測る。住居内の埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は住居全体より散在して出土したが、殆どの土器が床面より浮いた状態で出土した。器種は土師器の甕・壺、須恵器の蓋坏・坏身などが出土する。

出土遺物（第 36 図、図版 9）

203･204 は甕である。「く」字状を呈する口縁部に端部は平らな面をなす。205･206 は壺である。205 はやや外上方に直線的に延びる口縁部、206 は「く」字状を呈する口縁部をもち、内外面はナデ調整が施される。207・208 は須恵器で、207 は蓋坏であり、天井部と口縁部との境に稜をもち、口縁端部は平らな面をなす。208 は坏身であり、口縁端部に内傾する段を有する。

時期：出土した須恵器の特徴から古墳時代後期前葉に時期比定される。



第36図　ＳＢ15測量図・出土遺物実測図

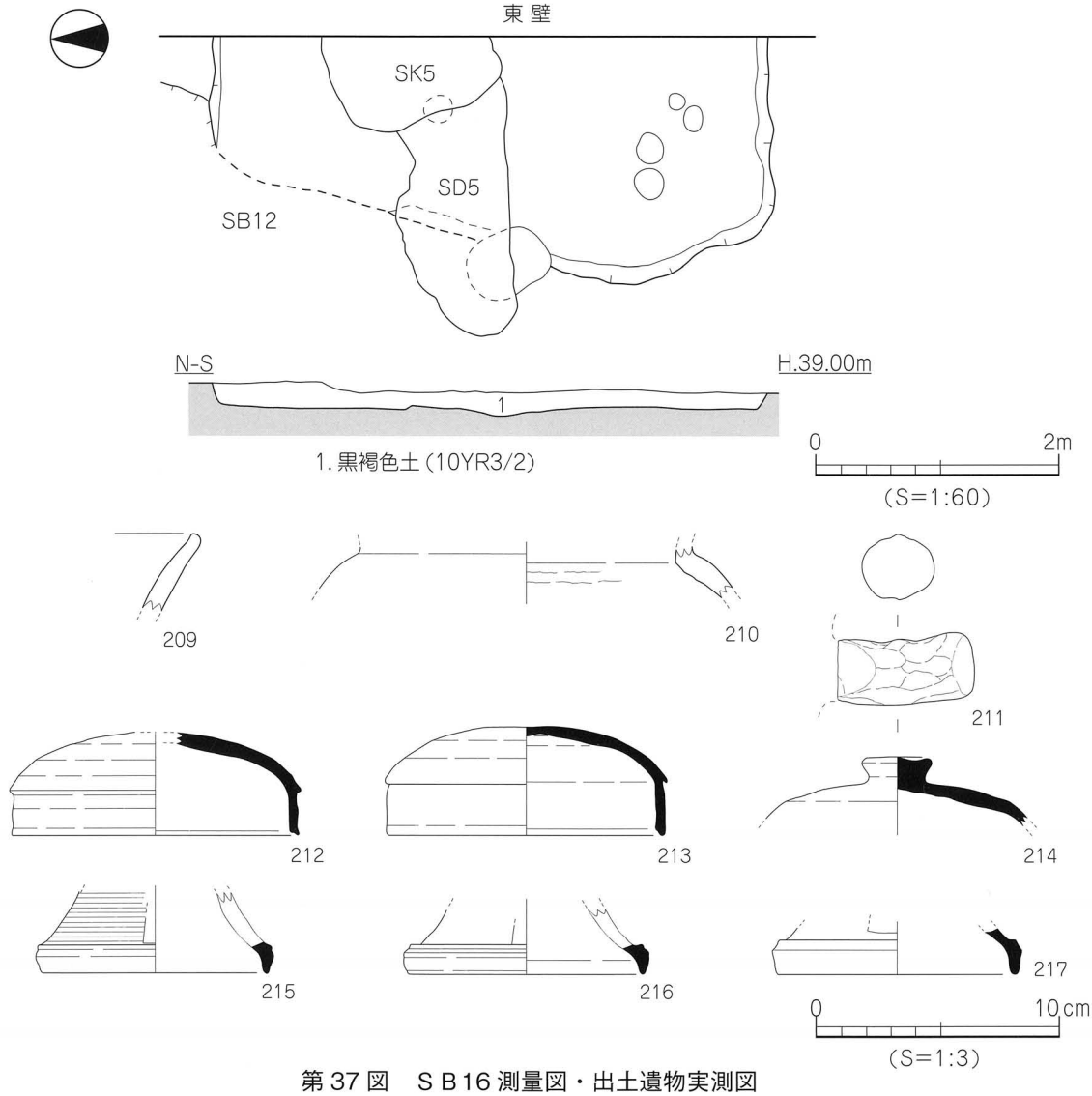
ＳＢ 16（第 37 図）

調査区南東部Ｉ・7 ～ 8 区に位置し、SB12 を切り、東側は調査区外に延びる。全容は不明であるが、平面形態は方形を呈するものと推測する。検出規模は東西 2.03m 以上、南北 4.68m、深さ 28 cmを測る。西壁中央部の壁体付近にて焼土の塊を検出する。住居内の埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は住居全体より散在して出土したが、殆どの土器が床面より浮いた状態で出土した。器種は土師器の甕・壺・甑や須恵器の蓋坏・高坏などが出土する。

出土遺物（第 37 図）

209 は甕の口縁部で、内外面にナデ調整が施される。210 は壺の上胴部で、頸部付近の内面に粘土のつなぎ目がある。211 は甑の把手部で、断面は楕円形である。212 ～ 217 は須恵器。212・213 は蓋坏で、天井部と口縁部との境に稜をもち、口縁端部が 212 は内傾する段、213 は内傾する面をなす。214 は有蓋高坏の蓋で、天井部に上部の縁がやや凹み、中心部がやや盛り上がるつまみがつく。215 ～ 217 は高坏の脚部で、脚柱部に透かしが施される。

時期：出土した須恵器の特徴から古墳時代後期前葉とする。

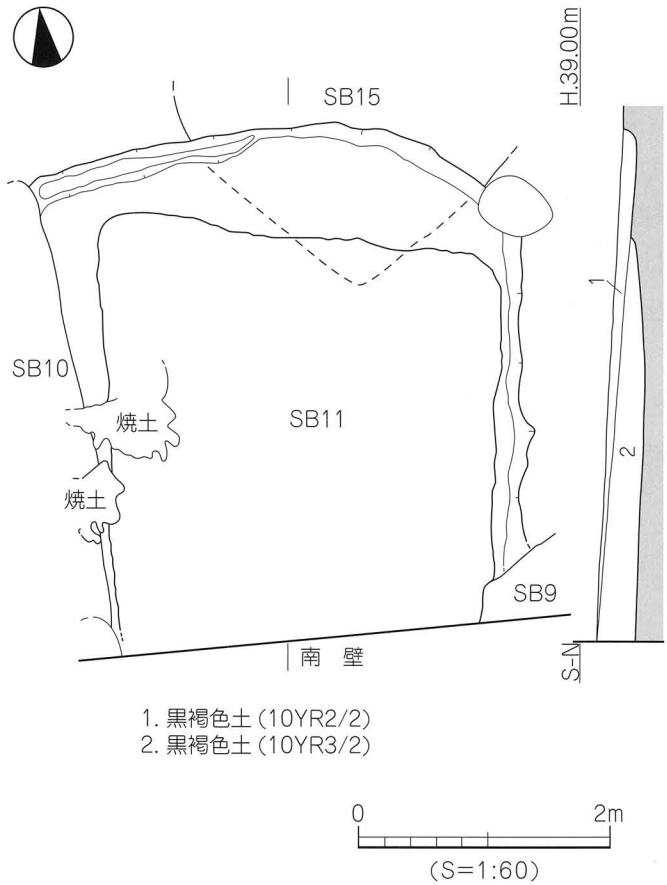


第 37 図　ＳＢ16 測量図・出土遺物実測図

ＳＢ 18（第 38 図）

調査区南東部Ｈ・8 ～ 9 区に位置し、SB10・11 に切られる。南側は調査区外に延びる。平面形態は方形を呈し、検出規模は東西 3.5m 以上、南北 4.05m 以上、深さ 13 cmを測る。内部施設は周壁溝を検出した。周壁溝は壁体に沿って、北壁の西側で検出した。幅 18 ～ 20 cm、深さ 2 ～ 5 cmを測る。貼り床は床面の凹み部から検出した。北壁中央部付近の壁体に貼り付くように焼土を検出する。住居内の埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は住居全体より散在して出土したが、殆どの土器が床面より浮いた状態で出土した。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、遺構の切り合いから、SB13 より古い古墳時代後期前半以前とする。

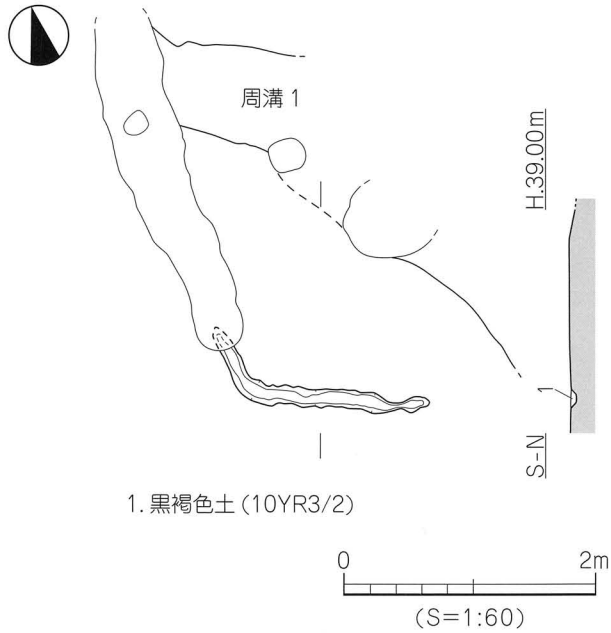


第 38 図　ＳＢ18 測量図

ＳＢ 19（第 39 図）

調査区南東部Ｇ～Ｈ・8 区に位置し、南西隅の床面を検出した。全容は不明であるが、平面形態は方形を呈するものと推測する。検出規模は東西 1.5m 以上、南北 0.6m 以上を測り、内部施設は、周壁溝の南西隅部を検出した。幅 12 ～ 17 cm、深さ 3 ～ 5 cmを測る。周壁溝の埋土は、黒褐色土である。出土遺物はない。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、遺構の切り合いから、SB18 より古い古墳時代後期前半以前とする。



第 39 図　ＳＢ19 測量図

(2) 掘立柱建物

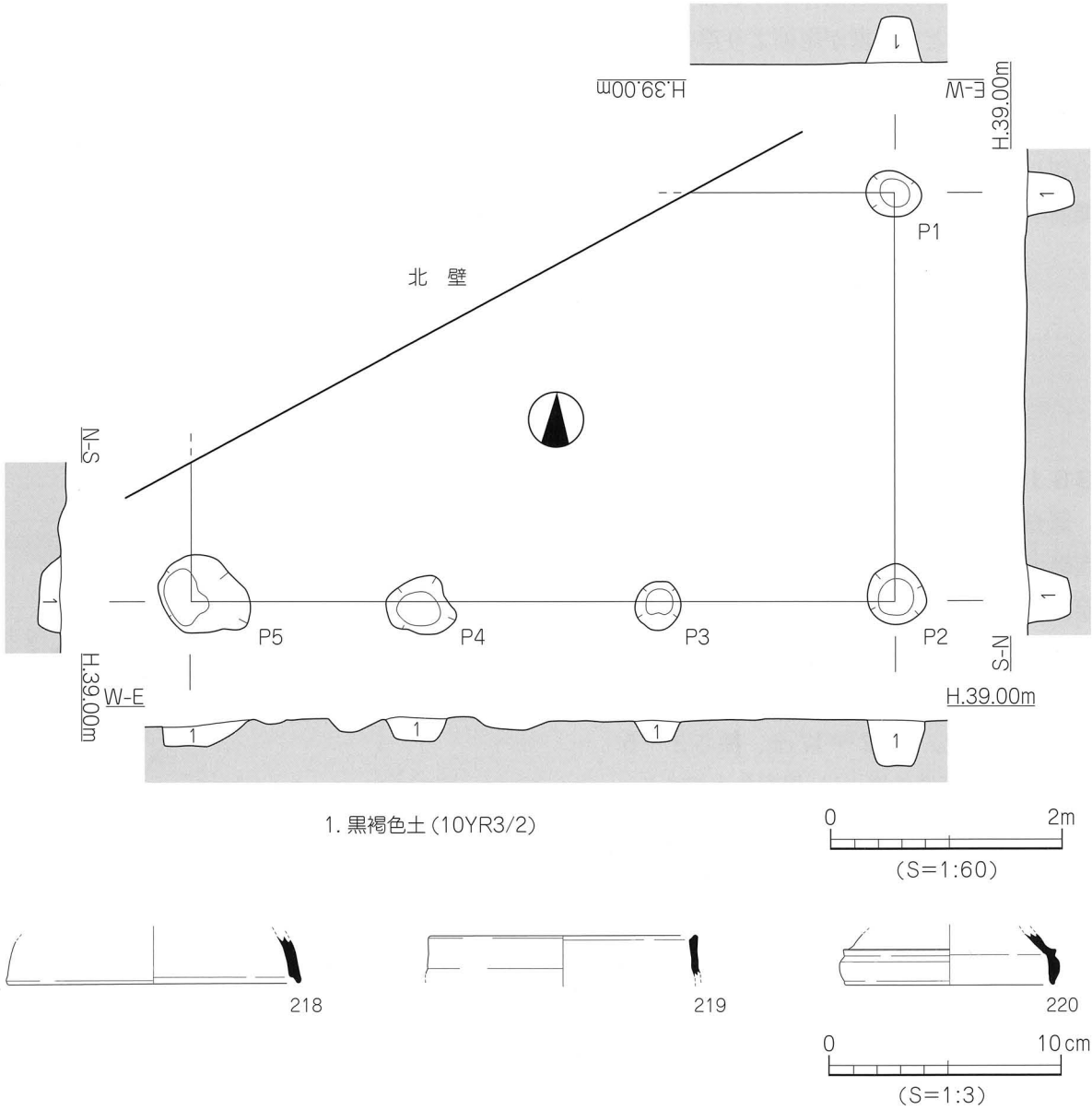
掘立 1（第 40 図）

調査区北西部の F ～ H・3 ～ 4 区に位置し、SB1 を切り、北西部は調査区外に延びる。3 間× 1 間の東西棟で、主軸は N-88°-E を指向する。検出規模は桁行 6.02m、柱間 1.9 ～ 2.1m、梁行 3.5m、柱間 3.5m、柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、直径 39 ～ 84 cm、深さ 18 ～ 40 cmを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器や須恵器の蓋坏・坏身・高坏の小片が僅かに出土する。

出土遺物（第 40 図）

218 は蓋坏で、口縁端部に内傾する面を有する。219 は坏身で、口縁端部に内傾する面を有する。220 は高坏の脚部で、脚端部は下方に延びる。

時期：出土した須恵器の特徴及び、埋土や遺構の切り合いなどから古墳時代後期前葉とする。



第 40 図　掘立 1 測量図・出土遺物実測図

掘立２（第41図）

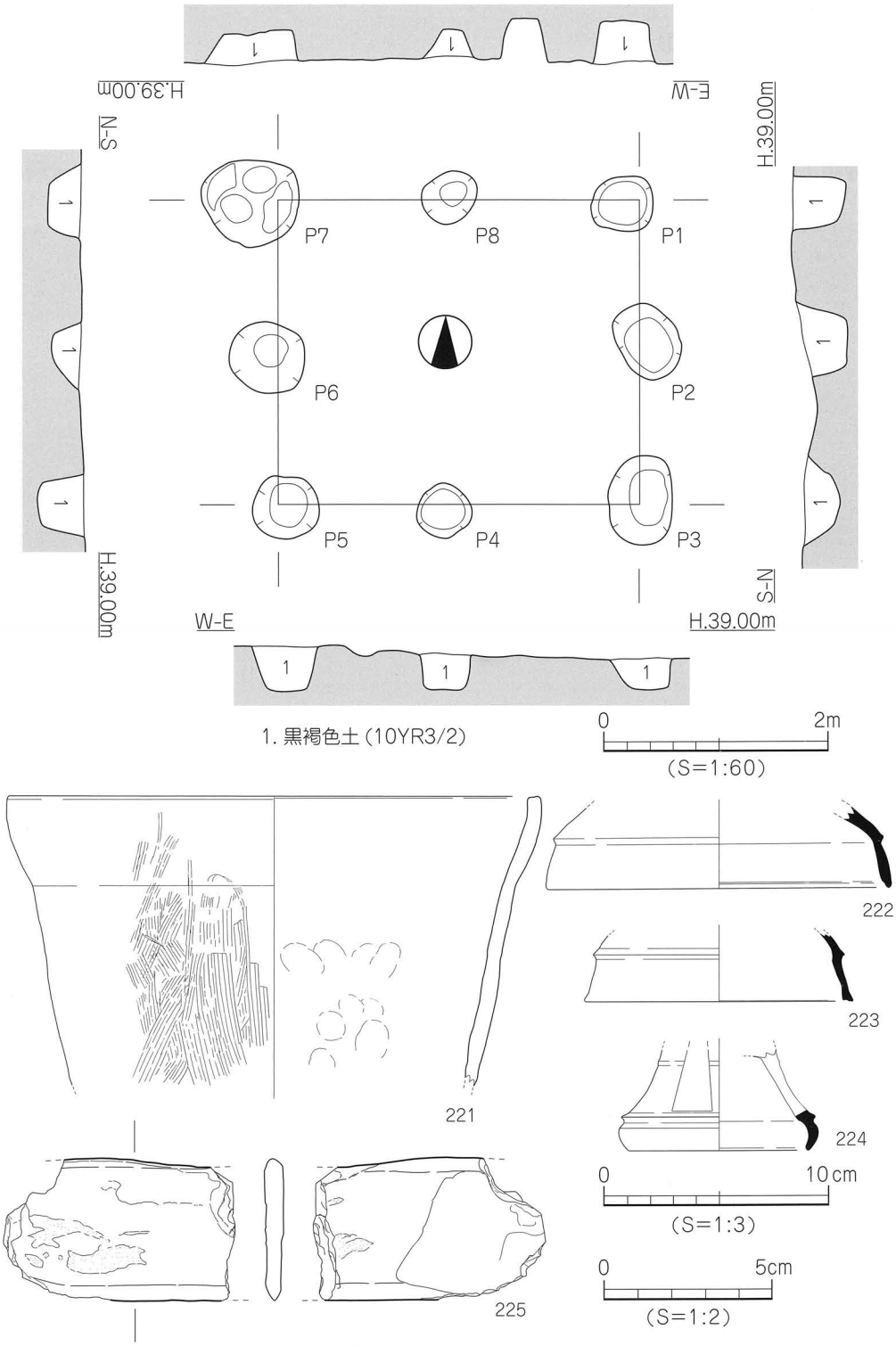
調査区北東部のＧ～Ｉ・３～４区に位置し、SB5・SK4を切る。２間×２間の東西棟で、主軸はN-89°-Eを指向する。規模は桁行3.2m、柱間1.5～1.7m、梁行2.7m、柱間1.3～1.4m、柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、直径43～88㎝、深さ24～48㎝を測る。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器の甑・須恵器の蓋坏・高坏の小片が僅かと石庖丁が出土する。

出土遺物

（第41図､図版9）

221は甑である。口縁部付近が僅かに内湾し、端部は平らな面をなし、外面にハケ目調整が施される。222・223は蓋坏で、口縁端部に内傾する段を有す る。224は高坏の脚部で、脚柱部に透かしが施される。225は石庖丁である。両面に刃部をもち、背部は使用時における擦り減りにより滑らかである。緑色片岩製。

時期：出土した須恵器の特徴及び、埋土や遺構の切り合いなどから古墳時代後期前葉とする。



第41図　掘立２測量図・出土遺物実測図

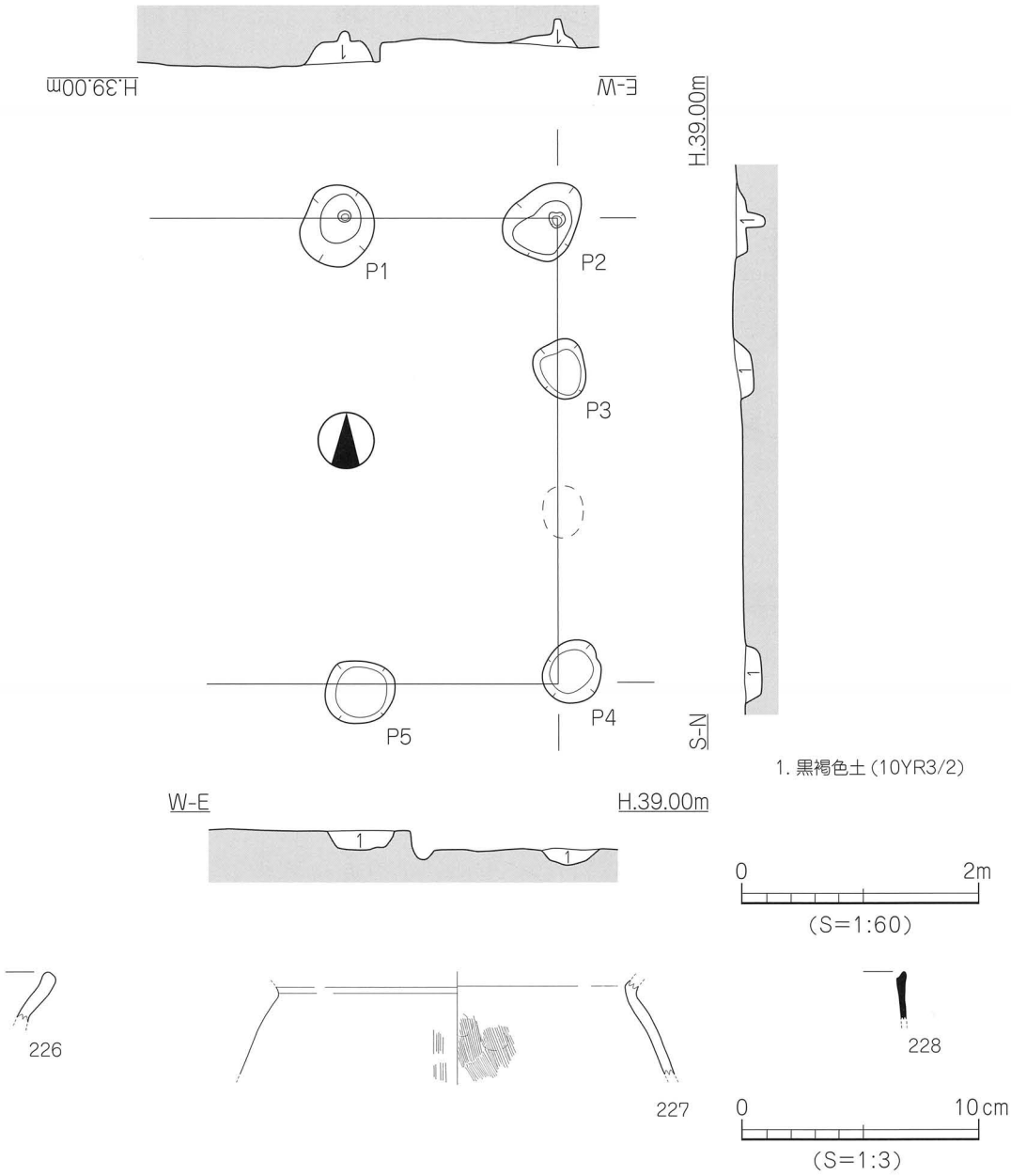
掘立 4（第 42 図）

調査区中央部西端の F ～ G・6 ～ 7 区に位置し、SD1・2 に切られ、SB6・7・17 を切り、西側は調査区外に延びる。3 間 × 2 間以上の南北棟になる。主軸は N-1°-E を指向する。検出規模は桁行 3.95m、柱間 1.3m、梁行 1.7m、柱間 1.7m、柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、直径 43 ～ 75 ㎝、深さ 16 ～ 26 ㎝を測る。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器の甕や須恵器の坏身・甕の小片が少量出土する。

出土遺物（第 42 図）

226・227 は甕であり、226 は外反気味の口縁部に端部はやや内湾する。227 は内湾する上胴部の内外面にハケ目調整が施される。228 は坏身である。口縁端部に内傾する面を有する。

時期：出土した須恵器の特徴及び、埋土や遺構の切り合いなどから古墳時代後期前葉とする。



第 42 図　掘立 4 測量図・出土遺物実測図

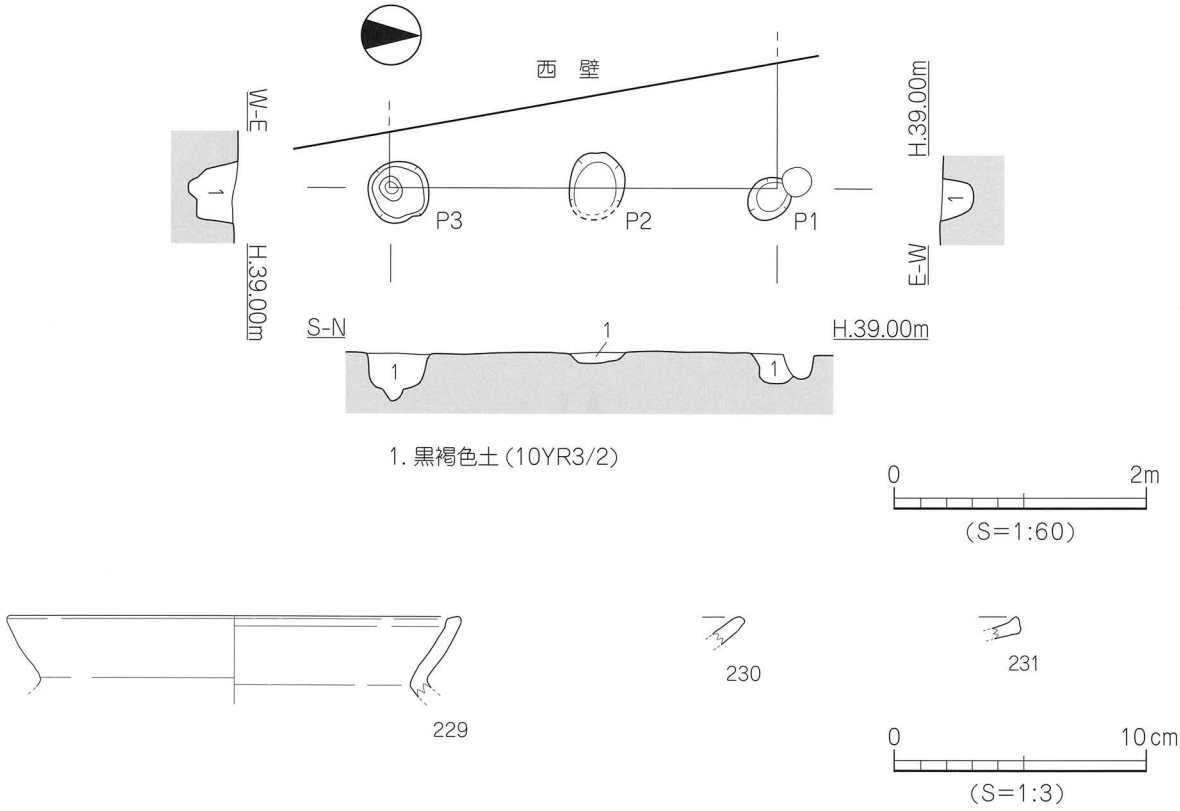
掘立５（第43図）

調査区中央部西側のＦ・６～７区に位置し、SB7を切り、西側は調査区外に延びる。２間×１間以上の南北棟になる。主軸はN-3°-Eを指向する。規模は桁行3.06m、柱間1.4～1.6m、梁行1m以上、柱間1m以上、柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、直径33～50㎝、深さ３～38㎝を測る。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器の甕や須恵器の蓋坏・坏身の小片が少量出土する。

出土遺物（第43図）

229～231は甕である。229は「く」字状を呈する口縁部に端部は水平な面をなし、内外面にナデ調整が施される。230は外反する口縁部。231は口縁端部が上方にやや肥厚され、端面は凹む。内外面に横ナデ調整が施される

時期：出土した土師器の特徴及び、埋土や遺構の切り合いなどから古墳時代後期前半代とする。



第43図　掘立５測量図・出土遺物実測図

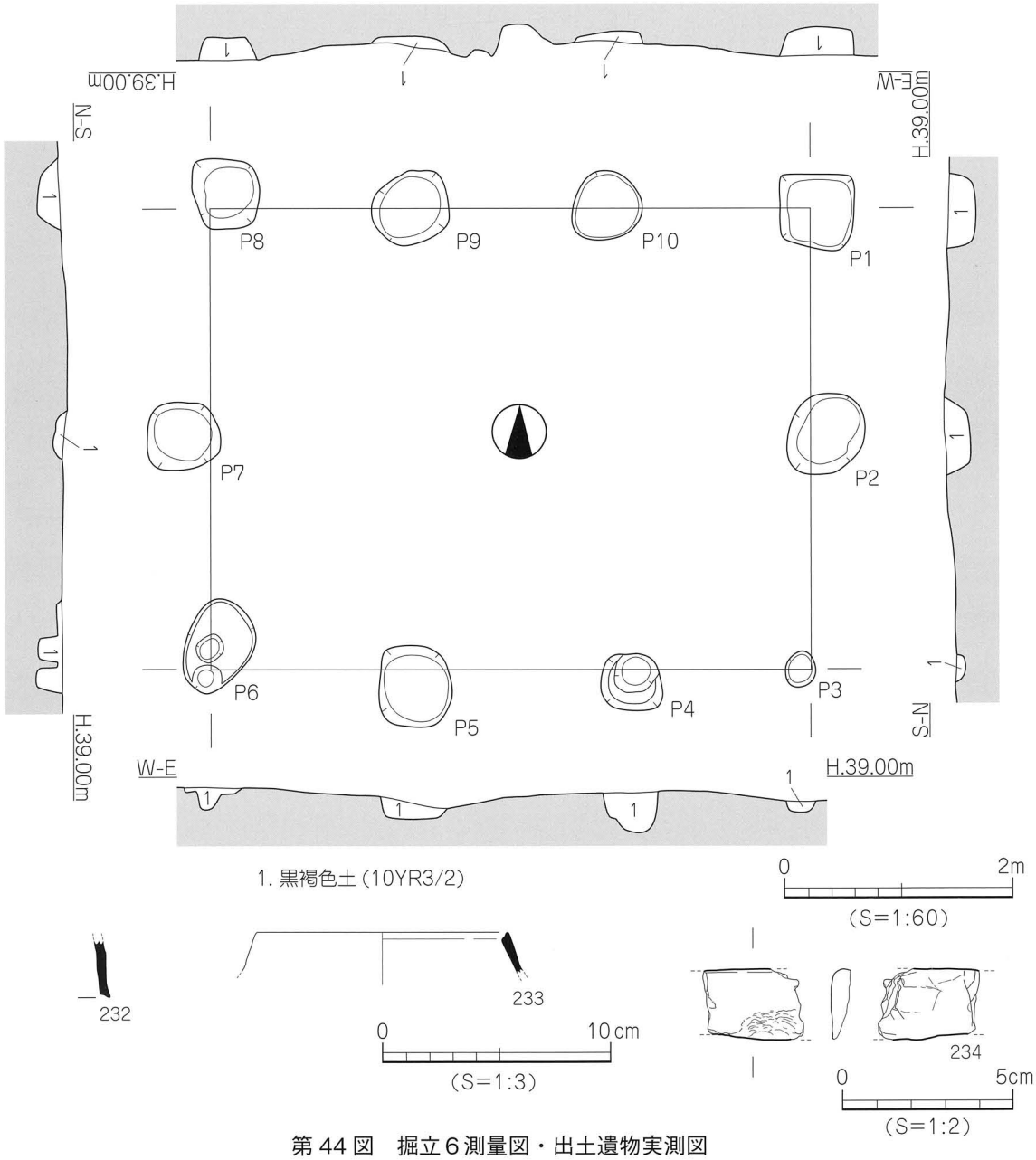
掘立 6（第 44 図）

調査区北西部の F ～ G･4 ～ 5 区に位置し、SD1 ～ 3 に切られ、SB2･7 を切る。3 間 × 2 間の東西棟で、主軸は N-90°-E を指向する。規模は桁行 5.25m、柱間 1.5 ～ 1.9m、梁行 4.06m、柱間 2.0 ～ 2.1m、柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、直径 28 ～ 80 cm、深さ 8 ～ 36 cmを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器の甕・高坏や須恵器の坏身の破片が出土する。

出土遺物（第 44 図）

232 は蓋坏である。口縁端部に内傾する面を有する。233 は坏身である。口縁端部に内傾する面を有する。234 は石庖丁の背部付近である。緑色片岩製。

時期：出土した須恵器の特徴及び、埋土や遺構の切り合いなどから古墳時代後期前葉とする。



第 44 図　掘立 6 測量図・出土遺物実測図

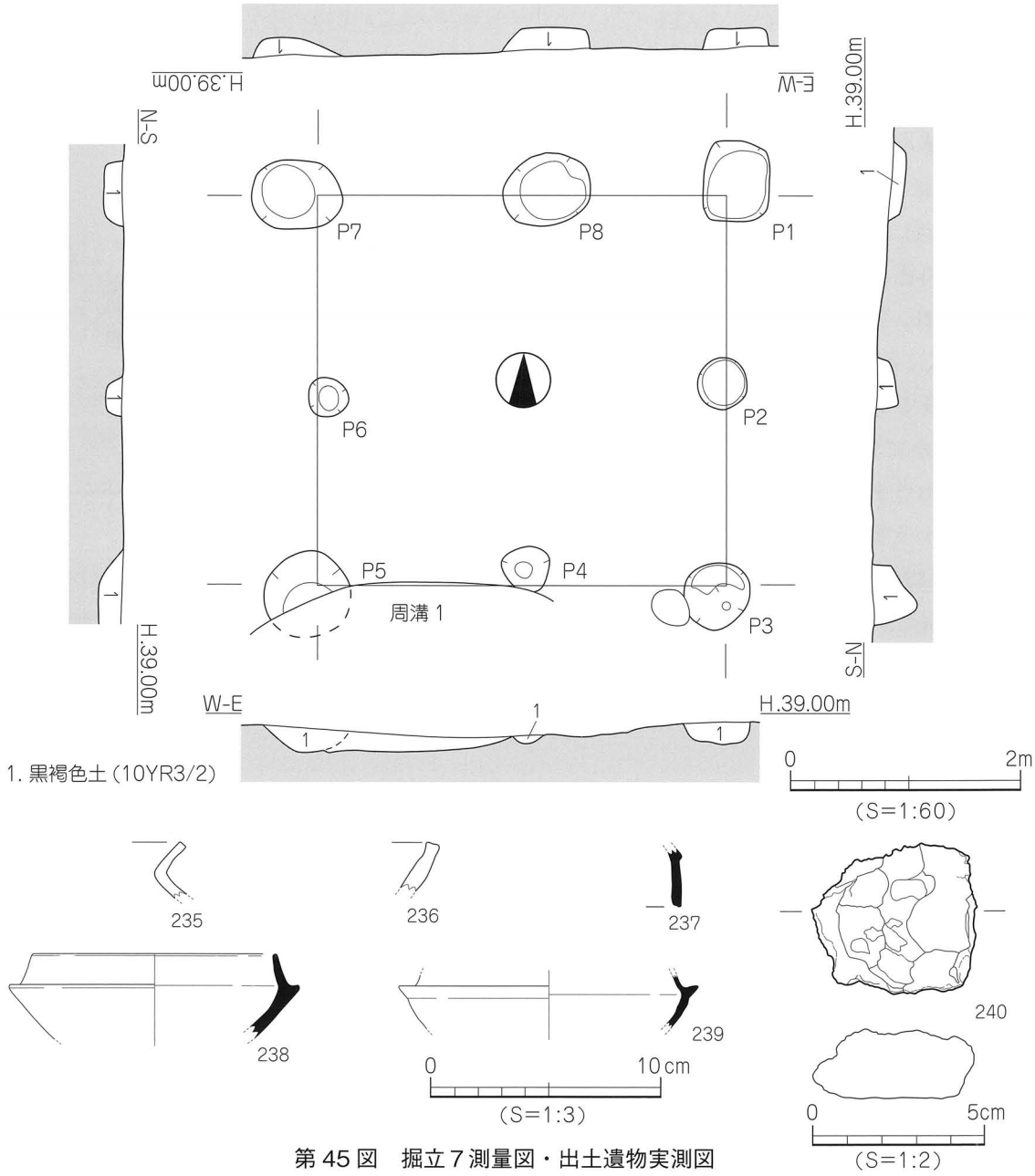
掘立７（第 45 図）

調査区中央部のＨ～Ｉ・５～６区に位置し、SB4、周溝１を切る。２間×２間の東西棟で、主軸はN-90°-E を指向する。規模は桁行 3.54m、柱間 1.5 ～ 2.1m、梁行 3.4m、柱間 1.6 ～ 1.8m、柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、直径 34 ～ 78 ㎝、深さ 14 ～ 38 ㎝を測る。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器片の甕、須恵器の蓋坏・坏身の破片や鉄滓が少量出土する。

出土遺物（第 45 図）

235・236 は甕で、口縁部端部は平らな面をなす。237 は蓋坏で口縁端部に不明瞭な段を有する。238・239 は坏身である。238 は立ち上がりが内傾し、239 は受部端がやや凹む。240 は鉄滓である。

時期：出土した須恵器の特徴及び、埋土や遺構の切り合いなどから古墳時代後期中葉とする。



第 45 図　掘立７測量図・出土遺物実測図

(3) 土坑

ＳＫ１（第46図）

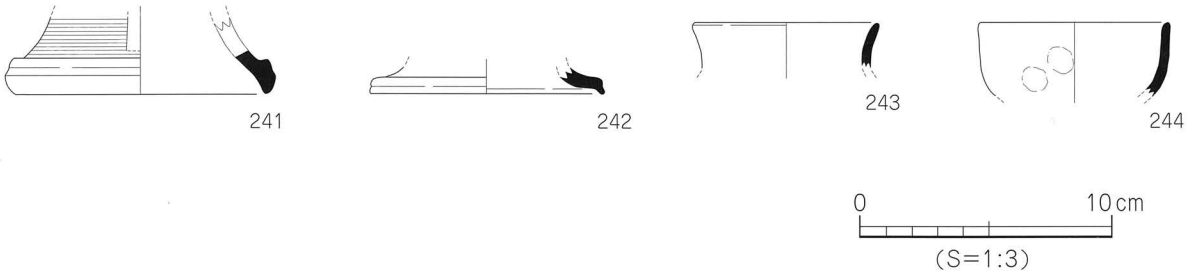
調査区北西部のＧ・3～4区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は皿状を呈し、基底面はほぼ平らな面をなす。規模は長軸2.35m、短軸1.9m、深さ9㎝を測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は土師器片、須恵器の高坏・壺・埦の小片が少量出土する。

出土遺物（第47図）

241・242は高坏の脚部である。241は脚裾部に透かしと外面にカキ目調整が施され、242は脚端部が下方に肥厚される。243は壺である。口縁部が緩やかに外反し、端部は丸くおさまり、内外面に回転ナデ調整が施される。244は埦である。内湾する下胴部から上方に直線的に立ち上がり、端部は丸くおさまり、内外面に回転ナデ調整が施される。

時期：出土した須恵器の特徴から、古墳時代後期前葉とする。

第46図　ＳＫ１測量図



第47図　ＳＫ１出土遺物実測図

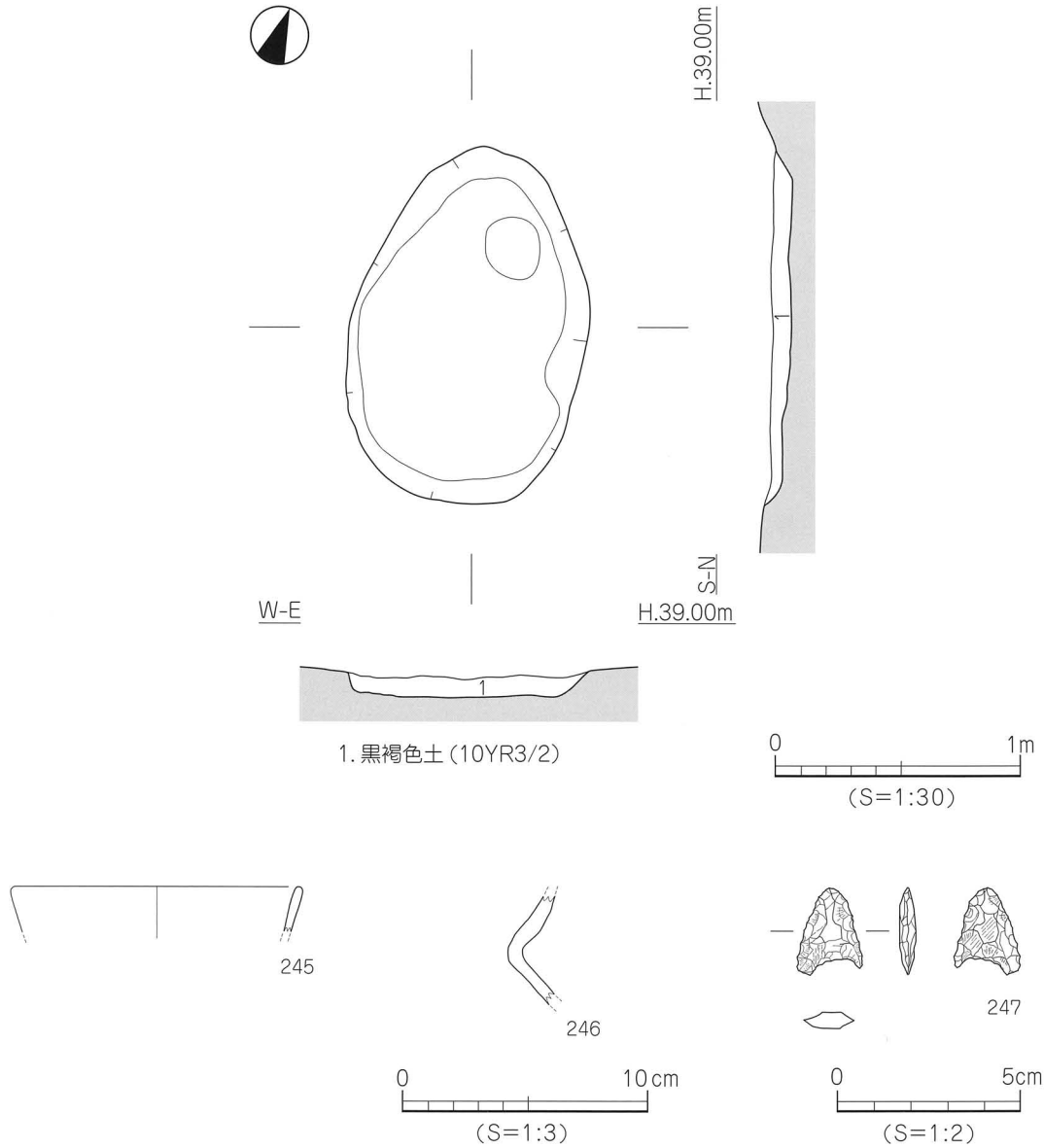
ＳＫ２（第 48 図）

調査区北西隅のＦ・４区に位置し、SB1 の床面にて検出する。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は長軸 1.45m、短軸 0.98m、深さ 10 cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は土師器の甕、須恵器の小片、石鏃が僅かに出土する。

出土遺物（第 48 図）

245･246 は甕である。245 はやや外上方に直線的に延びる口縁部に端部は丸くおさまり、246 は「く」字状を呈する口縁部。247 は打製石鏃の完存品である。凹基無茎式鏃で両面に二次剥離がおよぶ。サヌカイト製。

時期：出土した土師器の特徴から、古墳時代後期頃とする。



第 48 図　ＳＫ２測量図・出土遺物実測図

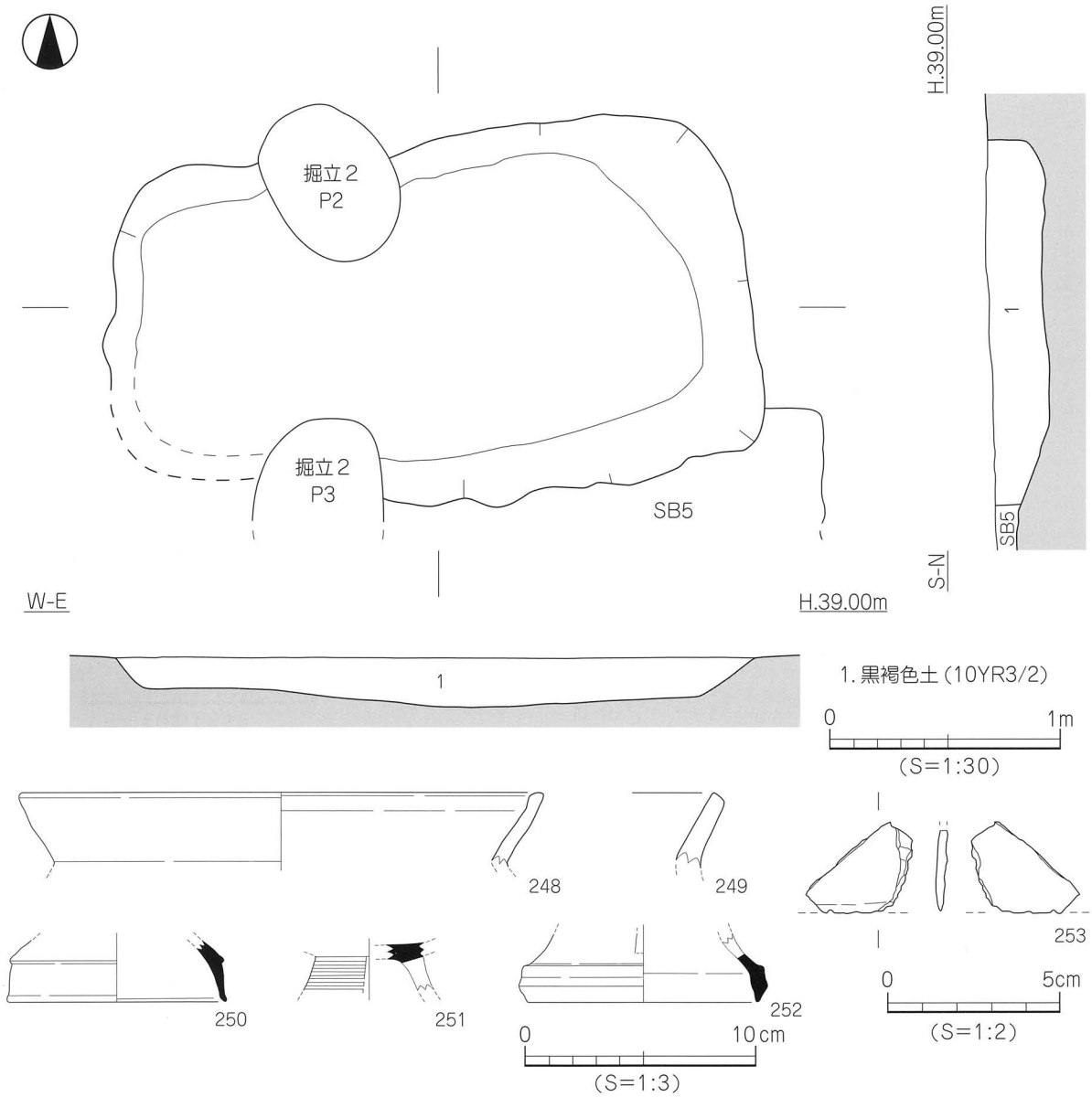
ＳＫ４（第 49 図）

調査区北東部のＨ～Ｉ・３～４区に位置し、掘立２に切られ、SB5 を切る。平面形態は長方形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は長軸 2.7m、短軸 1.6m、深さ 3 cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は土師器の甕、須恵器の蓋坏・高坏の破片が少量と石庖丁が１点出土する。

出土遺物（第 49 図）

248・249 は甕である。248 は外反する口縁部の端部はやや水平な面をなし、249 は外反する口縁部の端部は平らな面をなす。250 は蓋坏であり、口縁端部に内傾する面を有する。251・252 は高坏の脚部である。251 は脚基部に透かしが施され、252 は脚端部は下方に延びる。253 は石庖丁の刃部片である。

時期：出土した須恵器の特徴から、古墳時代中期後半とする。



第 49 図　ＳＫ４測量図・出土遺物実測図

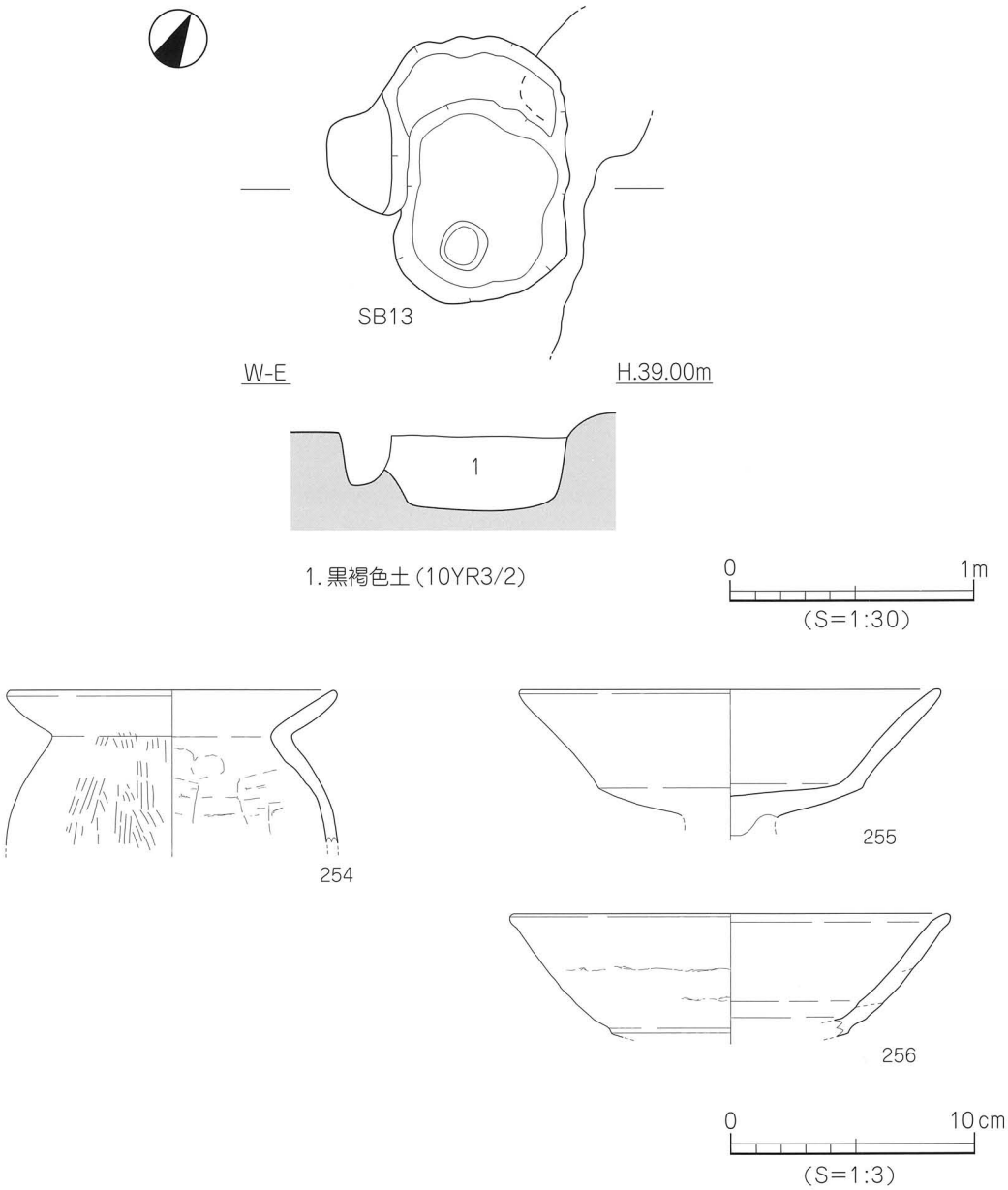
ＳＫ８（第50図）

調査区南東部のＩ・８～９区に位置し、SB13の床面から検出する。平面形態は長方形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は長軸1.1m、短軸0.95m、深さ30㎝を測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は上位から基底面にかけ、土師器の甕・高坏の破片が出土する。

出土遺物（第50図）

254は甕である。「く」字状の口縁部に端部は平らな面をなし、口縁部内外面は横ナデ調整、胴部外面はハケ目調整、内面はナデ調整やケズリ調整が施される。255・256は高坏である。坏底部付近で屈曲し、口縁部は外反する。

時期：出土した土師器の特徴から、古墳時代中期前葉とする。



第50図　ＳＫ８測量図・出土遺物実測図

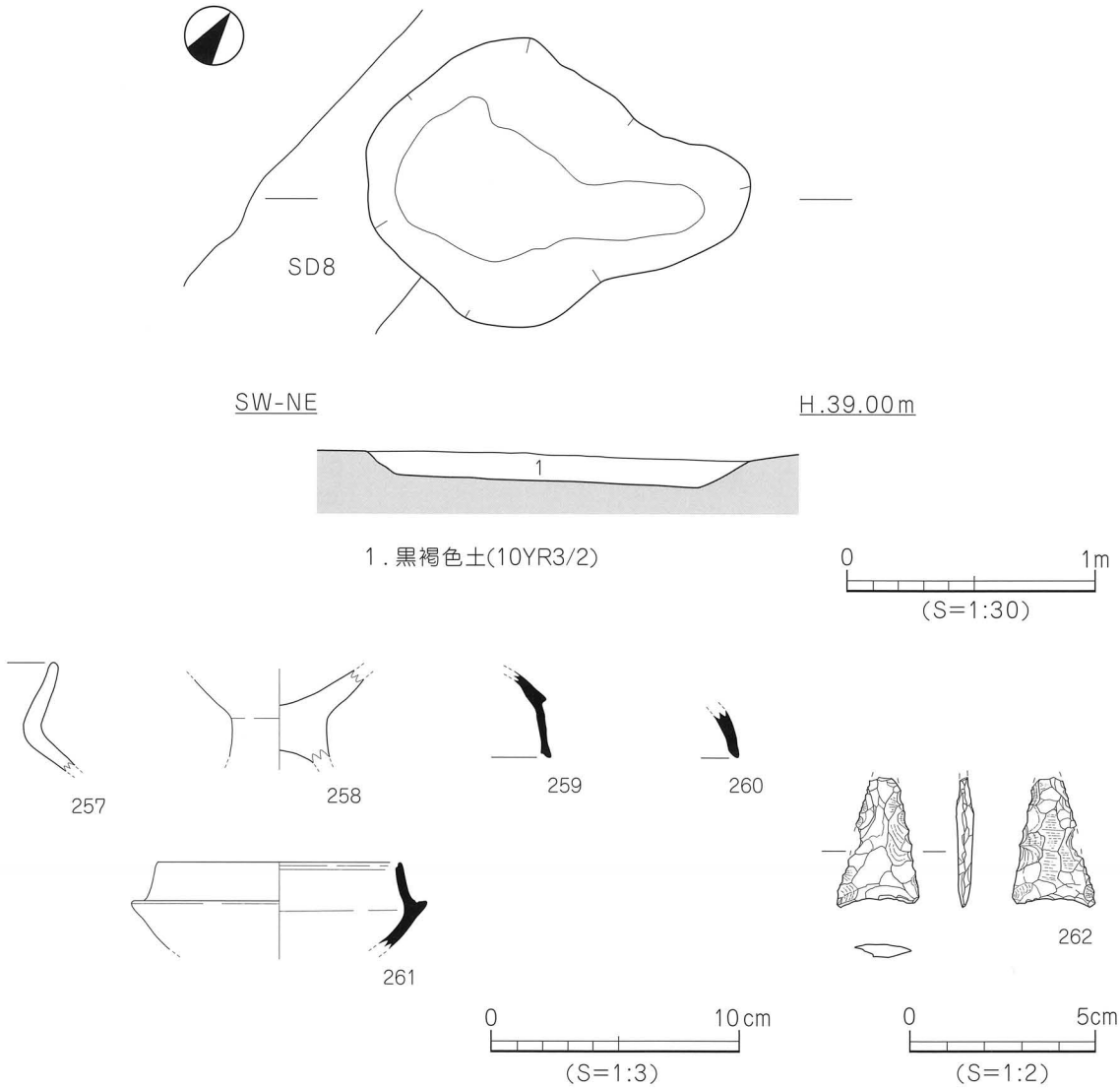
ＳＫ 10（第 51 図）

調査区南西部のＧ・８区に位置し、SD8 を切る。平面形態は不整楕円形、断面形態は皿状を呈し、基底面は凹む。規模は長軸 1.53m、短軸 1.16m、深さ 12 ㎝を測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は土師器の甕・高坏、須恵器の蓋坏・坏身の破片が少量と石鏃が出土する。

出土遺物（第 51 図）

257 は甕である。「く」字状の口縁部に端部は丸くおさまる。258 は高坏である。坏部は内湾気味に立ち上がる。259・260 は蓋坏である。259 は口縁端部に段を有し、260 は口縁端部に内傾する面をなす。261 は坏身である。口縁端部に明瞭な段を有し、受部端が凹む。262 はサヌカイト製の打製石鏃で、基部が僅かに抉られた凹基無茎式で先端部が欠失する。

時期：出土した須恵器の特徴から、古墳時代後期前葉とする。



第 51 図　ＳＫ10 測量図・出土遺物実測図

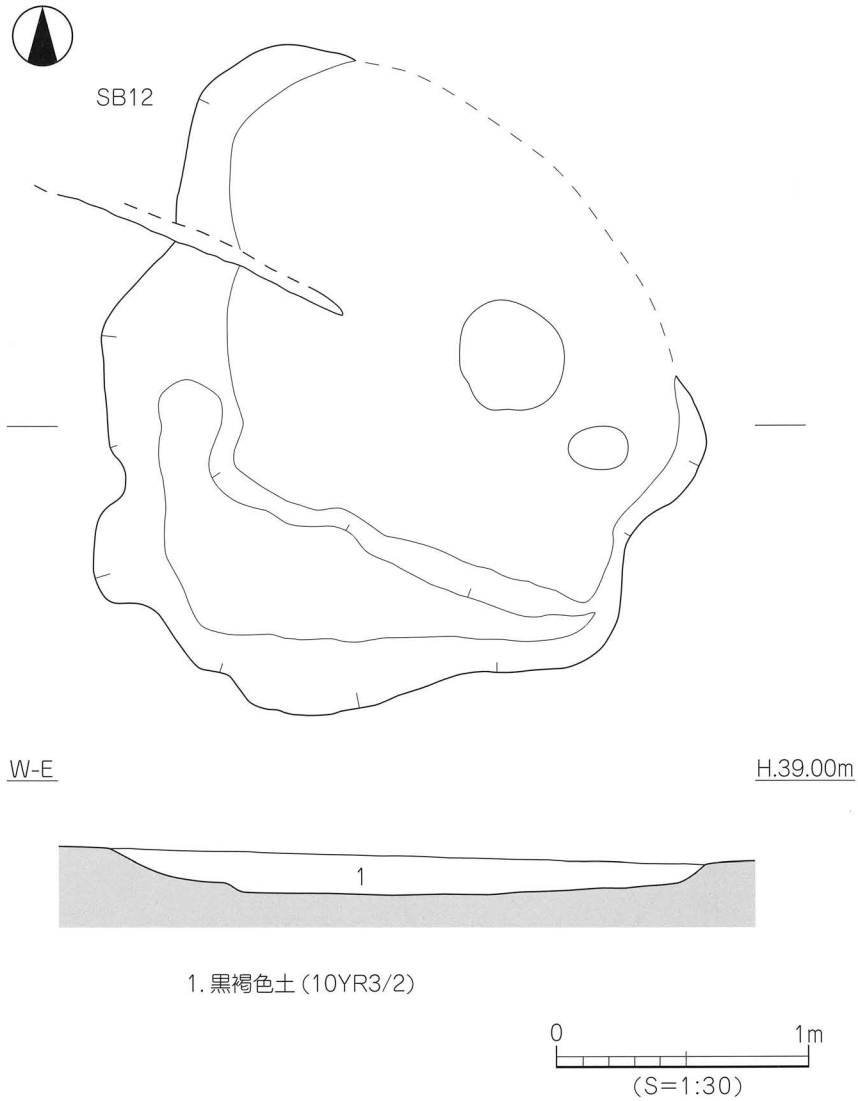
ＳＫ 11（第 52 図）

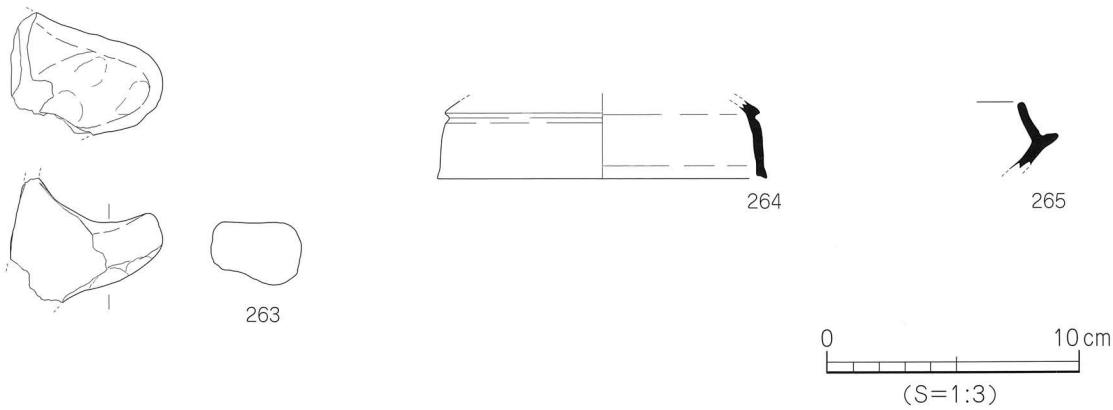
調査区南東部のＨ～Ｉ・7～8区に位置し、SB12・15を切る。平面形態は不整楕円形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は凹む。規模は長軸 2.66m、短軸 2.35m、深さ 16 cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は土師器の甑、須恵器の蓋坏・坏身の破片が出土する。

出土遺物（第 52 図）

263 は甑の把手であり、断面楕円形の把手で、先端部が窄まる。264 は蓋坏である。口縁端部に内傾する面をなす。265 は坏身である。受部端が凹み、口縁端部は丸くおさまる。

時期：出土した須恵器の特徴から、古墳時代後期前葉とする。





第 52 図　ＳＫ11 測量図・出土遺物実測図

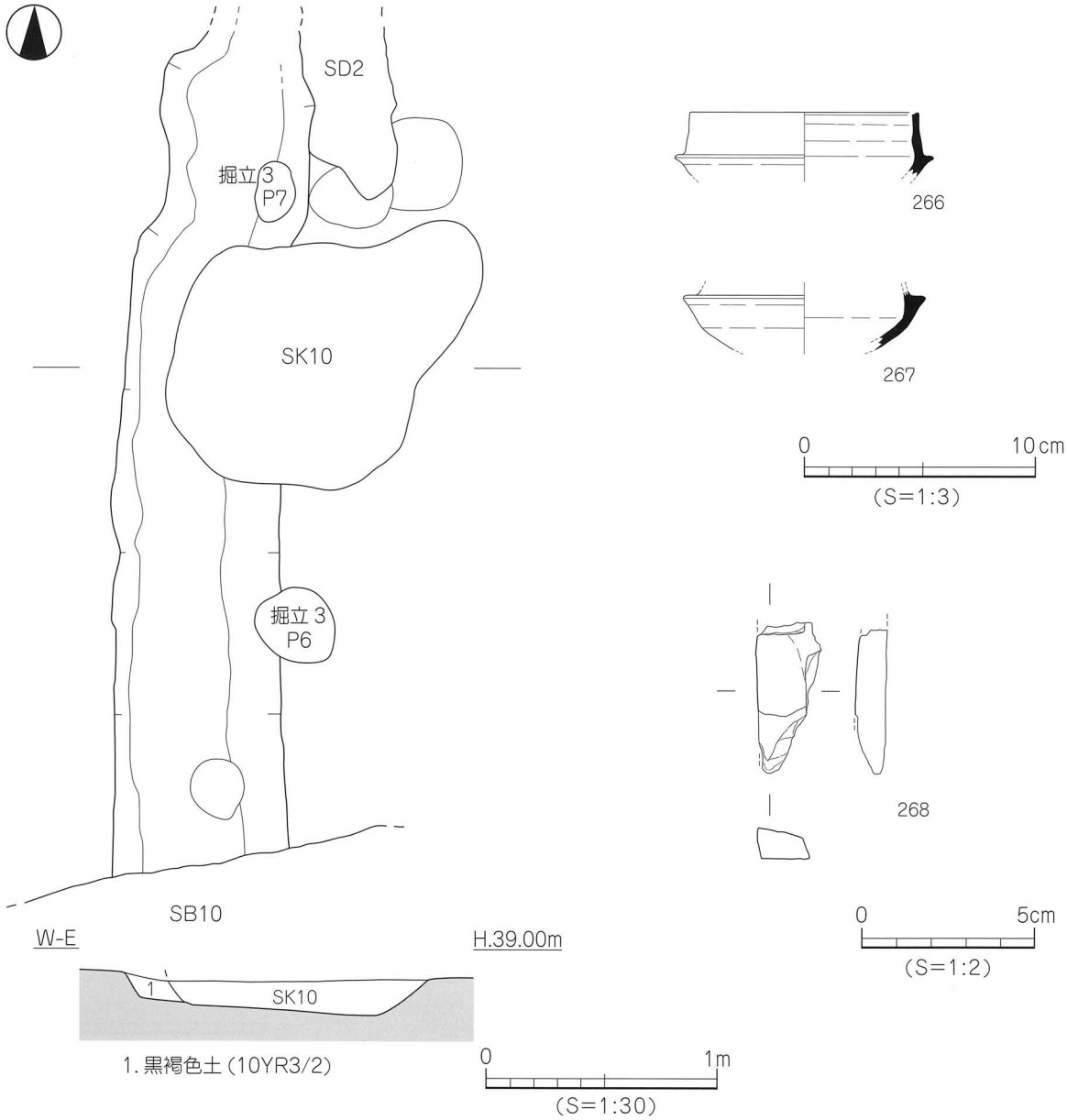
ＳＤ８（第 53 図）

調査区南西部のＧ・7 ～ 8 区に位置し、SB10、掘立 3、SK10、SD2 に切られ、両端は不明である。主軸は N-87° -E でやや湾曲を示す。規模は検出長 3.62m、上場幅 0.5 ～ 0.73m、深さ 10 ～ 12 cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。比高差は殆どない。埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は須恵器片が少量と石斧が出土する。

出土遺物（第 53 図）

266・267 は坏身である。266 は口縁端部に内傾する面をなし、267 の受部は水平な面をなす。268 は磨製石斧で刃部付近のみ一部残存する。緑色片岩製。

時期：出土した須恵器の特徴から、古墳時代後期前葉とする。



第 53 図　ＳＤ８測量図・出土遺物実測図

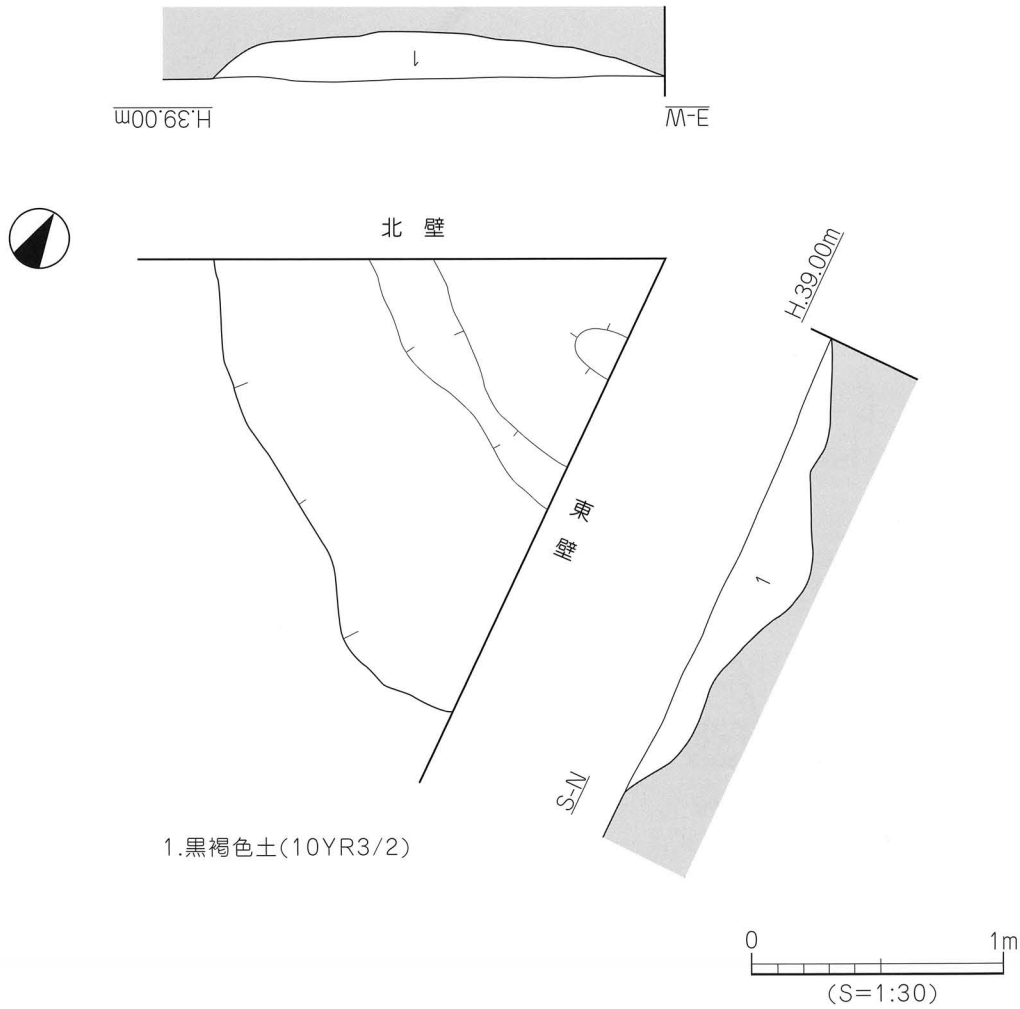
ＳＸ２（第 54 図）

調査区北東部のＩ・２区に位置し、東・北側は調査区に延びる。平面形態は不整形、断面形態はレンズ状を呈する。規模は東西 1.8m 以上、南北 2.0m 以上、深さ 28 cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は土師器の高坏・鉢、須恵器の蓋坏・高坏・壺、砥石、石鏃が出土する。

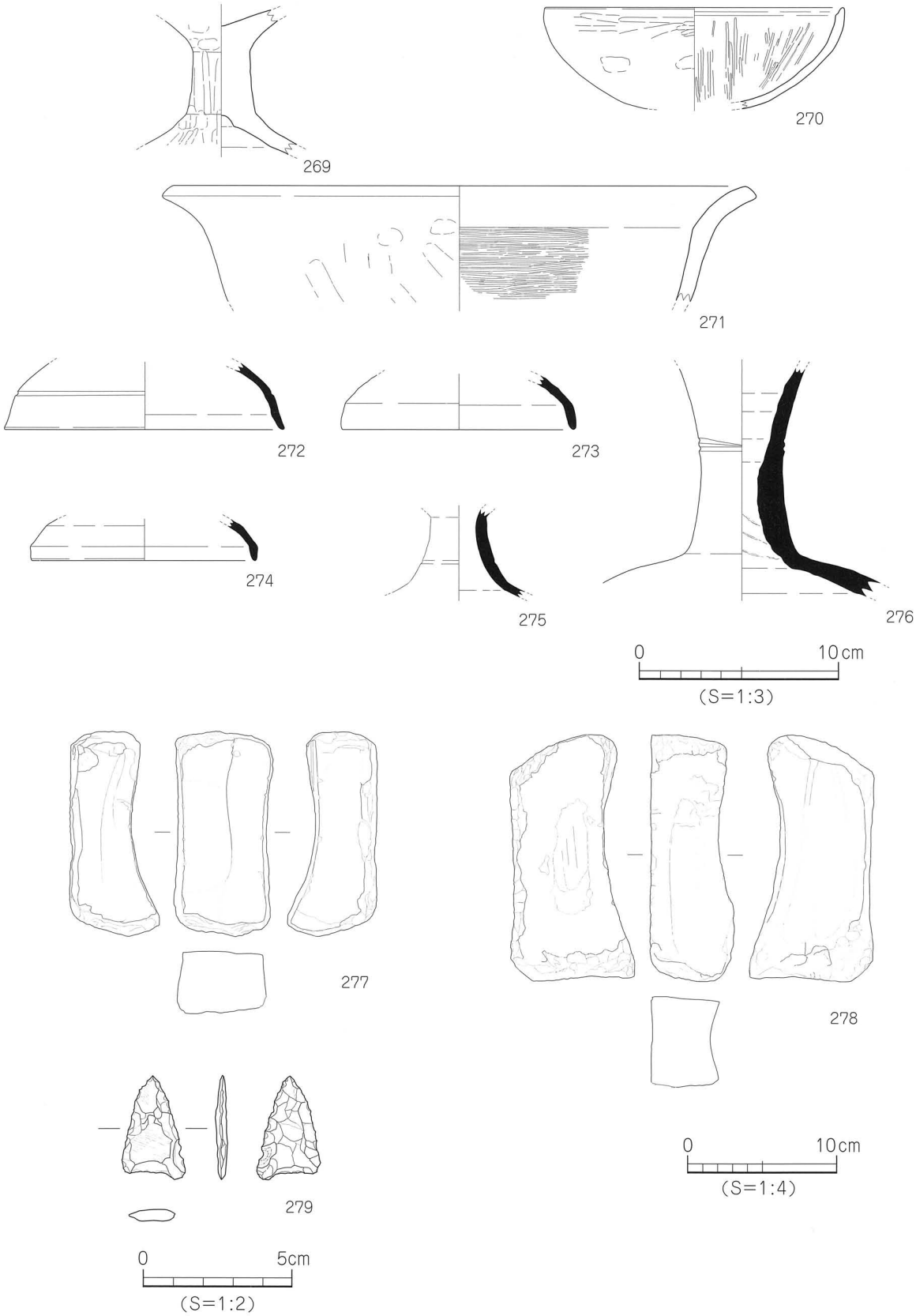
出土遺物（第 55 図、図版 9）

269 は高坏である。坏部と脚裾部は大きく外反する。270・271 は鉢である。270 は内湾する胴部に口縁端部は内傾する面をなし、内外面にミガキ調整が施される。271 は外傾する胴部に口縁部がさらに外反し、端部は平らな面をなし、内面にハケ目調整が施される。272 ～ 274 は蓋坏である。272 は天井部と口縁部の境に凹みによる稜を持ち、273 は天井部から屈曲した口縁部は下方に延び、274 は天井部から屈曲した口縁部は短く、273・274 とも端部は丸く収まる。275 は高坏の脚部で、脚柱部に沈線が１条巡る。276 は壺であり、窄まった頸部は緩やかに外反し長頸である。277・278 は砥石の完存品である。両端を除き４面とも砥面とし、表面では主に縦方向の微細な線条痕が観察される。表裏とも滑らかな凹面をもち、よく使い込まれている。279 は石鏃である。

時期：出土した須恵器の特徴から、古墳時代後期前葉とする。



第 54 図　ＳＸ２測量図



第 55 図　ＳＸ２出土遺物実測図

〔3〕古代

第Ⅴ層上面にて性格不明遺構１基（SX1）を検出した。

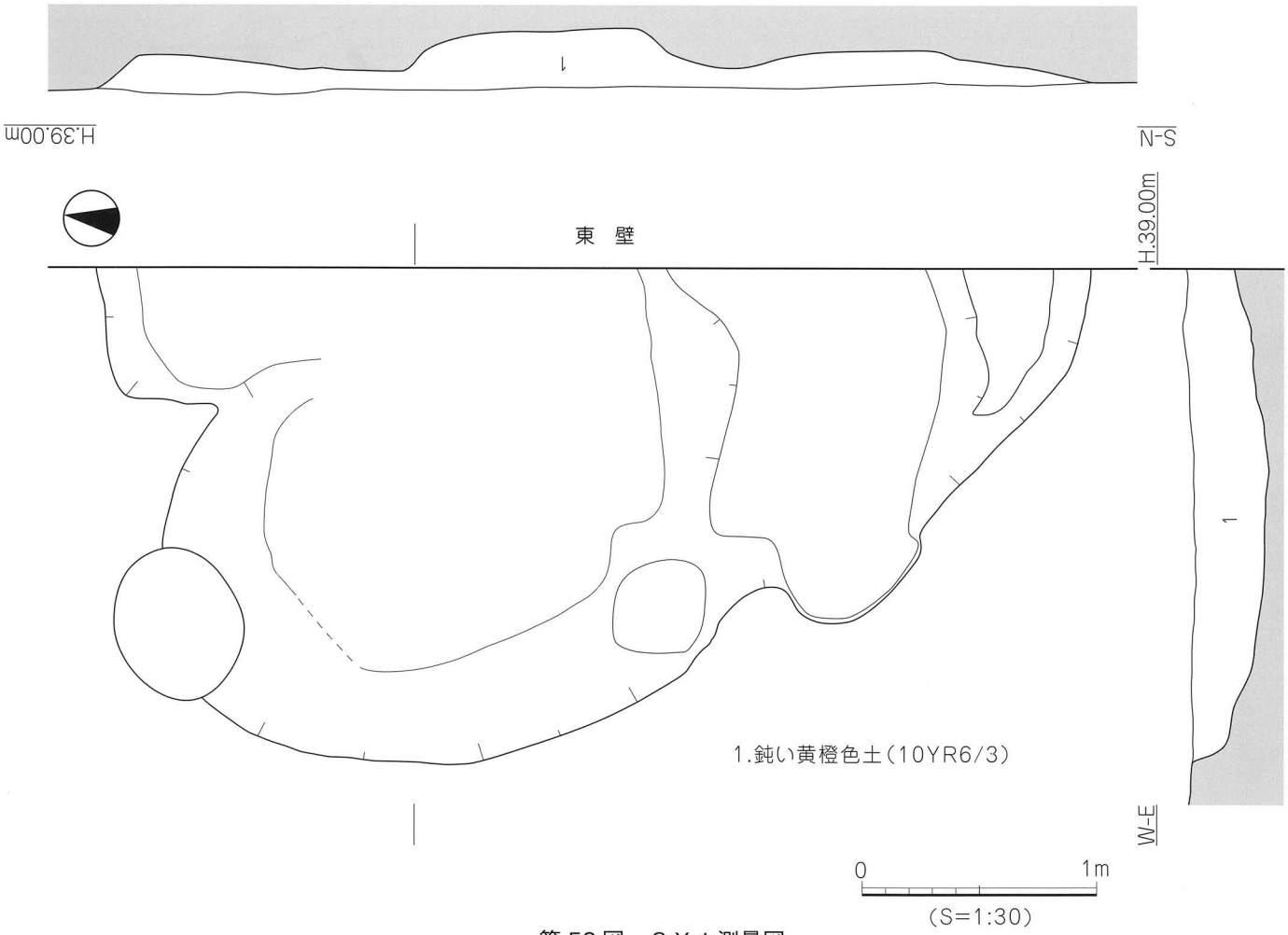
性格不明遺構

ＳＸ１（第 56 図）

調査区北東部のＨ～Ｉ・２～３区に位置し、東端は調査区に延びる。平面形態は不整形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は東西 2.1m 以上、南北 4.2m、深さ 30 cmを測る。埋土は鈍い黄橙色土の単一層で、遺物は土師器の鉢、須恵器の蓋坏・坏・高坏・甕、紡錘車、石鏃が出土する。

出土遺物（第 57 図、図版 9）

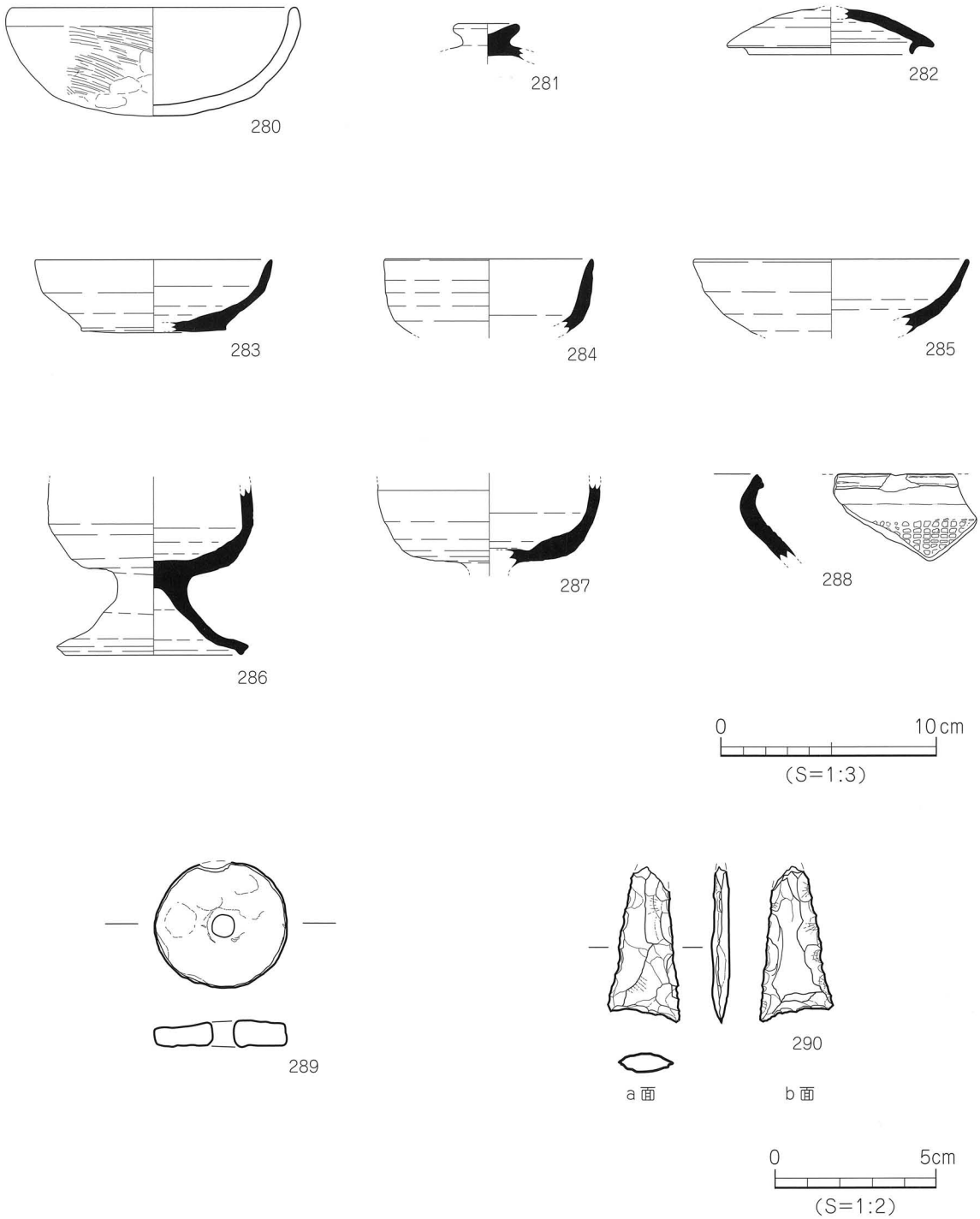
280 は土師器の鉢である。底部から口縁部まで内湾しており、端部は丸くおさまり、外面にハケ目調整、内面にナデ調整が施される。281 ～ 288 は須恵器である。281・282 は蓋坏であり、281 はつまみ中央部が凹み、282 は口縁部の内端面が接地する。283 ～ 285 は坏であり、283 は平底の底部より外反気味に立ち上がり、胴部中位にて稜を持ち、口縁端部は丸くおさまる。284 は直立気味の口縁部に端部が尖り気味である。285 は内湾する口縁部の端部は丸くおさまる。286・287 は高坏であり、286 は「ハ」字状を呈する脚部は内端面が接地し、287 は坏部は内湾気味に立ち上がり、いずれも坏底部に回転ヘラ削り調整が施される。288 は甕であり、口縁端部に２条の凹線文が巡り、胴部に格子



第 56 図　ＳＸ１測量図

状タタキが施される。289 は土製の紡錘車である。端面と中央部の穿孔部は平らな面をなす。290 は打製石鏃である。基部が僅かに抉られた凹基無茎式鏃で、先端部が欠失している。a 面のほぼ全面と b 面の周縁部に二次剥離がおよぶ。石材はサヌカイト製。

時期：出土した須恵器の特徴から、8 世紀代とする。



第 57 図　ＳＸ１出土遺物実測図

〔4〕中世

第Ⅴ層上面にて掘立柱建物１棟、土坑１基（SK7）を検出した。

（1）掘立柱建物

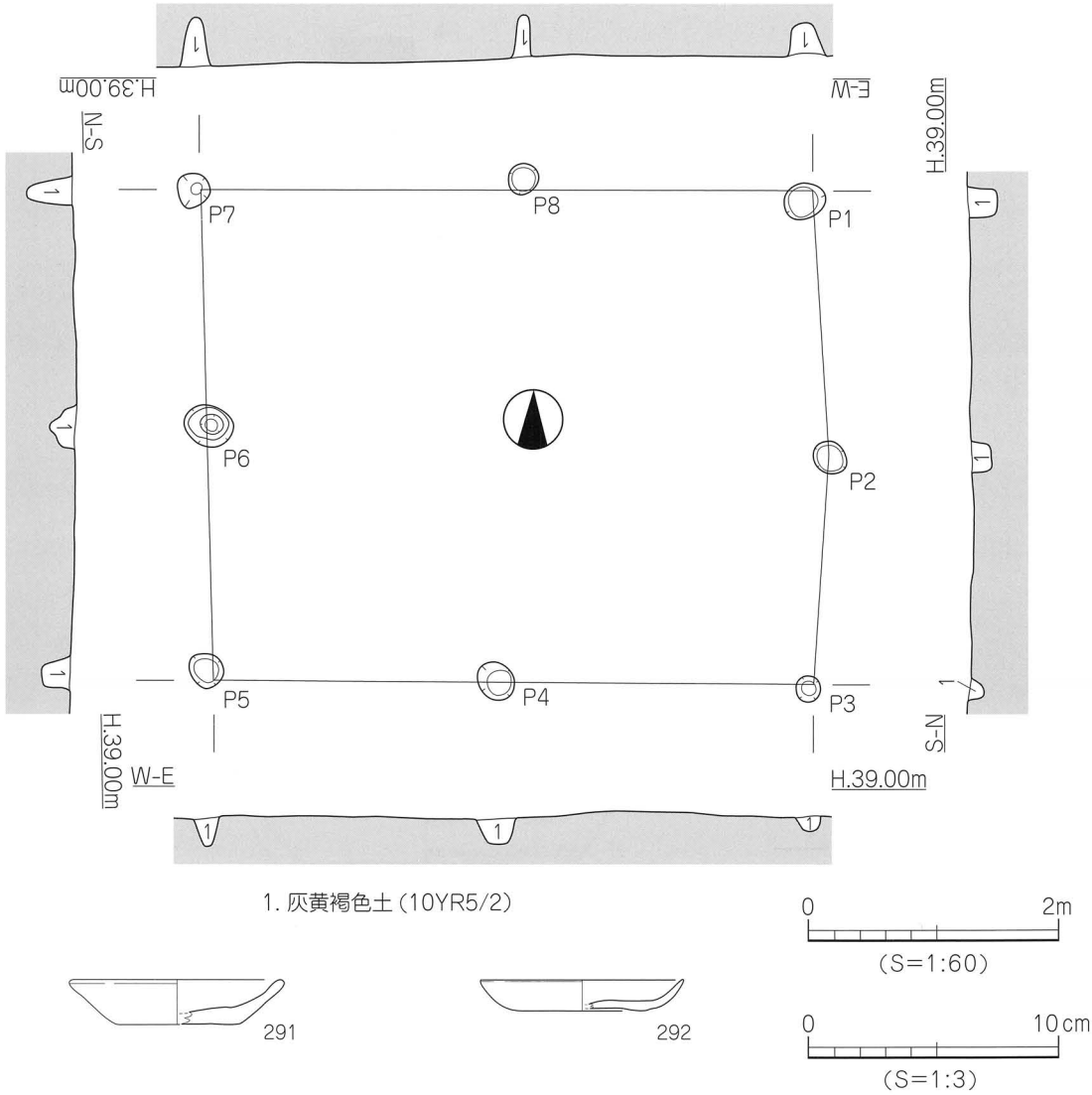
掘立３（第 58 図）

調査区南西部のＧ～Ｈ・８～９区に位置し、SB10・11・18・19、SD8、SK9・10、周溝１を切る。２間×２間の東西棟で、主軸はN- 89°-Eとほぼ真北を指向する。規模は桁行 4.86m、柱間 2.3 ～ 2.6m、梁行 3.9 ～ 4.1m、柱間 1.8 ～ 2.1m、柱穴の平面形態は円形を呈し、直径 20 ～ 42 ㎝、深さ 9 ～ 35 ㎝を測り、南東角の柱穴基底面に根石を伴う。埋土は灰黄褐色土。出土遺物は土師器の小片が僅かに出土する。

出土遺物（第 58 図）

291・292 は土師器の皿である。291 は平底の底部より外傾して立ち上がり、底部に回転糸切り痕がある。292 は平底の底部より内湾気味に立ち上がる。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土が SD1 と同一なことから 17 世紀前半とする。



第 58 図　掘立３測量図・出土遺物実測図

(2) 土坑

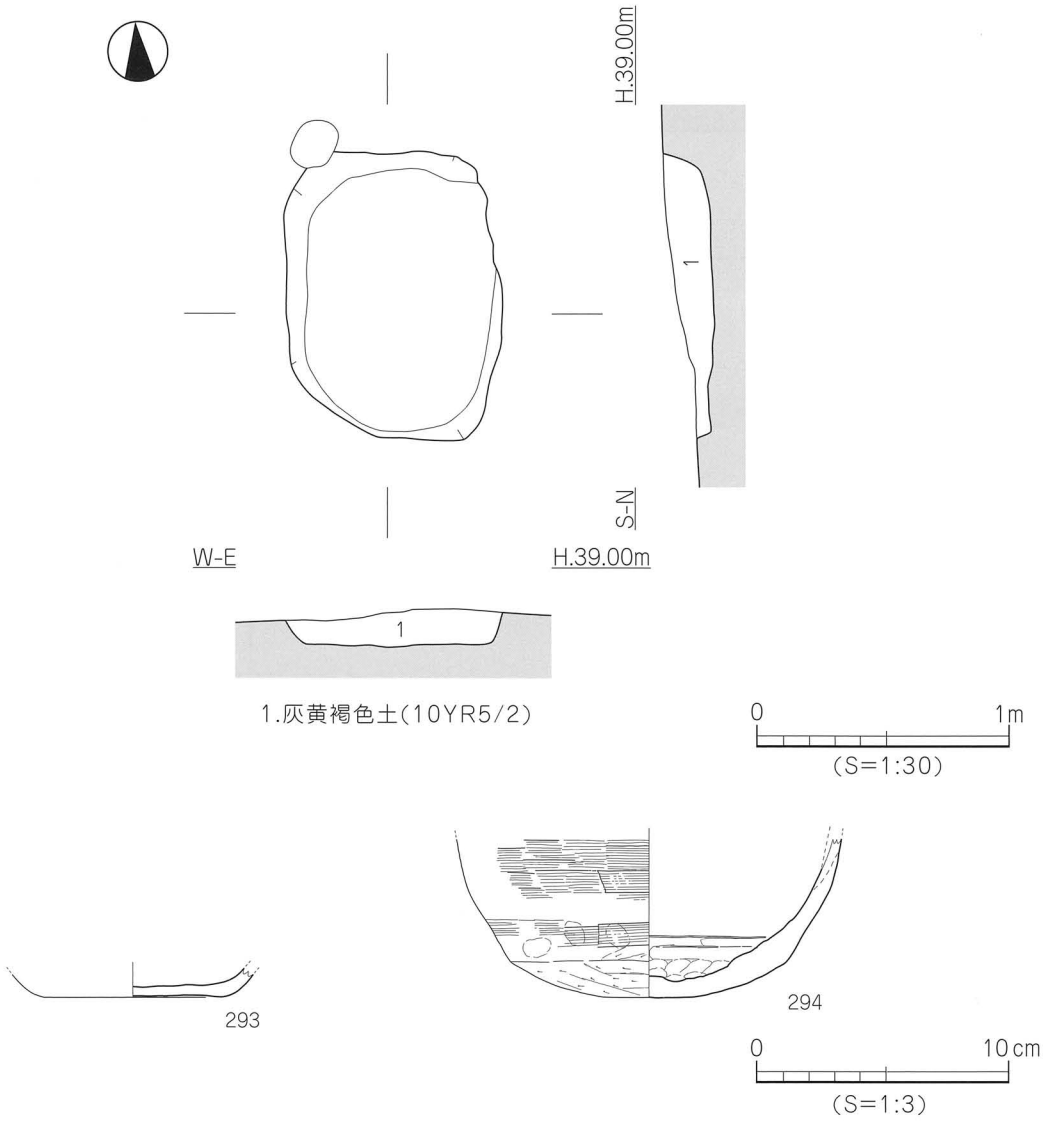
ＳＫ７（第 59 図）

調査区南西部のＦ・8 ～ 9 区に位置し、SB10 を切る。平面形態は隅丸長方形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は長軸 1.1m、短軸 0.85m、深さ 18 cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単一層で、上位に人頭大の礫、上位から中位にかけて焼土の塊や少量の炭を検出した。遺物は上位から中位にかけ、土師器の坏や甕の破片が僅かに出土する。

出土遺物（第 59 図）

293 は土師器の坏である。平底の底部より内湾気味に立ち上がる。294 は土師器の甕？である。やや丸みをもつ底部から内湾気味に立ち上がり、外面は胴部にハケ目調整、底部にケズリ調整が施される。

時期：出土した土師器の特徴から、13 世紀代とする。



第 59 図　ＳＫ７測量図・出土遺物実測図

〔5〕近世

第Ⅴ層上面にて溝８条（SD1～7･9）、土坑２基（SK5･6）、柱穴を検出した。

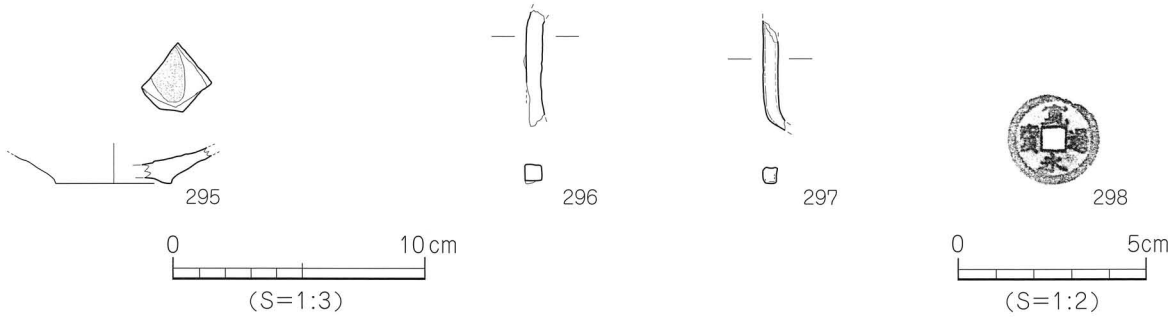
ＳＤ１（第62図）

調査区西側のＧ・３～８区に位置し、SB2・6・7、掘立４・6、SK3、周溝１を切り、北端は調査区外に延びる。主軸はN-4°-Wとほぼ真北方向を指向する。規模は検出長19.8m、上場幅0.58～1.32m、深さ５～11㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈する。比高差は殆どない。埋土は灰黄褐色土の単一層である。遺物は土師器・陶磁器の小片や鉄釘、銭貨などが出土する。

出土遺物（第60図、図版9）

295は磁器碗の底部である。底部外面には削り出しの低い高台をもち、内面は施釉され砂目痕がある。296・297は鉄釘である。298は寛永通宝銭である。

時期：出土した銭貨の特徴から、17世紀前半とする。



第60図　ＳＤ１出土遺物実測図

ＳＤ２（第62図）

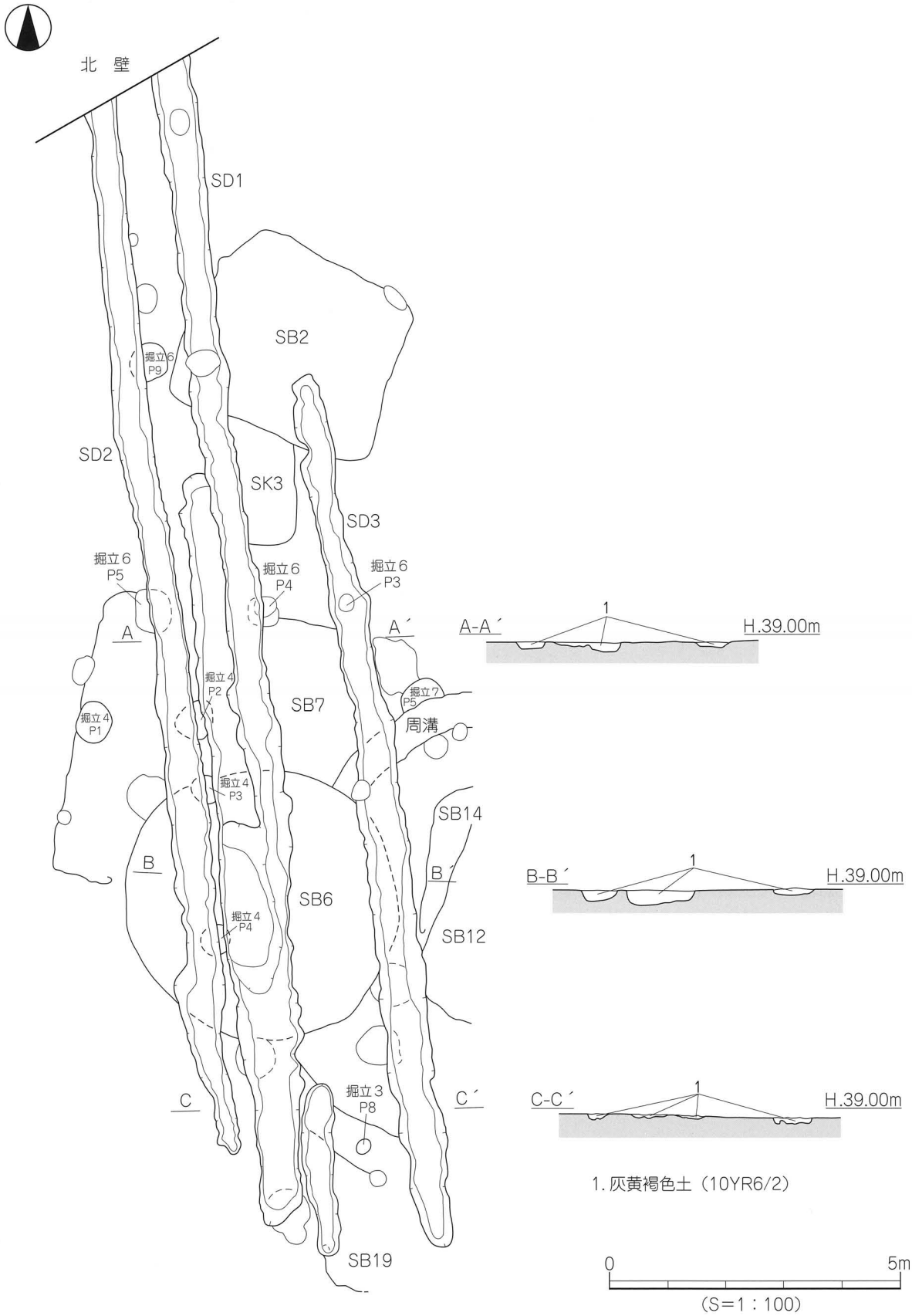
調査区西側のＦ～Ｇ･３～８区に位置し、SB6･7、掘立4･6、SD8を切り、北端は調査区外に延びる。主軸はN-6°-Wとほぼ真北方向を指向する。規模は検出長17.95ｍ、上場幅0.48～0.64m、深さ４～20㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈する。比高差は殆どない。埋土は灰黄褐色土の単一層である。遺物は土師器・陶磁器の小片が少量と鉄滓が出土する。

出土遺物（第61図）

299は磁器碗の底部である。底部には断面逆台形状の削り出し高台をもち、外面は高台付近まで施釉が施される。300は鉄滓である。

時期:時期決定しうる遺物に乏しく、SD1･3と平行しており、埋土も同一なことから17世紀前半とする。

第61図　ＳＤ２出土遺物実測図



第 62 図　ＳＤ１～ＳＤ３測量図

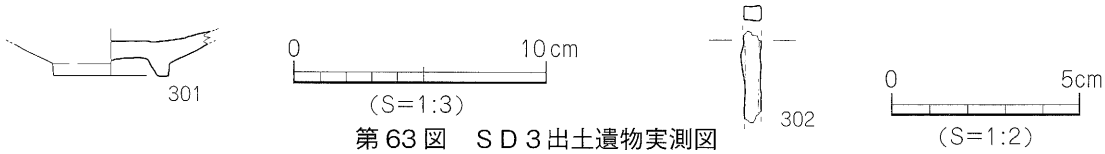
ＳＤ３（第62図）

調査区中央部のＧ～Ｈ・４～８区に位置し、SB2・6・7・12・14、掘立6、周溝１を切る。主軸はN-8°-Wと南北方向を指向する。規模は検出長14.95m、上場幅0.43～0.80m、深さ３～15㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈する。比高差は殆どない。埋土は灰黄褐色土の単一層である。遺物は土師器・陶磁器の小片が僅かと鉄釘が出土する。

出土遺物（第63図）

301は磁器碗の底部である。底部には断面逆台形状の削り出し高台をもち、高台部まで施釉が施される。302は鉄釘である。

時期:時期決定しうる遺物に乏しく、SD1・2と平行しており、埋土も同一なことから17世紀前半とする。



第63図　ＳＤ３出土遺物実測図

ＳＤ４

調査区北東部のＨ・２～３区に位置し、北端は調査区外に延びる。主軸はN-7°-Eと南北方向を指向する。規模は検出長2.73m、上場幅0.7～0.93m、深さ３～６㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。比高差は殆どない。埋土は灰黄褐色土の単一層である。遺物は土師器の小片が少量出土する。

時期：時期決定しうる出土遺物に乏しく、埋土がSD1と同一なことから、17世紀前半とする。

ＳＤ５

調査区南東部のＩ・７区に位置し、SK5に切られ、SB16を切る。東端は調査区外に延びる。主軸はN-82°-Eと東西方向を指向する。規模は検出長2.6m、上場幅0.73～0.92m、深さ６～12㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈する。比高差は殆どない。埋土は灰黄褐色土の単一層である。遺物は土師器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる出土遺物に乏しく、埋土がSD1と同一なことから、17世紀前半とする。

ＳＤ６

調査区東側のＩ・５～６区に位置し、東端は調査区外に延びる。主軸はN-90°-Eと真北の直角方向を指向する。規模は検出長2.6m、上場幅0.58～0.8m、深さ４～13㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈する。比高差は殆どない。埋土は灰黄褐色土の単一層である。遺物は土師器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる出土遺物に乏しく、埋土がSD1と同一なことから、17世紀前半とする。

ＳＤ７

調査区東側のI・6区に位置し、東端は調査区外に延びる。主軸はN-80°-Eと東西方向を指向する。規模は検出長1.0m、上場幅0.52～0.6m、深さ３～８㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈する。比高差は殆どない。埋土は灰黄褐色土の単一層である。出土遺物はない。

時期：時期決定しうる出土遺物はないが、埋土がSD1と同一なことから、17世紀前半とする。

ＳＤ９

調査区北東部のＩ・４区に位置し、SB5 を切り、東端は調査区外に延びる。主軸は N-85°-E と東西方向を指向する。規模は検出長 2.0m、上場幅 1.05 ～ 1.1m、深さ 3 ～ 4 ㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈する。比高差は殆どない。埋土は灰黄褐色土の単一層である。遺物は弥生土器の小片が少量混入していただけである。

時期：時期決定しうる出土遺物はないが、埋土が SD1 と同一なことから、17 世紀前半とする。

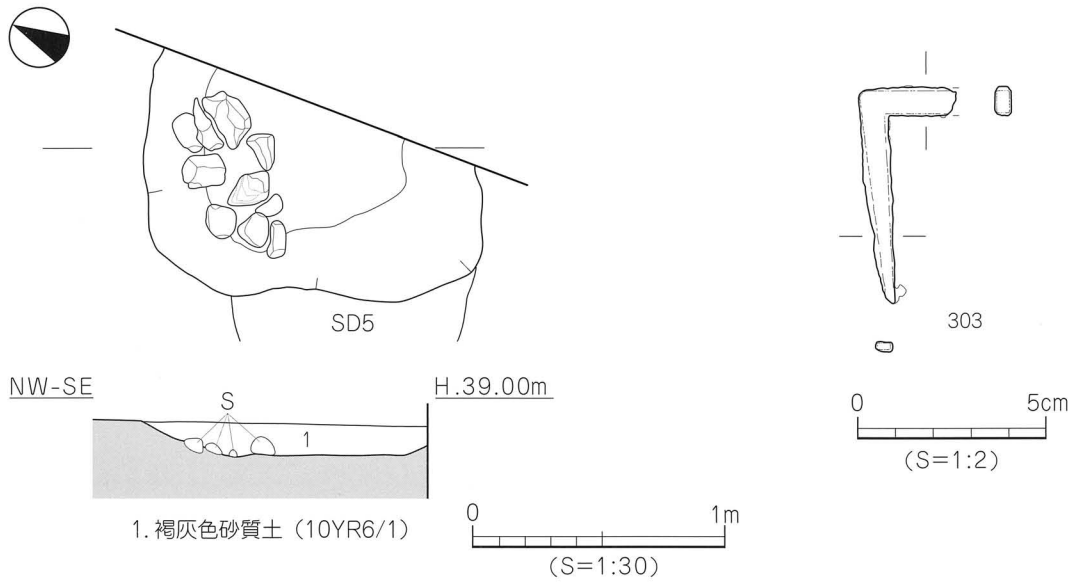
ＳＫ５（第 64 図）

調査区南東部のＩ・７区に位置し、SD5 を切る。東側は調査区外に延びる。平面形態は隅丸長方形、断面形態は皿状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は南北 1.32m、東西 0.92m 以上、深さ 13 ㎝を測り、埋土は灰黄褐色砂質土の単一層で、北側の基底面に 10 ～ 22 ㎝大の礫を密集した状態で検出土した。遺物は土師器の小片が僅かに出土し、礫の下から鋏が１点出土した。

出土遺物（第 64 図、図版 9）

303 は鉄の鋏である。

時期：出土した土師器の特徴から、17 世紀前半とする。

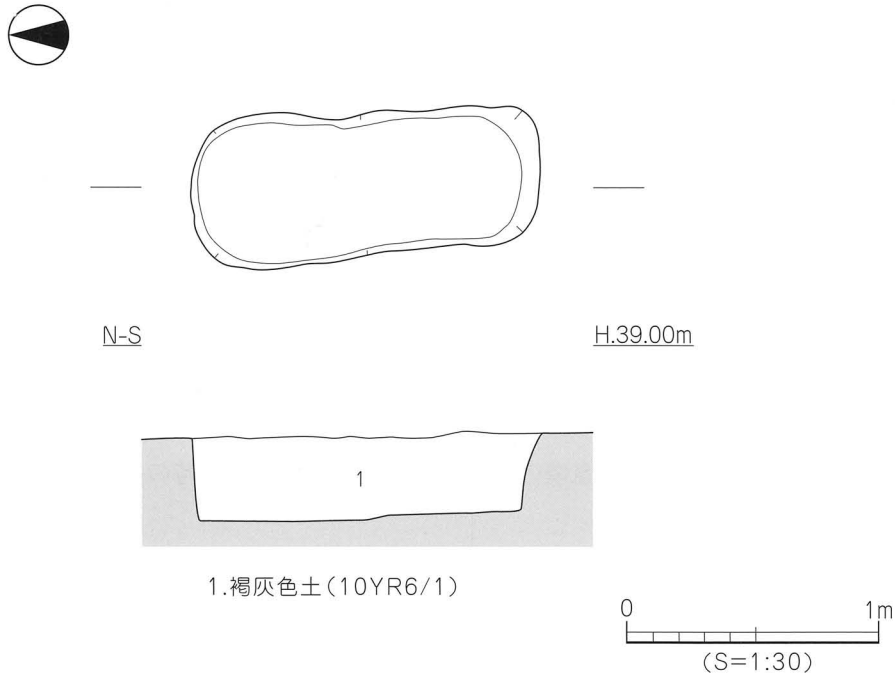


第 64 図　ＳＫ５測量図・出土遺物実測図

ＳＫ６（第 65 図）

調査区南東部のＩ・８～９区に位置し、SB13・15 を切る。平面形態は隅丸長方形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は長軸 0.9m、短軸 0.62m、深さ 33 ㎝を測る。埋土は灰黄褐色土の単一層である。遺物は上位から基底面にかけ、土師器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく埋土が SK5 と同一なことから 17 世紀前半とする。



第65図　ＳＫ６測量図

4. 小　結

今回の調査では、弥生時代～近世の遺構や遺物を検出した。遺構は、主に弥生時代中期の竪穴住居・土坑、古墳時代の竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝・性格不明遺構、古代の性格不明遺構、中世の掘立柱建物・土坑、近世の溝・土坑などである。

弥生時代

SB17の床面から出土した甕や高坏などは、後世の削平を受け上半が欠失しているが、一括性の高い遺物である。SB6から出土した磨製石鏃2点は、在地の緑色片岩製の石材であることから、当地にて製作されたことが想定できる。また、サヌカイト製の打製石鏃や石庖丁状の収穫具に加えサヌカイト剥片なども少量ではあるが出土しており、この住居内で製作された可能性をもつ。周溝1は東側半分がSB12やSB15により削平を受け全容は不明であるが、平面形態は楕円形でも隅丸方形に近いものと想定する。周溝内から出土した遺物は、甕や壺など日常用の土器の破片などで、一括投棄などの祭祀行為はみとめられなかった。

古墳時代

全域において竪穴住居や掘立柱建物を検出しており、安定して調査地周辺に該期における集落の展開が窺える。特に微高地がやや高くなる南側に集中しており、SB9～16・18・19の10棟が切り合って検出された。これらの住居址は古墳時代中期後半から後期にかけてのものが密度が濃く、この間に継続的に当地やその周辺で居住していたと考えられる。SB12の北壁で検出した焼土は竈施設の残存で、壁体の外側への張り出しは煙道施設と考えられる。

古　代

SX1は埋土や出土遺物から、東隣の樽味高木遺跡6次調査の鍛冶関連遺構を検出した8世紀頃の段落ち遺構のつながりである西端部が検出できた。

中　世

SK7からは人頭大の礫のほかに炭や焼土を浮いた状態で検出しているが、遺構内で焼かれた痕跡はなく、別の場所で焼かれてSK7に入れたことが考えられる。骨は未検出であったが、土廣墓の可能性をもち、上位から検出した礫は墓標施設が崩落したことが窺える。

近　世

SD1～4は南北方向に平行して延び、東西方向のSD5～7・9に直角方向であり、溝の形状や位置関係などから農耕に伴う溝と考える。SK5の基底面からは鎹状の鉄製品が出土し、その上層に人頭大の礫を検出する。この鎹は桶棺に使われていたことも考えられ、桶棺墓の可能性をもつ。掘立3の出現により、周辺に近世集落の存在が窺える。

今回の調査では、弥生時代中期、古墳時代中期から後期の竪穴住居や掘立柱建物を主体とした集落を形成する遺構や遺物と、古代から近世頃の集落関連遺構を検出し、当時の集落構造を解明する資料が得られた。

今後の整理課題として、当地における古墳時代中期から後期にかけての詳細な集落構造や規模を未整理遺物などの整理作業を進めながら検討する必要がある。

遺構・遺物　－凡例－

（1）以下の表は遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（2）遺物観察表の各記載について。

法量欄（ ）　：復元推定値

形態・施文欄　：土器の各部位名称を略記。

例）つ→つまみ部、天→天井部、口→口縁部、坏→坏部、坏底→坏底部、頸→頸部、胴→胴部、胴上→胴部上位、胴下→胴部下位、脚→脚部、脚端→脚端部、底→底部、裾→裾部

胎土・焼成欄　：胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土、金→金雲母、チャ→チャート、細→細粒（0.9㎜以下）

（ ）内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。（単位：㎜）

焼成の略記について。◎→良好、○→良、△→不良

表２　竪穴住居一覧

竪穴(SB)	時期	平面形	規模（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	埋土	床面積（㎡）	主柱穴（本）	内部施設 高床	土坑	炉	カマド	周壁溝	備考
1	古墳	方形	2.9 以上× 2.1 以上× 0.1	黒褐色土	5.67 以上						○	掘立１に切られ、北・西側は調査区外に延びる。
2	弥生	方形	3.5 × 3.1 × 0.13	黒褐色土	10.86						○	掘立６、SD1・３に切られ、SK3 を切る。
3	古墳	方形	1.2 以上× 0.8 以上× 0.08	黒褐色土	0.56 以上						○	北側は調査区外に延びる。
4	古墳	方形	4.4 × 3.55 × 0.13	黒褐色土	19.1	(2)					○	SB5 を切る。
5	古墳	方形	4.85 × 3.05 以上× 0.05	黒褐色土	11.94 以上	(1)					○	SB4・掘立２・SD9・SK4 に切られ、床面での検出。
6	弥生	円形	4.7 × 4.6 × 0.23	黒褐色土	17.06	(3)			○		○	SB7、掘立４、SD1 ～３に切られ、SB17、周溝１を切る。
7	古墳	方形	5.03 × 4.1 以上× 0.04	黒褐色土	17.07 以上						○	掘立４～６、SD1 ～３に切られ、SB6・17、周溝１を切る。
8	弥生	方形	1.7 以上× 0.4 以上× 0.17	黒褐色土	0.52 以上						○	東側は調査区外に延びる。
9	弥生	方形	3.7 以上× 1.6 以上× 2.2	黒褐色土	4.89 以上						○	SB11・13・18 に切られ、南側は調査区外に延びる。
10	古墳	方形	5.5 以上× 3.8 以上× 0.12	黒褐色土	19.3 以上	(2)					○	南・西側は調査区外に延びる。
11	古墳	方形	3.2 以上× 3.1 × 0.24	黒褐色土	9.95 以上	(1)				○		SB9・15・18 を切り、南側は調査区外に延びる。
12	古墳	方形	5.55 × 5.47 × 0.35	黒褐色土	30.27	4						SB16 に切られ、SB14・周溝１を切る。
13	古墳	方形	4.1 以上× 2.3 以上× 0.06	黒褐色土	15.6 以上						○	SK6 に切られ、SB9 を切る。
14	古墳	方形	5.05 × 0.6 以上× 0.13	黒褐色土	1.65 以上						○	SB12・SD3 に切られる。
15	古墳	方形	4.76 × 2.1 以上× 0.15	黒褐色土	10.69 以上						○	掘立３、SK6・11 に切られ、SB18 を切り、小溝を伴う。
16	古墳	方形	4.68 × 2.03 以上× 0.28	黒褐色土	7.92 以上							SB12 を切り、東側は調査区外に延びる。
17	弥生	隅丸方形	2.0 以上× 1.6 以上× 0.07	黒褐色土	4.46 以上							SB6・7、掘立４に切られる。
18	古墳	隅丸方形	4.05 以上× 3.5 以上× 0.13	黒褐色土	3.81 以上						○	SB10・11 に切られる。
19	古墳	方形	1.5 以上× 0.6 以上× 0.03 ～ 0.05	黒褐色土	3.51 以上						○	南西部の床面のみ残存。

表３　竪穴住居の炉・カマド一覧

竪穴(SB)	時期	炉	カマド	位置	平面形	規模（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	面積（㎡）	備考
6	弥生	○		中央部	楕円形	0.64 × 0.48 × 0.1	0.25	炭・焼土を少量検出。
11	古墳		○	西壁中央部	U 字形	1.0 以上× 0.73 以上× 0.21	0.37 以上	焼土
12	古墳		煙道？	北壁中央部	不正形			壁体に突出部をもつ。焼土塊検出。

表４　掘立柱建物一覧　（1）

掘立	規模（間）	方向	桁行 実長（m）	桁行 柱間寸法（m）	梁行 実長（m）	梁行 柱間寸法（m）	方位	床面積（㎡）	時期	備考
1	3 × 1	東西	6.02	1.9 ～ 2.1	3.5	3.5	N-88° -E	16.12 以上	古墳	SB1 を切り、北西部は調査区外に延びる。
2	2 × 2	東西	3.2	1.5 ～ 1.7	2.7	1.3 ～ 1.4	N-89° -E	8.64	古墳	SB5、SK4 を切る。
3	2 × 2	東西	4.86	2.3 ～ 2.6	3.9 ～ 4.1	1.8 ～ 2.1	N-89° -E	19.44	中世	SB10・11・18・19、SD8、SK9・10、周溝１を切る。
4	3× 2以上	南北	3.95	1.3	1.7 以上	1.7	N- 1° -E	6.72 以上	古墳	SD1・2 に切られ、SB6・7・17 を切り、西側は調査区外に延びる。
5	2× 1以上	南北	3.06	1.4 ～ 1.6	1.0 以上	1.0 以上	N- 3° -E	3.06 以上	古墳	SB7 を切り、西側は調査区外に延びる。

掘立柱建物一覧

(2)

掘立	規模(間)	方向	桁行		梁行		方位	床面積(㎡)	時期	備考
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)				
6	3×2	東西	5.25	1.5～1.9	4.06	2.0～2.1	N-90°-E	21.32	古墳	SD1～3に切られ、SB2・7を切る。
7	2×2	東西	3.54	1.5～2.1	3.4	1.6～1.8	N-90°-E	12.04	古墳	SB4、周溝1を切る。

表5　溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規模(m) 長さ×幅×深さ	方向	埋土	出土遺物	時期	備考
1	G・3～8	逆台形状	19.8×0.58～1.32×0.05～0.11	南北	灰黄褐色土	土師器・磁器 銭貨・鉄器	近世	SB2・6・7、掘立4・6、SK3、周溝1を切る。
2	F～G・3～8	逆台形状	17.95×0.48～0.64×0.04～0.2	南北	灰黄褐色土	土師器 磁器・鉄器	近世	SB6・7、掘立4・6、SD8を切る。
3	G～H・4～8	逆台形状	14.95×0.43～0.8×0.03～0.15	南北	灰黄褐色土	土師器 磁器・鉄器	近世	SB2・6・7・12・14、掘立6、周溝1を切る。
4	H・2～3	皿状	2.73×0.7～0.93×0.03～0.06	南北	灰黄褐色土	土師器	近世	北端は調査区外に延びる。
5	I・7	レンズ状	2.6×0.73～0.92×0.06～0.12	東西	灰黄褐色土	土師器	近世	SK5に切られ、SB16を切り、東端は調査区外に延びる。
6	I・5～6	レンズ状	2.6×0.58～0.8×0.04～0.13	東西	灰黄褐色土	土師器	近世	東端は調査区外に延びる。
7	I・6	レンズ状	1.0×0.52～0.6×0.03～0.08	東西	灰黄褐色土		近世	東端は調査区外に延びる。
8	G・7～8	逆台形状	3.62×0.5～0.73×0.1～0.12	南北	黒褐色土	須恵器・石器	古墳	SB10、掘立3、SK10、SD2に切られ、両端は不明。
9	I・4	レンズ状	2.0×1.05～1.1×0.03～0.04	東西	灰黄褐色土	弥生	近世	SB5を切り、東端は調査区外に延びる。

表6　土坑一覧

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積(㎡)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	G・3～4	楕円形	皿状	2.35×1.9×0.09	3.51	黒褐色土	土師器 須恵器	古墳	
2	F・4	楕円形	逆台形状	1.45×0.98×0.1	1.09	黒褐色土	土師器 須恵器	古墳	SB1の床面にて検出。
3	G・5	長方形	逆台形状	2.15以上×0.93以上×0.2	1.42	黒褐色土	弥生土器	弥生	SB2、SD1に切られる。
4	H～I 3～4	長方形	逆台形状	2.7×1.6×0.03	4.01	黒褐色土	土師器 須恵器・石器	古墳	掘立2に切られ、SB5を切る。
5	I・7	隅丸 長方形	皿状	1.32×0.92以上×0.13	0.95以上	灰黄褐色 砂質土	土師器 鉄器	近世	SD5を切り、東側は調査区外に延びる。
6	I・8～9	隅丸 長方形	逆台形状	0.9×0.62×0.33	0.76	灰黄褐色土	土師器	近世	SB13・15を切る。
7	F・8～9	隅丸 長方形	逆台形状	1.1×0.85×0.18	0.85	灰黄褐色土	土師器	中世	SB10を切る。
8	I・8～9	長方形	逆台形状	1.1×0.95×0.3	0.81	黒褐色土	土師器	古墳	SB13の床面にて検出。
9	H・8	不整形	レンズ状	2.15×1.12以上×0.24	1.77以上	黒褐色土	弥生土器	弥生	掘立3に切られる。
10	G・8	不整 楕円形	皿状	1.53×1.16×0.12	1.16	黒褐色土	土師器 須恵器	古墳	SD8を切る。
11	H～I 7～8	不整 楕円形	逆台形状	2.66×2.35×0.16	4.65	黒褐色土	土師器 須恵器	古墳	SB12・15を切る。

表7　性格不明遺構一覧

(SX)	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積(㎡)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	H～I 2～3	不整形	逆台形状	4.2×2.1以上×0.3	6.46以上	にぶい 黄橙色土	土師器 須恵器・石器	古代	東側は調査区外に延びる。
2	I・2	不整形	レンズ状	2.0以上×1.8以上×0.28	1.94以上	黒褐色土	土師器 須恵器・石器	古墳	東・北側は調査区外に延びる。

表８　SB2 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	残高　2.6	「く」字状の頸部に刻目文を施した貼付凸帯をもち、口縁端部は上方に拡張する。	ヨコナデ	ヨコナデ	明赤褐色・にぶい黄橙色 にぶい褐色	密・砂 ◎		
2	高坏	残高　2.3	坏部は大きく外反する。	ハケ（5本／cm） →ナデ	ナデ	にぶい橙色・にぶい黄橙色 灰黄褐色・灰白色	砂 金 ◎	赤砂	

表９　SB6 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
3	甕	口径（16.1） 残高　3.7	口縁端部に１条の凹線を持ち、上方に肥厚する。	ヨコナデ ハケ or ミガキ	ヨコナデ マメツ	淡黄色・淡褐色 淡黄色・淡褐色	石（密）・長（1） ◎		
4	甕	残高　1.6	口縁端部に１条の凹線を持ち、外上方に肥厚する。	ヨコナデ	マメツ	にぶい黄橙色・黒褐色 にぶい黄橙色・黒褐色	砂 ○		
5	甕	残高　2.4	口縁端部に２条の凹線を持ち、頸部に刻目文の貼付凸帯が巡る。	ヨコナデ	マメツ ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい黄橙色・橙色	長（1～2） ◎		
6	甕	残高　2.0	口縁端部がやや凹み、上方に肥厚する。	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石・長（1～2） ◎		
7	甕	底径　(6.3) 残高　2.0	平底の底部より、内湾気味に立ち上がる。	マメツ 指頭痕	マメツ 指頭痕	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長（1～3） ○		
8	甕	底径　3.2 残高　1.5	やや上げ底の底部付近はくびれる。	指ナデ	指ナデ	褐灰色・黒色 にぶい褐色	石・長（1） 金 ◎		
9	壺	口径（20.0） 残高　2.9	口縁端部に３条の凹線を持ち、端部は上下方に肥厚する。	マメツ 指頭痕→ナデ	マメツ	明赤褐色 明褐色	石（1～3） ○		
10	壺	口径（17.4） 残高　2.0	口縁端部に３条の凹線を持ち、端部は上下方に肥厚する。	マメツ ナデ	ヨコナデ	淡茶色 淡茶色	石・長（1） ◎	黒斑	
11	壺	口径（11.8） 残高　5.3	口縁端部に３条の凹線を持ち、端部は上下方に肥厚する。	ヨコナデ ハケ（7本／cm） →ヨコナデ	指頭痕→ヨコナデ ナデ	褐色・灰褐色 にぶい赤褐色	密・砂 ◎	赤砂	
12	壺	口径（14.4） 残高　1.6	口縁端部がやや凹む。	ナデ 指頭痕→ナデ	ヨコナデ	明黄褐色 にぶい橙色	石（1） 金 ◎		
13	壺	底径　(4.8) 残高　4.7	平底の底部から外反して立ち上がる。	ヘラミガキ 指頭痕・ナデ	ヘラミガキ 指頭痕	橙色・黒色 にぶい橙色	密・砂 ◎		
14	高坏	口径（21.4） 残高　1.6	口縁端部は水平な面をなし、内面は肥厚され、外面に刻目文が施される。	マメツ	ヨコナデ	茶色 茶色	石・長（1～2） ◎		
15	高坏	口径（26.4） 残高　6.0	内湾して立ち上がる坏部に、貼付けられた口縁部は外反し、端面は平らな面をなす。	ミガキ マメツ	マメツ	橙色 橙色	石（1～4）・長（1～3） 金 ○		

表10　SB6 出土遺物観察表　石製品　（1）

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
16	石　鏃	片方逆刺部欠損	サヌカイト	3.00	2.48	0.35	2.57		6
17	石　鏃	未成品	サヌカイト	2.50	1.80	0.35	1.573		6
18	石　鏃	完　形	サヌカイト	2.18	1.15	0.36	0.856		6
19	石　鏃	ほぼ完形	緑色片岩	3.30	1.80	0.20	1.355		6

SB6 出土遺物観察表　　石製品　　(2)

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
20	石鏃	一部欠損	緑色片岩	3.15	1.10	0.15	0.902		6
21	収穫具	一部欠損	頁岩	8.65	4.10	1.25	37.196		6

表11　SB6 出土遺物観察表　　装身具

番号	器種	残存	材質	法量 厚さ(cm)	外径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	色調	備考	図版
22	小玉	完形	ガラス	0.43	0.58	0.2～0.25	0.112	青緑色		6
23	小玉	完形	ガラス	0.35	0.42～0.45	0.12～0.15	0.05	青緑色		6
24	土玉	ほぼ完形	土製	1.80	1.60	0.35～0.42	4.084	にぶい橙色		6
25	管玉	完形	輝岩	(長さ) 3.13	0.64	0.18～0.23	22.02	にぶい黄色		6

表12　SB6 出土遺物観察表　　鉄製品

番号	器種	残存	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
26	鉄滓	完形	4.95	7.0	2.35	66.19		6

表13　SB8 出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
27	甕	口径 (15.2) 残高 6.4	口縁端部はやや凹む。	㊐ マメツ ヨコナデ ハケ(6本/cm)	ヨコナデ ハケ→ナデ	灰褐色・黒色 にぶい褐色	砂 ◎	赤砂	
28	甕	口径 (13.6) 残高 1.5	口縁端部はやや凹む。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 にぶい褐色	砂 ◎		
29	甕	口径 (17.0) 残高 0.8	口縁端部に2条の凹線を持ち、端部は上方に肥厚する。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 橙色	砂 ◎		
30	壺	残高 2.1	口縁端部は平らな面をなす。	ハケ ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ハケ・ナデ	灰褐色 褐色	石・長(1) ◎		
31	壺	残高 3.5	内湾する上胴部に、頸部はやや窄む。	ヨコナデ ナデ	マメツ	橙色 にぶい黄橙色	砂 ◎		
32	高坏	残高 4.1	脚部に11条の直線文が巡り、下方に矢羽根透かしが施される。	ミガキ	ナデ	橙色 明赤褐色	密 ◎		
33	高坏	底径 (9.6) 残高 3.4	脚裾部に矢羽根透かしと、下方に3条の沈線文が施され、内端面が接地する。	ヨコナデ	ヨコナデ	明赤褐色 橙色	石・長(1) ◎	赤砂	
34	鉢	残高 3.5	内湾する胴部に、外反する口縁部をもつ。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭痕	灰褐色 明赤褐色	石・長(1～4) ◎		

表14　SB9 出土遺物観察表　　土製品　　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
35	甕	口径 (17.6) 残高 2.7	口縁端部は上方に肥厚され、端面は凹む。	㊐ ヨコナデ マメツ	㊐ ヨコナデ 指頭痕→ナデ	にぶい褐色 にぶい黄褐色	砂 金 ◎		
36	甕	口径 (15.0) 残高 4.8	「く」字状の口縁部に端部はやや内方に肥厚される。	マメツ	指頭痕	灰黄色 灰黄色	石・長(1～4)多 金 ○		
37	甕	残高 3.0	緩やかに「く」字状の口縁部に端部はやや外方に肥厚される。	㊐ヨコナデ ハケ	㊐ ハケ ナデ	にぶい橙色 灰黄褐色	石・長(1～2) 金 ◎		

SB9 出土遺物観察表　　土製品　　(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
38	甕	底径 (4.8) 残高 1.7	平底の底部より外反気味に立ち上がる。	ナデ	ナデ 指頭痕	明赤褐色 黒色	石・長(1～3) ◎		
39	甕	残高 4.2	平底の底部より外反気味に立ち上がる。	ミガキ ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) 金 ◎		
40	壺	底径 (6.8) 残高 2.7	平底の底部より外反気味に立ち上がる。	マメツ	マメツ	明赤褐色 褐色	石・長(1～2) ◎		
41	高坏	口径 (14.4) 残高 2.4	内湾気味の口縁部外面に５条の凹線文が施される。	マメツ	ヨコナデ	にぶい橙色 橙色	砂 ◎		
42	高坏	底径 (9.0) 残高 4.6	「ハ」字状の脚裾部外面に３条の凹線文と矢羽根透かしが施され、脚端部は内端面が接地する。	ミガキ ヨコナデ	ナデ	橙色 橙色	石(1) ◎		
43	ミニチュア	口径 5.7 器高 4.4 底径 4.6	平底の底部より内湾気味に立ち上がり、口縁部は丸くおさまる。	ナデ・指オサエ (底)ナデ	ナデ 指オサエ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3) 金 ◎		6

表 15　SB17 出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
44	甕	口径 (16.0) 器高 28.15 底径 5.4	口縁端部に２条の凹線文をもつ。	ヨコナデ (胴上)ハケ(6～7本/cm) (胴下)ミガキ・ナデ	ヨコナデ ハケ(5本/cm) ナデ	橙色・にぶい褐色 橙色・にぶい黄橙色	石(1～3)・長(1) ○		6
45	甕	口径 (14.8) 残高 18.82	口縁端部がやや凹む。	ヨコナデ (胴上)ハケ(5～6本/cm) (胴下)ミガキ	ヨコナデ 指頭痕 ハケ	灰黄褐色・灰褐色 灰黄褐色	石(2) ○		
46	甕	口径 (17.8) 残高 6.1	口縁端部がやや凹み、上方に肥厚し、その内面は凹線が巡る。	ヨコナデ ハケ(8本/cm)	ヨコナデ 指頭痕 ハケ→ナデ	橙色 橙色	石・長(1) 金 ○		
47	甕	底径 5.6 残高 6.95	平底の底部から外反して立ち上がりる。	ミガキ ナデ	ナデ	黒褐色 にぶい褐色・黄灰色	石(1～3)・長(1) 金 ○		
48	甕	底径 5.0 残高 25.5	平底の底部から外反して立ち上がり、上胴部に最大胴径をもつ。	ハケ ミガキ・ナデ	ハケ→ナデ ナデ	橙色・にぶい黄橙色 にぶい橙色・褐灰色	石(1～4)・長(1～3) チャ ○		
49	壺	底径 7.0 残高 15.5	平底の底部に、胴部中心よりやや上方に最大胴径をもつ。	ハケ(9～10本/cm) ミガキ→ナデ ナデ	ハケ→ナデ ハケ・指頭痕 ミガキ	橙色・にぶい黄橙色 橙色・にぶい黄橙色	石(1～3)・長(1～2) ○		
50	高坏	口径 (20.8) 器高 16.55 底径 11.2	口縁部に４条の凹線文、脚部に６条の沈線文、矢羽根透かし、裾部に３条の凹線文が施され、内端面が接地する。	(口)ヨコナデ (坏)ミガキ (裾)ヨコナデ	ヨコナデ ハケ(10本/cm) →ミガキ・シボリ痕	乳茶橙色 乳茶橙色・灰黄褐色	石・長(1～3) ◎		6
51	高坏	底径 (9.1) 残高 9.75	脚部に10条の沈線文・矢羽根透かし、裾部に３条の凹線文が施され、内端面が接地する。	(坏)ミガキ・ナデ (裾)ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	橙色 橙色	石(1～2) 細粒 ◎		

表 16　SB17 出土遺物観察表　　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
52	石鏃	完形	サヌカイト	2.8	2.0	0.4	1.997		6

表 17　周溝１出土遺物観察表　　土製品　　(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
53	甕	口径 (11.6) 残高 4.3	緩やかに「く」字状を呈する口縁部に端部は丸くおさまる。	ハケ	(口)ヨコナデ ナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色・にぶい黄橙色	石(1) ◎		
54	甕	残高 1.3	口縁端部に２条の凹線文をもつ。	ナデ	ナデ	明赤褐色・明黄褐色 明赤褐色	石(1～2) ◎		

周溝1出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
55	甕	残高 1.2	口縁端部に2条の凹線文をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐灰色 にぶい褐色	砂 ◎		
56	甕	残高 1.5	口縁端部が凹む。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄褐色・にぶい橙色 橙色	砂 ◎		
57	甕	底径 (6.4) 残高 3.2	上げ底の底部はくびれをもつ。	ナデ	ナデ 指頭痕	明赤褐色・にぶい褐色 灰黄褐色	石・長(1) ◎		
58	甕	底径 (4.8) 残高 2.3	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石(1～2) ◎		
59	壺	底径 (13.6) 残高 3.6	やや上げ底の底部。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 にぶい黄橙色	石(1～2)・長(1) ○		
60	壺	底径 (9.8) 残高 4.5	平底の底部。	工具 ナデ	ナデ	褐灰色・橙色 にぶい黄橙色	砂 ◎		
61	高坏	残高 2.8	内湾する口縁部の外面に4条の沈線文が施される。	ナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	砂 ◎		
62	支脚	底径 (12.6) 残高 3.4	「ハ」字状の脚端部は丸くおさまる。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1～2) ◎		
63	不明	残高 1.5	片面に格子状の線刻と穿孔、端面に線刻が施される。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 橙色	砂 ◎		7

表18　SK3出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
64	甕	残高 2.1	外反する口縁部の端面は平らな面をなす。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 褐色	石・長(1～2) ◎		
65	甕	残高 2.3	緩やかに「く」字状を呈する口縁部に端部は丸くおさまる。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 灰黄褐色	石・長(1) ◎		
66	壺	口径 (10.0) 残高 1.9	外反する口縁部の端面に3条の凹線文が施される。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 橙色	石・長(1) ◎	赤砂	
67	鉢	口径 (15.6) 残高 4.7	内湾する上胴部に口縁部は緩やかに外反し、端部は平らな面をなす。	ナデ	ナデ ハケ	橙色 橙色	石・長(1) ◎		

表19　SK9出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
68	甕	底径 (6.6) 残高 2.7	上げ底の底部。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 褐灰色	石・長(1～2) ◎		
69	壺	口径 (11.2) 残高 3.0	外反する口縁部の端面に3条の凹線文が施される。	ヨコナデ	マメツ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) ◎		
70	高坏	口径 (15.4) 残高 6.5	内湾する口縁部の外面に7条の凹線文が施される。	ハケ	回ヨコナデ マメツ	にぶい黄橙色 灰黄褐色	密・砂 ◎		

表20　SB1出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
71	高坏	つまみ径 3.0 残高 1.6	つまみの上部が凹む。	回転ナデ	ナデ	灰白色 灰色	石(1) ◎		

SB1 出土遺物観察表　　土製品　　(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
72	坏身	受部径 (14.8) 残高 2.4	水平に延びる受部端は凹みをもつ。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表 21　SB4 出土遺物観察表　　土製品　　(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
73	甕	口径 (24.4) 残高 2.6	口縁端部に平らな面をなす。	マメツ	マメツ	淡茶褐色 淡茶褐色	石(1～3)・長(1) 金 ◎	黒斑	
74	甕	口径 (18.6) 残高 3.0	口縁端部は丸みをもち、内面がやや凹む。	ナデ ハケ(8本/cm) →ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石(1)・長(1～3) 金 ◎	赤砂	
75	甕	口径 (19.4) 残高 3.25	口縁端部に平らな面をなす。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1) 金 ◎		
76	甕	口径 (20.6) 残高 2.9	口縁端部は丸みをもつ。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	石・長(1～3) 金 ◎		
77	甕	口径 (16.6) 残高 2.4	口縁端部は平らな面をなし、その下は僅かに屈曲する。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 乳茶褐色	石(1～3)・長(1～2) 金 ○		
78	高坏	底径 (18.6) 残高 2.95	脚裾部は屈曲をもち、裾端部は丸くおさまる。	マメツ	ケズリ マメツ	淡橙黄色	石(1～3)・長(1～2) ◎		
79	高坏	底径 (13.7) 残高 1.35	脚裾部は屈曲をもち、裾端部は丸くおさまる。	マメツ	マメツ	暗褐色 乳茶褐色	石・長(1～3) 金 ◎		
80	甑	口径 (27.7) 残高 22.4	外傾して立ち上がり、端部は丸くおさまる。把手部は凹みをもち尖り気味。	ナデ	ナデ ハケ(7～8本/cm)	浅黄橙色 にぶい黄橙色	石(1～4)・長(1～2) 金 ○		
81	甑	口径 (23.8) 残高 4.4	口縁端部は平らな面をなす。	ナデ ハケ(7～10本/cm)	ヨコナデ ナデ	黒褐色 暗褐色	石・長(1～2) 金 ◎		
82	甑	残高 4.5	つまみ部は外上方に延び尖る。	ナデ		淡橙色	長(1～3) ◎		
83	甑	残高 4.3	つまみ部は凹みをもち尖る。	ナデ	ナデ	淡褐色 淡褐色	石(1～5)・長(1～2) ◎	赤砂	
84	椀	口径 (13.0) 残高 4.4	内湾する胴部に、口縁端部は内傾する面をなす。	マメツ	ナデ ミガキ	淡橙褐色 淡橙褐色	長(1～3) ◎		
85	椀	口径 (11.0) 器高 4.5	内湾する胴部に、口縁端部は丸くおさまりやや内傾する。	ナデ	ナデ	橙褐色・黒灰色 橙褐色	長(1～4) 金 ◎	黒斑	
86	蓋坏	口径 (13.6) 器高 4.2	天井部に歪みをもち、口縁端部は内傾する段をもつ。	㊇ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ ナデ	灰色 灰白色	長(2) ○		
87	蓋坏	口径 (13.4) 残高 4.1	天井部境に浅い凹みによる稜をもち、口縁端部は内傾する面をもつ。	㊇ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	密 ◎		
88	蓋坏	口径 (12.3) 残高 3.5	天井部境に凹みによる断面三角形状の稜をもち、口縁端部は内傾する段をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石(6) ◎		
89	蓋坏	口径 (11.3) 残高 3.95	天井部境に凹みによる断面三角形状の稜をもち、口縁端部は内傾する面をもつ。	㊇ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
90	蓋坏	口径 (11.0) 残高 4.4	天井部境に凹みによる断面三角形状の稜をもち、口縁端部はやや外傾する。	㊇ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石(1～3)・長(1～2) ◎		

SB4 出土遺物観察表　　土製品　　(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
91	蓋坏	口径 (14.8) 残高 3.4	天井部境に浅い凹みによる稜をもち、口縁端部は内傾する段をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	長(1～2) ◎		
92	蓋坏	口径 (12.9) 残高 3.75	天井部境に浅い凹みによる稜をもち、口縁端部は内傾する面をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄黒色 灰色	密 ◎		
93	蓋坏	口径 (14.8) 残高 4.4	天井部境に浅い凹みによる稜をもち、口縁端部は内傾する面をもつ。	㊦ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	淡灰色	石(2) ○		
94	蓋坏	口径 (13.8) 残高 3.85	天井部境に稜をもち、口縁端部は内傾する面をなす。	㊦ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎		
95	蓋坏	口径 (13.4) 残高 4.7	天井部境に浅い凹みによる稜をもち、口縁端部は内傾する面をもつ。	㊦ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石(1～5)・長(1) ◎		
96	蓋坏	口径 (10.8) 残高 4.0	天井部境に浅い凹みによる稜をもち、口縁端部は内傾する面をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1～2) ◎		
97	蓋坏	口径 (13.8) 残高 3.95	天井部境に断面三角形状の稜をもち、口縁端部はやや内傾する面をなす。	㊦ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色・灰褐色 灰色	石(1～4)・長(1～2) ◎		
98	蓋坏	口径 (12.0) 残高 3.4	天井部境に断面三角形状の稜をもち、口縁端部は丸くおさまる。	㊦ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 淡灰色	石(1) ◎		
99	蓋坏	口径 (12.9) 器高 4.8	天井部境は凹み、口縁端部は内傾する面をもつ。	㊦ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石(1)・長(細～2.5) △		
100	蓋坏	口径 14.7 器高 4.6	天井部境に僅かに稜がつき、口縁端部は丸くおさまる。	㊦ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石(1～2.5)・長(1～5) ◎		7
101	蓋坏	口径 14.4 器高 5.0	天井部境に僅かに稜がつき、口縁端部は平らな面をなす。	㊦ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1) ◎		7
102	蓋坏	つまみ径 3.3 つまみ高 0.75 残高 2.6	天井部に凹みをもつ扁平なつまみが貼り付く。	㊥ ナデ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色・灰色 灰色	石・長(1～4) ◎		
103	坏身	口径 (14.1) 残高 3.9	口縁端部に内傾する段をなし、受部は外方に延びる。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石(1)・細 ◎		
104	坏身	口径 (13.2) 残高 4.4	口縁端部に内傾する段をなし、受部は外方に延びる。	マメツ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1) ○		
105	坏身	口径 (12.1) 器高 4.7	口縁端部に内傾する段をなし、受部は外上方に延びる。	回転ナデ ㊦ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗青灰色・灰色 灰色	石(1～2)・長(1～15) ◎		
106	坏身	口径 (10.0) 器高 4.9	口縁端部に内傾する段をなし、受部は外上方に延びる。	回転ナデ ㊦ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰色	石・長(1～3) ◎		7
107	坏身	口径 (13.0) 残高 3.6	口縁端部に内傾する段をなし、受部は外方に延びる。	回転ナデ ㊦ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色・灰色 灰白色	石(1～3)・長(1) ○		
108	坏身	口径 (12.0) 残高 4.1	口縁端部に僅かに内傾する段をもち、受部は外方に延びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
109	坏身	口径 (12.2) 残高 4.0	口縁端部は丸くおさまり、受部は外上方に延びる。	回転ナデ ㊦ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	石(1)・長(細～1.5) ◎		
110	坏身	口径 (13.0) 器高 5.75	口縁端部は丸くおさまり、受部は短く外方に延びる。	回転ナデ ㊦ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1) ◎		7
111	坏身	口径 (10.8) 残高 3.85	口縁端部は丸くおさまり、受部は外上方に延びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(2) ◎		

SB4 出土遺物観察表　土製品　(3)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
112	高坏	口径 (9.8) 残高 4.05	坏部に稜をもち、波状文が施される。	回転ナデ ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石(1)・長(1～2) ◎		
113	高坏	底径 (7.7) 残高 8.4	脚部には透かしが施され、端部は段をなして垂直に下がる。	回転ナデ →カキメ (脚端) 回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰色	石・長(1) ◎		
114	高坏	底径 (8.6) 残高 4.95	脚部には透かしが施され、端部は段をなして垂直に下がる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石(1～2) ◎		
115	高坏	底径 (9.0) 残高 5.15	脚部は「ハ」字状を呈し、端部は丸くおさまり、外端面が接地する。	ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色・オリーブ灰色 灰白色	長(1～2)・細 ◎		
116	高坏	底径 (8.6) 残高 3.92	脚部に円孔が施され、端部は平らな面をなす。	回転ナデ	回転ナデ ナデ	灰色 灰色	細 ◎		
117	甕	口径 (18.3) 残高 6.55	外反する口縁部の端部は上下方に肥厚する。	回転ナデ	回転ナデ ヨコナデ タタキ	灰色・暗オリーブ灰色 オリーブ灰色	石(1)・長(1～3) ◎	自然釉	
118	甕	口径 (18.4) 残高 6.1	口縁端部は外方に肥厚され、外面に凹みをもつ。	回転ナデ 回転カキメ	回転ナデ ナデ	灰色 灰色	石・長(1～3) ◎		
119	甕	口径 (14.6) 残高 4.6	外反する口縁部の端部は上下方に肥厚され、外面に凹みをもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石(1～2) △		
120	甕	残高 10.7	球形の下胴部と底部の境に、粘土の継ぎ目がある。	タタキ ナデ	タタキ ナデ	灰色 灰色	石(1～3) ◎	自然釉	
121	提瓶	口径 (8.9) 残高 3.92	口縁端部は屈曲をもち外上方に延びる。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	石・長(1) ◎	自然釉	
122	提瓶	残高 8.7	肩部に半円盤状の把手が貼付けられ、円孔が施される。	カキメ ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色・灰色 灰色	石・長(細～2) ◎	自然釉	

表 22　SB4 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
123	石鏃	完形	サヌカイト	2.52	1.72	0.5	1.622		

表 23　SB4 出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
124	鉄鏃	鏃身部残存	4.0	2.12	0.32	5.66		7
125	鉄鏃	鏃身部・茎部欠損	7.65	0.4～1.9	0.36～0.4	8.26		7
126	鉄鏃	端部欠損	5.25	0.7	0.53	2.66	刻み目あり	7
127	鉄滓	一部欠損	2.6	2.85	1.65	9.42		7

表 24　SB4 出土遺物観察表　装身具

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	色調	備考	図版
128	勾玉	約 1/3	土製	3.5	2.15	1.9	16.58	乳茶褐色		7

表 25　SB5 出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
129	甕	残高 2.9	口縁外面に断面三角形状の貼付凸帯をもち、端部は外方に肥厚される。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 灰色・褐灰色	石(1～3) ◎		

SB5 出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
130	蓋坏	口径 (12.2) 残高 3.6	天井部境に凹みによる稜、口縁端部は内傾する段をもつ。	㊦ 回転ヘラケズリ ㊐ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密・砂 ◎		
131	蓋坏	残高 3.8	天井部境に凹みによる稜をもつ。	㊦ 回転ヘラケズリ ㊐ 回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	長 (1) ◎		

表26　SB5 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
132	石鏃	先端部欠失	サヌカイト	2.81	1.78	0.59	2.758		

表27　SB7 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
133	甕	口径 (19.0) 残高 5.3	「く」字状を呈する口縁部の端面は平らである。	㊐ ハケ ㊥ ヨコナデ	ナデ	にぶい褐色 橙色	石・長（細） ◎		
134	蓋坏	口径 (12.3) 残高 2.8	天井部境に凹みによる稜、口縁端部は内傾する段をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長 (1) ◎	自然釉	
135	坏身	口径 (10.1) 残高 3.2	受部端に凹みをもち、口縁端部に内傾する面をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石 (2)・砂 ◎		
136	坏身	残高 2.6	水平に延びる受部。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色・灰色 灰白色	密 ◎		

表28　SB10 出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
137	甕	口径 (19.8) 残高 3.3	口縁部が緩やかに段をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1) 金 ◎		
138	甕	口径 (15.8) 残高 14.6	「く」字状を呈する口縁部。	マメツ	ナデ	にぶい黄橙色・にぶい橙色 にぶい黄橙色・にぶい橙色	石・長 (1～3) ○		
139	甕	口径 (12.6) 残高 4.8	「く」字状を呈する口縁部に端部は平らな面をなす。	ハケ	マメツ	にぶい橙色 灰黄褐色	石・長 (1～2) ◎		
140	甕	口径 (12.8) 残高 5.7	緩やかに「く」字状を呈する口縁部に端部は丸くおさまる。	㊐ ヨコナデ ハケ	ナデ	暗灰黄色・にぶい橙色 にぶい黄色	石・長 (1～2) 砂・金 ◎		
141	甕	口径 (11.6) 残高 2.1	緩やかに「く」字状を呈する口縁部に端部は丸くおさまる。	マメツ	マメツ	明黄褐色 明黄褐色	石 (1) ○		
142	甕	残高 2.9	外傾する口縁部に端部は丸くおさまる。	㊐ マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	砂 ◎	赤砂	
143	蓋坏	口径 (14.8) 残高 5.4	天井部境に凹みによる稜、口縁端部は内傾する段をもつ。	㊦ 回転ヘラケズリ ㊐ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1～3) ◎		
144	蓋坏	口径 (14.2) 残高 4.2	天井部境に凹みによる稜、口縁端部は内傾する面をもつ。	㊦ 回転ヘラケズリ ㊐ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石 (1) ◎		
145	坏身	口径 (11.0) 残高 5.8	外上方に延びる受部に端部は凹む。口縁端部は内傾する面をもつ。	回転ナデ ㊡ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	砂 ◎		
146	坏身	口径 (10.3) 残高 3.8	外上方に延びる受部に端部は凹む。口縁端部は内傾する段をもつ。	㊐ 回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	長 (1) ◎		
147	坏身	口径 (10.8) 残高 3.6	やや外上方に延びる受部に端部は浅く凹み、口縁端部は内傾する段をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石 (1) ◎	自然釉	

SB10 出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
148	坏身	口径 (12.8) 残高 2.7	やや外上方に延びる受部に端部は浅く凹み、口縁部は内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	砂 ◎		
149	壺	口径 (17.6) 残高 2.2	外反する口縁部に端部は丸くおさまる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	砂 ◎		

表 29　SB10 出土遺物観察表　装身具

番号	器種	残存	材質	法量 直径（cm）	法量 孔径（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	色調	備考	図版
150	小玉	完形	ガラス	0.6 ～ 0.65	0.2	0.56	0.246	青緑色		7

表 30　SB10 出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
151	鉄鏃	鏃身部・茎部欠損	6.65	0.8	0.27 ～ 0.44	4.29		7
152	鉄滓	完形	1.95	2.45	1.5	5.27		7

表 31　SB10 出土遺物観察表　遺存体

番号	種別	部位	色調	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
153	骨	不明	緑白色	2.0	0.17 ～ 0.45	0.15 ～ 0.28	0.065	焼成を受けている	7

表 32　SB11 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
154	甕	口径 (12.7) 残高 7.2	緩やかに「く」字状を呈する口縁部に端部は丸くおさまる。	ナデ	マメツ	淡赤橙色 淡赤橙色・灰黄褐色	石・長 (1 ～ 3) 金 ○		
155	鉢	口径 (15.8) 残高 4.0	内湾して立ち上がり、口縁部が僅かに外反する。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 3) ○		
156	坏身	口径 (10.8) 残高 3.8	上方に延びる受部に、口縁端部は丸くおさまる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1) ◎		
157	高坏	口径 10.5 器高 8.0 底径 8.1	坏部の受部端は凹み、口縁端部に内傾する面、短脚の脚部端は内方へ屈曲し、脚柱部に透かしが施される。	回転ナデ (坏底)回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1 ～ 5) ◎		8
158	高坏	残高 2.1	外反して下がる脚柱上部に 4 方向の円孔が施される。	カキメ	ナデ	灰色 灰色	砂 ◎		

表 33　SB11 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
159	砥石	約 2/3	石英粗面岩	14.75	7.4	5.5	762.0		8

表 34　SB11 出土遺物観察表　装身具

番号	器種	残存	材質	法量 直径（cm）	法量 孔径（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	色調	備考	図版
160	小玉	完形	ガラス	0.75 ～ 0.82	0.13	0.48	0.408	青色		8

表 35　SB11 出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
161	鉄鏃	茎部欠損	9.0	0.7	0.6	4.92		8

表36　SB12出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
162	甕	口径 (22.5) 残高 7.5	「く」字状を呈する口縁部に端部は丸くおさまる。	ヨコナデ ハケ(7/cm)	ヨコナデ ナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1) 金 ◎	赤砂	
163	甕	口径 (19.0) 残高 2.9	外反する口縁部に端部は丸くおさまる。	マメツ	ナデ ヨコナデ	暗褐色 茶褐色	石・長(1～2) 金 ○	赤砂	
164	甕	口径 19.2 残高 9.0	「く」字状を呈する口縁部に端部はやや平らな面をなす。	マメツ	ナデ・マメツ 指頭痕	橙色 赤橙褐色・にぶい黄橙色	石・長(1～3) ○		
165	甕	口径 (16.0) 残高 3.0	「く」字状を呈する口縁部に端部は丸くおさまる。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄茶色 淡黄茶色	石・長(1～2) ◎	赤砂	
166	甕	口径 (17.6) 残高 6.2	頸部がやや凹み、口縁端部が内傾し面をなす。	マメツ	マメツ ケズリ	淡褐色 淡褐色	石(1～4) ○		
167	甕	口径 (19.0) 残高 3.5	外傾する口縁部に端面はやや凹む。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	密 金 ◎		
168	壺	口径 (8.6) 残高 5.6	直立気味の口縁部に端部は尖り気味である。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色・灰黄色	石・長(1～2) 金 ○	黒斑	
169	壺	口径 (9.0) 残高 4.1	やや外反する口縁部。	マメツ	マメツ	乳茶褐色・黒色 乳茶褐色・黒色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
170	脚付鉢	底径 (10.4) 残高 4.4	「ハ」字状に外反する脚部。	ハケ ヨコナデ	ヨコナデ	暗黄褐色 暗黄褐色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	
171	甑	口径 (26.2) 残高 9.5	やや外反気味の上胴部に口縁端部は平らな面をなす。	ハケ(7～8/cm)	ハケ(6～11/cm) マメツ	茶褐色 茶色	石・長(1～4) 金 ◎		
172	蓋坏	口径 (13.6) 残高 4.9	天井部境に凹みによる稜、口縁端部は内傾する段をもつ。	(天)回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(2) ◎		
173	蓋坏	口径 12.7 器高 4.55	天井部境に凹みによる稜、口縁端部は内傾する面をもつ。	(天)回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 白灰色	石・長(1～2) ◎		
174	蓋坏	口径 (12.7) 残高 3.6	天井部境に稜をもち、口縁端部はやや凹む。	(天)回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	暗灰褐色 灰色	石・長(1～2) ◎		
175	蓋坏	口径 13.1 器高 4.75	天井部境に凹みによる稜、口縁端部は内傾する面をもつ。	(天)回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色・灰黄色 乳灰黄色	石・長(1～5) △		8
176	坏身	口径 (10.9) 残高 3.55	外上方に延びる受部に端部は凹み、口縁端部は内傾する段をもつ。	回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色・黒灰色 青灰色	密 ◎		
177	坏身	口径 (10.6) 残高 4.3	外上方に延びる受部に端部は凹み、口縁端部は内傾する段をもつ。	回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
178	坏身	口径 (10.6) 残高 3.7	外上方に延びる受部に端部は凹み、口縁端部は内傾する段をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
179	坏身	口径 (9.9) 残高 4.15	外上方に延びる受部に端部は凹み、口縁端部は内傾する段をもつ。	回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1～2) ◎		
180	坏身	口径 (10.7) 残高 4.6	外方に延びる受部に端部は凹み、口縁端部は内傾する段をもつ。	回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
181	坏身	口径 (11.5) 残高 3.3	外方に延びる受部に端部は凹み、口縁端部は内傾する段をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		

SB12 出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
182	坏身	口径 (10.0) 残高 3.4	外方に延びる受部に端部は凹み、口縁端部は内傾する段をもつ。	回転ナデ (底) 回転ヘラケズリ→ナデ	回転ナデ ナデ	黒灰色 青灰色	石・長 (1) ◎		
183	高坏	つまみ径 3.0 残高 4.3	天井部に凹みのあるつまみをもち、天井部境に稜をもつ。	(つ) 回転ナデ (天) 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ→ナデ 回転ナデ	青灰色 青灰色	長 (1 ～ 3) ◎		8
184	高坏	つまみ径 (3.4) 残高 2.05	天井部に扁平なつまみをもつ。	(つ) 回転ナデ (天) 回転ヘラケズリ	回転ナデ→ナデ 回転ナデ	淡灰色 淡灰色	長 (1 ～ 3) ◎		8
185	高坏	つまみ径 3.7 残高 1.55	凹みをもつつまみ。	回転ナデ	ナデ	黒灰色 灰色	密 ◎		8
186	高坏	口径 (9.6) 残高 5.2	やや上外方に延びる受部に、口縁端部は内傾する段をもち、脚部に透かしが施される。	回転ナデ (坏底) 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	青灰色 青灰色	石 (1 ～ 3) ◎		
187	高坏	底径 (8.9) 残高 4.2	透かしが施された脚部に脚裾部は屈曲をもつ。	(脚) カキメ (脚端) 回転ナデ	回転ナデ	灰色・濃青灰色 濃青灰色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
188	高坏	底径 7.6 残高 5.65	透かしが施された脚部に脚裾部は屈曲をもつ。	(脚) カキメ (脚端) 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長 (4 ～ 5) ◎		
189	高坏	底径 (8.2) 残高 4.4	透かしが施された脚部に脚裾部は屈曲をもつ。	(脚) カキメ (脚端) 回転ナデ	回転ナデ	濃青灰色 青灰色	石・長 (1) ◎		
190	甕	口径 (20.2) 残高 6.8	外反する口縁部の端部は上下方に拡張する。	(口) 回転ナデ タタキ→回転ナデ タタキ→カキメ	回転ナデ 円弧タタキ	濃青灰色 濃青灰色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
191	甕	口径 (16.1) 残高 2.65	外反する口縁部の端部は上下方に拡張され、波状文が施される。	(口) 回転ナデ カキメ・タタキ	回転ナデ	赤褐色 赤褐色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
192	甕	口径 (15.0) 残高 4.8	外反する口縁部の端部は上下方に拡張され、波状文が施される。	(口) 回転ナデ カキメ	回転ナデ	濃灰色 濃灰色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
193	甕	残高 7.2	頸部は「く」字状で口縁部に波状文が施される。	カキメ→ナデ カキメ→タタキ	回転ナデ タタキ→ナデ	灰色 灰色	長 (1 ～ 2) ◎		
194	壺	口径 (9.8) 残高 4.75	直立気味の口縁部に端部は丸くおさまる。	回転ナデ (胴) 回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
195	甑	口径 (11.0) 残高 4.1	外反する口縁部は屈曲をもち、波状文が施される。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長 (1) ◎		

表 37　SB12 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
196	石錘	完形	砂岩	4.88	3.0	2.21	42.15		8
197	石斧	刃部片	緑色片岩	6.0	2.0	0.46	6.223		8
198	石錐	先端部上部欠損	サヌカイト	2.4	1.8	0.35 ～ 0.1	1.634		9
199	敲石	約 2/3	玄武岩	11.35	7.2	7.05	802.27		8

表 38　SB12 出土遺物観察表　装身具

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 径（cm）	法量 重さ（g）	色調	備考	図版
200	管玉	小片	緑色凝灰岩	1.5	0.78	(0.85)	0.298	明緑灰色		8

表39　SB12出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	法量				備考	図版
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
201	鉄鏃	鏃身部残存	4.1	1.62	0.37	3.83		9

表40　SB13出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
202	高坏	口径 (17.8) 残高 6.1	坏部は底部付近で屈曲し、直線的に外上方に延びる。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～4) 金 ◎	赤砂	

表41　SB15出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
203	甕	口径 19.4 残高 16.5	「く」字状を呈する口縁部に端部は平らな面をなす。	㊐ ヨコナデ ハケ	㊐ ヨコナデ ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～6) 金 ○		9
204	甕	口径 (24.0) 残高 3.6	「く」字状を呈する口縁部に端部は平らな面をなす。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) ◎		
205	壺	口径 (12.0) 残高 6.3	やや外上方に直線的に延びる口縁部。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1～3) ◎	赤砂	
206	壺	頸部径 (8.2) 残高 4.5	「く」字状を呈する口縁部。	㊦ ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1～2) ◎	赤砂	
207	蓋坏	口径 (12.8) 残高 4.25	天井部と口縁部との境に稜をもち、口縁端部は平らな面をなす。	㊦ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1～3) ◎		
208	坏身	口径 (9.7) 残高 3.2	口縁端部に内傾する段を有する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色・灰白色 灰色	密 ◎	施釉	

表42　SB16出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
209	甕	残高 3.2	やや外反する口縁部。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 灰黄褐色	石・長(1) 金 ◎		
210	壺	頸部径 (13.8) 残高 2.1	内湾する頸部付近の内面に粘土のつなぎ目がみられる。	ナデ	ナデ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(細) ○		
211	甑	残高 3.0	断面楕円形の把手。	ナデ		にぶい黄橙色 橙色	石・長(1) ◎		
212	蓋坏	口径 (11.8) 残高 4.2	天井部と口縁部との境に稜をもち、口縁端部は内傾する段を有する。	㊦ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1～2) ◎		
213	蓋坏	口径 (11.2) 残高 4.45	天井部と口縁部との境に稜をもち、口縁端部は内傾する面をなす。	㊦ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	石・長(1) ◎		
214	高坏	つまみ径 2.8 残高 2.9	つまみの上部の縁がやや凹み、中心部がやや盛り上がる。	㊦ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	石・長(1～3) ◎		
215	高坏	底径 (9.2) 残高 3.4	脚柱部に透かしが施される。	脚 カキメ 脚端 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ◎		
216	高坏	底径 (9.6) 残高 2.7	脚柱部に透かしが施される。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(細～2) ◎		
217	高坏	底径 (9.8) 残高 1.9	脚柱部に透かしが施される。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(細) ◎		

表 43　掘立 1 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
218	蓋坏	口径 (12.6) 残高 2.0	口縁端部は内傾する面を有する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
219	坏身	口径 (11.4) 残高 1.8	口縁端部に内傾する面を有する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
220	高坏	底径 (9.0) 残高 2.2	脚端部は下方に延びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ◎		

表 44　掘立 2 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
221	甑	口径 (23.6) 残高 12.9	口縁部付近が僅かに内湾し、端部は平らな面をなす。	ハケ	ヨコナデ ナデ	灰黄褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
222	蓋坏	口径 (15.2) 残高 3.6	口縁端部に内傾する段を有する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
223	蓋坏	口径 (12.0) 残高 3.0	口縁端部に内傾する段を有する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
224	高坏	底径 (8.0) 残高 4.5	脚柱部に透かしが施され、裾端部は内湾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	密 ◎		

表 45　掘立 2 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
225	石庖丁	両端部欠失	緑色片岩	6.9	4.2	0.58	30.58		9

表 46　掘立 4 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
226	甕	残高 2.1	外反気味の口縁部に端部はやや内湾する。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい赤褐色 明赤褐色	石・長 (1) ◎		
227	甕	頸部径 (15.2) 残高 3.9	内湾する上胴部。	頸 ヨコナデ 胴 ハケ	頸 ヨコナデ 胴 ハケ	橙色 にぶい黄橙色	砂 ◎		
228	坏身	残高 2.0	口縁端部に内傾する面を有する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		

表 47　掘立 5 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
229	甕	口径 (17.4) 残高 3.2	「く」字状を呈する口縁部に端部は水平な面をなす。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	砂 ◎		
230	甕	残高 1.1	外反する口縁部。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石 (1) ○	赤砂	
231	甕	残高 0.9	口縁端部が上方にやや肥厚され、端面は凹む。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい赤褐色	石 (1) ◎		

表 48　掘立 6 出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
232	蓋坏	残高 2.5	口縁端部に内傾する面を有する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

掘立 6 出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
233	坏身	口径 (11.0) 残高 1.8	口縁端部に内傾する面を有する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表 49　掘立 6 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
234	石庖丁	背部残存	緑色片岩	2.1	2.8	0.56	4.94		

表 50　掘立 7 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
235	甕	残高 2.4	「く」字状を呈する口縁部に端部は平らな面をなす。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色・にぶい黄褐色 にぶい橙色	石・長 (1) ◎		
236	甕	残高 2.1	口縁端部は平らな面をなす。	マメツ	マメツ	明黄褐色 明黄褐色	石・長 (1) ◎		
237	蓋坏	残高 2.5	口縁端部に不明瞭な段を有する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
238	坏身	口径 (10.6) 残高 3.7	立ち上がりは内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ◎		
239	坏身	受部径 (13.0) 残高 2.3	受部端がやや凹む。	回転ナデ ケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表 51　掘立 7 出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
240	鉄滓	一部欠損	4.4	4.8	2.05	51.59		

表 52　SK1 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
241	高坏	底径 (10.0) 残高 3.1	脚裾部に透かしが施される。	脚 カキメ 脚端 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長 (1) ◎		
242	高坏	底径 (9.2) 残高 1.1	脚端部が下方に肥厚される。	脚端 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長（細） ◎		
243	壺	口径 (7.2) 残高 1.8	口縁部が緩やかに外反し、端部は丸くおさまる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長（細） ◎		
244	埦	口径 (7.4) 残高 2.9	内湾する下胴部から上方に直線的に立ち上がり、端部は丸くおさまる。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色 黄灰色	長 (1) ◎		

表 53　SK2 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
245	甕	口径 (11.6) 残高 1.8	やや外上方に直線的に延びる口縁部に端部は丸くおさまる。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1) ○		
246	甕	残高 4.4	「く」字状を呈する口縁部。	マメツ	ナデ	にぶい黄橙色 浅黄橙色	石・長 (1～2) △		

表 54　SK2 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
247	石鏃	完形	サヌカイト	2.4	1.8	0.45	1.553		

表 55　SK4 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
248	甕	口径 (22.2) 残高 3.2	外反する口縁部の端部はやや水平な面をなす。	ナデ	マメツ	橙色 明褐色	石・長(1) 金 ○	赤砂	
249	甕	残高 3.3	外反する口縁部の端部は平らな面をなす。	マメツ	マメツ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1～2) ○	赤砂	
250	蓋坏	口径 (9.4) 残高 2.7	口縁端部に内傾する面を有する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
251	高坏	残高 2.1	脚基部に透かしが施される。	カキメ	ナデ	灰白色 灰色	密 ◎		
252	高坏	底径 (9.7) 残高 3.2	脚端部は下方に延びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色 にぶい褐色	長(細～1) ◎		

表 56　SK4 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
253	石庖丁	一部残存	緑色片岩	2.65	2.7	0.31	3.027		

表 57　SK8 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
254	甕	口径 (13.4) 残高 6.4	「く」字状の口縁部に端部は平らな面をなす。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ(5本/cm)	(口)ヨコナデ (胴)ナデ ケズリ	灰白色 浅黄橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
255	高坏	口径 (17.2) 残高 6.0	坏底部に屈曲をもち、口縁部は外反する。	マメツ	ハクリ	橙色 浅黄橙色	石・長(1～2) 金 ◎	赤砂	
256	高坏	口径 (17.9) 残高 5.0	坏底部に屈曲をもち、口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部はやや外反する。	マメツ	マメツ	浅黄橙色・にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) 金 ○		

表 58　SK10 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
257	甕	残高 4.4	「く」字状の口縁部に端部は丸くおさまる。	マメツ	マメツ	灰褐色 褐色・にぶい褐色	石・長(1～2) ○		
258	高坏	残高 3.8	坏部は内湾気味に立ち上がる。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1) 金 △		
259	蓋坏	残高 3.5	口縁端部に段を有する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
260	蓋坏	残高 1.9	口縁端部に内傾する面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	砂 ◎		
261	坏身	口径 (9.8) 残高 3.5	口縁端部に明瞭な段を有し、受部端が凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	砂 ◎		

表59　SK10出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
262	石鏃	先端部欠失	サヌカイト	3.5	2.2	0.45	3.043		

表60　SK11出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
263	甑	残高 4.9	断面楕円形の把手で、先端部が窄まる。	ナデ		にぶい橙色 橙色	石・長(1～3) ◎		
264	蓋坏	口径 (13.0) 残高 3.1	口縁端部に内傾する面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄褐色 褐灰色	密 ◎	自然釉	
265	坏身	残高 2.7	受部端が凹み、口縁端部は丸くおさまる。	回転ナデ	回転ナデ	黄灰色・暗灰色 灰色	長(1) ◎		

表61　SD8出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
266	坏身	口径 (9.9) 残高 2.8	口縁端部に内傾する面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1～3) ◎	自然釉	
267	坏身	受部径 (10.6) 残高 2.7	受部は水平な面をなす。	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰黄褐色	長(細) ◎		

表62　SD8出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
268	石斧	一部残存	緑色片岩	4.3	1.9	0.9	8.894		

表63　SX2出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
269	高坏	残高 7.3	坏部と脚裾部は大きく外反する。	ミガキ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	砂 金 ◎	赤砂	
270	鉢	口径 (14.8) 残高 5.1	内湾する胴部に口縁端部は内傾する面をなす。	ミガキ	ミガキ	にぶい橙色 橙色	密 金 ◎		
271	鉢	口径 (28.6) 残高 5.8	外傾する胴部に口縁部がさらに外反し、端部は平らな面をなす。	ナデ	ナデ ハケ(10本/cm)	にぶい褐色 灰黄褐色	石・長(1～2) 金 ◎		
272	蓋坏	口径 (14.0) 残高 3.4	天井部と口縁部の境に凹みによる稜を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密・砂 ◎		
273	蓋坏	口径 (11.6) 残高 2.8	天井部から屈曲した口縁部は下方に延び端部は丸く収まる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
274	蓋坏	口径 (11.2) 残高 2.1	天井部から屈曲した口縁部は短く、端部は丸く収まる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
275	高坏	残高 4.5	脚柱部に沈線が1条巡る。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ◎	自然釉	
276	壺	頸部径 (5.8) 残高 11.6	窄まった頸部は緩やかに外反し長頸である。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1) ◎	自然釉	

表 64　SX2 出土遺物観察表　　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
277	砥石	ほぼ完存	凝灰岩	13.7	6.6	4.2	638.59		9
278	砥石	ほぼ完存	凝灰岩	16.5	8.4	5.6	951.06		9
279	石鏃	完形	サヌカイト	3.48	2.12	0.4	2.991		

表 65　SX1 出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
280	鉢	口径 (13.0) 残高 5.1	底部から口縁部まで内湾しており、端部は丸くおさまる。	ハケ（8本／cm） 指頭痕	ナデ	にぶい黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～2) 金 ◎		
281	蓋坏	つまみ径 3.1 残高 1.7	つまみ中央部が凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	砂 ◎		
282	蓋坏	口径 (7.6) 残高 2.2	口縁部の内端面が接地する。	(天)回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	砂 ◎		
283	坏	口径 (11.0) 器高 3.4 残高 (6.6)	平底の底部より外反気味に立ち上がり、胴部中位にて稜を持ち、口縁端部は丸くおさまる。	回転ナデ (底)ヘラ切り	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
284	坏	口径 (9.6) 残高 3.5	直立気味の口縁部に端部が尖り気味である。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	石・長(1) ◎		
285	坏	口径 (12.6) 残高 3.5	内湾する口縁部の端部は丸くおさまる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰黄褐色	密 ◎	自然釉	
286	高坏	底径 (8.2) 残高 8.0	「ハ」字状を呈する脚部は内端面が接地する。	回転ナデ (坏底)回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰色	長(1～2) ◎	自然釉	
287	高坏	残高 4.0	坏部は内湾気味に立ち上がる。	回転ナデ (坏底)回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1～3) ◎		
288	甕	残高 4.0	外反する短い口縁部の平らな端面に２条の凹線文が巡る。	(口)回転ナデ (胴)格子タタキ	回転ナデ	灰色 灰色	砂 ◎		
289	紡錘車	直径 3.9～4.1 厚み 0.82	端面と中央部の穿孔部は平らな面をなす。	マメツ	マメツ	橙色	石(1～2)・長(1) 金 ◎		9

表 66　SX1 出土遺物観察表　　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
290	石鏃	先端部欠損	サヌカイト	4.8	2.2	0.55	5.639		

表 67　掘立３出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
291	皿	口径 (8.2) 器高 1.8 底径 (5.0)	平底の底部より外傾して立ち上がる。	ヨコナデ (底)回転糸切り	ナデ	橙色 浅黄橙色	砂 ◎		
292	皿	口径 (8.1) 器高 1.2 底径 (5.2)	平底の底部より内湾気味に立ち上がる。	ナデ	マメツ	黄橙色 黄橙色	砂 ○		

表68　SK7出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
293	坏	底径 (7.0) 残高 1.2	平底の底部より内湾気味に立ち上がる。	ナデ ㊞ 板圧痕	ナデ	にぶい黄橙色 橙色・にぶい黄橙色	長（細） ◎		
294	甕？	底径 (3.6) 残高 6.4	やや丸みをもつ底部から内湾気味に立ち上がる。	ハケ（9本/cm） ナデ ㊞ ケズリ	ナデ	橙色・明褐灰色 灰白色・橙色	石・長（1～4） ◎	煤	

表69　SD1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
295	碗	底径 (4.6) 残高 1.4	底部外面には削り出しの低い高台をもち、内面には砂目痕がある。	回転ナデ	施釉	灰黄褐色 にぶい黄橙色	密 ◎		

表70　SD1出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
296	鉄　釘	上下部欠損	3.13	0.5	0.38	1.6		9
297	鉄　釘	上下部欠損	2.90	0.4	0.42	0.9		9

表71　SD1出土遺物観察表　銭貨

番号	銭名	初鋳年	法量 銭径（mm）	法量 孔径（mm）	法量 外縁（mm）	法量 内縁厚（mm）	法量 重量（g）	備考	図版
298	寛永通宝		2.45	0.55	0.12	0.06	1.337		9

表72　SD2出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
299	碗	底径 (4.6) 残高 2.0	底部には断面逆台形状の削り出し高台をもつ。	施釉	施釉	明緑灰色 明緑灰色	密 ◎		

表73　SD2出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
300	鉄　滓	一部欠損	2.95	3.0	1.75	22.0		

表74　SD3出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
301	碗	底径 (4.6) 残高 1.8	底部には断面逆台形状の削り出し高台をもつ。	施釉	施釉	灰白色 明緑灰色	密 ◎		

表75　SD3出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
302	鉄　釘	上下部欠損	2.45	0.55	0.4	1.21		

表76　SK5出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
303	鋤	1／3残存	5.8	0.3～0.8	0.28～0.45	4.74		9

第3章

樽味高木遺跡

たるみたかぎ

－ 13次調査 －

第3章　樽味高木遺跡13次調査

1. 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯

調査地は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地『№81樽味遺物包含地』内に所在する。調査地がある石手川中流域左岸では、樽味遺跡（愛媛大学農学部構内）をはじめ、樽味四反地遺跡や樽味立添遺跡、樽味高木遺跡など数多くの発掘調査が実施され、縄文時代から中世までの集落関連遺構や遺物が多数確認されている。また、平成8年度に実施した樽味四反地遺跡6次調査や平成15年度に実施した樽味四反地遺跡8次調査、さらに平成17年度に実施した樽味四反地遺跡13次調査においては、全国的にもあまり類例のない総柱による大型建物が発見された。これらのことから、樽味地区は平成18年度に国より重要遺跡確認地域として指定された。今回の調査は、国庫補助事業として実施した樽味地区における重要遺跡確認調査である。調査は松山市教育委員会文化財課の指導のもと、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、2006（平成18）年4月17日より開始した。

(2) 調査の経緯

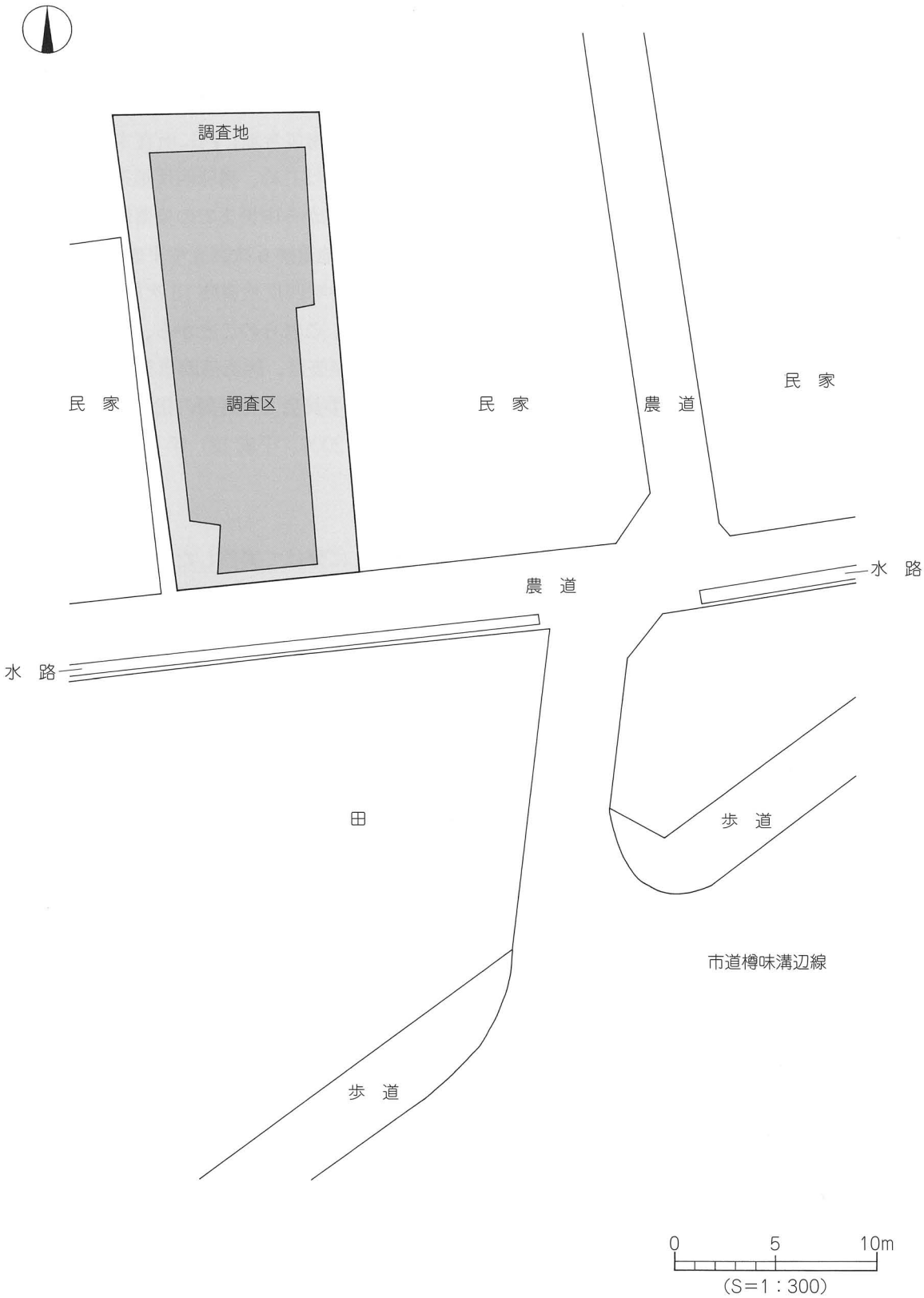
調査は廃土置き場の都合上、調査地内を北半部と南半部とに分けて実施した。平成18年4月17日より、南半部の調査に着手した。

〔南半部の調査〕4月17日より、重機（バックホー0.25㎥）の使用により表土層を除去した。その後、土の堆積状況を確認するため、一部深掘りを行った結果、遺物包含層が60㎝程度堆積していることが分かった。この結果により、各層ごとに重機による剥ぎ取り及び遺物収集を行い、Ⅴ層までを掘削した。その後、作業員によりⅥ層を掘り下げ、遺構検出作業を行った。検出した遺構や遺物の取り上げを行うために4月24日、測量業者に国土座標第Ⅳ座標系基準点の設置を委託し、調査地内に5m四方のグリットを設定した。

遺構は、主にⅧ層上面で、弥生時代の土坑や柱穴、中世の溝や土坑、柱穴等を確認した。調査は時期の新しい遺構から順に掘削を行い、測量や写真撮影等の記録作業を行った。5月24日、南半部の調査を終了し、重機による埋め戻しを行った。その後、北半部の調査を開始した。

〔北半部の調査〕5月29日より、重機の使用によりⅤ層まで剥ぎ取りをおこない、その後、作業員によりⅥ層を掘り下げ、遺構検出作業を行った。6月14日、測量業者に基準点の設置を委託し、南半部と同様、5m四方のグリットを設定した。北半部では主にⅧ層ないしⅨ層上面にて、古墳時代の竪穴住居や土坑、古代から中世の溝や柱穴を確認した。なお、重複する数棟の竪穴住居を検出したため先行トレンチを設定し、平面形態や断面観察により前後関係を決定した。その後、竪穴住居から調査を開始したが、住居内からガラス玉が出土したことから住居埋土をすべて採取し、調査と併行して土の水洗いやふるい作業を行った。その結果、ガラス玉2点と滑石製臼玉33点を発見した。

6月27日、すべての遺構測量が終了し、重機による埋め戻しを行った。それと併行して調査事務所や発掘用具の撤去作業を行い、6月30日、発掘調査を終了した。



第 66 図　調査地測量図

(3) 調査組織

調 査 地　松山市樽味4丁目238番1
遺 跡 名　樽味高木遺跡13次調査
調査期間　2006（平成18）年4月17日～同年6月30日
調査面積　217㎡
調査担当　財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　宮内　慎一

2. 層　位

(1) 基本層位（第67・68図）

調査地は、調査を実施する以前には既存宅地であり、標高約40m前後に立地する。調査地の基本層位は、以下のとおりである。なお、10層以下は調査地東壁沿いに設定した深掘トレンチにより確認したものである。

Ⅰ　層：近現代の造成に伴う真砂土や水田耕作に伴う客土〔青灰色土（青灰10BG5/1）〕で、地表下20～40cmまで開発が行われている。

Ⅱ　層：水田耕作に伴う耕土で、土質、土色の違いにより2層に分層される。Ⅱ①層は灰白色土（N5/0）で調査地ほぼ全域にあり、層厚5～20cmを測る。Ⅱ②層は灰色土（10YR5/1）で調査地北半部にあり、層厚5～15cmを測る。

Ⅲ　層：灰色（5Y4/1）を呈する砂質土で、調査地ほぼ全域にみられ、層厚5～10cmを測る。本層中からは少量の土師器片が出土した。遺物包含層。

Ⅳ　層：灰黄褐色（10YR4/2）を呈する粘質土で、調査地南西部のみにみられ、層厚3～8cmを測る。

Ⅴ　層：褐灰色（10YR5/1）を呈する粘質土で、調査地全域にみられ、層厚10～25cmを測る。本層中からは土師器片や須恵器片が少量出土した。なお、土層観察より本層上面から溝や柱穴が掘り込まれていることや、竪穴住居や土坑の上面を本層が覆っていることを確認した。また、調査地南半部にて本層下面に流路を検出した（想定線のみを記載：第69図）。

Ⅵ　層：暗褐色（7.5YR3/4）を呈する粘質土で、調査地中央部から南半部にみられ、層厚6～20cmを測る。本層中からは、少量の土師器片や須恵器片が出土した。

Ⅶ　層：黒褐色（7.5YR4/1）を呈する粘質土で、調査地南東部にみられ、層厚10cmを測る。土層観察により、本層中にて土坑や柱穴が掘削されていることを確認した。

Ⅷ　層：褐色（7.5YR4/0）を呈する粘質土で、バサバサした質感をもち、径3～5cm大の円礫を含む。調査地全域にみられ、検出した状況では層厚10～40cmを測る。本層上面は調査地北側から南側へ向け傾斜をなし、調査地北端では標高39.5m、南端では標高39.0mとなる。

Ⅸ　層：明黄褐色（10YR7/6）を呈する粘質土で、調査地中央部付近に部分的にみられ、検出状況からは層厚40cmを測る。本層中には、径5～10cm大の円礫が多く混入する。

10　層：灰黄褐色（10YR4/2）を呈する砂層で、a層：灰色（5Y5/1）砂が混入する。

11　層：黄灰色（2.5YR5/1）を呈する砂層で、径3～5cm大の円礫を少量含む。

12　層：灰黄褐色（10YR4/2）を呈する砂礫層で、径5～25cm大の円礫を多く含む。

13　層：黄灰色（2.5YR5/1）を呈する微砂層である。

14　層：黄灰色（2.5YR5/1）を呈する砂礫層で、径5～10cm大の円礫を含む。

検出した遺構や出土遺物から、Ⅶ層は弥生時代、Ⅵ層は古墳時代、Ⅴ層は古代、Ⅲ・Ⅳ層は中世までに堆積したものと考えられる。なお、調査にあたり調査地内を5m四方のグリットに分けた。グリットは西から東へA・B、北から南へ1・2・3・4・5・6とし、A1・A2・・・B6というグリット名を付した。

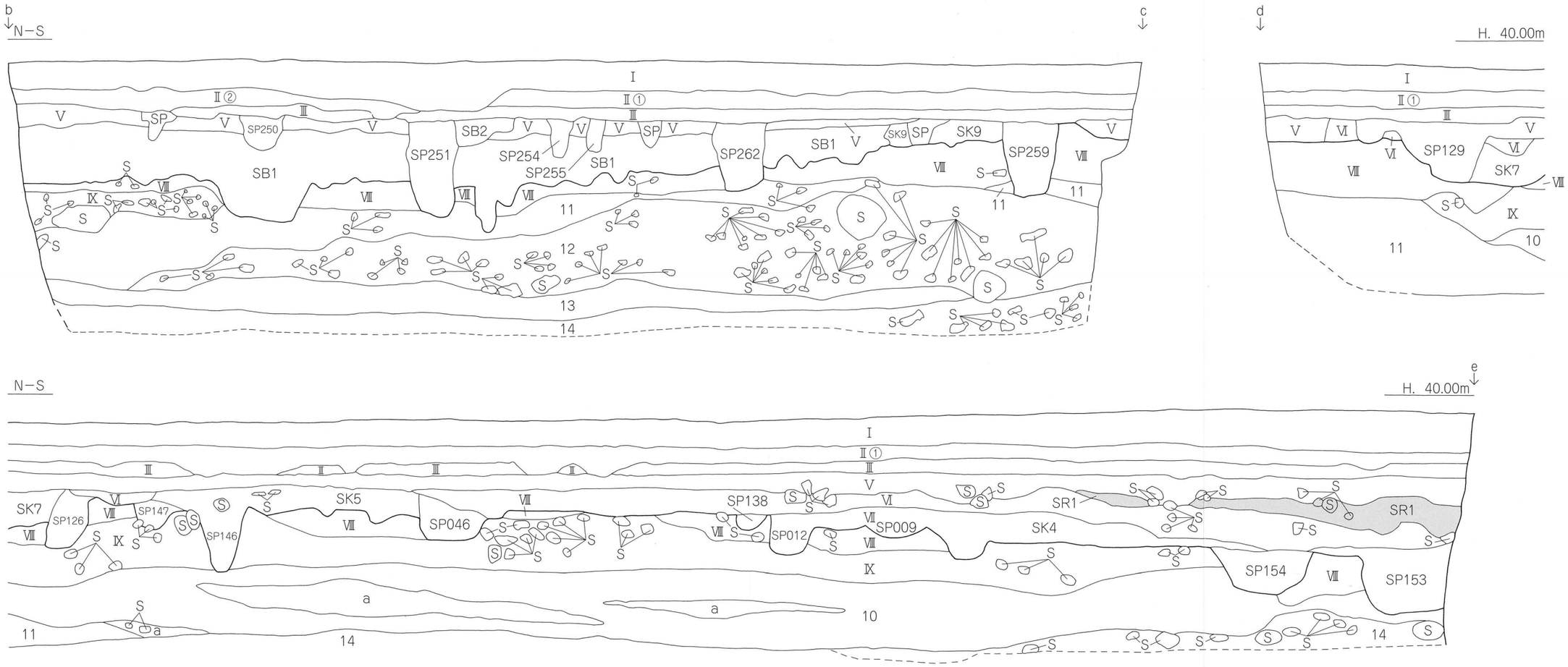
(2) 検出遺構・遺物（表77）

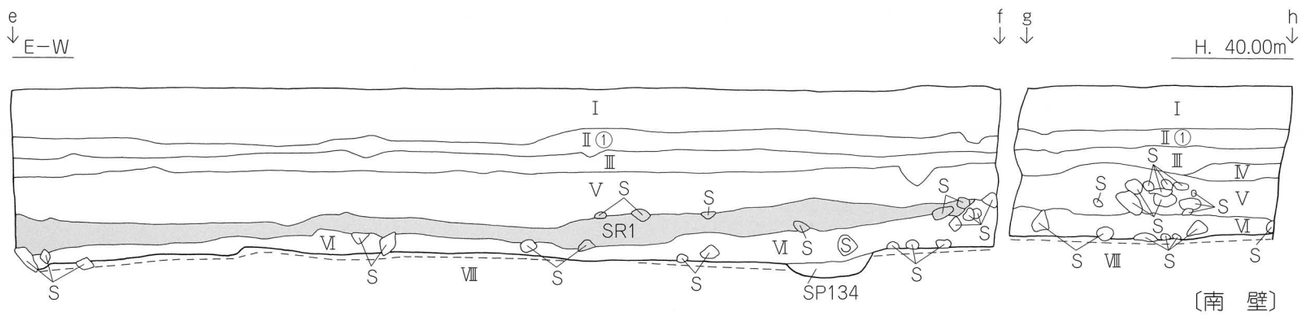
調査で検出した遺構は、弥生時代から中世までのもので竪穴住居3棟（古墳時代）、掘立柱建物1棟（中世）、溝2条（中世）、土坑9基（弥生：6基・古墳：1基・中世：2基）、柱穴275基である。すべて、Ⅷ層上面での検出であるが、本来はⅦ層以上の土層から掘り込まれた可能性の高い遺構ばかりである。

遺物は遺構及び包含層中から、弥生土器（前期～後期）、土師器（古墳～中世）、須恵器（古墳～古代）、石器のほか、分銅形土製品1点、有孔円板1点、装飾品〔ガラス玉5点・臼玉95点〕等が出土した。

表77　検出遺構一覧

遺構／時期	竪穴住居	掘立柱建物	溝	土坑
弥生時代中期	－	－	－	ＳＫ１・２・４～７
古墳時代中期	ＳＢ２・３	－	－	ＳＫ９
古墳時代後期	ＳＢ１	－	－	－
中　世	－	掘立１	ＳＤ１・２	ＳＫ３・８

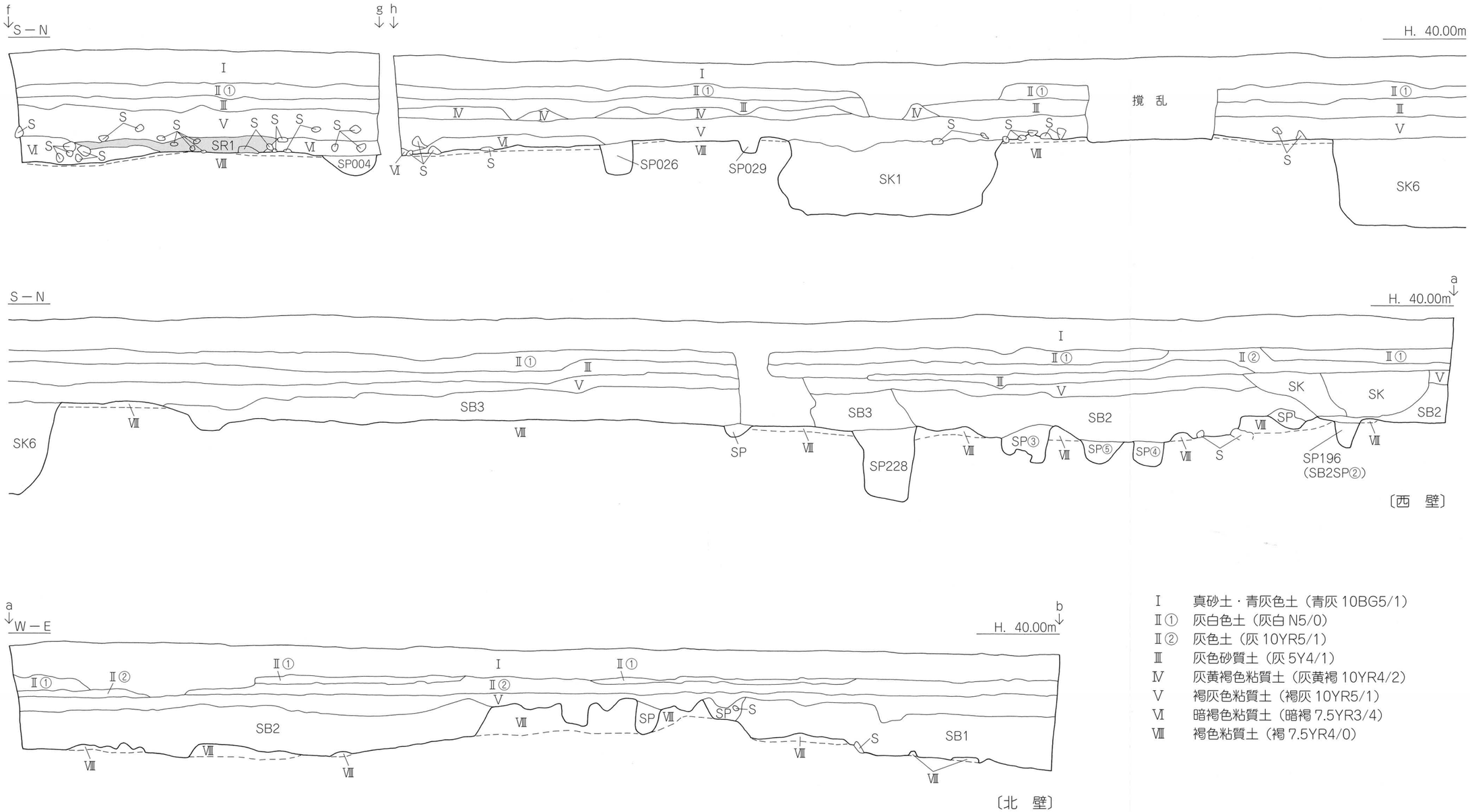




Ⅰ	真砂土・青灰色土（青灰 10BG5/1）
Ⅱ①	灰白色土（灰白 N5/0）
Ⅱ②	灰色土（灰 10YR5/1）
Ⅲ	灰色砂質土（灰 5Y4/1）
Ⅳ	灰黄褐色粘質土（灰黄褐 10YR4/2）
Ⅴ	褐灰色粘質土（褐灰 10YR5/1）
Ⅵ	暗褐色粘質土（暗褐 7.5YR3/4）
Ⅶ	黒褐色粘質土（黒褐 7.5YR4/1）
Ⅷ	褐色粘質土（褐 7.5YR4/0）
Ⅸ	明黄褐色粘質土（明黄褐 10YR7/6）
10	灰黄褐色砂（灰黄褐 10YR4/2）
11	黄灰色砂（黄灰 2.5YR5/1）
12	灰黄褐色砂礫（灰黄褐 10YR4/2）
13	黄灰色微砂（黄灰 2.5YR5/1）
14	黄灰色砂礫（黄灰 2.5YR5/1）
a	灰色砂（灰 5Y5/1）

0　1m
（S=1：30）

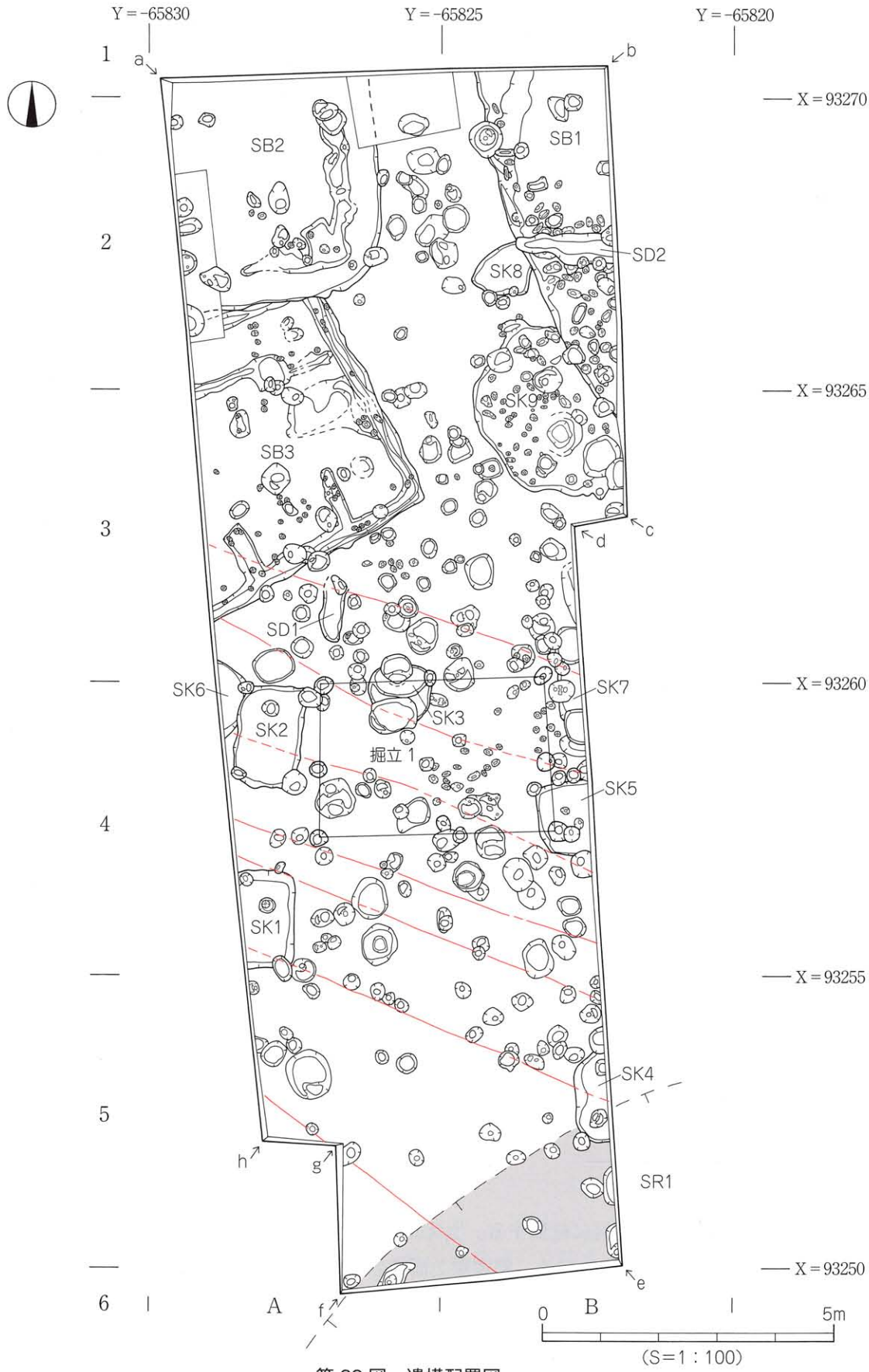
第 67 図　調査区東壁・南壁土層図



Ⅰ　真砂土・青灰色土（青灰 10BG5/1）
Ⅱ①　灰白色土（灰白 N5/0）
Ⅱ②　灰色土（灰 10YR5/1）
Ⅲ　灰色砂質土（灰 5Y4/1）
Ⅳ　灰黄褐色粘質土（灰黄褐 10YR4/2）
Ⅴ　褐灰色粘質土（褐灰 10YR5/1）
Ⅵ　暗褐色粘質土（暗褐 7.5YR3/4）
Ⅶ　褐色粘質土（褐 7.5YR4/0）

0　1m
(S＝1：30)

第 68 図　調査区西壁・北壁土層図


Y = -65830
Y = -65825
Y = -65820
X = 93270
X = 93265
X = 93260
X = 93255
X = 93250
1
2
3
4
5
6
A
B
a
b
c
d
e
f
g
h
SB1
SB2
SB3
SD1
SD2
SK1
SK2
SK3
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SR1
掘立 1
0
5m
(S=1：100)

第 69 図　遺構配置図

3. 遺構と遺物

〔1〕弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、土坑 6 基を検出した。

ＳＫ１（第 69・70 図、図版 13）

調査区南西部、A 4 区に位置する。土坑北東部及び南東部は、それぞれ SP017 と SP136 とに切られ、土坑西側は調査区外に続く。第Ⅷ層上面での検出であり、第Ⅴ層が土坑を覆う。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は南北長 1.68m、東西検出長 0.90m、深さは検出面下 55 cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑北側及び南側壁体は一部、袋状となる。埋土は 3 層に分層でき、埋土上位より 1 層暗褐色土、2 層暗褐色土と黄色土の混合土、3 層黒色粘質土である。ベルトの断面観察により、2 層上面よりピット状の掘り込み（埋土：4 層）を確認したが、平面精査では検出できなかった。土坑底面にてピット 1 基（SP ①）を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径 22 cm、深さ 6 cmを測る。ピット埋土は、黒色粘質土（黄褐色土ブロック少量含む）である。遺物は土坑埋土中より弥生土器片が数点と、1 層中より伐採斧（4）が出土した。また、1 層及び 3 層中より少量の炭化物が出土した。

出土遺物（第 70 図、図版 18）

1･2 は甕形土器の口縁部片。2 の口縁端部には凹線文 2 条を施す。3 は壺形土器の胴部片で、内外面共にヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。4 は緑色片岩製の伐採斧、5 は安山岩の剥片である。

時期：出土した弥生土器の特徴より、弥生時代中期後半とする。

ＳＫ２（第 69・71 図、図版 13）

調査区中央部西寄り、A4 区に位置する。土坑の四隅は、4 基のピット（SP081･082・085・093）に切られている。第Ⅷ層上面で検出した。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長さ 1.80m、幅 1.12m、深さは検出面下 24 cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土を基調とし、白色砂粒が少量混入する。また、埋土中には淡黄色土が一部、ブロック状に混入する。土坑底面にてピット 1 基（SP ①）を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径 26 cm、深さ 7 cmを測る。ピット埋土は土坑埋土と同様の、黒褐色土単層である。遺物は土坑埋土中より弥生土器片が数点出土した。図化しうるものを 3 点掲載した。

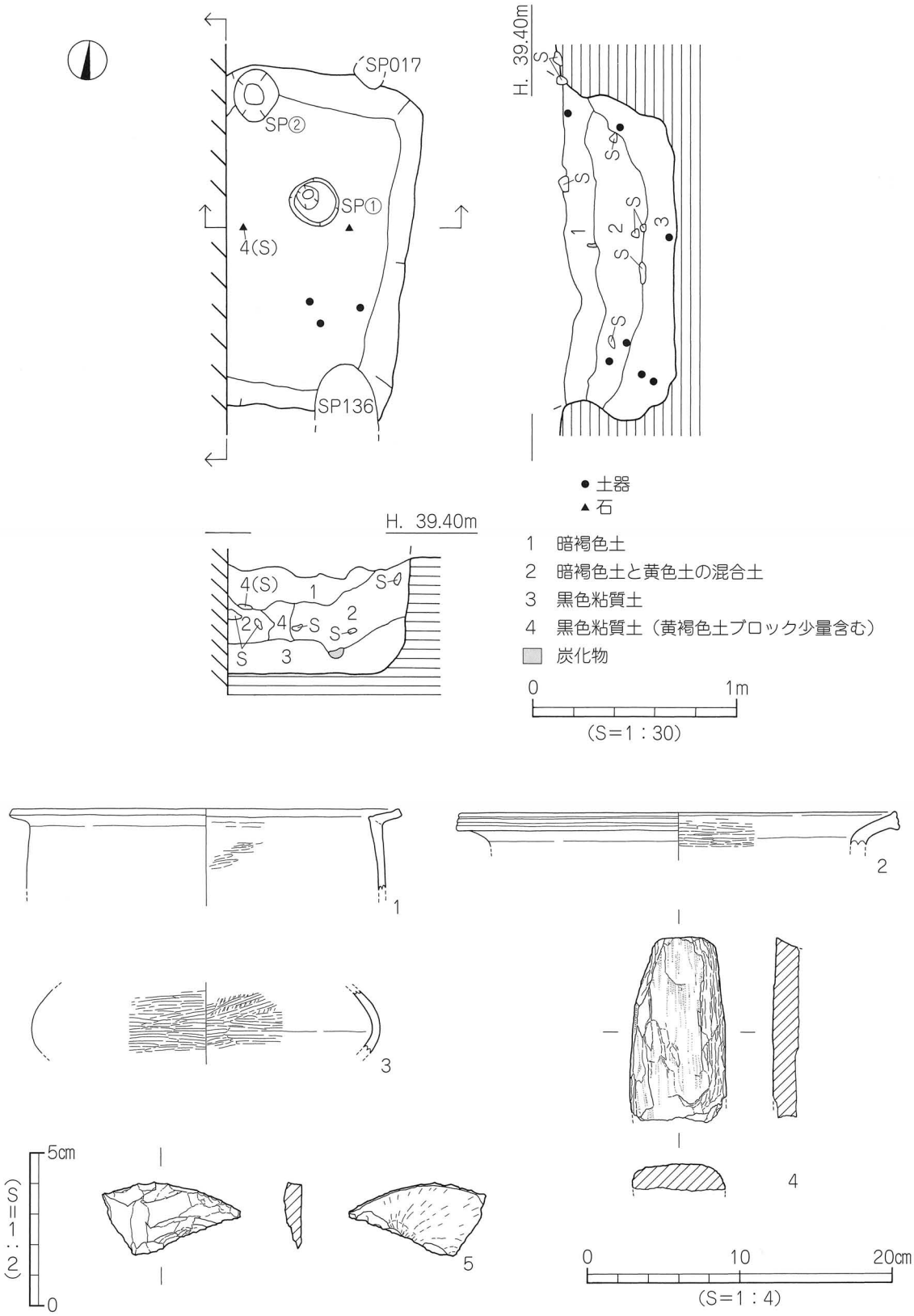
出土遺物（第 71 図、図版 18）

6 は甕形土器の頸部片で、刻目凸帯文 1 条を施す。7 は壺形土器の肩部片で、貝殻施文による列点文を 2 段に施す。8 は壺形土器の頸部片で、ヘラ描き沈線文 2 条を施す。

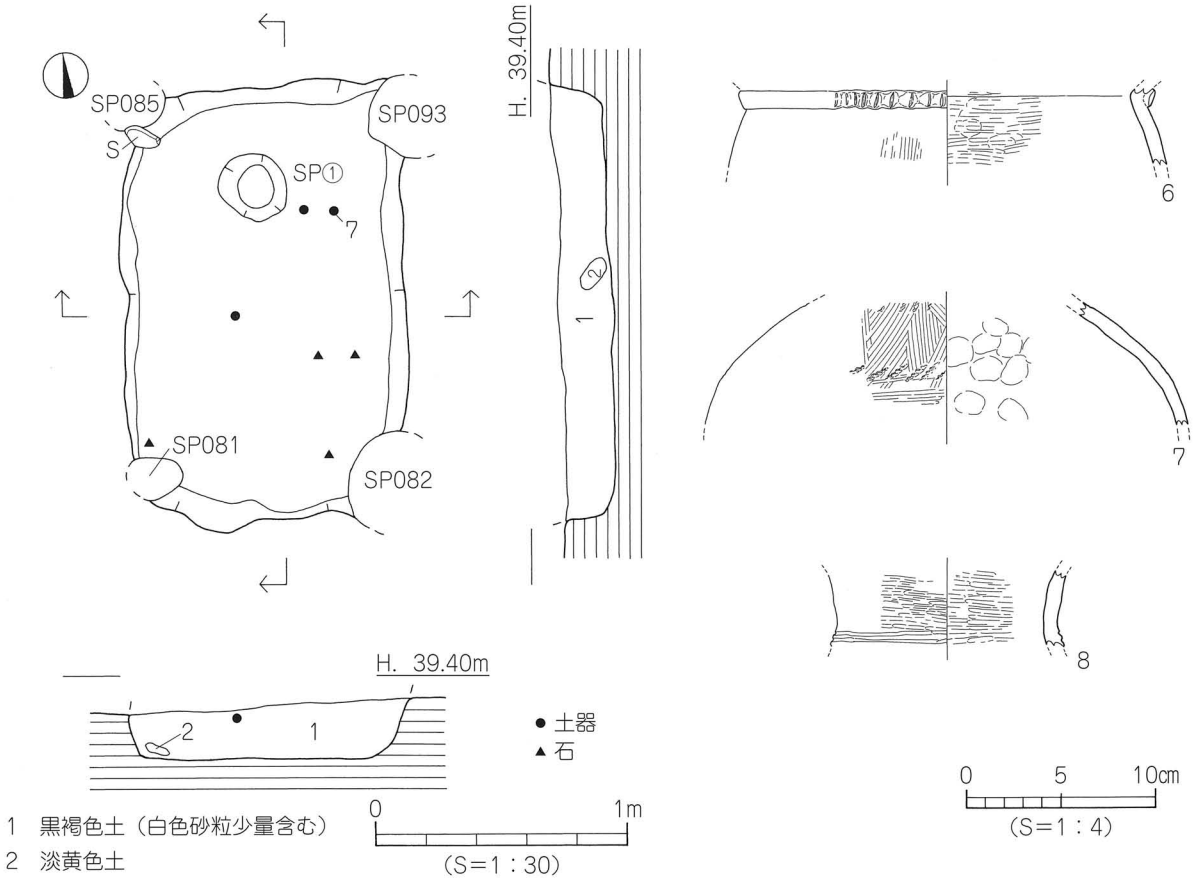
時期：出土した弥生土器の特徴より、弥生時代中期後半とする。

ＳＫ５（第 69・72 図）

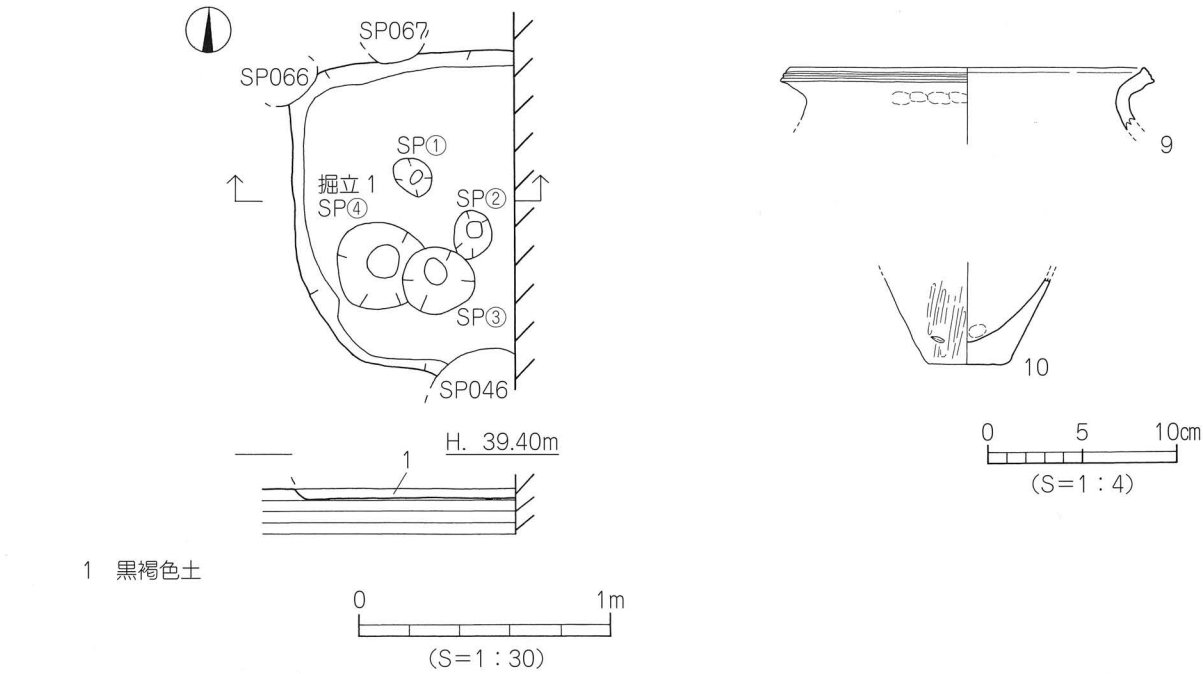
調査区中央部東寄り、B4 区に位置する。土坑北側及び南側は 3 基のピット（SP066･067･046）に切られ、土坑東側は調査区外に続く。第Ⅷ層上面での検出であり、第Ⅵ層が覆う。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は南北長 1.24m、東西検出長 0.86m、深さは検出面下 4 cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。土坑底面にて大小 4 基のピット（SP ①～③、掘立 1：SP ④）を検出した。平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径 12 ～ 30 cm、深さ 6 ～



第70図　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図



第 71 図　ＳＫ２測量図・出土遺物実測図



第 72 図　ＳＫ５測量図・出土遺物実測図

8 cmを測る。ピット埋土はSP①・②・掘立1SP④が灰褐色土単層、SP③は灰色土単層である。土坑底面は平坦である。遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。図化しうるものを2点掲載した。

出土遺物（第72図）

9は甕形土器の口縁部片で、口縁端部を上下方に拡張し、端面に凹線文2条を施す。10は甕形土器の底部で、外面に籾圧痕が残る。

時期：出土した弥生土器の特徴より、弥生時代中期後半とする。

ＳＫ６（第69・73図）

調査区中央部西寄り、A3·4区に位置する。土坑東側はSP085に切られ、さらにSK2と重複し（前後関係は不明）、土坑西側は調査区外に続く。第Ⅷ層上面での検出であり、第Ⅴ層が覆う。平面形態は円形または楕円形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長1.35m、東西検出長0.46m、深さは検出面下63 cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒色土単層である。土坑底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。図化しうるものを2点掲載した。

出土遺物（第73図、図版18）

11は甕形土器の口～胴部片で、口縁端部は上方に拡張し、口縁端面に凹線文1条を施す。12は甕形土器の底部で、くびれをもつ上げ底となる。

時期：出土した弥生土器の特徴より、弥生時代中期後半とする。

ＳＫ４（第69・74図）

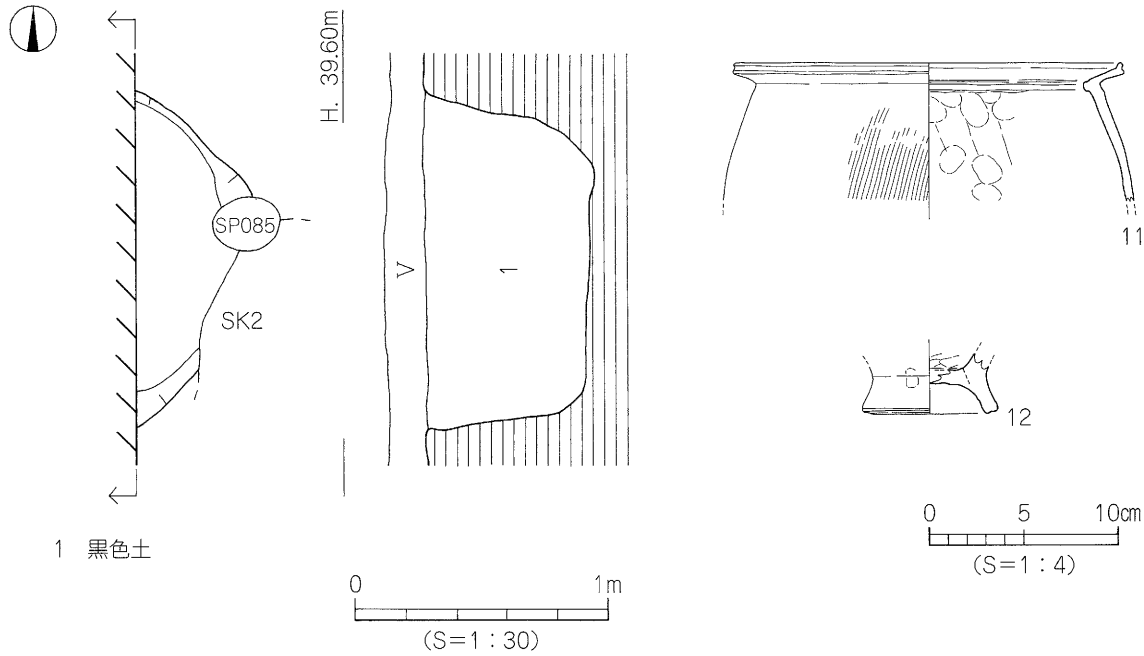
調査区南東部、B5区に位置する。土坑北側及び南側は2基のピット（SP009·148）に切られ、土坑東側は調査区外に続く。第Ⅷ層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長1.55m、東西検出長0.54m、深さは検出面下8 cmを測る。断面形態は緩やかな逆台形状を呈し、埋土は第Ⅶ層と同様の黒褐色土単層である。土坑底面にて2基のピット（SP①・②）を検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は径26～30 cmを測る。ピット埋土は、土坑埋土と同様の黒褐色土単層である。土坑底面は北側から南側へ向けて緩傾斜をなす。遺物は、埋土中より弥生土器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、埋土がSK2やSK5と酷似することや、検出層位から、概ね弥生時代中期後半とする。

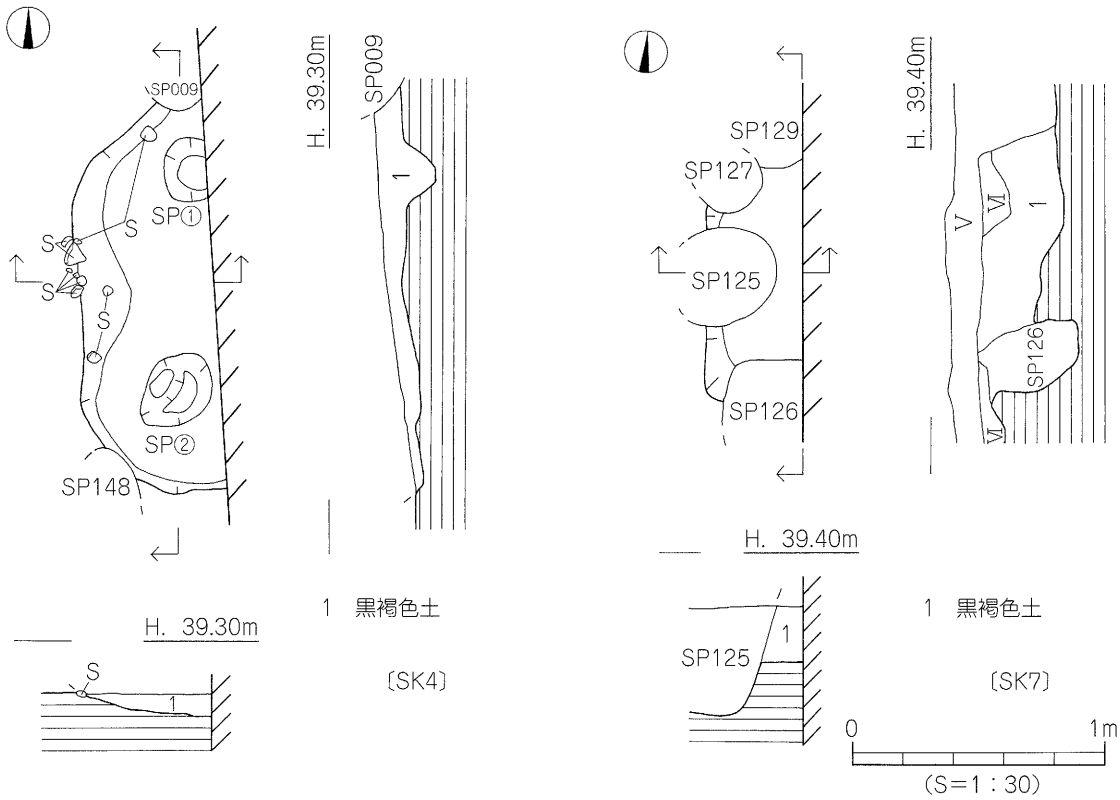
ＳＫ７（第69・74図）

調査区中央部東寄り、B3·4区に位置する。土坑壁体は4基のピット（SP125～127·129）に切られ、土坑東側は調査区外に続く。第Ⅷ層上面での検出であり、第Ⅵ層が覆う。平面形態は方形または長方形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長0.76m、東西検出長0.40m、深さは検出面下40 cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。土坑底面は中央部がやや凹む。遺物は埋土中より弥生土器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、埋土がSK2やSK6と酷似することや、検出層位から、概ね弥生時代中期後半とする。



第 73 図　ＳＫ６測量図・出土遺物実測図



第 74 図　ＳＫ４・ＳＫ７測量図

〔2〕古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、竪穴住居３棟、土坑１基を検出した。

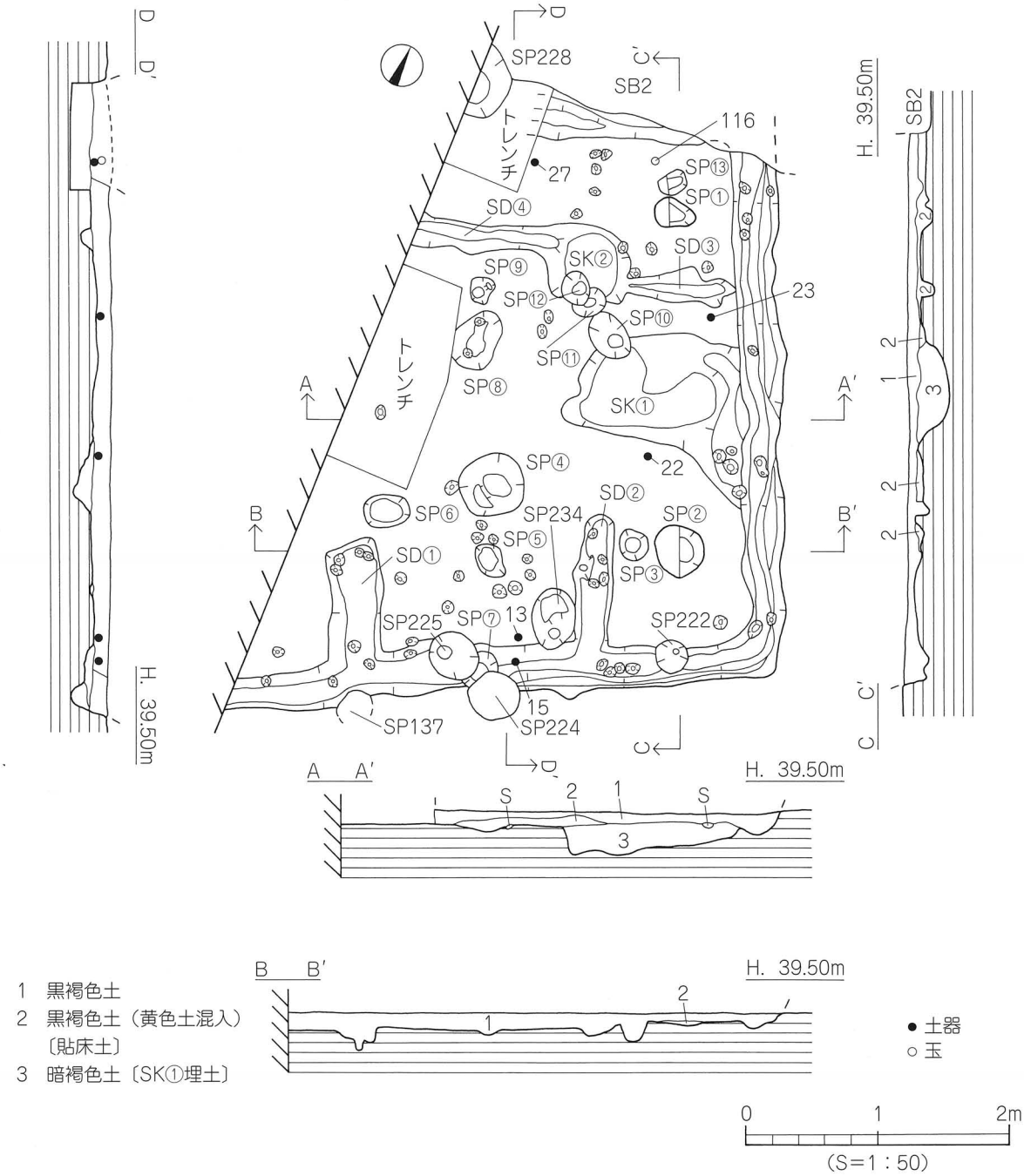
(1) 竪穴住居

ＳＢ３（第69・75図、図版14・15）

調査区北西部A2･3区に位置する。住居北壁はSB2に切られ、北西部と南壁の一部は３基のピット（SP137･224･228）に切られている。また、住居上面には灰褐色土を埋土とする３基のピット（SP222･225･234）が存在し、住居西側は調査区外に続く。第Ⅷ層上面での検出であり、第Ⅴ層が住居を覆う。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長4.13m、南北検出長4.65m、壁高は12㎝を測る。住居埋土は２層に分層され、１層は黒褐色土、２層は黒褐色土に黄色土が混入するものである。なお、２層は主に住居床面の凹んだ箇所に堆積がみられることから、床面修築のための貼床土と考えられ、厚さは５～８㎝を測る。内部施設は、主柱穴、土坑、溝、周壁溝を検出した。主柱穴は２本（SP①・②）を検出したが、その配置から、本来は４本と推測される。主柱穴の平面形態は楕円形を呈し、規模は径20～40㎝、深さ10㎝を測る。柱穴埋土は、黒褐色土と黄色土の混合土である。住居壁体に沿って、幅20～40㎝、深さ５～８㎝の周壁溝が巡る。周壁溝埋土は、住居埋土と同様の黒褐色土である。住居床面中央部付近にて、２基の土坑（SK①・②）を検出した。SK①東側壁体は周壁溝と一部重複し、土坑北西部は黒褐色土を埋土とするピット（SP⑩）に切られている。断面観察の結果、貼床土である２層が土坑上面を一部覆っていることから、本住居には伴わない遺構の可能性が高いと考えられる。SK①の平面形態は不整楕円形を呈するものと考えられ、規模は長径1.35m、短径0.85m、深さ25㎝を測る。断面形態は緩やかな逆台形状を呈し、埋土は暗褐色土単層である。土坑内からは、弥生土器片が少量出土した。SK②は円形を呈する土坑で、規模は径50㎝、深さ12㎝を測る。断面形態は緩やかな逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土と黄色土の混合土である。土坑南側は黒褐色土を埋土とする２基のピット（SP⑪・⑫）に切られている。また、土坑東側及び西側は、それぞれ溝SD③・④（埋土：黒褐色土と黄色土の混合土）と重複するが、遺構埋土が酷似することから両者の切り合い関係は不明である。なお、溝SD③・④は深さ10～12㎝を測る。このほか、住居南側床面にて２条の溝（SD①・②）を検出した。溝の規模は、幅30～45㎝、深さ６～10㎝を測り、埋土は両溝共に黒褐色土単層である。なお、SD①・②共に周壁溝と重複する遺構埋土が酷似することから、前後関係は不明であるが、溝の性格は住居内を仕切るための間仕切り溝ではないかと推測される。なお、溝底面にて径６～８㎝、深さ５㎝程度の小ピットを数基検出した。

上記の遺構のほかに、住居床面にて大小８基のピット（SP③～⑨･⑬）を検出した。ピット埋土は、すべて黒褐色土と黄色土の混合土である。

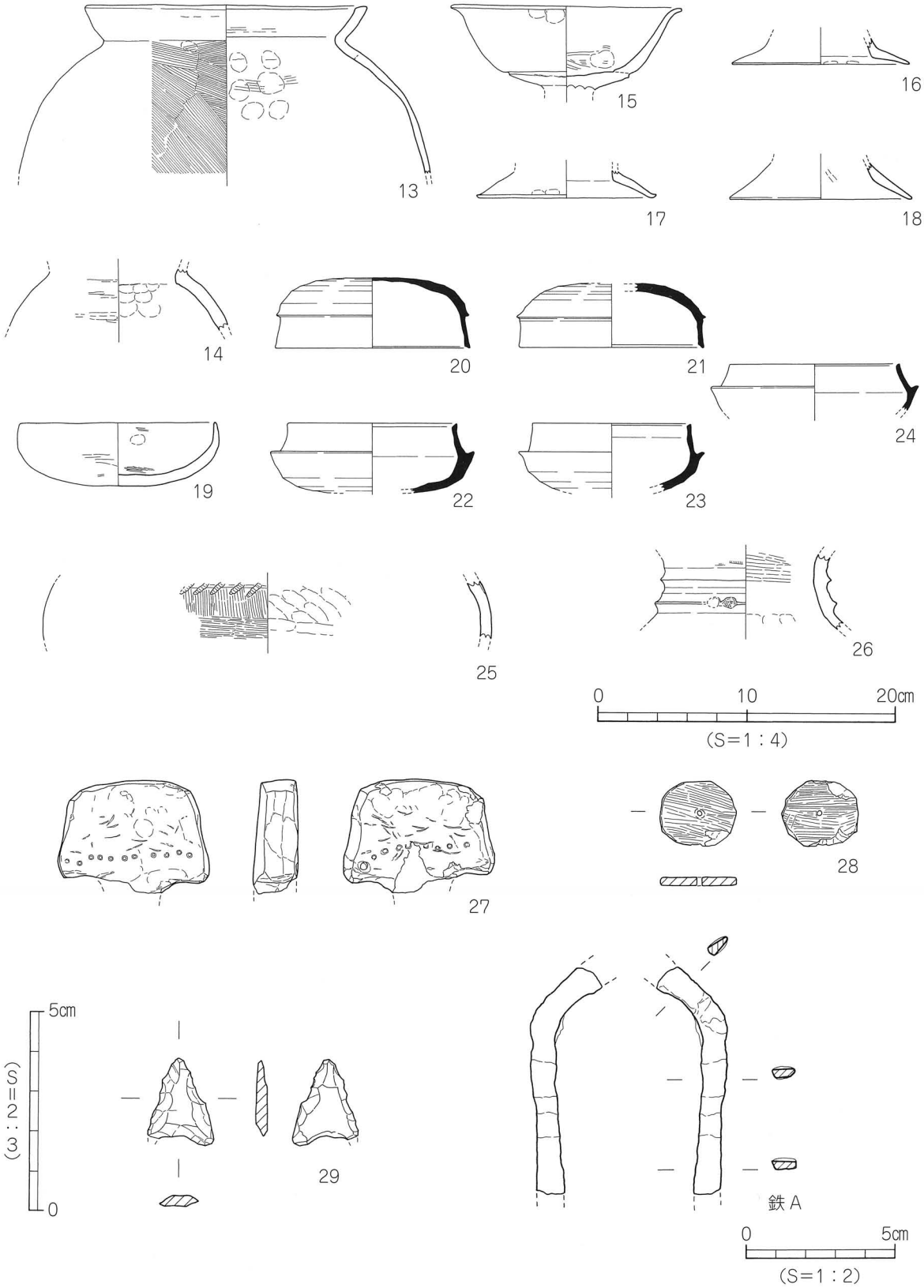
遺物は住居南側、溝SD①と②とに囲まれたエリアの床面付近から、土師器甕（13）や高坏（15）が出土したほか、住居東側中央部の２層上面付近から、須恵器坏身（22・23）が出土した。また、住居北側の２層上面付近にてガラス玉が出土したほか、SP②とSP④からは、それぞれ臼玉（114･115）が出土した。このほか、住居埋土中にて土師器、須恵器のほか、分銅形土製品（27）、有孔円板、石鏃、臼玉が出土した。なお、住居内からは、発掘調査時にガラス玉や臼玉が出土したことから、埋土をすべて採取し、整理作業時に洗浄とふるい作業をおこなった。その結果、整理作業においては臼玉53点、ガラス玉３点を発見した。その結果、住居内から出土した玉類は、ガラス玉５点、臼玉86点となった。



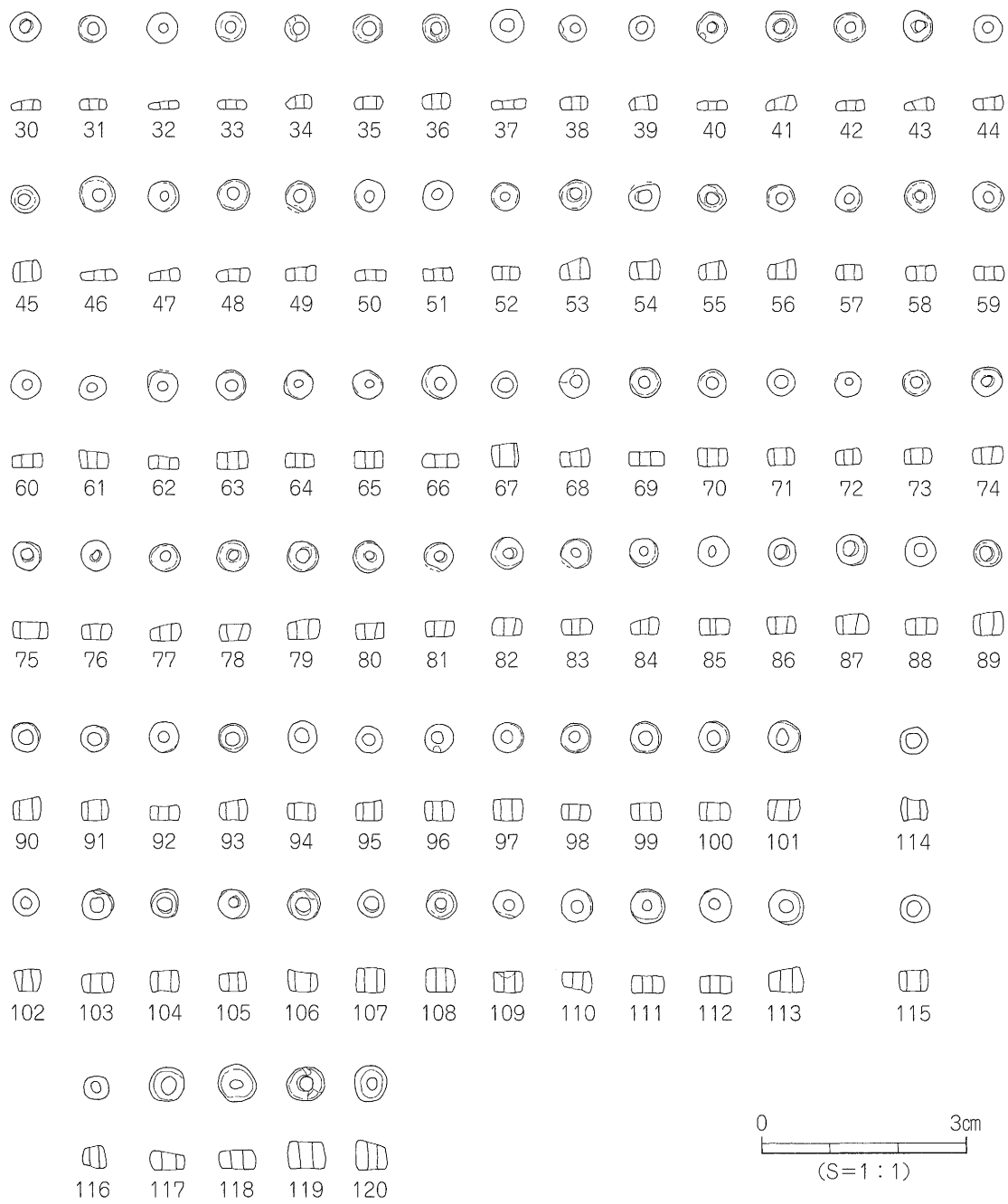
第75図　ＳＢ３測量図

出土遺物（第76・77図、図版18・19）

13は土師器の甕形土器。口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。14は壺形土器の肩部片、15～18は高坏形土器である。15は坏部で、坏部下位に段をもち、口縁部はやや外反する。16～18は脚部片で、柱裾部境内面には明瞭な稜をもつ。19は椀形土器で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。20～24は須恵器。20･21は坏蓋で、断面三角形状の稜をもち、口縁端部は内傾する面をなす。22～



第76図　ＳＢ３出土遺物実測図（１）



第77図　ＳＢ３出土遺物実測図（２）

24は坏身で、たちあがりは内傾し、たちあがり端部は内傾する。25･26は弥生土器の壺形土器。25は胴部外面にハケ状工具による列点文を施す。26は頸部に凸帯文２条を貼り付けし、凸帯上に布目状の押圧痕が残る。27は分銅形土製品で、表面に竹管文11ヶ、裏面には竹管文８ヶと未貫通の円孔を施す。28は滑石製の有孔円板で、直径1.8㎜大の孔を穿つ。29はサヌカイト製の石鏃、鉄Ａは器種不明の鉄器である。30～115は滑石製の臼玉で、ほとんどが完存品である。色調は４種類に分かれ、灰色:41個、黒灰色:9個、褐灰色:18個、緑灰色:18個となる。重量では、最も軽量のもので0.02g、

最も重いもので0.13gのものがある。内訳は以下のとおりである〔0.02g：3個、0.03g：2個、0.04g：10個、0.05g：8個、0.06g：27個、0.07g：19個、0.08g：8個、0.09g：3個、0.10g：5個、0.13g：1個〕。なお、最も数量の多いものは、重量0.06gの臼玉である。116～120はガラス玉である。直径0.37～0.55cm、重量は0.06～0.15gを測り、色調は濃い紺色である。

時期：出土した土器の特徴より、住居の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半、5世紀後半とする。

ＳＢ２（第69・78図、図版14・16）

調査区北西部A1･2区に位置する。住居壁体は、灰褐色土を埋土とする2基のピット（SP172･173）に切られ、住居上面には、灰褐色土を埋土とする3基のピット（SP193･194･195）が存在する。また、住居南側はSB3を切り、住居北側及び西側は調査区外に続く。なお、住居北側と西側は、調査壁の土層観察のためのトレンチにより一部削平されている。第Ⅷ層上面での検出であり、第Ⅴ層が覆う。

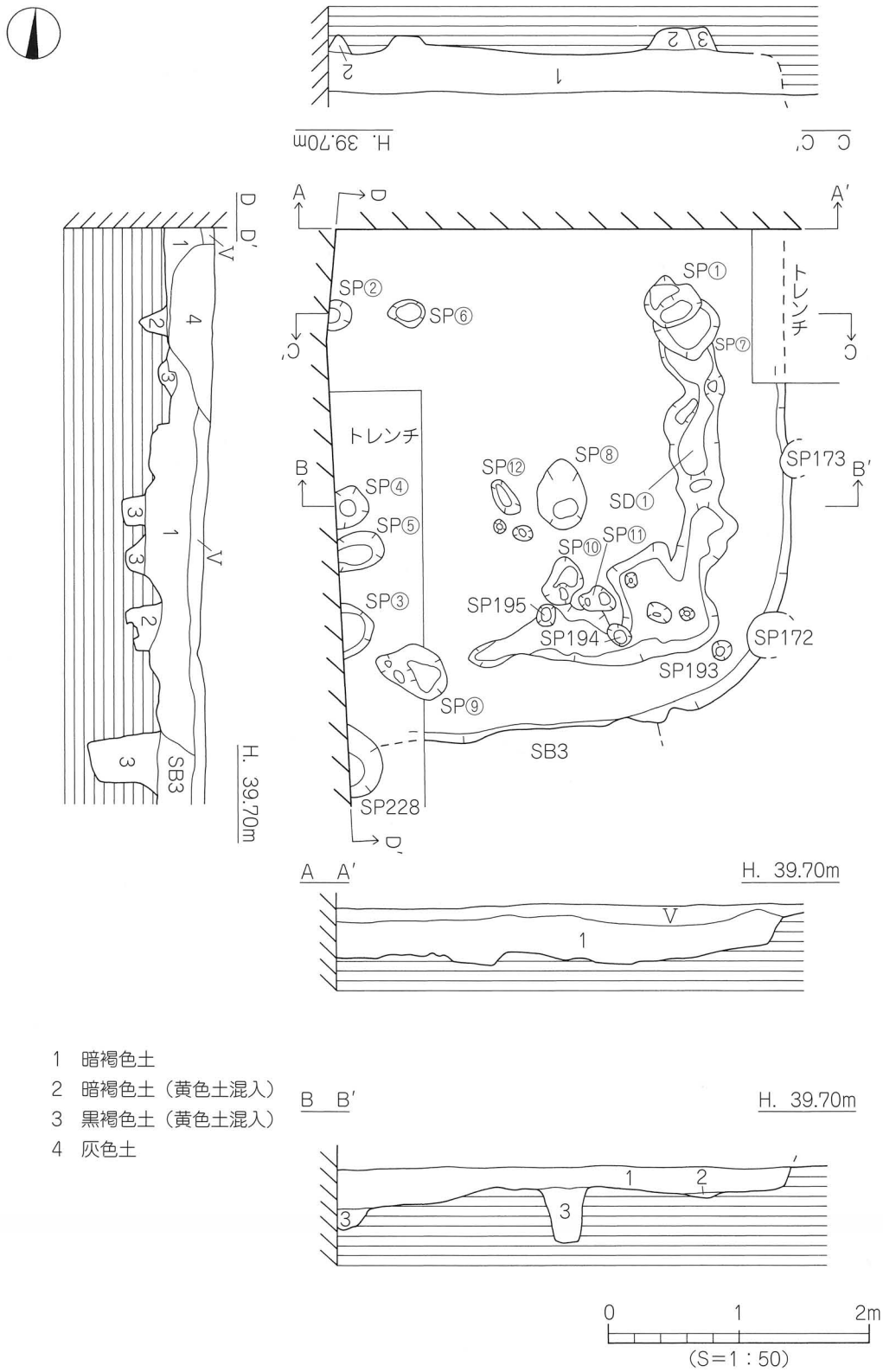
平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長3.50m、南北検出長3.95m、壁高は40cmを測る。住居埋土は暗褐色土単層である。内部施設は主柱穴と溝、及びピットを検出した。主柱穴は3本（SP①・②・③）を検出したが、その配置から本来は4本と考えられる。各主柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径25～40cm、深さ20～30cmを測り、柱穴埋土は暗褐色土に黄色土が混入するものである。住居南東部床面にて、溝SD①を検出した。「L」字状に折れ曲がる溝で、幅30～85cm、深さ15～20cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色土と黄色土の混合土である。溝底面は起伏に富み、径10～20cm、深さ3～5cm程度の小ピットが数基点在する。なお、溝北端及び中央部付近は、黒褐色土（黄色土混入）を埋土とする3基のピット（SP⑦・⑩・⑪）に切られている。このほか、住居床面にて、大小6基のピット（SP④～⑥・⑧・⑨・⑫）を検出した。いずれも、ピット埋土は黒褐色土（黄色土混入）である。

遺物は住居埋土中より、土師器片や須恵器片が点在して出土したほか、石鏃3点と鉄鏃1点が出土した。なお、発掘調査時にはSB3と併行して調査をおこなった関係で、SB3と同様、SB2の埋土を採取した。その結果、整理作業において臼玉9点を発見した。

出土遺物（第79図、図版19）

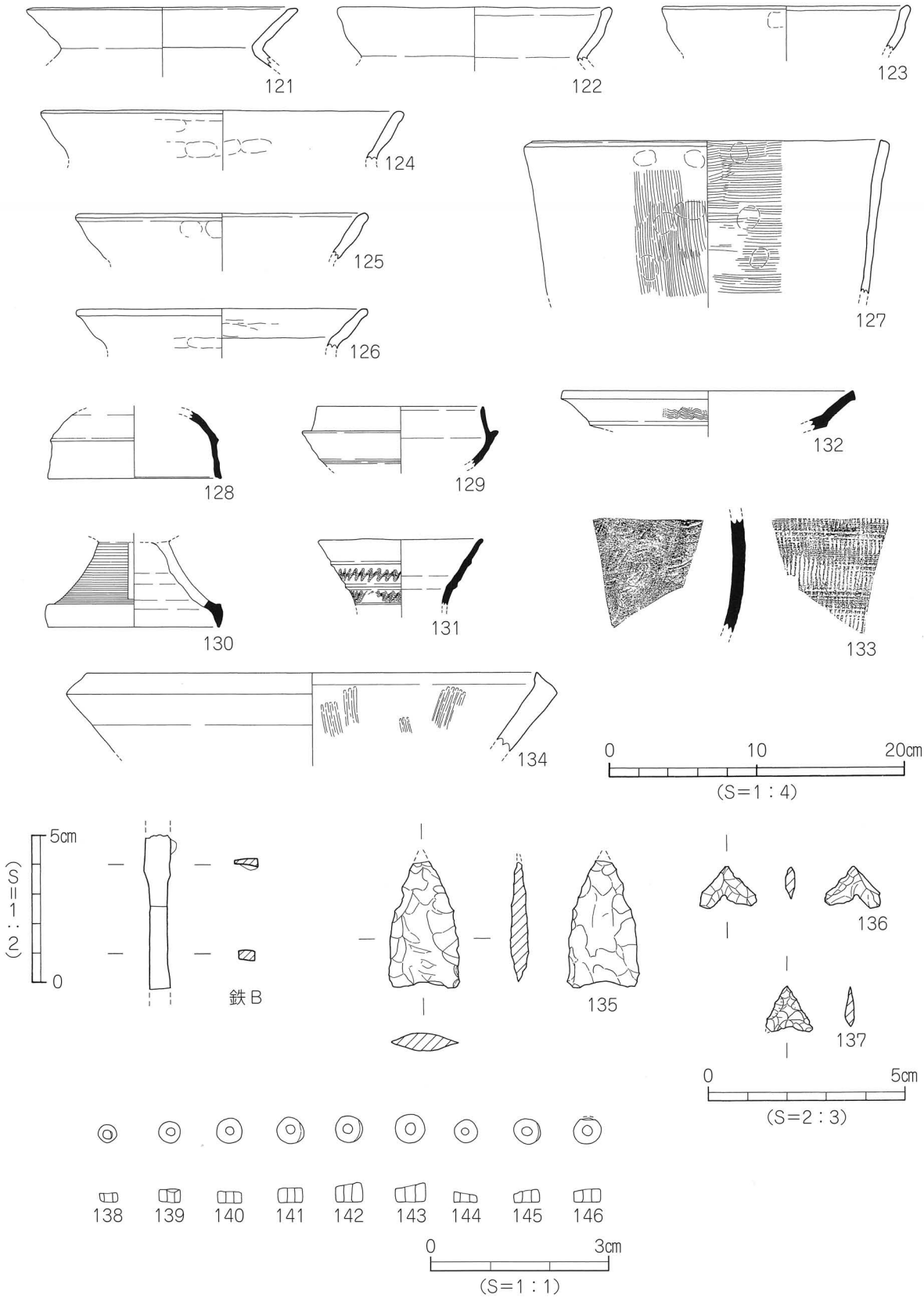
121～127は土師器。121～126は甕形土器で、121は口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁端部は内傾する面をもつ。122～126は口縁部中位に稜をもち、122･123は口縁端部が内傾し、124～126は口縁端部が丸く仕上げられている。127は甑形土器で、口縁端部は外傾する。外面はタテ、内面はヨコ方向のハケメ調整を施す。128～133は須恵器。128は坏蓋で、天井部は比較的高く、推定口径11.5cmを測る。129は坏身で、たちあがり端部は内傾する面をもつ。推定口径11.1cmを測る。130は高坏の脚部で、長方形状の透かしをもつ。131は直口壺で、凸線2条と凸線間に波状文を施す。132は広口壺の口縁部片で、口縁下に波状文、口縁下位に段をもつ。133は甕の胴部片で、外面に平行叩き、内面は円弧叩きがスリ消されている。134は備前焼の摺鉢で、体部内面に条線が残る。混入品。135～137はサヌカイト製の石鏃、鉄Ｂは鉄鏃の茎部である。138～146は滑石製の臼玉で、ほとんどが完存品である。色調で分類すると、黒灰色7個、緑灰色1個、灰色1個となる。直径は0.30～0.48cm、重量は0.02～0.12gを測る。

時期：出土した土器の特徴より、SB2の廃棄・埋没時期は古墳時代中期末、5世紀末とする。



1　暗褐色土
2　暗褐色土（黄色土混入）
3　黒褐色土（黄色土混入）
4　灰色土

第 78 図　ＳＢ２測量図



第79図　ＳＢ２出土遺物実測図

ＳＢ１（第69・80図、図版16）

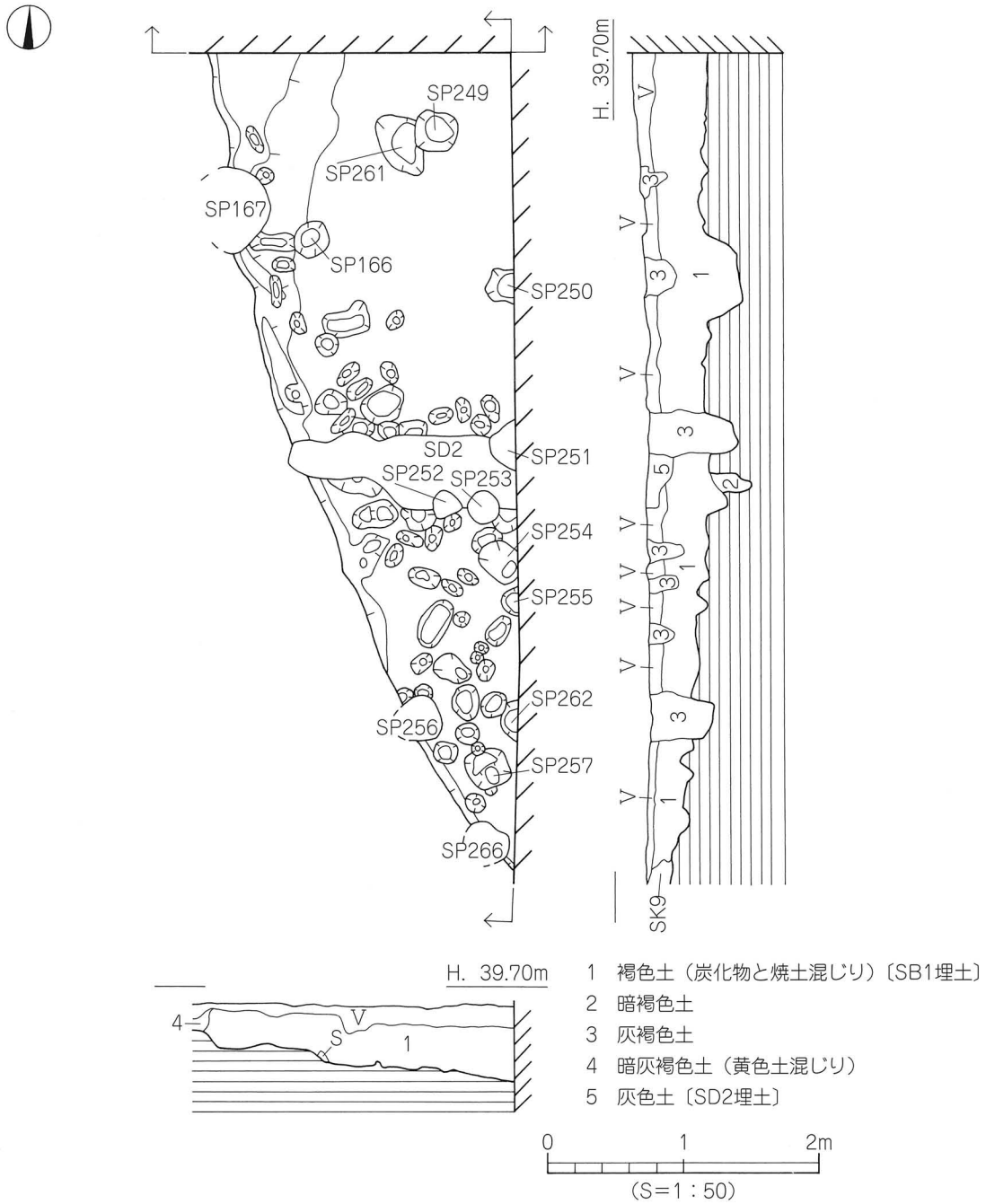
調査区北東部、B1～3区に位置する。一部のみの検出であり、遺構の性格は断定できないが、ここでは竪穴住居として報告する。住居中央部は、灰色土を埋土とする溝SD2に切られ、住居壁体は灰褐色土を埋土とする3基のピット（SP167・256・266）に切られ、住居上面には、灰褐色土や灰色土を埋土とする11基のピット（SP166・249～255・257・261・262）が存在する。住居南側は土坑SK9を切り、住居北側及び東側は調査区外に続く。第Ⅷ層上面での検出であり、第Ⅴ層が覆う。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長6.40m、東西検出長2.20m、壁高40cmを測る。住居埋土は褐色土単層であるが、埋土中に炭化物や焼土が点在する。住居床面にて、径10～25cm大のピットを多数検出したが、主柱穴を特定することはできなかった。ピット埋土は、黒褐色土（黄色土混入）や暗褐色土（黄色土混入）である。また、住居床面は凹凸が著しく、住居中央部に向けて緩傾斜をなす。

遺物は埋土上位から土師器片や須恵器片が出土したほか、埋土下位では土師器片、須恵器片のほかに弥生土器片や石鏃、砥石の破片が出土した。

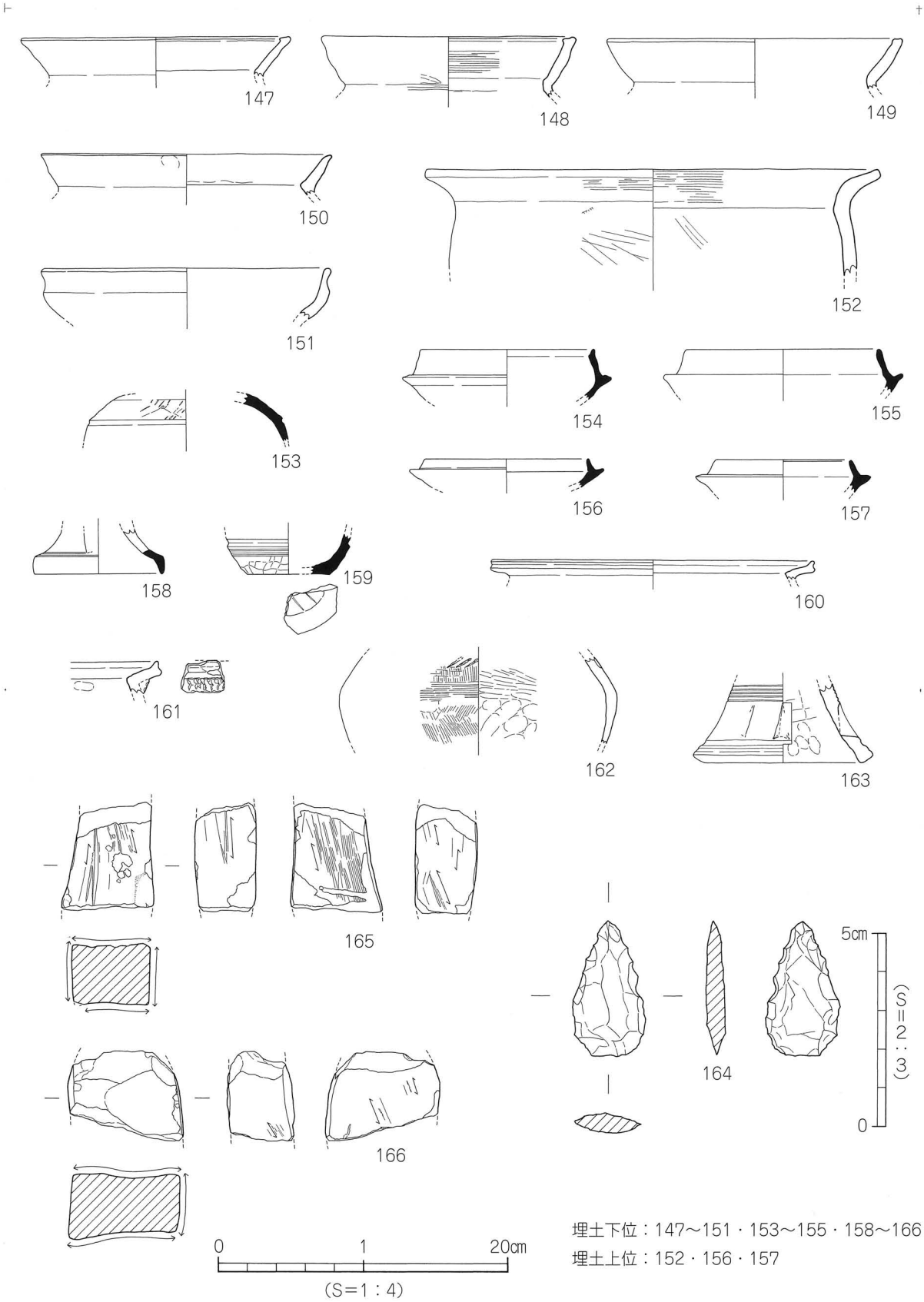
出土遺物（第81図、図版20）

147～151・153～155・158～166は埋土下位出土品、152・156・157は埋土上位出土品。147～152は土師器。147～151は甕形土器で、147～150の口縁端部は内傾する。なお、147～149は口縁端部内面が内側にやや肥厚する。151は口縁部中位に稜をもつ。152は鉢形土器で、口縁部は外反する。153～159は須恵器。153は坏蓋で、天井部と口縁部との境界は凹線により表現される。天井部に刻目か。154～157は坏身で、156・157のたちあがりは短く内傾し、端部は尖り気味となる。158は高坏の脚部片で、脚部外面に回転カキメ調整を施す。159は把手付椀で、体部下位に沈線1条を施し、底部外面には手持ちヘラケズリを施す。なお、底面にはヘラ状工具による線刻を施す。160～163は弥生土器。160・161は弥生中期後半の甕形土器の口縁部で、160の口縁端面には凹線文1条、161は頸部に刻目凸帯文1条を施す。164はサヌカイト製の石鏃、165・166は石材不明の砥石である。165・166共に2面の砥面をもつ。

時期：埋土下位出土の土師器、須恵器の特徴より、SB1の廃棄・埋没時期は古墳時代後期前半、6世紀前半とする。


SP249
SP261
SP167
SP166
SP250
SD2
SP251
SP252
SP253
SP254
SP255
SP262
SP256
SP257
SP266
H. 39.70m
SK9
H. 39.70m
1 褐色土（炭化物と焼土混じり）〔SB1埋土〕
2 暗褐色土
3 灰褐色土
4 暗灰褐色土（黄色土混じり）
5 灰色土〔SD2埋土〕
0 1 2m
(S=1：50)

第80図　ＳＢ１測量図

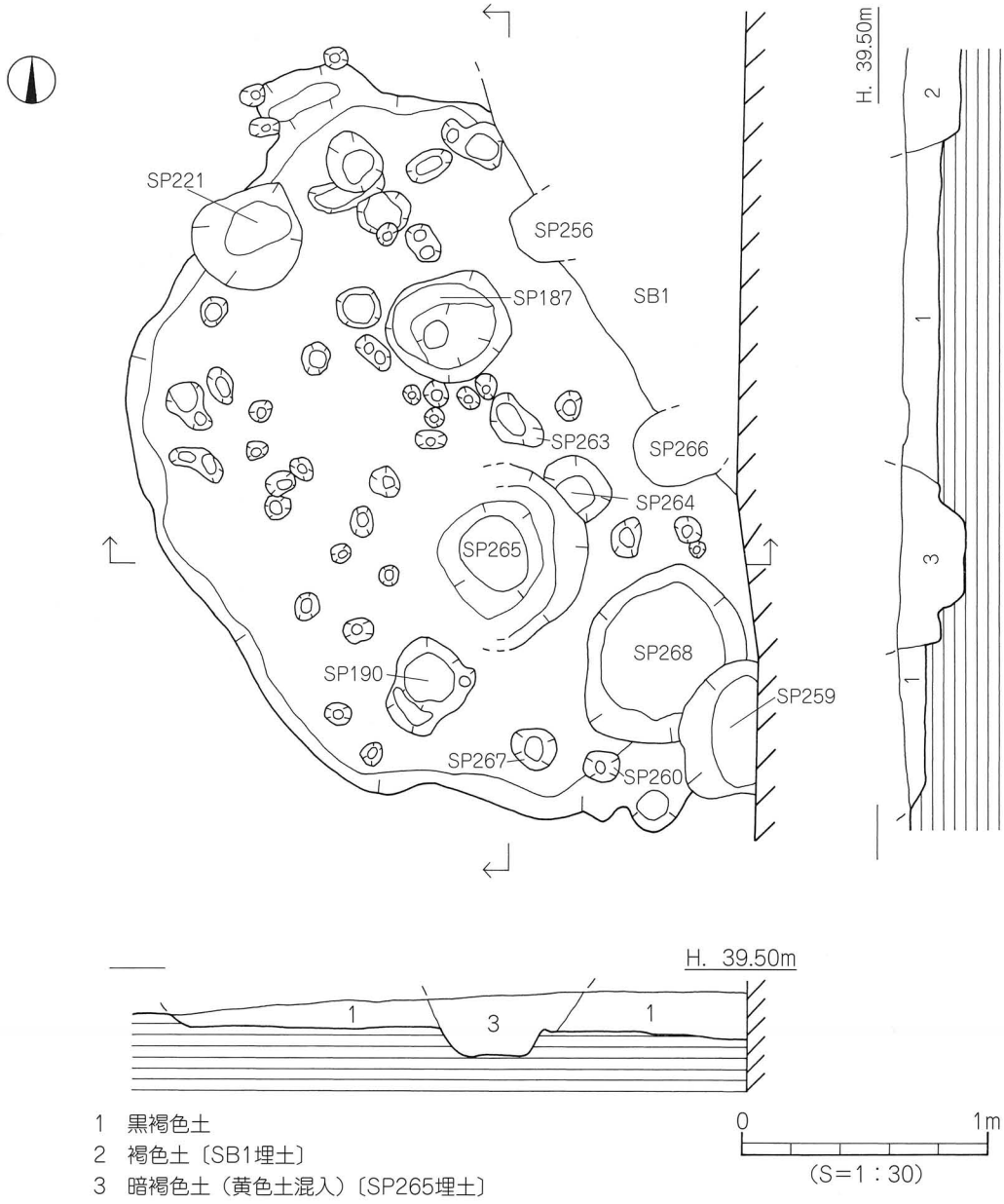


第 81 図　ＳＢ１出土遺物実測図

(2) 土　坑

ＳＫ９（第69・82図、図版17）

調査区北東部、B2･3区に位置する。土坑北側はSB1及び、灰褐色土を埋土とする２基のピット（SP256･266）に切られ、土坑西側及び南側壁体は、灰褐色土を埋土とする２基のピット（SP221･259）に切られている。また、土坑上面には、暗褐色土（黄色土混入）や灰褐色土を埋土とする８基のピット（SP187･190･260･263～265･267･268）が存在する。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長1.94m、南北長3.38m、深さ10～18cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、壁体は緩やかに立ち上がる。土坑埋土は、黒褐色土単層である。土坑北側壁体中央部付近には、長さ50cm、幅20cmを測る長方形状の張り出し部が付設されている。なお、土坑底面と張り出し部底面との比高差は約５cmあり、張り出し部が土坑底面より高くなっている。張り出し部の埋土は、土坑埋土



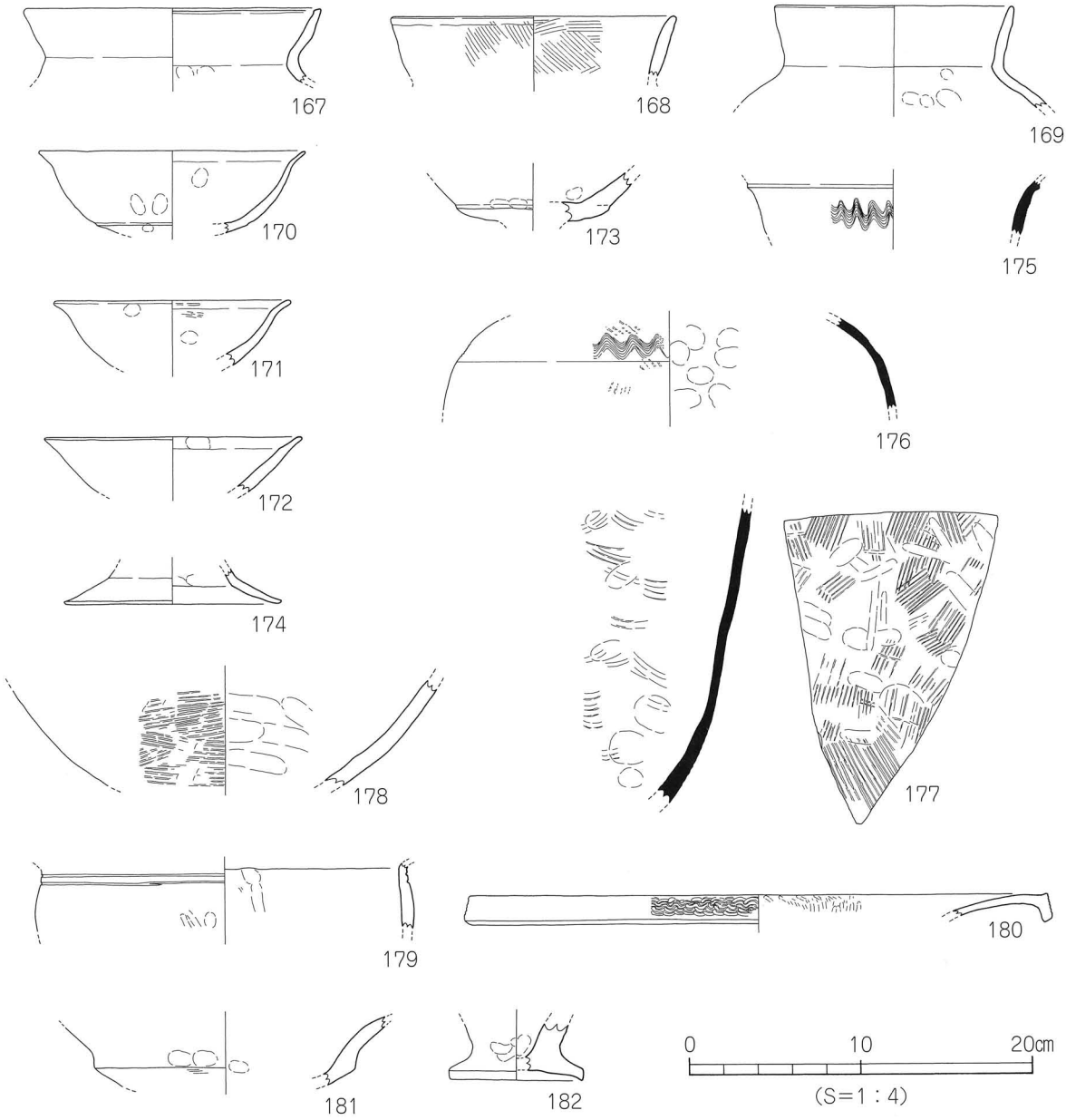
第82図　ＳＫ９測量図

と同様の黒褐色土単層である。このほか、土坑底面にて大小37基のピットを検出した。ピットは径10～20cm、深さ3～7cmを測り、埋土はすべて黒褐色土単層である。

遺物は埋土中より、土師器片や須恵器片のほか、弥生土器片が数点出土した。

出土遺物（第83図、図版20）

167～174は土師器。167～169は甕形土器で、167の口縁端部は内傾する面をもつ。170～174は高坏形土器で、170・173は坏部下位に稜をもち、170～172の口縁部はやや外反する。174は柱裾部境内面に稜をもつ。175～177は須恵器。175は壺の頸部片で、凸線1条と波状文を施す。176は壺の肩部片で、波状文を施す。177は甕の胴部片で、外面は平行叩き、内面は円弧叩きがスリ消されている。178は瓦質の甕で、外面は平行叩き、内面は叩きがスリ消されている。179～182は弥生土器。179は弥生前期の甕形土器で、ヘラ描き沈線文2条を施す。180は弥生後期の壺形土器で、口



第83図　ＳＫ９出土遺物実測図

縁端部は下方に垂下し、口縁端面に櫛描波状文５条を施す。また、口縁上面には丁寧なヘラミガキ調整を施す。181 は弥生後期の高坏で、口縁部は外反する。182 は弥生後期の鉢形土器で、上げ底となる。
時期：出土した土器の特徴と SB1 に切られることから、古墳時代中期後半、５世紀後半とする。

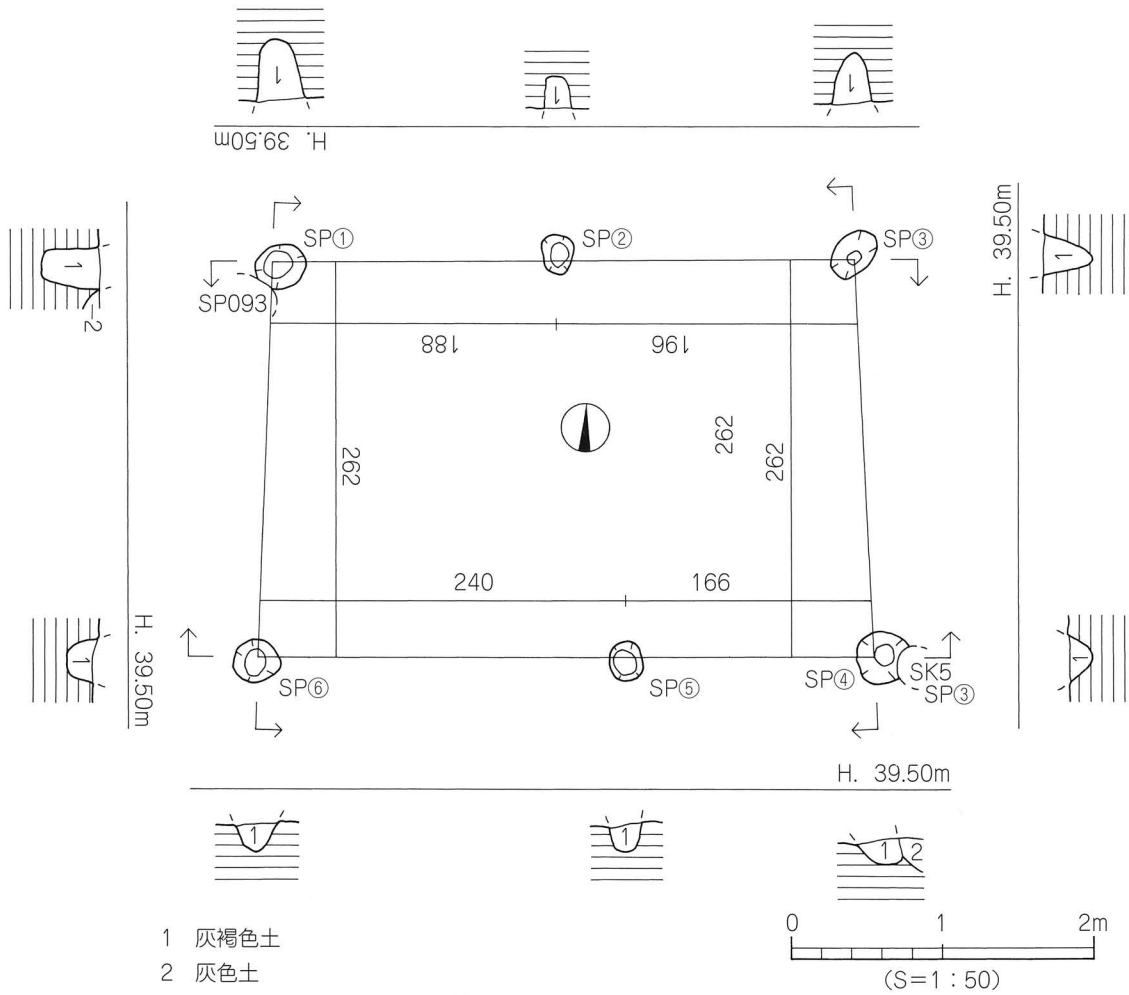
〔3〕中世の遺構と遺物

中世の遺構は、掘立柱建物１棟、溝２条、土坑２基を検出した。

(1) 掘立柱建物

掘立１（第 69・84 図）

調査区中央部、A・B4 区に位置する。第Ⅷ層上面で検出した。建物北東隅と南東隅は SP093・SK5SP ③に切られ、北側中央部の柱穴は土坑 SK3 を切っている。桁行長 4.06m、梁行長 2.62m を測る２間×１間の東西棟で、６基の柱穴より構成される。各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径 15 ～ 22 cm、深さは検出面下 10 ～ 25 cmを測る。柱穴掘り方埋土は灰褐色土単層である。柱穴内からは少量の土師器片が出土したが、図化しうるものはない。
時期：時期決定しうる遺物の出土はないが、柱穴埋土が第Ⅳ層と類似することから、概ね中世の遺構とする。



第 84 図　掘立１測量図

(2) 溝

ＳＤ１（第69・85図）

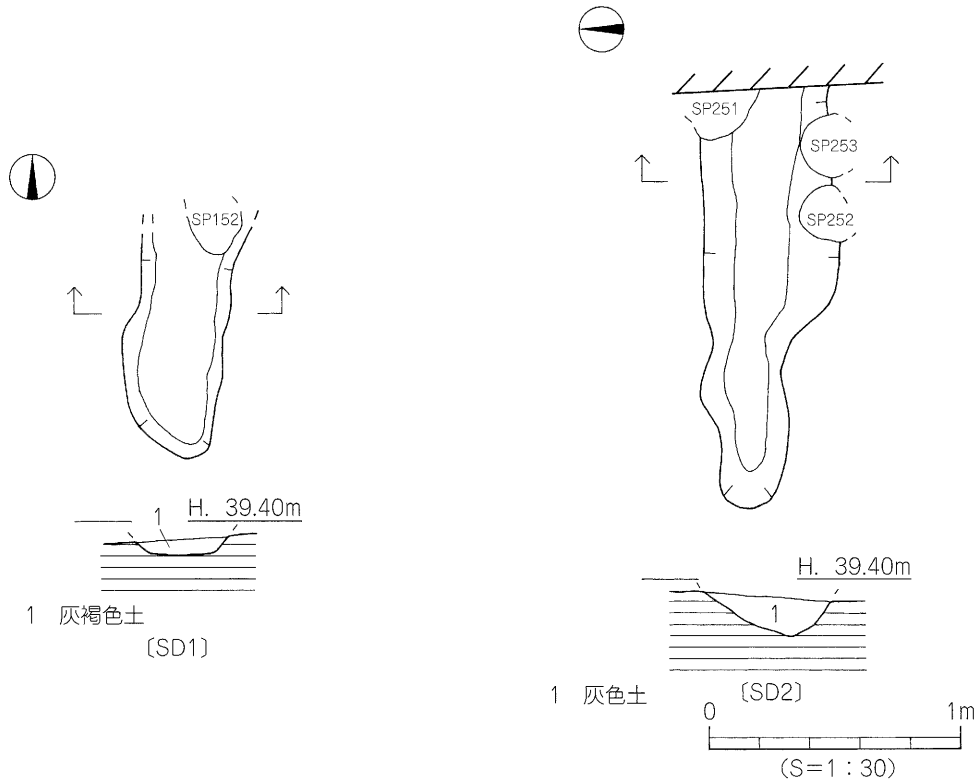
調査区中央部やや西寄り、A3区で検出した南北方向の溝で、溝北側はSP152（埋土：灰色土）に切られ、北端は消失している。第Ⅷ層上面で検出した。規模は幅0.36～0.40m、検出長0.96m、深さは検出面下6～8cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰褐色土単層である。溝底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より土師器小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、遺構埋土が第Ⅳ層と酷似することから、概ね中世の遺構とする。

ＳＤ２（第69・85図）

調査区北東部、B2区で検出した東西方向の溝で、SB1を切り、溝東側はSP251・252・253（埋土：灰色土）に切られ、調査区外に続く。第Ⅴ層上面での検出であり、第Ⅲ層が覆う。規模は、幅0.30～0.56m、検出長1.66m、深さは10～14cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰色土単層である。溝底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より土師器小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期決定しうる遺物の出土はないが、埋土が第Ⅲ層と酷似することから、概ね中世の遺構とする。



第85図　ＳＤ１・ＳＤ２測量図

(3) 土　坑

ＳＫ８（第69・86図）

調査区北東部、B2区に位置する。土坑東側はSB1と重複し、南側はSP184・275（埋土：灰褐色土）に切られている。第Ⅷ層上面で検出した。平面形態は不整方形を呈し、規模は東西検出長0.98m、南北長0.90m、深さは検出面下14㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑東側壁体は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分層され、1層暗灰褐色土、2層黄色土である。遺物は1層中より土師器片や須恵器片のほか、3～5㎝大の礫が数点出土した。また、1層中からは土坑中央部付近にて、炭化物が少量出土した。

出土遺物（第86図）

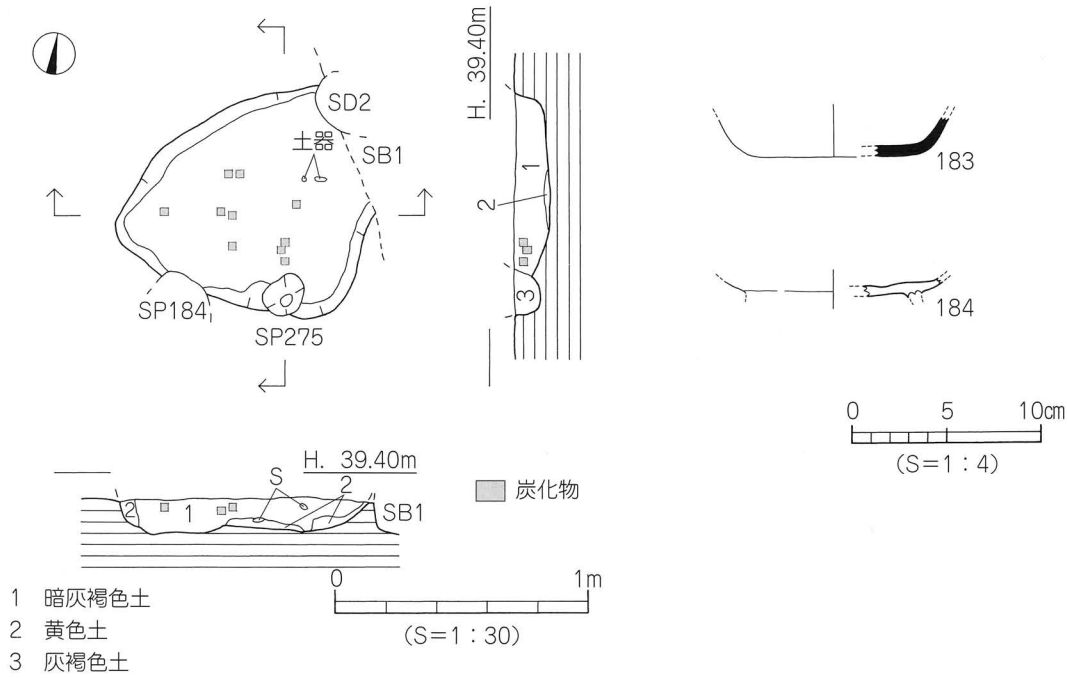
183は須恵器坏で、平底となる。184は瓦質土器の椀で、高台部分は剥がれ欠落している。

時期：出土遺物が少量であるため時期特定は困難であるが、概ね中世の遺構とする。

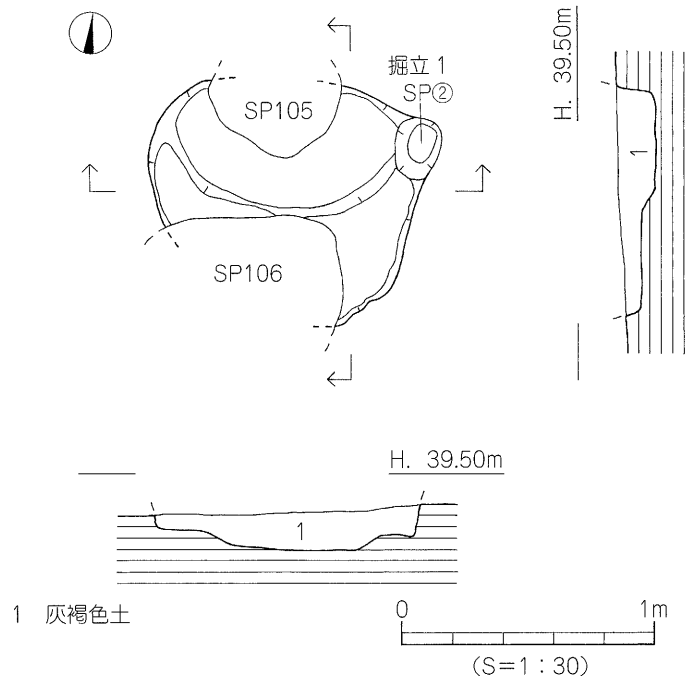
ＳＫ３（第69・87図）

調査区中央部、A4区に位置する。土坑北側及び南側はSP105･106（埋土：灰色土）に切られている。第Ⅷ層上面で検出した。平面形態は不整円形を呈し、規模は東西長1.18m、南北検出長0.98m、深さは検出面下14㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈し、土坑南側にはテラス状の高床部をもつ（高低差6㎝）。埋土は灰褐色土単層である。土坑北東部にて径15㎝、深さ8㎝の柱穴（掘立1：SP②）を検出した。遺物は埋土中より土師器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、埋土が第Ⅳ層と酷似することから、概ね中世の遺構とする。



第86図　ＳＫ８測量図・出土遺物実測図



第87図　ＳＫ３測量図

〔4〕その他の遺構と遺物

調査では、柱穴275基を検出した。埋土で分類すると以下の4種類に大別される。

① 灰色土・・・・・・・・・・・ 53基（土師器出土）
② 褐色土・・・・・・・・・・・ 32基（土師器・須恵器出土）
③ 暗褐色土・・・・・・・・・・126基（弥生土器・土師器・須恵器出土）
④ 暗褐色土（黄色土混入）・・・64基（弥生土器・土師器・須恵器出土）

なお、図化しうる遺物が出土した柱穴は13基ある。内訳は、以下のとおりである。

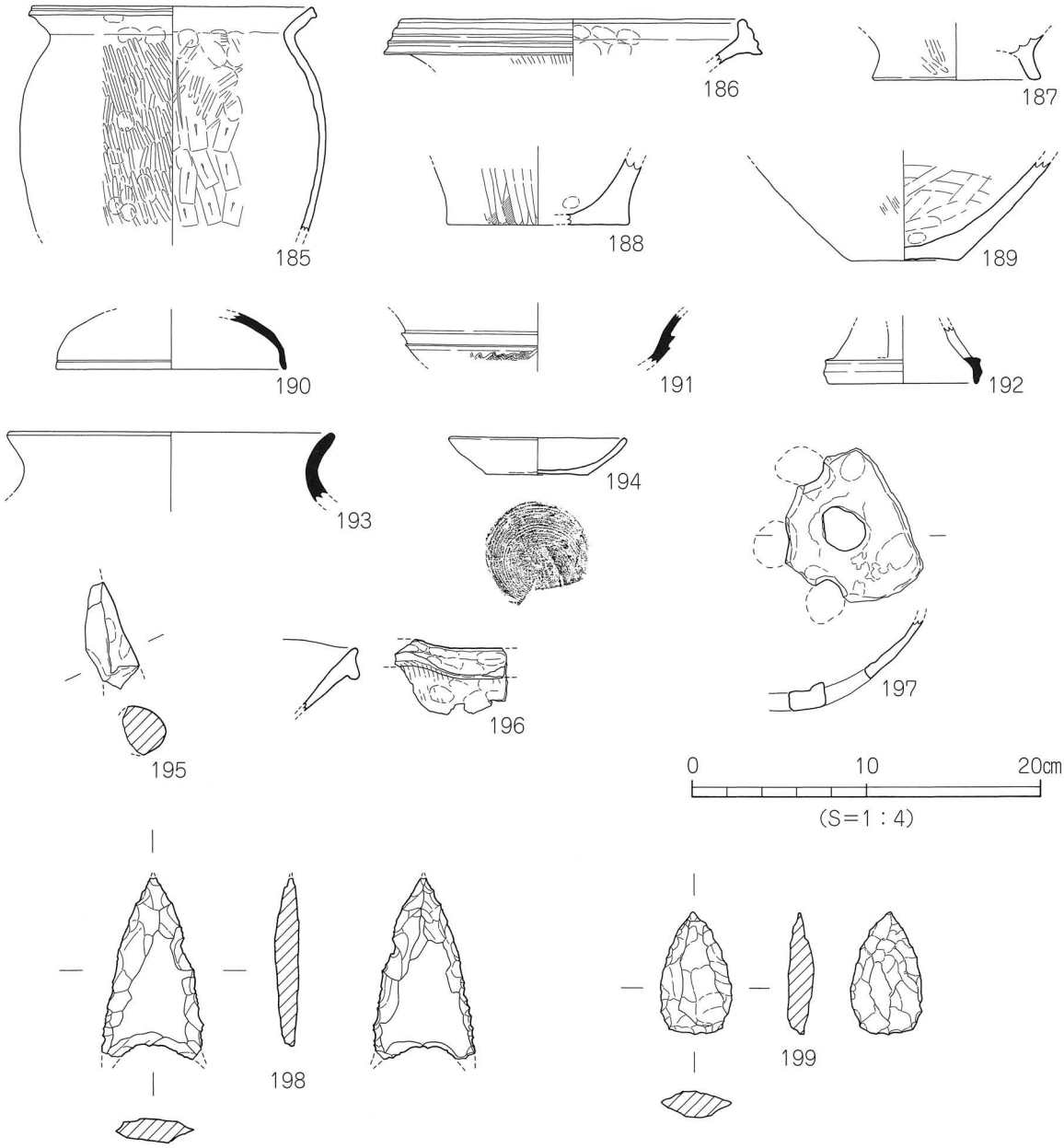
① 灰色土　：SP078・SP088・SP105
② 褐色土　：SP243
③ 暗褐色土：SP044・SP178・SP187・SP244・SP252
④ 暗褐色土（黄色土混入）：SP061・SP076・SP079・SP101

ここでは、これら13基の柱穴出土品を、SP出土遺物として掲載する。

(1) ＳＰ出土遺物（第88図、図版20）

13基の柱穴出土品は、以下のとおりである。〔185：SP076、186：SP101、187：SP178、188：SP044、189：SP079、190･196：SP105、191：SP244、192：SP252、193：SP243、194：SP088、195：SP078、197：SP187、198･199：SP061〕

185～189は弥生土器。185は弥生後期初頭の甕形土器で、口縁端面はナデ凹む。186～189は弥生中期後半の土器で、186･189は壺形土器、187･188は甕形土器である。186は口縁部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文3条を施す。190～193は須恵器。190は坏蓋、191･192は高坏、193は甕で、191は凸線2条と凸線下に波状文を施す。194～197は土師器。194は坏で、底部切り離しは回転糸切り技法による。195は土釜の脚部、196は片口鉢の口縁部片である。197は甑形土器の底部片で、径3cm大の孔を4ケ所看守する。198･199はサヌカイト製の石鏃である。



185：SP076
186：SP101
187：SP178
188：SP044
189：SP079
190・196：SP105
191：SP244
192：SP252
193：SP243
194：SP088
195：SP078
197：SP187
198・199：SP061

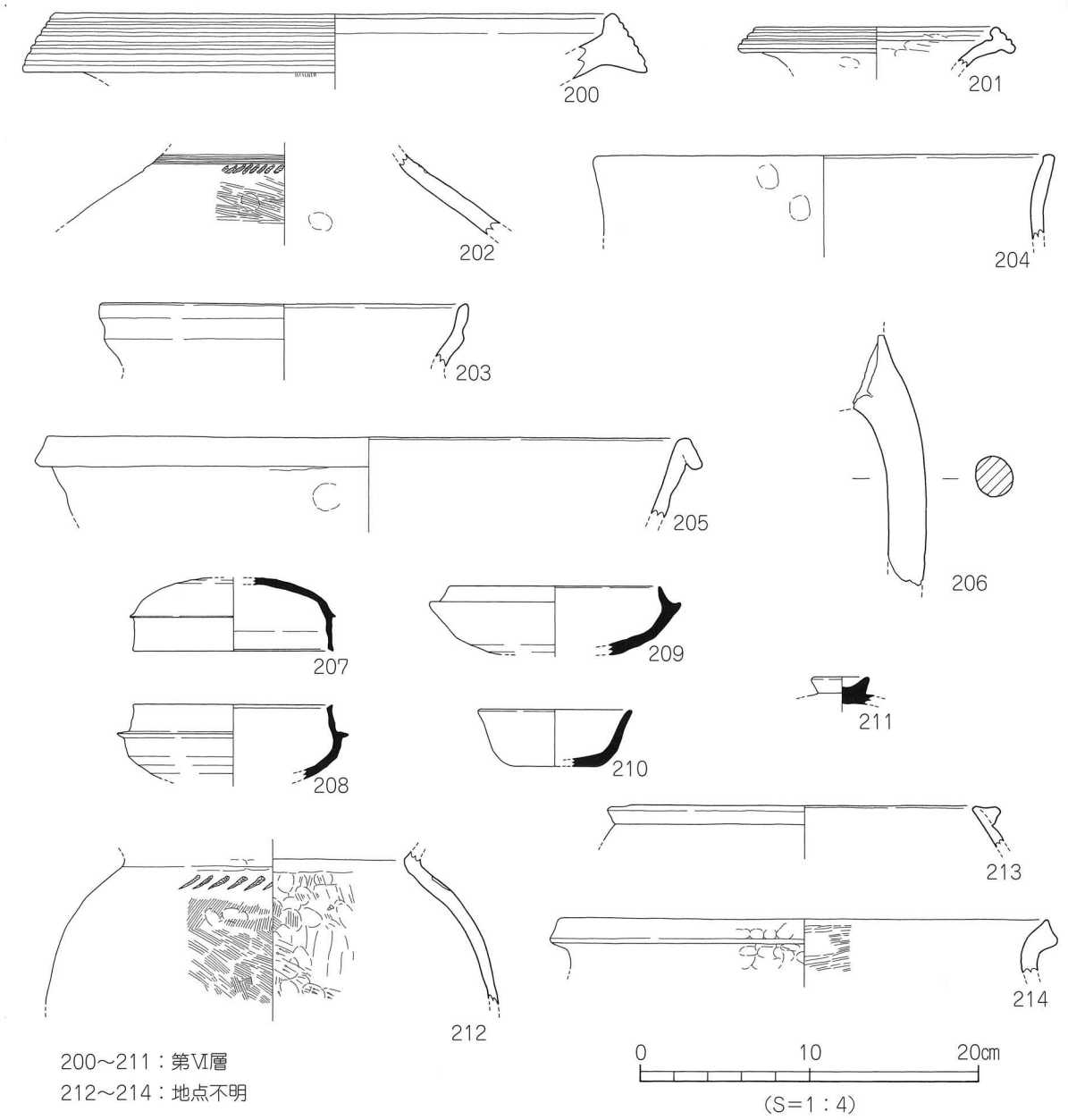
第88図　ＳＰ出土遺物実測図

（2）**第Ⅵ層出土遺物**（第 89 図、図版 20）

200 ～ 202 は弥生中期後半の壺形土器で、200･201 は口縁端面に凹線文を施す。202 は肩部に細沈線文とハケ状工具による刻目を施す。203 ～ 206 は土師器。203 は甕形土器、204 は甑形土器で、204 の口縁部はやや内側に肥厚する。5 世紀後半。205･206 は土釜である。13 ～ 14 世紀。207 ～ 211 は須恵器。207 は坏蓋、208･209 は坏身、210 は坏、211 は高坏の蓋のつまみである。207･208･211 は 5 世紀後半、209 は 6 世紀後半、210 は 7 世紀後半。

（3）**地点不明出土遺物**（第 89 図、図版 20）

212 は弥生中期後半の壺形土器で、頸部にハケ状工具による列点文を施す。213 は土釜、 214 は亀山焼の甕である。14 世紀。



第 89 図　第Ⅵ層・地点不明出土遺物実測図

4. 小　結

調査では、弥生時代から中世までの集落関連遺構や遺物を確認した。ここでは、時期別にまとめを行う。

(1) 弥生時代

弥生時代の遺構は、土坑6基があげられる。このうち、SK1･2は長さ1.7m前後、幅1mを測る長方形土坑で、SK1は深さ60cmに及ぶ。土坑壁体は一部筒状または袋状を呈することから、貯蔵穴として利用されていた可能性がある。出土遺物の特徴から、2つの土坑は弥生時代中期後半の遺構と考えられる。このほか、SK5･6からもSK1･2と同時期の遺物が出土している。注目される遺物では、古墳時代の竪穴住居SB3床面付近にて、分銅形土製品が1点出土した。

(2) 古墳時代

古墳時代の遺構は、竪穴住居3棟、土坑1基を検出した。SB3は一辺4.6m前後を測る方形住居で、住居南側にて幅30～45cm、長さ約1m、深さ6～10cmを測る、2本の並列する南北方向の溝を検出したほか、住居北側でも東西方向の溝1条を検出した。溝の性格は断定しえないが、住居内を区画する仕切り溝ではないかと推測される。また、SB3からはガラス玉5点と臼玉86点など、装飾品類が大量に出土しており、住居廃絶に伴う祭祀的行為が行われた可能性が考えられる。このほか、SB2からも臼玉9点が出土している。出土遺物より、SB3は古墳時代中期後半、SB2は古墳時代中期末に廃棄・埋没したものと考えられる。一方、SB1は方形を呈すると考えられる竪穴住居で、住居内からは古墳時代後期前半の須恵器と共に、砥石が出土している。

(3) 古　代

古代の遺構は未検出であるが、調査壁の土層観察により、調査地南側にて流路状の砂層を確認した(SR1と標記)。Ⅵ層堆積後、Ⅴ層堆積までの間に存在したもので、時期特定は困難であるが、概ね古代の遺構と考えられる。このほか、包含層中からは飛鳥時代から奈良時代の遺物が出土しており、調査地周辺に古代集落が展開していることを示唆する資料である。

(4) 中　世

中世では、掘立柱建物や溝、土坑、柱穴を検出した。掘立柱建物柱穴からは時期特定しうる遺物の出土はないが、土色・土質の酷似する柱穴からは、13～14世紀の遺物が出土している。また、前述した柱穴のうち、掘り方が検出面下60cmに及ぶ柱穴が数基あり、掘立柱建物を伴う中世集落が調査地近隣に存在するものと推測される。

今回の調査では、これまでに発見された超大型建物と関連性の高いとされる溝の延長部は確認されなかった。その反面、弥生時代中期後半、凹線文期の土坑の検出や、古墳時代中期の竪穴住居の構造や廃絶方法、さらには中世段階の建物の検出など、新たな発見が多く、今後、樽味地区における集落様相を解明するうえで貴重な資料を得ることができたものと高く評価される。

遺構・遺物一覧　－凡例－

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄　(　)：復元推定値

調整欄　土器の各部位名称を略記した。

例）口→口縁部、天→天井部、頸→頸部、胴→胴部、底→底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土。

(　) の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1～4）→「1～4㎜大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表 78　竪穴住居一覧

竪穴(SB)	時期	平面形	規模（m）長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	床面積(㎡)	主柱穴(本)	内部施設				周壁溝	備考
							高床	土坑	炉	カマド		
1	古墳後期前半	方形	(6.40) × (2.20) × 0.40	褐色土	7.04							
2	古墳中期末	方形	(3.95) × (3.50) × 0.40	暗褐色土	13.82	(3)						
3	古墳中期後半	方形	(4.65) × (4.13) × 0.12	黒褐色土	15.41	(2)		○			○	貼床

表 79　掘立柱建物一覧

掘立	規模(間)	方向	桁行		梁行		方位	床面積(㎡)	時期	備考
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)				
1	2×1	東西	4.06	2.40・1.66	2.62	2.62	東西	10.6	中世	

表 80　溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規模（m）長さ×幅×深さ	方向	埋土	出土遺物	時期	備考
1	A 3	皿状	(0.96) × 0.36 ～ 0.40 × 0.06 ～ 0.08	南北	灰褐色土	—	中世	
2	B 2	レンズ状	(1.66) × 0.30 ～ 0.56 × 0.10 ～ 0.14	東西	灰色土	土師	中世	

表 81　土坑一覧

土坑(SK)	平面形	断面形	規模（m）長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積(㎡)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	隅丸長方形	逆台形	1.68 × (0.90) × 0.55	1.51	暗褐色土 暗褐色土＋黄色土 黒色粘質土	弥生 石	弥生中期後半	
2	隅丸長方形	逆台形	1.80 × 1.12 × 0.24	2.01	黒褐色土	弥生	弥生中期後半	
3	不整円形	逆台形	1.18 × (0.98) × 0.14		灰褐色土	土師	中世	
4	楕円形	逆台形	(1.55) × (0.54) × 0.08	0.84	黒褐色土	弥生	弥生中期後半	
5	方形	逆台形	1.24 × (0.86) × 0.04	1.07	黒褐色土	弥生	弥生中期後半	
6	円～楕円形	逆台形	(1.35) × (0.46) × 0.63	0.62	黒色土	弥生	弥生中期後半	
7	方～長方形	逆台形	(0.76) × (0.40) × 0.40	0.30	黒褐色土	弥生	弥生中期後半	
8	不整方形	逆台形	(0.98) × 0.90 × 0.14		暗灰褐色土	土師・須恵	中世	
9	楕円形	逆台形	3.38 × (1.94) × 0.18	5.62	黒褐色土	土師・須恵・弥生	古墳中期後半	

表 82　SK1 出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	口径 (25.6) 残高 5.2	「く」の字状口縁。	㊐ヨコナデ ㊒マメツ	㊐ヨコナデ ㊒ナデ→ミガキ	明橙褐色 橙褐色	石・長(1～3) 金 ◎		18
2	甕	口径 (28.1) 残高 2.2	口縁端面に凹線文２条。	ヨコナデ	ヨコナデ ミガキ	淡茶色 淡茶褐色	石・長(1～2) 金 ◎		
3	壺	残高 4.1	胴部片。	ミガキ	ミガキ	茶褐色 茶色	石・長(1～2) 金 ◎	黒斑	

表 83　SK1 出土遺物観察表　　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
4	伐採斧	1／2	緑色片岩	(11.90)	6.25	(1.65)	236.03		18
5	剥片	完存	安山岩	4.50	2.30	0.60	5.86		18

表 84　SK2 出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
6	甕	残高 4.0	頸部に刻目凸帯文１条。	ハケ？・ヨコナデ (マメツ)	ミガキ	茶褐色 明茶褐色	石・長(1～2) ◎		
7	壺	残高 6.5	貝殻施文による列点文２段。	ミガキ？	ナデ	明茶色 灰茶色	石・長(1～2) 金 ◎		18
8	壺	残高 4.0	頸部に沈線文２条。	ミガキ(ナデ)	ミガキ(ナデ)	淡茶色 淡茶色	石・長(1～3) 金 ◎		

表 85　SK5 出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
9	甕	口径 (18.5) 残高 3.3	口縁端部は上下方に肥厚し、口縁端面に凹線文２条。	ナデ(マメツ)	マメツ	乳灰色 淡灰褐色	石・長(1～3) ◎		
10	甕	底径 (4.2) 残高 4.6	底部及び胴部外面に籾圧痕あり。	ミガキ(マメツ)	マメツ(ナデ)	黒褐色 黒褐色	長(1～2) ◎		

表 86　SK6 出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
11	甕	口径 (20.2) 残高 6.8	口縁端部は上方に拡張、口縁端面に凹線文１条。	㊐ヨコナデ ㊒ハケ(5本/cm)	㊐ヨコナデ ㊒ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1) 金 ◎	黒斑 煤付着	18
12	甕	底径 (6.1) 残高 3.1	上げ底。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶褐色 黒色	石・長(1) ◎	黒斑	18

表 87　SB3 出土遺物観察表　　土製品　　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
13	甕	口径 18.8 残高 11.2	内湾口縁。口縁端部は内傾する面をもつ。	㊒ヨコナデ ㊒ハケ(8本/cm)	㊒ヨコナデ ㊒ナデ・ハケ	淡褐色 淡褐色	石・長(1～2) 金 ◎		18
14	壺	残高 4.0	小片。	ミガキ→ナデ	ナデ	灰色 橙褐色	石・長(1～3) ◎	黒斑	

SB3 出土遺物観察表　　土製品　　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
15	高坏	口径 15.4 残高 5.6	坏部下位に段をもち、口縁部は外反する。ほぼ完形。	㊀ヨコナデ ナデ(マメツ)	㊀マメツ ハケ→ヨコナデ	茶褐色 茶色	密 ○	黒斑	18
16	高坏	底径 (11.8) 残高 1.7	柱裾部内面に明瞭な稜あり。小片。	マメツ(ナデ)	ナデ(マメツ)	明褐色 乳褐色	密 ◎		
17	高坏	底径 (12.0) 残高 1.8	柱裾部内面に明瞭な稜あり。脚端部はわずかに外反。小片。	ナデ(マメツ)	マメツ(ナデ)	暗褐色 暗褐色	石・長(1) 金 ◎		
18	高坏	底径 (12.0) 残高 2.4	小片。	マメツ	マメツ	淡黄色 淡橙黄色	密 ◎	黒斑	
19	椀	口径 (12.9) 器高 4.2	口縁端部は尖り気味。1/3の残存。	ナデ・ハケ	ナデ・ミガキ	橙褐色 橙褐色	密・金 ◎		
20	坏蓋	口径 (12.9) 器高 4.7	断面三角形状の鈍い稜。口縁端部は内傾。1/2の残存。	㊤回転ヘラケズリ ㊀回転ナデ	㊤ナデ ㊀回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		18
21	坏蓋	口径 (12.3) 残高 4.2	口縁端部は内傾する凹面をなす。	㊤回転ヘラケズリ ㊀回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
22	坏身	口径 (11.2) 残高 4.6	たちあがり端部は内傾する凹面をなす。1/4の残存。	㊀回転ナデ ㊁回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		18
23	坏身	口径 (10.6) 残高 4.4	たちあがり端部は内傾。1/4の残存。	㊀回転ナデ ㊁回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
24	坏身	口径 (11.3) 残高 3.1	たちあがり端部は内傾。小片。	回転ナデ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密 ○		
25	壺	残高 3.9	ハケ状工具による列点文。小片。	胴上ハケ(7本/cm) 胴下ハケ→ミガキ	ナデ	茶褐色 暗茶褐色	石・長(1～2) 金 ◎		
26	壺	残高 5.0	貼付凸帯文2条。凸帯上に布目状押圧痕あり。	ハケ→ヨコナデ ヨコナデ	ミガキ ナデ	淡茶色 淡茶色	石・長(1～2) ◎		
27	分銅形土製品	残長 3.8	表裏面に竹管文(φ 0.15 cm)、裏面に未貫通の円孔(φ 0.20 cm)あり。	ナデ	—	灰茶褐色	石・長(1)金 ◎	黒斑	18

表 88　SB3 出土遺物観察表　　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
28	有孔円板	ほぼ完形	滑石	2.15	2.55	0.30	3.28	円孔(φ 0.18 cm)	19
29	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	2.10	1.60	0.30	0.95		18

表 89　SB3 出土遺物観察表　　鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
鉄A	不明	不明	鉄	7.7	1.1	4.1	6.2		19

表 90　SB3 出土遺物観察表　　玉類　　(1)

番号	器種	残存	材質	色	法量 直径(cm)	法量 高さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
30	臼玉	完形	滑石	灰色	0.45	0.15	0.02		19
31	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.39	0.16	0.02		19
32	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.43	0.11	0.02		19

SB3 出土遺物観察表　　玉類　　(2)

番号	器種	残存	材質	色	法量 直径(cm)	法量 高さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
33	臼玉	完形	滑石	灰色	0.42	0.17	0.03		19
34	臼玉	ほぼ完形	滑石	緑灰色	0.40	0.23	0.03		19
35	臼玉	完形	滑石	褐灰色	0.40	0.21	0.04		19
36	臼玉	完形	滑石	褐灰色	0.39	0.26	0.04		19
37	臼玉	完形	滑石	褐灰色	0.48	0.14	0.04		19
38	臼玉	ほぼ完形	滑石	灰色	0.39	0.19	0.04		19
39	臼玉	完形	滑石	灰色	0.38	0.21	0.04		19
40	臼玉	ほぼ完形	滑石	灰色	0.42	0.13	0.04		19
41	臼玉	完形	滑石	褐灰色	0.43	0.22	0.04		19
42	臼玉	完形	滑石	灰色	0.43	0.17	0.04		19
43	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.43	0.21	0.04		19
44	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.42	0.22	0.04		19
45	臼玉	完形	滑石	灰色	0.42	0.30	0.05		19
46	臼玉	完形	滑石	褐灰色	0.51	0.16	0.05		19
47	臼玉	完形	滑石	灰色	0.43	0.19	0.05		19
48	臼玉	完形	滑石	灰色	0.47	0.18	0.05		19
49	臼玉	ほぼ完形	滑石	灰色	0.44	0.22	0.05		19
50	臼玉	完形	滑石	褐灰色	0.44	0.16	0.05		19
51	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.43	0.19	0.05		19
52	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.40	0.19	0.05		19
53	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.43	0.30	0.06		19
54	臼玉	ほぼ完形	滑石	褐灰色	0.45	0.30	0.06		19
55	臼玉	ほぼ完形	滑石	褐灰色	0.40	0.28	0.06		19
56	臼玉	完形	滑石	褐灰色	0.40	0.29	0.06		19
57	臼玉	完形	滑石	褐灰色	0.39	0.23	0.06		19
58	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.46	0.22	0.06		19
59	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.44	0.21	0.06		19
60	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.40	0.21	0.06		19
61	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.40	0.24	0.06		19
62	臼玉	完形	滑石	灰色	0.41	0.20	0.06		19
63	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.41	0.24	0.06		19
64	臼玉	完形	滑石	灰色	0.41	0.20	0.06		19

SB3 出土遺物観察表　　玉類　　（3）

番号	器種	残存	材質	色	法量 直径（cm）	法量 高さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
65	臼玉	完形	滑石	灰色	0.40	0.21	0.06		19
66	臼玉	完形	滑石	灰色	0.50	0.19	0.06		19
67	臼玉	完形	滑石	灰色	0.39	0.35	0.06		19
68	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.40	0.28	0.06		19
69	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.45	0.21	0.06		19
70	臼玉	完形	滑石	灰色	0.41	0.23	0.06		19
71	臼玉	完形	滑石	褐灰色	0.40	0.22	0.06		19
72	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.39	0.22	0.06		19
73	臼玉	完形	滑石	灰色	0.39	0.21	0.06		19
74	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.41	0.21	0.06		19
75	臼玉	完形	滑石	褐灰色	0.40	0.22	0.06		19
76	臼玉	完形	滑石	灰色	0.41	0.21	0.06		19
77	臼玉	完形	滑石	灰色	0.42	0.21	0.06		19
78	臼玉	完形	滑石	灰色	0.41	0.22	0.06		19
79	臼玉	完形	滑石	灰色	0.45	0.29	0.06		19
80	臼玉	完形	滑石	褐灰色	0.41	0.21	0.07		19
81	臼玉	完形	滑石	灰色	0.40	0.21	0.07		19
82	臼玉	完形	滑石	灰色	0.45	0.26	0.07		19
83	臼玉	完形	滑石	褐灰色	0.42	0.21	0.07		19
84	臼玉	完形	滑石	灰色	0.41	0.22	0.07		19
85	臼玉	完形	滑石	灰色	0.43	0.21	0.07		19
86	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.40	0.25	0.07		19
87	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.43	0.29	0.07		19
88	臼玉	完形	滑石	褐灰色	0.47	0.22	0.07		19
89	臼玉	完形	滑石	灰色	0.41	0.31	0.07		19
90	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.41	0.34	0.07		19
91	臼玉	完形	滑石	灰色	0.40	0.31	0.07		19
92	臼玉	完形	滑石	灰色	0.43	0.22	0.07		19
93	臼玉	完形	滑石	灰色	0.41	0.31	0.07		19
94	臼玉	完形	滑石	灰色	0.45	0.25	0.07		19
95	臼玉	完形	滑石	灰色	0.38	0.31	0.07		19
96	臼玉	ほぼ完形	滑石	灰色	0.41	0.28	0.07		19

SB3 出土遺物観察表　　玉類　　(4)

番号	器種	残存	材質	色	法量 直径(cm)	法量 高さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
97	臼玉	完形	滑石	灰色	0.43	0.34	0.08		19
98	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.43	0.25	0.08		19
99	臼玉	完形	滑石	灰色	0.45	0.28	0.08		19
100	臼玉	完形	滑石	灰色	0.45	0.27	0.08		19
101	臼玉	完形	滑石	灰色	0.46	0.32	0.08		19
102	臼玉	完形	滑石	灰色	0.40	0.33	0.08		19
103	臼玉	ほぼ完形	滑石	黒灰色	0.46	0.29	0.08		19
104	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.41	0.34	0.08		19
105	臼玉	完形	滑石	褐灰色	0.43	0.30	0.09		19
106	臼玉	ほぼ完形	滑石	褐灰色	0.46	0.33	0.09		19
107	臼玉	完形	滑石	褐灰色	0.42	0.36	0.09		19
108	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.45	0.34	0.10		19
109	臼玉	完形	滑石	灰色	0.44	0.31	0.10		19
110	臼玉	ほぼ完形	滑石	緑灰色	0.46	0.32	0.10		19
111	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.49	0.27	0.10		19
112	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.47	0.25	0.10		19
113	臼玉	完形	滑石	灰色	0.50	0.39	0.13		19
114	臼玉	完形	滑石	灰色	0.40	0.34	0.07		19
115	臼玉	完形	滑石	灰色	0.42	0.32	0.07		19
116	小玉	完形	ガラス	紺	0.37	0.32	0.06		19
117	小玉	完形	ガラス	濃紺	0.50	0.28	0.10		19
118	小玉	完形	ガラス	濃紺	0.55	0.30	0.13		19
119	小玉	ほぼ完形	ガラス	濃紺	0.55	0.40	0.14		19
120	小玉	完形	ガラス	濃紺	0.53	0.42	0.15		19

表 91　SB2 出土遺物観察表　　土製品　　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
121	甕	口径 (17.4) 残高 4.1	口縁端部は内傾し、口縁端面はやや丸味をもつ。小片。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	長(1～3) ◎		
122	甕	口径 (18.5) 残高 3.6	口縁中位に稜、口縁端部は内傾し、口縁端面はやや丸味をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	密・金 ◎		19
123	甕	口径 (16.4) 残高 3.0	口縁中位に稜、口縁端部は内傾し、口縁端面はやや丸味をもつ。	マメツ (ヨコナデ)	ヨコナデ	橙褐色 灰色	石・長(1～3) ◎	黒斑?	19
124	甕	口径 (24.1) 残高 3.2	口縁中位に稜、口縁端部は外方にやや肥厚。小片。	ナデ→ヨコナデ	マメツ (ヨコナデ)	茶褐色 橙褐色	石・長(1～3) 金 ◎		19

SB2 出土遺物観察表　　土製品　　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
125	甕	口径 (19.3) 残高 3.0	口縁中位に稜、口縁端部はわずかに外方へ肥厚。小片。	マメツ (ヨコナデ)	マメツ (ヨコナデ)	茶褐色 橙褐色	石・長(1～3) 金 ◎		
126	甕	口径 (19.5) 残高 2.7	口縁中位に稜、口縁端部は丸い。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 茶褐色	石・長(1～2) 金 ◎		
127	甑	口径 (23.5) 残高 10.4	直口口縁。口縁端部は外傾する。	ハケ(7本/cm)	ハケ(7本/cm)	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) 金 ◎		
128	坏蓋	口径 (11.5) 残高 4.5	断面三角形状の鋭い稜。口縁端部は内傾する凹面をなす。1/4の残存。	㊍回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
129	坏身	口径 (11.1) 残高 4.0	たちあがり端部は内傾する凹面をなす。	回転ナデ ㊋回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 茶褐色	密 ◎		
130	高坏	底径 (11.4) 残高 5.8	3方向の長方形状透かしあり。1/3の残存。	カキメ ㊋回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
131	壺	口径 (10.7) 残高 4.5	直口壺。凸線2条+波状文2段。口縁端部は丸い。	㊐回転ナデ カキメ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		19
132	壺	口径 (19.4) 残高 2.6	波状文5条以上。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		19
133	甕	残高 7.7	胴部片。	平行叩き →カキメ	円弧叩き →スリ消し	青灰色 青灰色	密 ◎		
134	擂鉢	口径 (31.2) 残高 5.3	体部内面に条線3～6条あり。	ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	長(1～5) ◎		

表92　SB2 出土遺物観察表　　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
135	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	3.20	1.80	0.45	2.48		19
136	石鏃	完存	サヌカイト	1.05	1.40	0.23	0.20		19
137	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	1.10	1.15	0.22	0.19		19

表93　SB2 出土遺物観察表　　鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
鉄B	鉄鏃	茎部	鉄	5.2	1.0	3.6	3.7		19

表94　SB2 出土遺物観察表　　玉類　　(1)

番号	器種	残存	材質	色	法量 直径(cm)	法量 高さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
138	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.30	0.16	0.02		19
139	臼玉	ほぼ完形	滑石	緑灰色	0.38	0.26	0.06		19
140	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.42	0.19	0.07		19
141	臼玉	ほぼ完形	滑石	黒灰色	0.44	0.25	0.09		19
142	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.46	0.33	0.10		19
143	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.50	0.32	0.12		19

SB2 出土遺物観察表　　玉類

（2）

番号	器種	残存	材質	色	法量 直径（cm）	法量 高さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
144	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.40	0.19	0.03		19
145	臼玉	完形	滑石	灰色	0.42	0.22	0.06		19
146	臼玉	ほぼ完形	滑石	黒灰色	0.48	0.22	0.08		19

表 95　SB1 出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
147	甕	口径 (18.4) 残高 2.7	口縁端部は内傾し、内側に肥厚。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶色 淡茶色	石・長(1～2) 金 ◎		
148	甕	口径 (17.4) 残高 4.1	口縁端部は内傾し、内側に肥厚。口縁端面は凹む。	ヨコナデ 工具痕	㊤ヨコハケ(マメツ) ㊥ナデ・ケズリ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) 金 ◎		19
149	甕	口径 (19.8) 残高 3.5	口縁端部は内傾し、口縁端面は丸味をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	密・金 ◎		19
150	甕	口径 (19.8) 残高 2.8	口縁端部は内傾し、口頸部内面に稜をもつ。	ヨコナデ (マメツ)	マメツ	橙灰色 橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
151	甕	口径 (19.4) 残高 3.5	「S」字状口縁。口縁端部は丸い。	マメツ	ナデ	暗褐色 暗褐色	石・長(1～2) 金 ◎		19
152	鉢	口径 (31.2) 残高 7.3	外反口縁。口縁端部は丸い。	ハケ	ハケ→ナデ？	茶褐色 黄褐色	石・長(1～2) 金 ◎		
153	坏蓋	残高 3.2	天井部と口縁部の境界に凹線１条。天井部に刻目？。	㊦回転ヘラケズリ ㊤回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
154	坏身	口径 (11.8) 残高 3.5	たちあがり端部は内傾。	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
155	坏身	口径 (13.1) 残高 3.0	たちあがり端部は尖り気味に丸い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
156	坏身	口径 (11.2) 残高 1.9	たちあがりは短く内傾し、たちあがり端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		19
157	坏身	口径 (9.2) 残高 2.2	たちあがりは短く内傾し、たちあがり端部は尖る。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		19
158	高坏	底径 (8.8) 残高 3.0	小片。	カキメ→回転ナデ ㊥回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
159	椀	底径 (5.6) 残高 2.7	体部外面に沈線１条。底部外面に線刻あり。	回転ナデ・カキメ ヘラケズリ(手持ち)	回転ナデ ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		19
160	甕	口径 (22.0) 残高 1.2	口縁端面に凹線文１条。	ヨコナデ	ヨコナデ	明茶色 明茶色	石・長(1) ◎		
161	甕	残高 2.2	刻目凸帯文１条。	マメツ (ヨコナデ)	マメツ (ヨコナデ)	淡茶色 暗茶色	石・長(1～3) ◎		
162	壺	残高 5.9	ヘラ状工具による刻目。	ハケ(5本／cm)	ミガキ ナデ	暗茶色 暗茶色	石・長(1～3) 金 ◎		
163	高坏	底径 (10.7) 残高 5.4	沈線文５条＋凹線文２条。矢羽根透かし２ヶ。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶褐色 乳褐色	石・長(1～2) ◎		

表96　SB1出土遺物観察表　　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
164	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	3.45	1.90	0.50	3.32		20
165	砥石	1／3	不明	(7.40)	6.25	4.20	276.81		20
166	砥石	1／4	不明	(6.20)	7.95	4.50	246.09		20

表97　SK9出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
167	甕	口径 17.2 残高 4.3	内傾する口縁部。口縁端部は内傾する面をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ (マメツ)	橙褐色 茶褐色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	20
168	甕	口径 (16.2) 残高 3.5	口縁端部は尖り気味に丸い。小片。	ハケ(5～6本/cm) →ナデ消し	ハケ(5～6本/cm) →ナデ消し	褐色 褐色	石・長(1～2) ◎		
169	甕	口径 (13.6) 残高 5.8	直立口縁。口縁端部は尖り気味に丸い。	マメツ	㊐ヨコナデ ㊗ヨコナデ→ナデ	茶褐色 褐色	石・長(1～3) 金 ◎		
170	高坏	口径 (15.4) 残高 4.7	坏部下位に稜あり。口縁部はやや外反。	ヨコナデ (マメツ)	マメツ	乳褐色 乳褐色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	
171	高坏	口径 (13.6) 残高 3.8	口縁部は、やや外反。	㊐ヨコナデ ㊙マメツ	ヨコナデ・ミガキ? (マメツ)	橙褐色 橙褐色	石・長(1～2) ◎		
172	高坏	口径 (14.9) 残高 3.2	口縁部は、わずかに外反。	マメツ	マメツ(ナデ)	褐色 褐色	石・長(1～2) ◎		
173	高坏	残高 2.8	坏部下位に稜あり。	ナデ(マメツ)	ナデ	乳赤白色 乳赤白色	密・金 ◎		
174	高坏	底径 (12.5) 残高 2.0	柱裾部内面に稜あり。	マメツ	マメツ	橙茶色 橙茶色	密 ◎		
175	壺	残高 3.1	凸線1条＋波状文8条。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白褐色	密 ◎		20
176	壺	残高 5.2	肩部に波状文9条。	平行叩き →回転ナデ	ナデ	淡茶灰色 淡灰色	密 ○		20
177	甕	残高 17.1	胴部片。	平行叩き →ナデ	円弧叩き →スリ消し	青灰色 青灰色	密 ◎		
178	甕	残高 6.1	瓦質。	平行叩き	叩き→スリ消し	淡灰色 乳灰色	密 ◎		
179	甕	残高 3.8	ヘラ描き沈線文2条。小片。	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	暗乳灰色 暗乳灰色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	
180	壺	口径 (33.4) 残高 1.6	下垂口縁。口縁端面に櫛描き波状文5条。	ヨコナデ	ミガキ	暗茶色 暗茶色	石・長(1)金 ◎	黒斑	
181	高坏	残高 3.9	坏部下位に稜をもつ。	ヨコナデ(マメツ) (一部ハケ？)	マメツ(ナデ)	淡褐色 淡褐色	長(1～2) ◎		
182	鉢	底径 (7.6) 残高 3.2	上げ底。	ナデ・ヨコナデ	ナデ	暗褐色 暗灰色	石・長(1～4) 金 ◎	黒斑	

表98　SK8出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
183	坏	底径 (8.4) 残高 2.1	平底。	マメツ	ナデ(マメツ)	乳白色 乳白色	密 ◎		
184	椀	残高 0.9	瓦質。小片。	ナデ	ナデ(マメツ)	乳白灰色 乳白褐色	密 ◎		

表99　SP出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
185	甕	口径 (16.0) 残高 12.8	外反口縁。口縁端面はナデ凹む。	㊀ヨコナデ→ナデ ㊁ナデ→ミガキ	㊀ヨコナデ ㊁ミガキ・ケズリ	褐色 褐橙色	石・長(1～3) ◎	SP076 黒斑	
186	壺	口径 (19.6) 残高 2.6	口縁端部は上下方に拡張。口縁端面に凹線文3条。	ヨコナデ ハケ(マメツ)	ナデ(マメツ)	淡茶色 淡茶色	石・長(1～3) ◎	SP101 黒斑	
187	甕	底径 (9.6) 残高 2.5	上げ底。	ミガキ(マメツ) ヨコナデ	ヨコナデ	褐橙色 褐橙色	石・長(1～2) 金 ◎	SP178	
188	甕	底径 (10.4) 残高 3.8	平底。	ハケ→ミガキ	ナデ	茶褐色 橙褐色	石・長(1～3) 金 ◎	SP044 黒斑	
189	壺	底径 (6.1) 残高 5.5	やや上げ底。	マメツ	板ナデ? (マメツ)	褐色 淡橙色	石・長(1～4) ◎	SP079	
190	坏蓋	口径 (13.1) 残高 3.2	口縁部外面に沈線1条。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	SP105	
191	高坏	残高 2.8	無蓋高坏。凸線2条+波状文5条以上。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SP244	
192	高坏	底径 (8.4) 残高 3.2	小片。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎	SP252	
193	甕	口径 (18.4) 残高 3.9	外反口縁。	ナデ	ナデ	乳白色 乳白色	密 ◎	SP243	
194	坏	口径 (10.2) 残高 2.1	底部に回転糸切り痕+スノコ痕。1/3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	密・金 ◎	SP088 煤付着	20
195	土釜	残高 6.1	脚部片。	ナデ	—	茶褐色	石・長(1～4) 金 ◎	SP078	
196	片口鉢	残高 3.6	小片。	ハケ(4本/cm) →ナデ	ナデ・ヨコナデ	淡乳褐色 黄茶褐色	石・長(1～2) ◎	SP105	20
197	甑	残高 5.2	円孔(φ3.1cm)4ヶ所あり。	ナデ(マメツ)	マメツ	橙褐色 乳褐色	石・長(1)金 ◎	SP187	20

表100　SP出土遺物観察表　　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
198	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	3.90	2.20	0.45	3.77	SP061	
199	石鏃	完存	サヌカイト	2.60	1.50	0.60	2.06	SP061	

表101　第Ⅵ層出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
200	壺	口径 (32.8) 残高 3.8	口縁部は上下方に拡張。口縁端面に凹線文6条。	マメツ	マメツ	淡黄色 淡橙色	石・長(1～5) ◎		20
201	壺	口径 (14.0) 残高 2.3	口縁部は上下方に拡張。口縁端面に凹線文3条。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1)金 ◎		
202	壺	残高 4.8	細沈線文5条以上＋ハケ状工具による刻目。	ミガキ	ナデ	橙褐色 橙褐色	石・長(1～4) 金 ◎		20
203	甕	口径 (21.6) 残高 3.7	「S」字状口縁。口縁端部は内傾。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙色 淡橙色	密 ◎		
204	甑	口径 (25.9) 残高 5.0	直口口縁。口縁部は、やや内側に肥厚。	ナデ	(口端)ヨコナデ (胴)ナデ	暗褐色 淡灰褐色	石・長(1～2) 金 ◎		
205	土釜	口径 (36.6) 残高 4.7	口縁上端部は面をもつ。	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	(口端)ヨコナデ (胴)ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3) 金 ◎	煤付着	20
206	土釜	残高 14.6	脚部片。	ナデ	—	暗茶褐色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	20
207	坏蓋	口径 (11.7) 残高 4.3	断面三角形状の鋭い稜。1/3の残存。	(口)回転ナデ (天)回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰茶色 暗灰色	密 ◎		
208	坏身	口径 (11.7) 残高 4.4	たちあがり端部は内傾。	(口)回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
209	坏身	口径 (12.4) 残高 4.0	たちあがり端部は尖り気味。	(口)回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	回転ナデ	淡灰色 淡灰色	密 ◎		
210	坏	口径 (8.9) 残高 3.3	口縁部は、やや外反。	回転ナデ (マメツ)	回転ナデ (マメツ)	乳灰色 乳灰色	密 ◎		
211	高坏	つまみ径 (3.4) 残高 1.6	有蓋高坏の蓋。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表102　地点不明出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
212	壺	残高 9.0	ハケ状工具による列点文。	(頸)ヨコナデ (胴)ハケ(8本/cm)	(胴)ハケ→ナデ 板ナデ？→ナデ	淡茶色 淡茶色	石・長(1～3) ◎		
213	土釜	口径 (20.2) 残高 2.6	断面三角形状の貼付口縁。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石・長(1～2) ◎		
214	甕	口径 (28.5) 残高 3.1	亀山焼。小片。	ナデ・ヨコナデ	ハケ(4～6本/cm)	暗灰褐色 暗灰褐色	石・長(1～3) ◎		20

第４章　樽味高木遺跡12次調査における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

Ⅰ．試料と目的

樽味高木遺跡12次調査では、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居が多数確認された。ここでは、SB1（古墳時代後期前葉）、SB2（弥生時代中期後葉）、SB3（古墳時代）、SB4（古墳時代後期前葉）、SB8（弥生時代中期後葉）、SB12（古墳時代後期前葉）の６遺構から採取された試料Ａ～試料Ｆの６試料について植物珪酸体分析および花粉分析を行い、各遺構における植物利用および周辺の植生環境の推定を試みた。

Ⅱ．植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、2000）。

2. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原、1976）を用いて、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
2）試料約１ｇに対し直径約40μｍのガラスビーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
3）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
5）沈底法による20μｍ以下の微粒子除去
6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
7）検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10 － 5g）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節・チシマザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山、2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

3. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表103および第90図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

クスノキ科、その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

分析の結果、各試料からネザサ節型が多量に検出され、イネ、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ミヤコザサ節型なども検出された。また、部分的にキビ族型、ヨシ属、樹木（その他）なども少量検出された。イネの密度は700～3,500個/gと比較的低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを下回っている。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねネザサ節型が優勢であり、試料Aではイネもやや多くなっている。なお、遺構の時期による植物珪酸体組成や密度の差異は特に認められなかった。

4. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居の周辺は、メダケ属（おもにネザサ節）を主体としてススキ属やチガヤ属なども生育する日当たりの良い開かれた環境であったと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。また、当時は周辺で稲作が行われており、そこから何らかの形で住居内にイネの植物珪酸体が混入したと考えられる。

これらのイネ科植物の茎葉は有用であり、当時は住居の屋根材や燃料などとして盛んに利用されていたと考えられるが、今回の分析では比較試料（遺構外の試料など）について検討が行われていないことから確定的なことは言えない。

【文献】

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学、9、p.15-29.

表103　植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

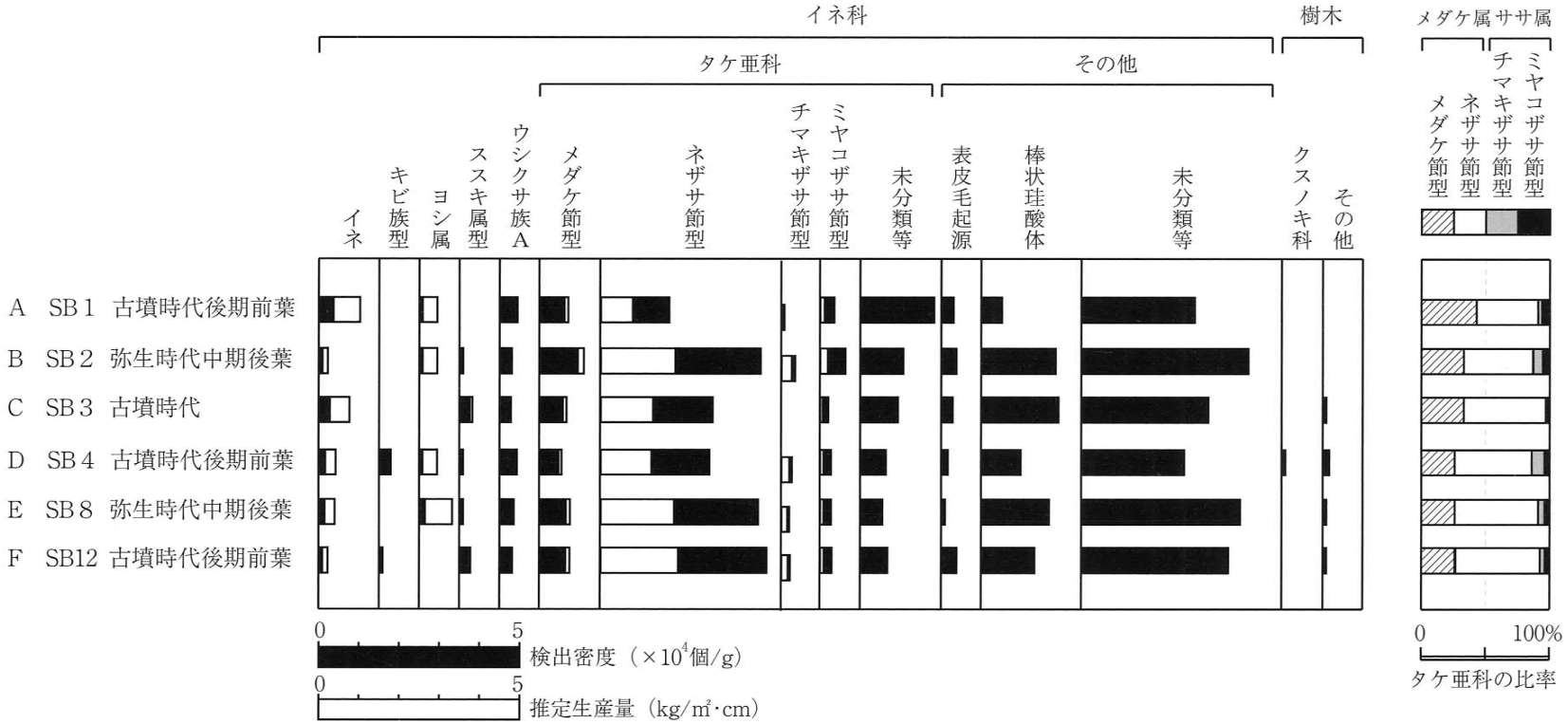
分類群	学名	地点・試料	ＳＢ１ A	ＳＢ２ B	ＳＢ３ C	ＳＢ４ D	ＳＢ８ E	ＳＢ12 F
イネ科	Gramineae (Grasses)							
イネ	Oryza sativa		35	7	26	14	13	7
キビ族型	Paniceae type					27		7
ヨシ属	Phragmites		7	7		7	13	
ススキ属型	Miscanthus type			7	26	7	7	22
ウシクサ族Ａ	Andropogoneae A type		42	28	26	41	33	29
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)							
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus		63	98	59	48	67	66
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa		168	393	275	267	387	408
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.		7	35		27	20	22
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi		35	63	20	27	27	29
未分類等	Others		182	105	92	62	53	66
その他のイネ科	Others							
表皮毛起源	Husk hair origin		28	35	26	14	7	36
棒状珪酸体	Rodshaped		49	183	190	96	167	131
未分類等	Others		280	414	314	254	393	364
樹木起源	Arboreal							
クスノキ科	Lauraceae					7		
その他	Others				7	14	7	7
植物珪酸体総数	Total		895	1377	1061	912	1194	1194

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

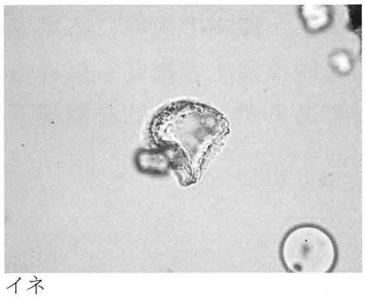
イネ	Oryza sativa	1.03	0.21	0.77	0.40	0.39	0.21
ヨシ属	Phragmites	0.44	0.44		0.43	0.84	
ススキ属型	Miscanthus type		0.09	0.32	0.08	0.08	0.27
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	0.73	1.14	0.68	0.56	0.77	0.76
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	0.81	1.89	1.32	1.28	1.86	1.96
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	0.05	0.26		0.21	0.15	0.16
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	0.10	0.19	0.06	0.08	0.08	0.09

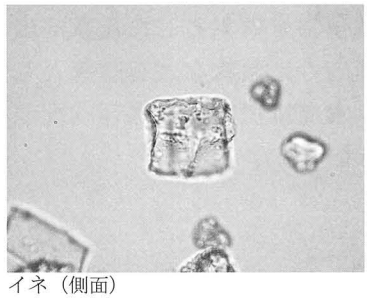
タケ亜科の比率（%）

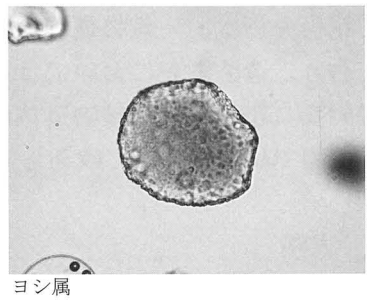
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	43	33	33	26	27	26
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	48	54	64	60	65	66
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	3	8		10	5	6
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	6	5	3	4	3	3

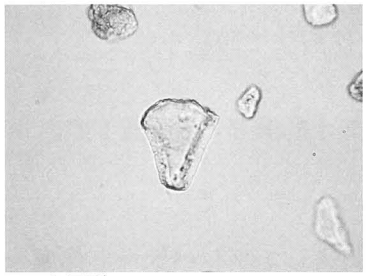


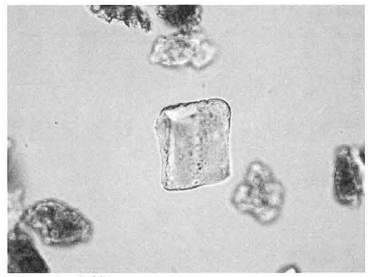
第90図　植物珪酸体分析結果

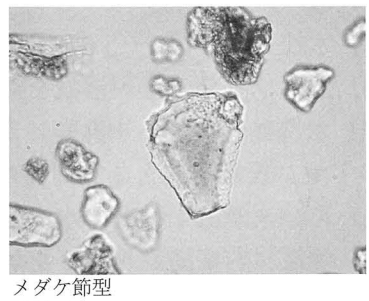

イネ
試料C

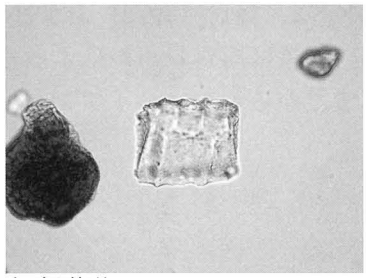

イネ（側面）
試料E

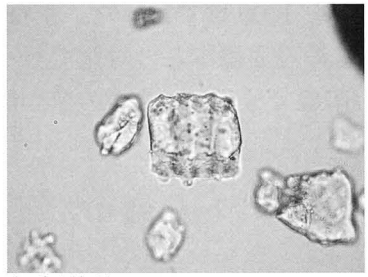

ヨシ属
試料A

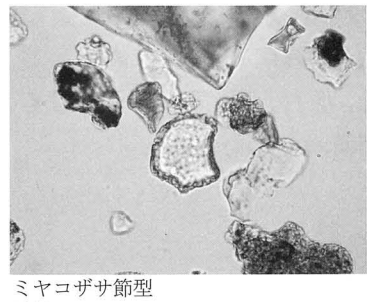

ススキ属型
試料C

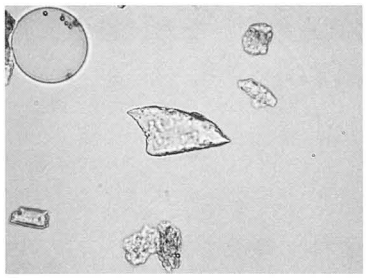

ウシクサ族A
試料F

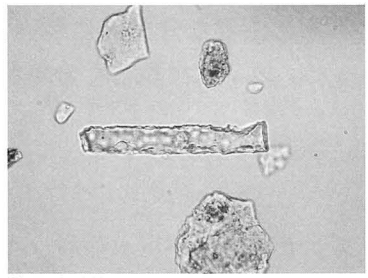

メダケ節型
試料E

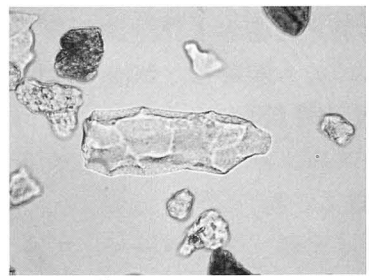

ネザサ節型
試料C


ネザサ節型
試料F


ミヤコザサ節型
試料D


表皮毛起源
試料F


棒状珪酸体
試料E


クスノキ科
試料D

植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真　　50μm

Ⅲ. 花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

1）0.5％リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎する。
2）水洗処理の後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
4）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
5）再び氷酢酸を加えて水洗処理
6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
7）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。

3. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉3、草本花粉6、シダ植物胞子2形態の計11である。これらの学名と和名および粒数を表104に示し、主要な分類群について写真を示す。なお、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕
スギ、ハンノキ属、クマシデ属－アサダ

〔草本花粉〕
イネ科、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕
単条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

1）SB1（古墳時代後期前葉）
スギ、イネ科、ヨモギ属、シダ植物三条溝胞子がわずかに検出された。

2）SB2（弥生時代中期後葉）
イネ科、アブラナ科、タンポポ亜科がわずかに検出された。

3）SB3（古墳時代）
クマシデ属－アサダ、タンポポ亜科、ヨモギ属がわずかに検出された。

4）SB4（古墳時代後期前葉）
ハンノキ属、イネ科がわずかに検出された。

5）SB8（弥生時代中期後葉）
ヨモギ属がわずかに検出された。

6）SB12（古墳時代後期前葉）
イネ科、アカザ科－ヒユ科、キク亜科、ヨモギ属、シダ植物単条溝胞子がわずかに検出された。

4. 花粉分析から推定される植生と環境

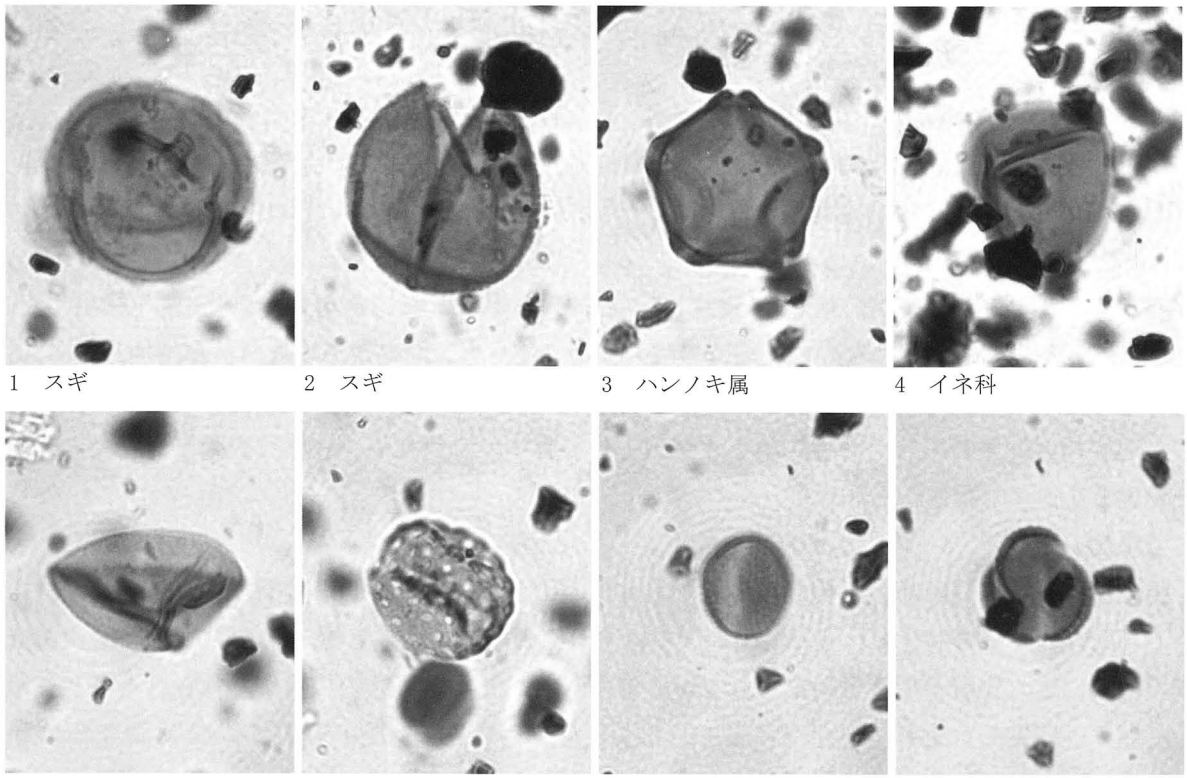
花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難であるが、SB2（弥生時代中期後葉）ではイネ科、アブラナ科、タンポポ亜科が生育するような日当たりの良い比較的乾燥した環境が示唆され、SB12（古墳時代後期前葉）でもイネ科、アカザ科－ヒユ科、キク亜科、ヨモギ属が生育するような同様の環境が示唆される。花粉があまり検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

【文献】

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p.
中村純（1973）花粉分析．古今書院、p.82-110.

表104　花粉分析結果

分類群		ＳＢ１	ＳＢ２	ＳＢ３	ＳＢ４	ＳＢ８	ＳＢ12
学名	和名	A	B	C	D	E	F
Arboreal pollen	樹木花粉						
Cryptomeria japonica	スギ	2					
Alnus	ハンノキ属				1		
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ			1			
Nonarboreal pollen	草本花粉						
Gramineae	イネ科	1	3		1		2
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科						1
Cruciferae	アブラナ科		1				
Lactucoideae	タンポポ亜科		1	1			
Asteroideae	キク亜科						1
Artemisia	ヨモギ属	3		1		1	1
Fern spore	シダ植物胞子						
Monolate type spore	単条溝胞子						1
Trilate type spore	三条溝胞子	1					
Arboreal pollen	樹木花粉	2	0	1	1	0	0
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	4	5	2	1	1	5
Total pollen	花粉総数	6	5	3	2	1	5
Unknown pollen	未同定花粉	1	0	0	0	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	1	0	0	0	0	1
Helminth eggs	寄生虫卵	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)	(+++)	(+)	(+)	(+)	(+)



1　スギ　2　スギ　3　ハンノキ属　4　イネ科

5　イネ科　6　アカザ科－ヒユ科　7 ヨモギ属　8　ヨモギ属

10μm

花粉・胞子の顕微鏡写真

第５章　調査の成果と課題

今回の調査の結果、弥生時代から近世までの集落関連遺構を中心とし、弥生土器から須恵器、土師器、収穫具、祭祀具、装飾品などの遺物を確認することに至った。

弥生時代

樽味高木12次調査で竪穴住居５棟、周溝１条、土坑２基、樽味高木13次調査で土坑６基を検出した。遺構の殆どが中期後半頃のもので、周辺の調査においても当該期の遺跡や遺構数が増加しており、これらに伴い当調査地一帯にも弥生集落が定着するものと考えることができる。また、SB6からは当地産の石材を利用した磨製石鏃２点が出土しており、北部九州の製作技術の伝播を考える上で貴重な遺物が確認された。

古墳時代

竪穴住居や掘立柱建物、土坑を検出した。遺構の殆どが中期後半から後期にかけての時期のもので、既存の調査事例を合わせると当地区では検出例が多い時期である。特に樽味高木12次調査においては竪穴住居が切り合いをもちながら集中しており、継続的に集落が経営されたことを示しており、安定した生活基盤が存在していたことを窺わせる。また、樽味高木13次調査SB3から出土した大量の装飾品は住居廃絶に伴う祭祀行為の一様相であり、祭祀のあり方を考える上での貴重な資料である。

古　代

自然流路や性格不明遺構、遺物包含層が確認されており、東隣の樽味高木遺跡６次調査で確認された鍛冶関連遺構などとあわせて周辺には、８世紀代とその前後頃の古代集落が展開していたことが想定される。

中　世

樽味高木12次調査では掘立柱建物、樽味高木13次調査からは掘立柱建物や溝、土坑、柱穴などを検出しており集落が存在することが確認できた。しかし、遺構が希薄であり集落の様相は今後の周辺の調査を含め検討する必要がある。

近　世

樽味高木12次調査で確認された南北や東西方向に直線的に延びる浅い溝は農耕に伴う溝と考えられ、生産域の存在を示す資料である。SK5は墓の可能性をもつ土坑であり、南東約70ｍに位置する樽味高木遺跡２次調査では２基の塚が確認されている。このほかには生活関連遺構が確認されていないことから、この辺りに墓域や信仰に伴う空間があったことも推測される。

今回の調査成果は、石手川中流域南岸の北東から南西方向へ延びる微高地の稜線上とやや北へ下がった北西端部に位置する２ヶ所の調査報告を時代別にまとめた。周辺では近年の調査事例の充実により、集落構造の解明が進んでいるが、微高地の稜線上から北西端部付近にかけては集落の広がりや動向、変遷などをさらに明確にする必要がある。

写真図版

写真図版データ

1.　遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35㎜判で補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン90㎜他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67　55㎜他
	ニコンニューFM2		ズームニッコール28～85㎜他
フィルム	白　黒　ネオパンSS・アクロス		
	カラー　アスティア100F		

2.　遺物は、4×5判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビュー45G
レンズ	ジンマーS 240㎜F 5.6他
ストロボ	コメット/CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	ネオパンアクロス

3.　単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキー45MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135㎜ F5.6A・50㎜ F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードⅣ RCペーパー

4.　製版　　写真図版175線

印刷	オフセット印刷
用紙	ニューVマット
製本	アジロ綴じ

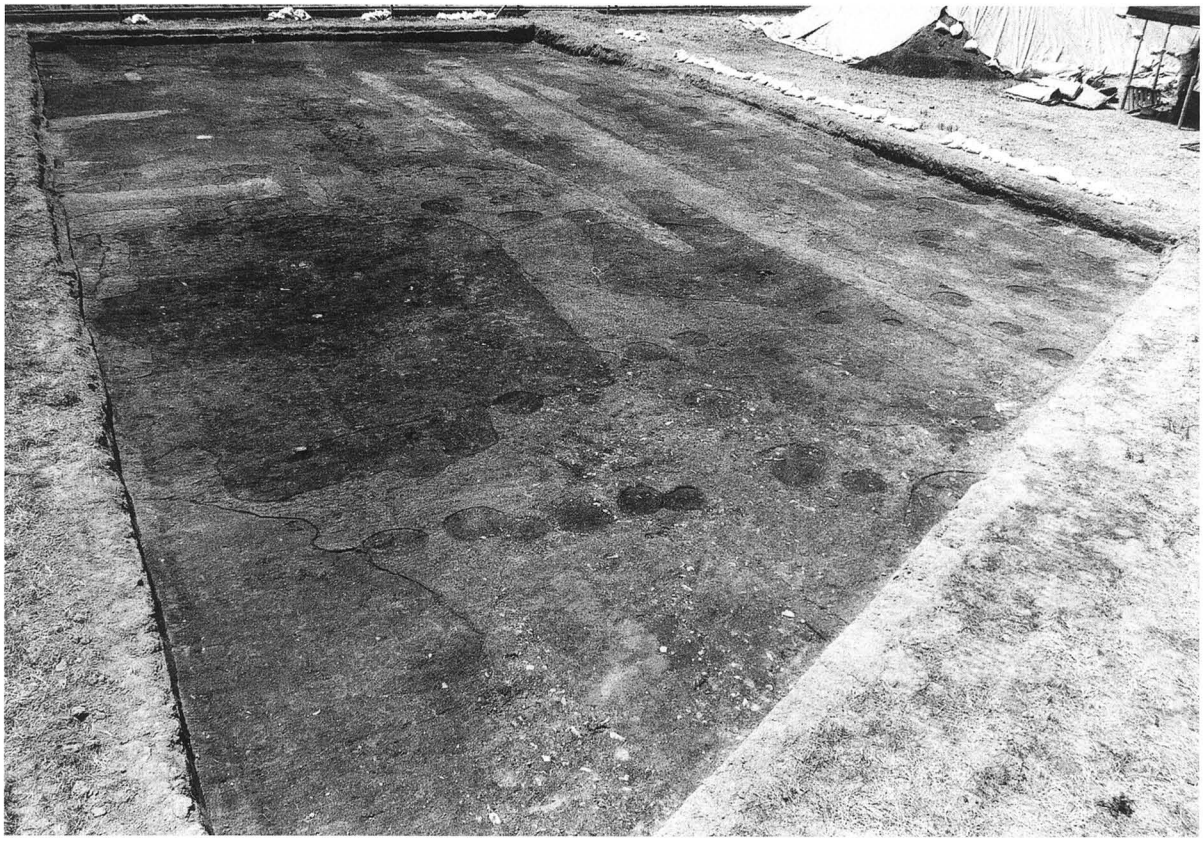
【参考】『埋文写真研究』vol.1～19　『報告書制作ガイド』

［大西朋子］

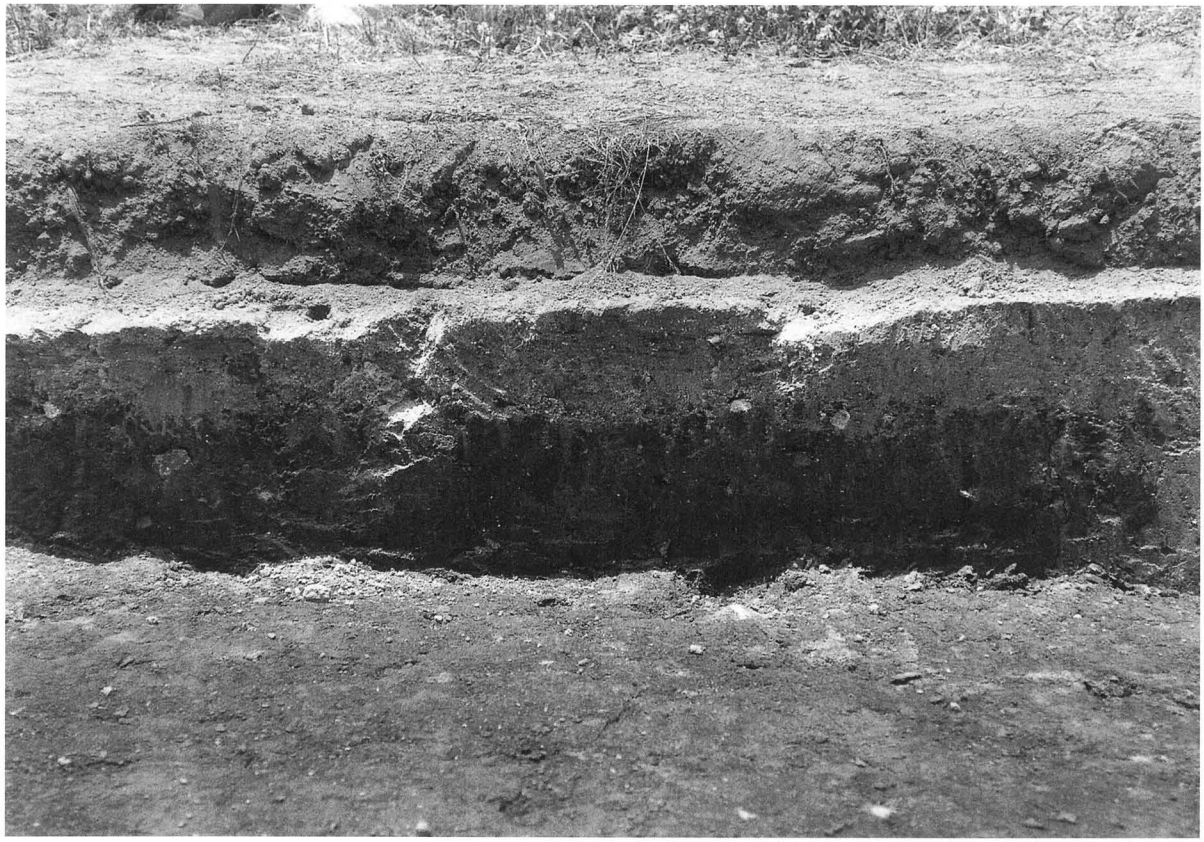
1．重機による掘削（北より）

2．調査風景（北東より）

図版二



1．遺構検出状況（北東より）



2．南壁土層（北より）

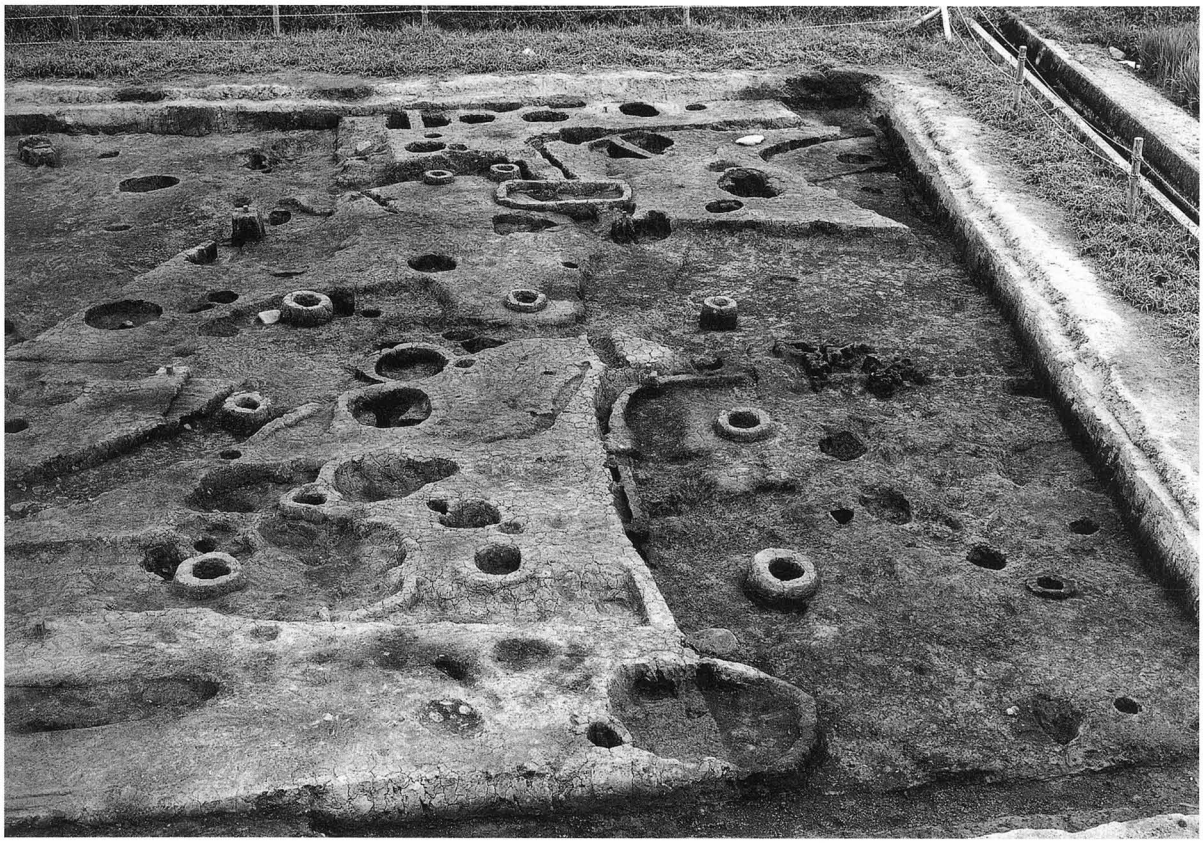
1. ＳＢ 11
遺物出土状況
（南より）

2. ＳＢ 11
カマド検出状況
（南より）

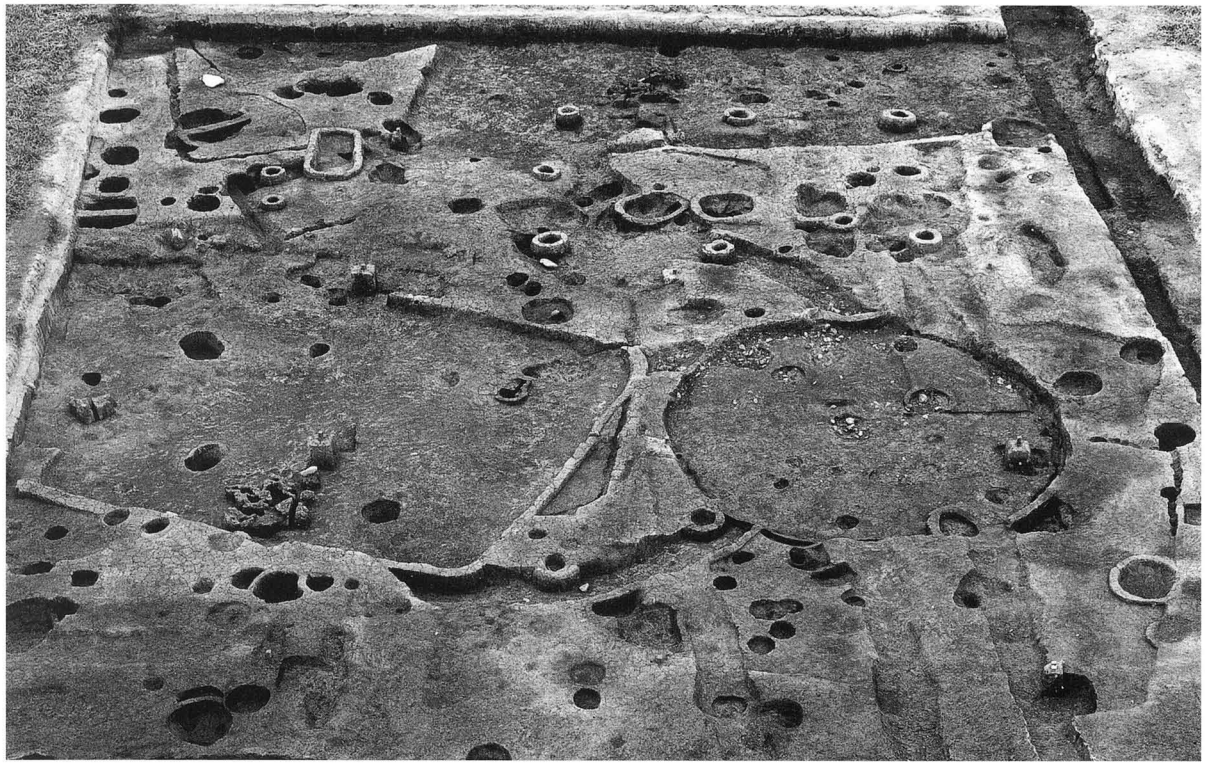
3. ＳＢ 17
遺物出土状況
（東より）

図版 四

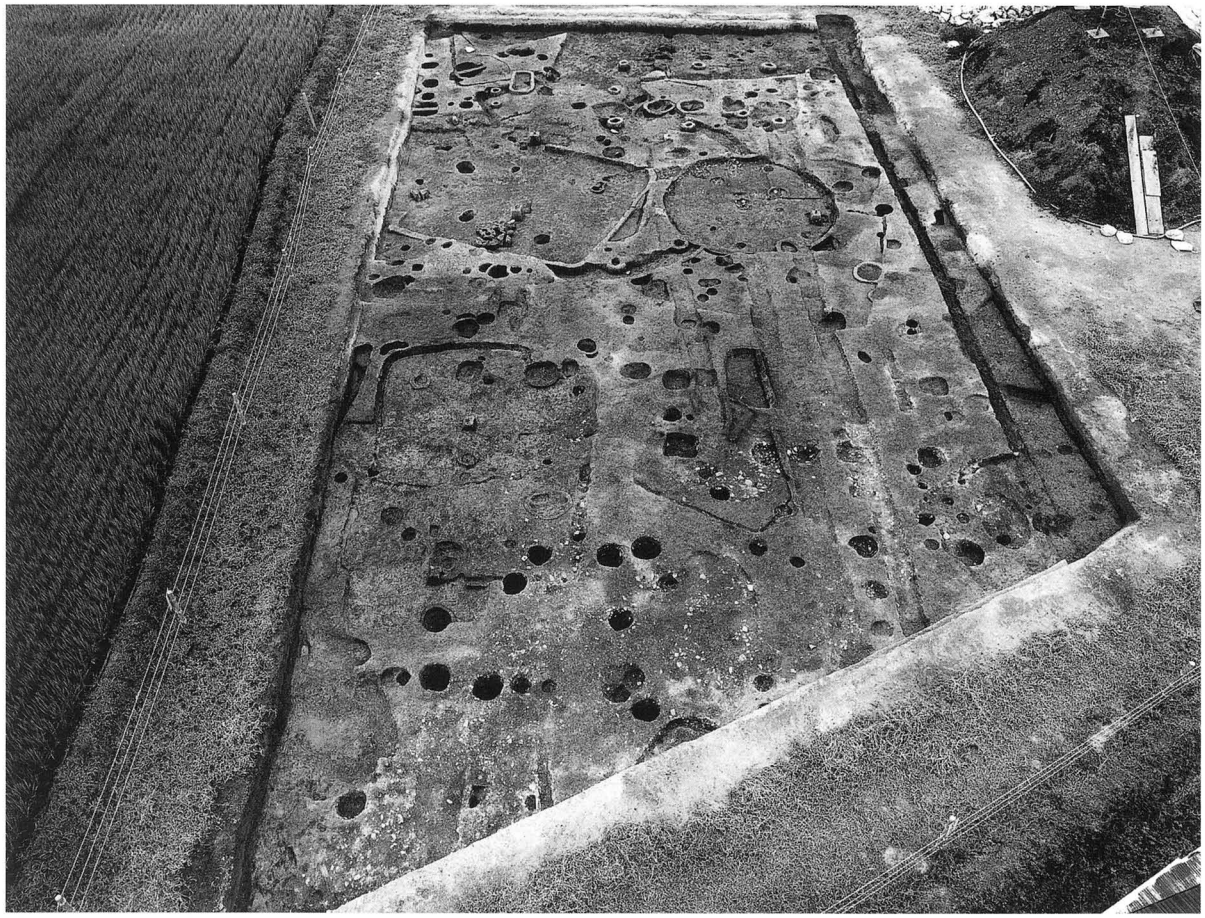
1．遺構完掘状況（南西より）



2．遺構完掘状況（西より）

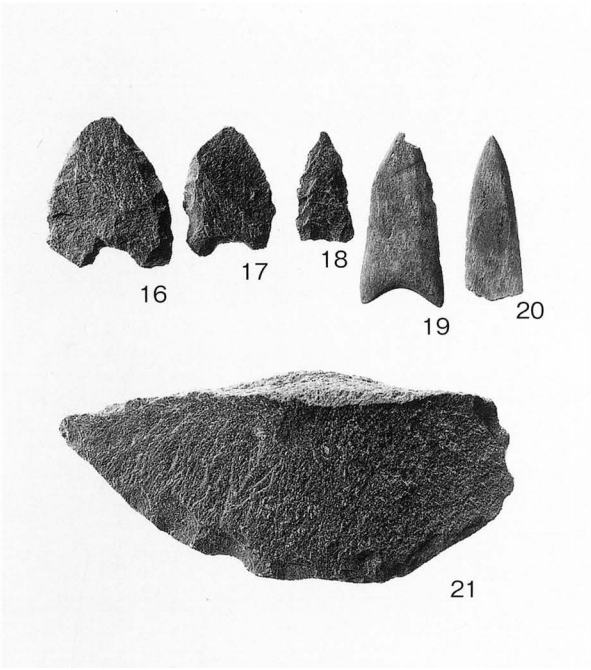


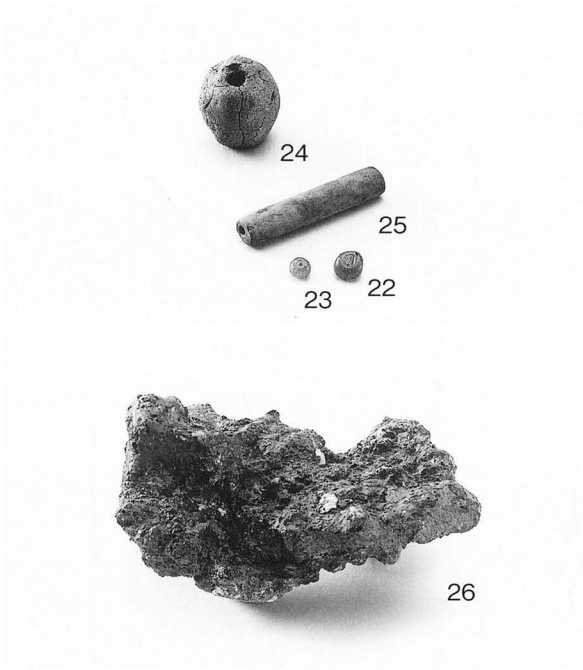
1．遺構完掘状況（北より）



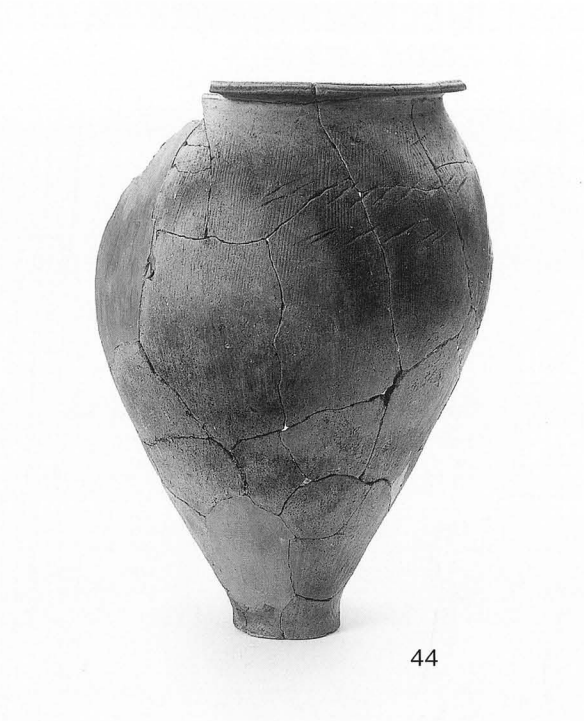
2．遺構完掘状況（北より）

図版六





1．ＳＢ６出土遺物



2．ＳＢ９出土遺物

3．ＳＢ 17 出土遺物

63

1．周溝１出土遺物

100

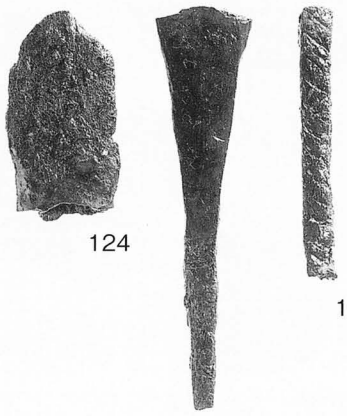
101

106

110

128

127

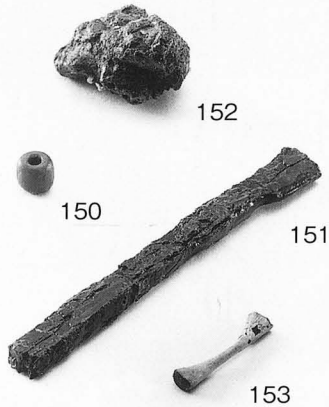


124

125

126

2．ＳＢ４出土遺物（100・101・106・110・124～128）



152

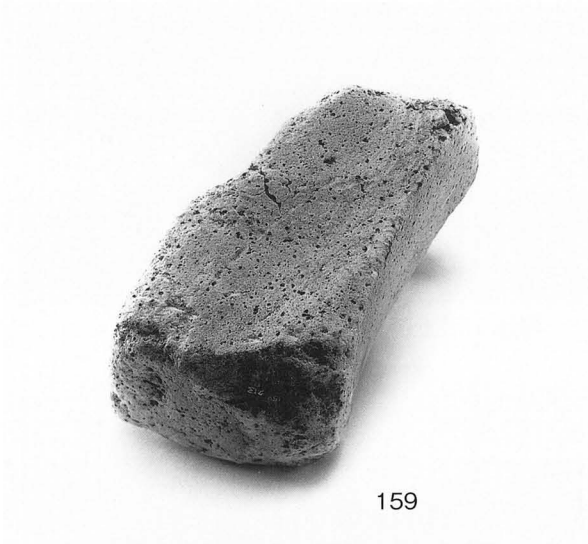
150

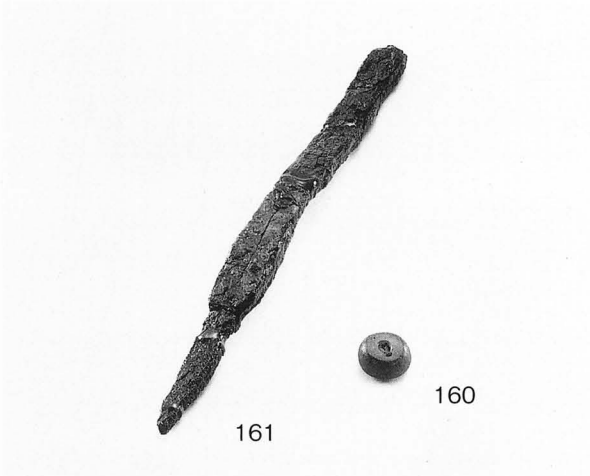
151

153

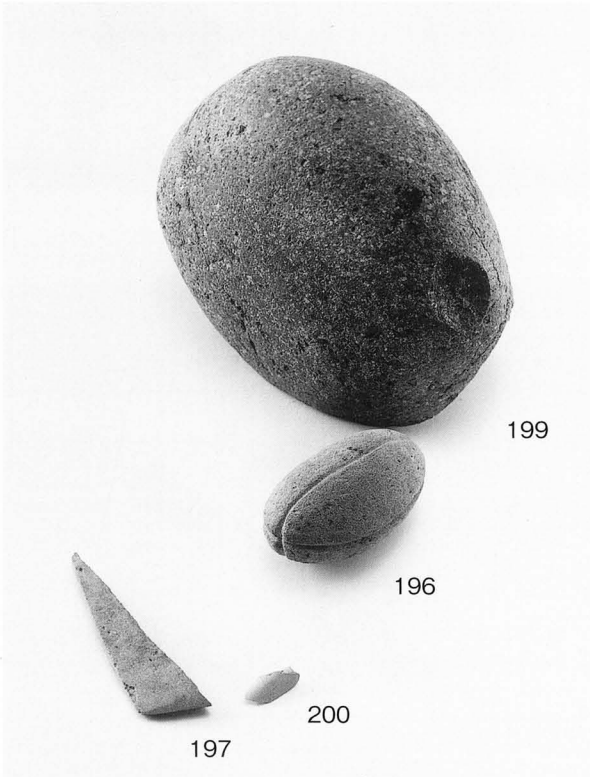
3．ＳＢ 10 出土遺物

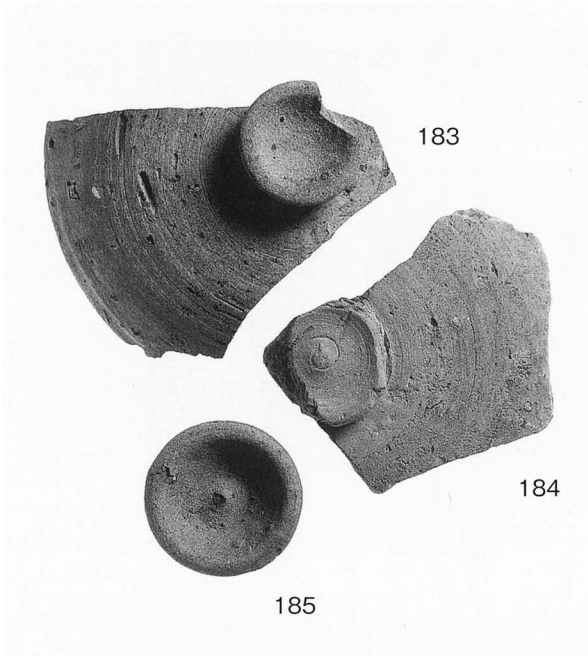
図版八



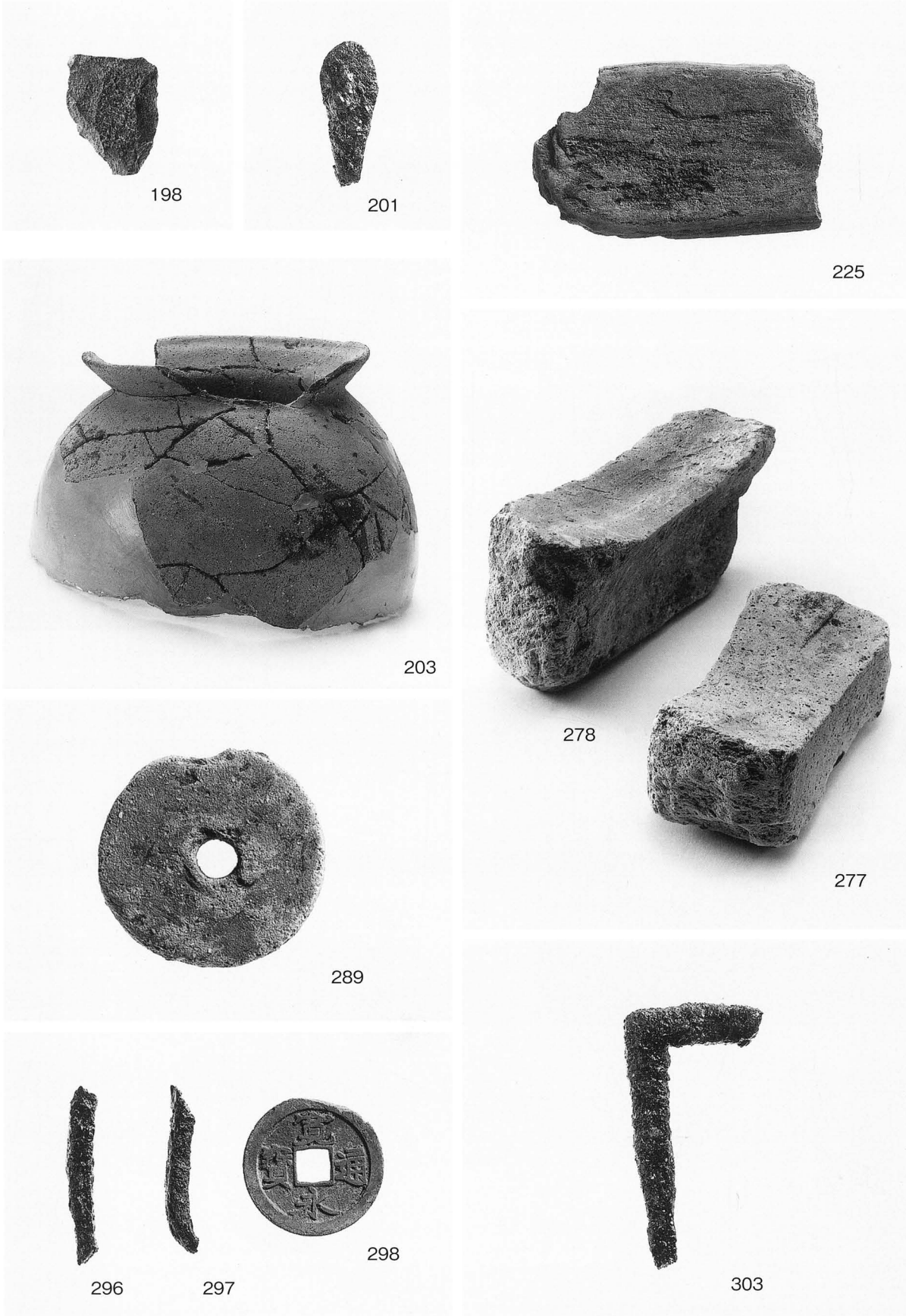


1．ＳＢ 11 出土遺物（157・159 ～ 161）

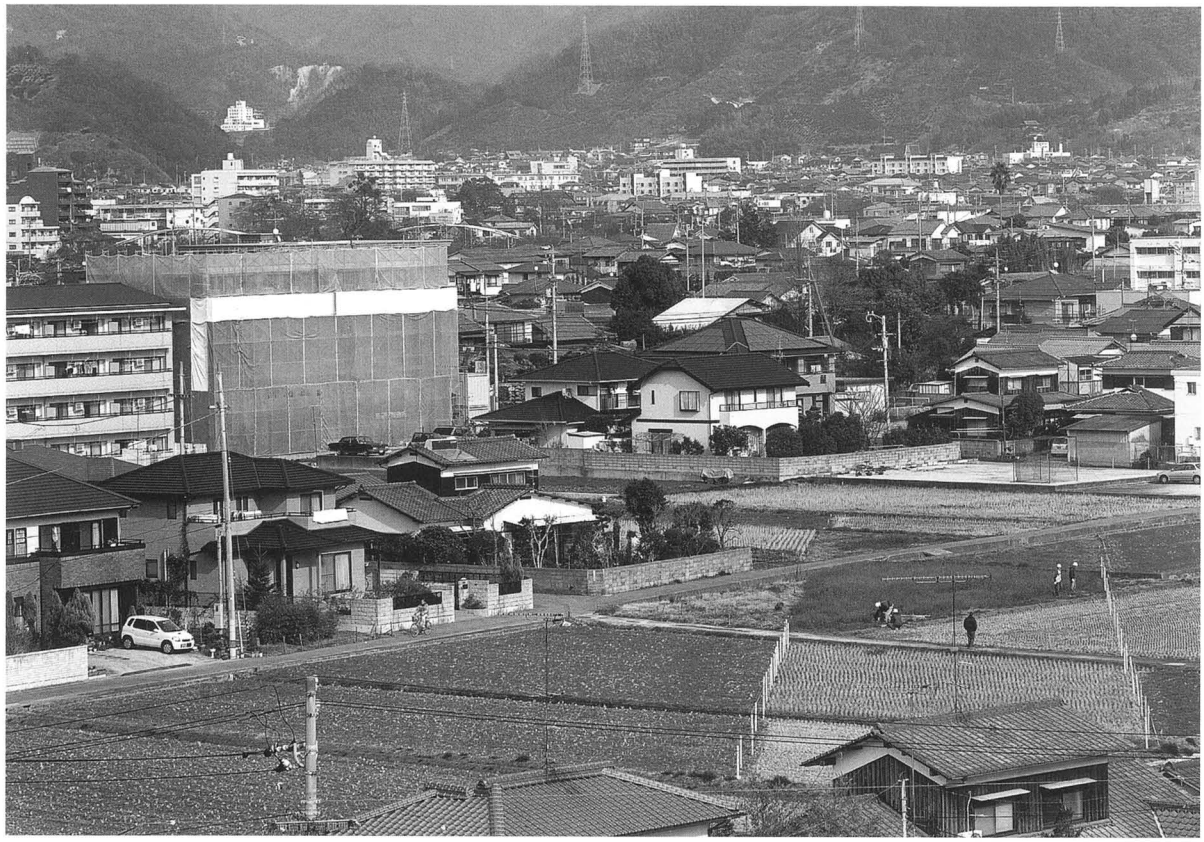




2．ＳＢ 12 出土遺物

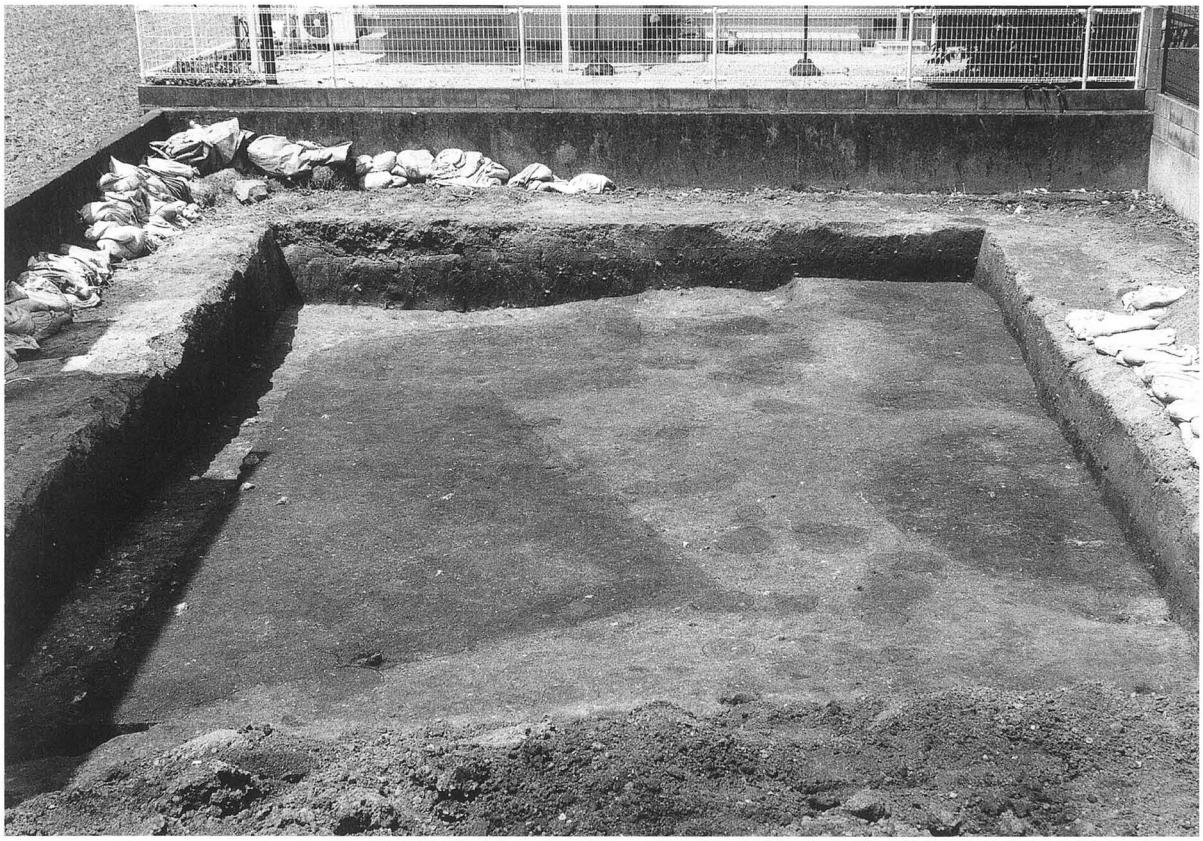


1．出土遺物（SB12：198・201、SB15：203、掘立 2：225、SX2：277・278、SX1：289、SD1：296 ～ 298、SK5：303）



1．調査前全景（南西より）

2．西壁土層（東より）



1．北半部遺構検出状況（南より）

2．南半部遺構検出状況（北より）

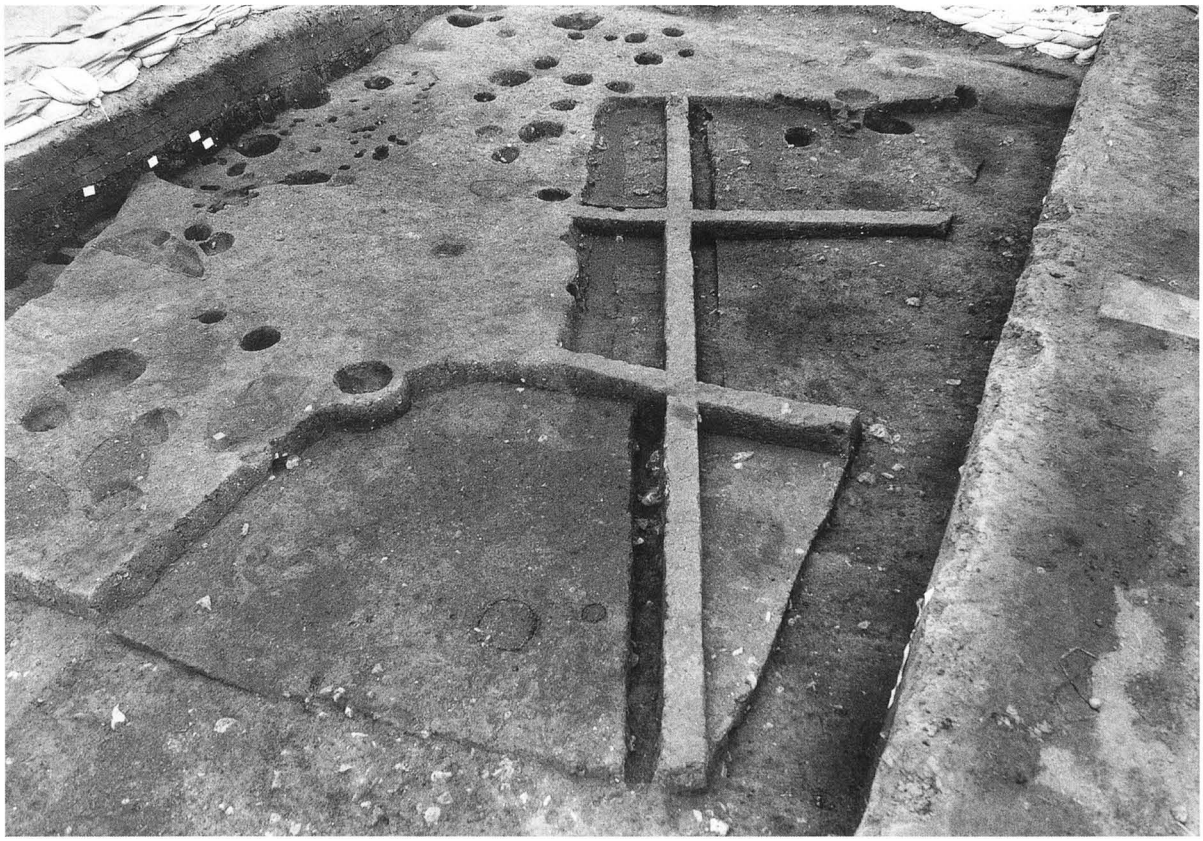
1．北半部完掘状況（南より）

2．南半部完掘状況（北より）

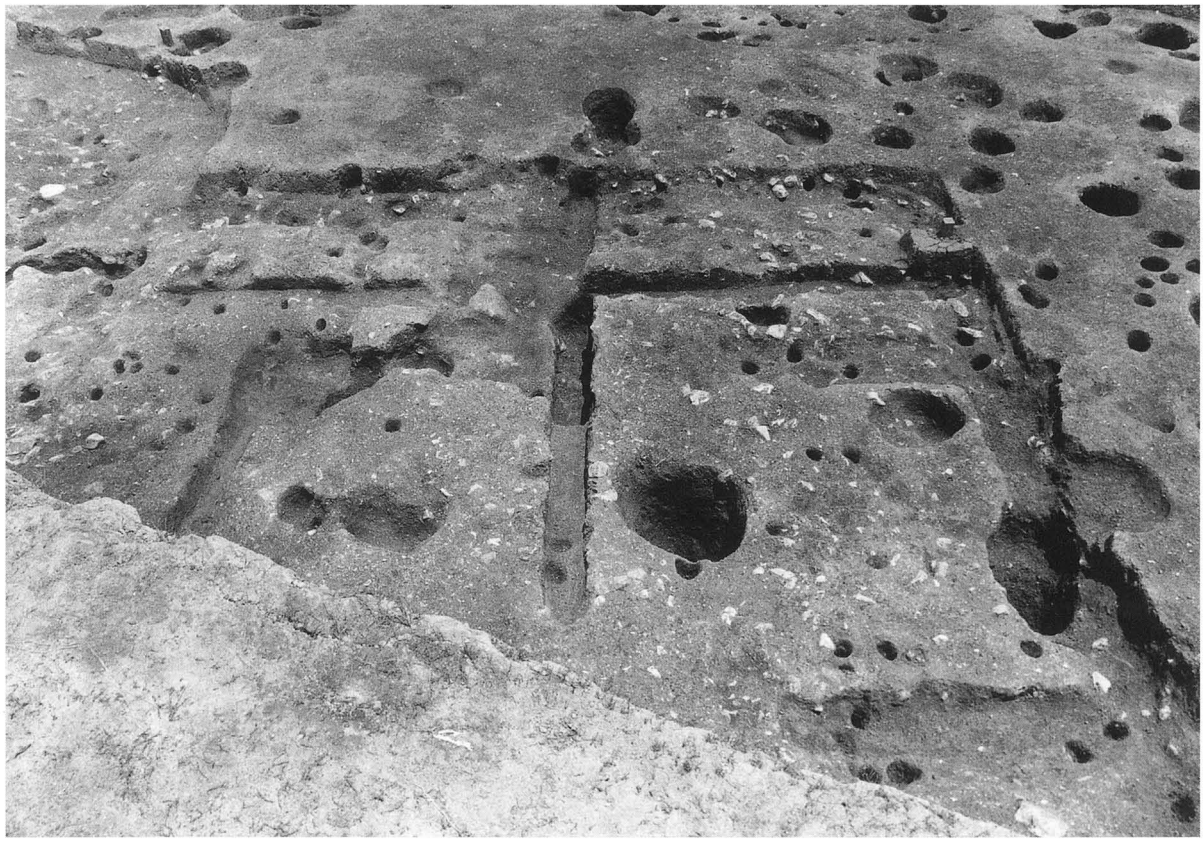
1．ＳＫ１検出状況
（北より）

2．ＳＫ１断面
（北東より）

3．ＳＫ２検出状況
（北より）



1．ＳＢ２・３検出状況（北より）



2．ＳＢ３完掘状況（西より）

1．ＳＢ３床面検出状況（南より）

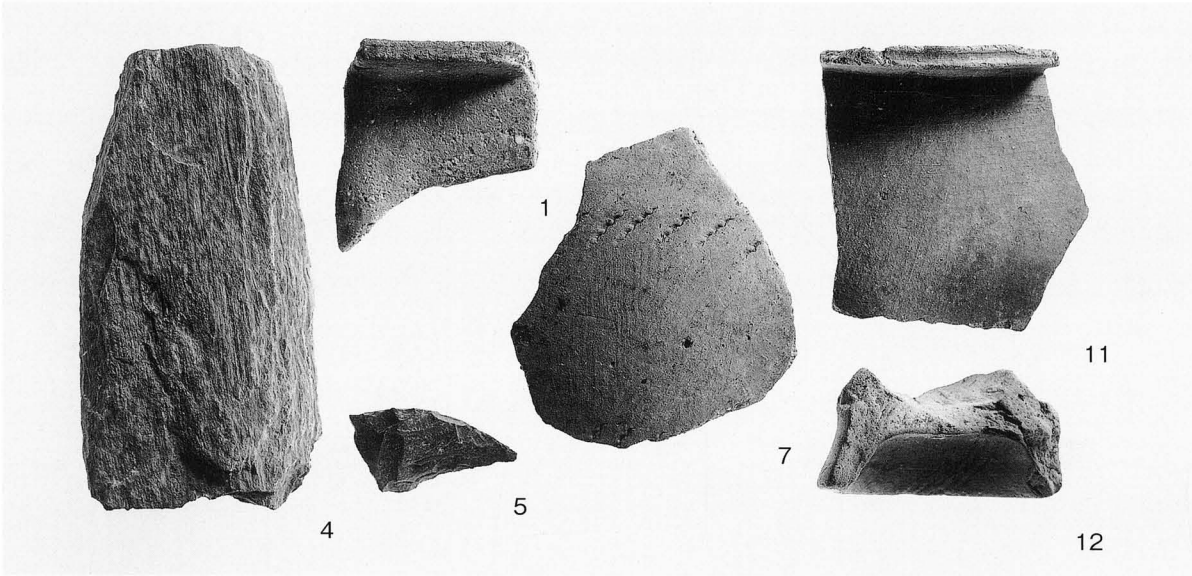
2．ＳＢ３遺物出土状況（南より）

1．ＳＢ２完掘状況（西より）

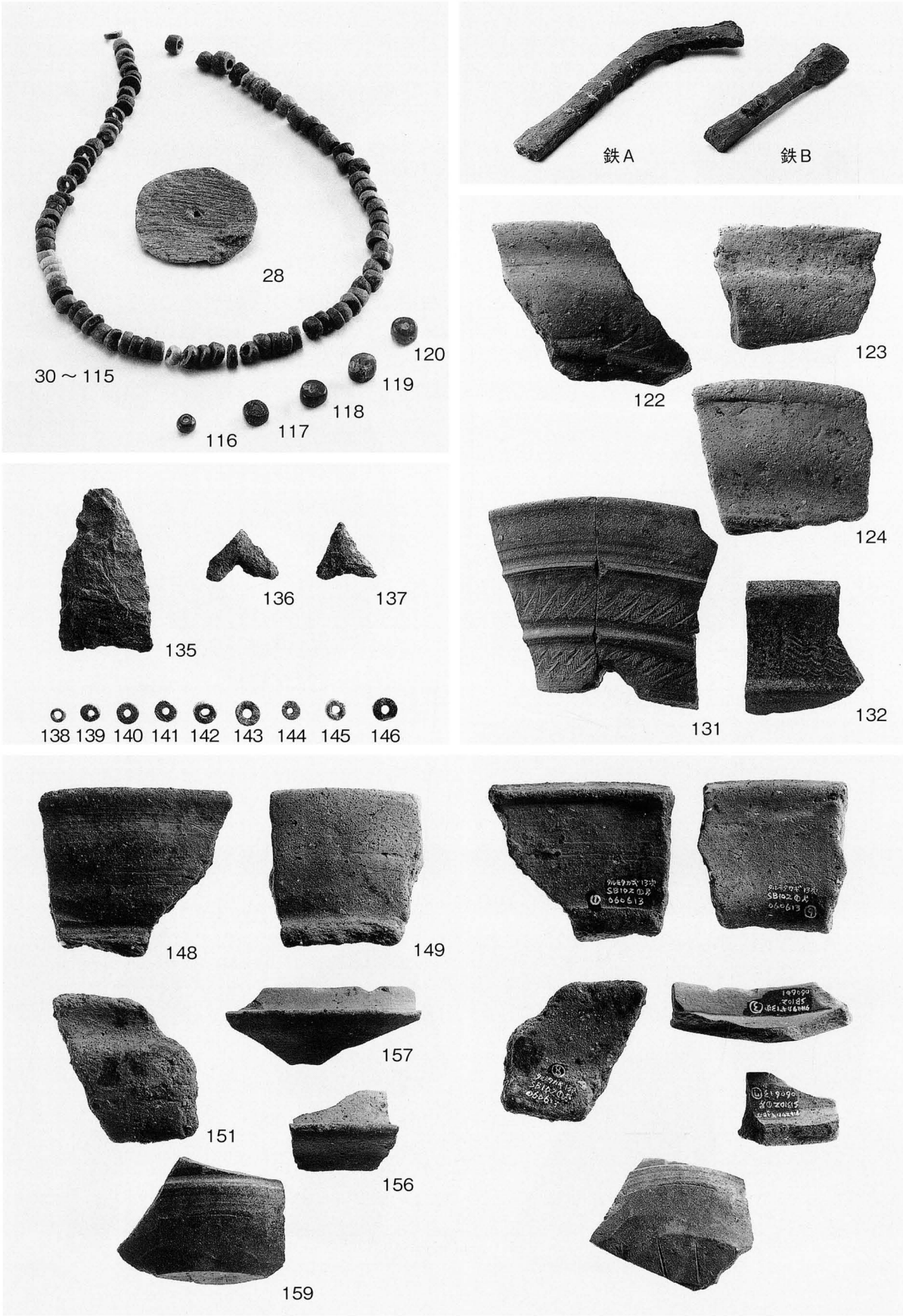
2．ＳＢ１完掘状況（北より）

1．ＳＫ９完掘状況（西より）

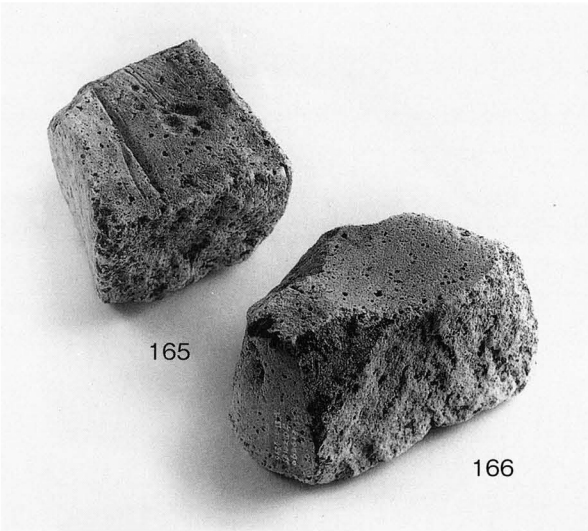
2．作業風景（東より）

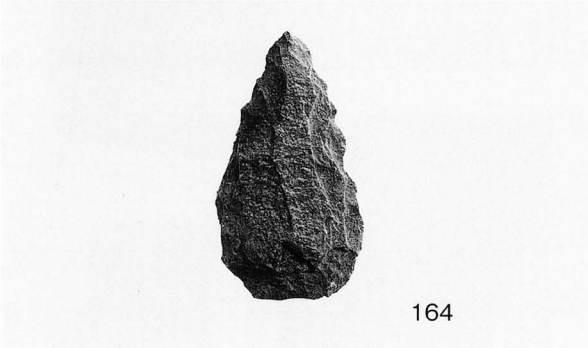


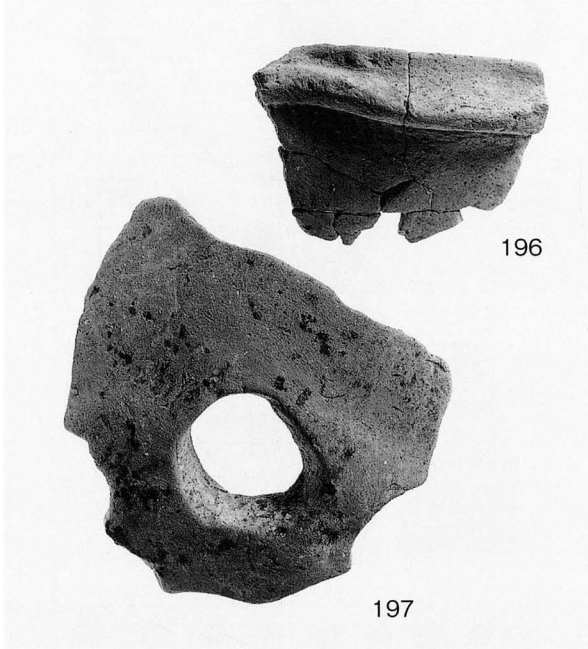
1．出土遺物（SK1：1・4・5、SK2：7、SK6：11・12、SB3①：13・15・20・22・27・29）

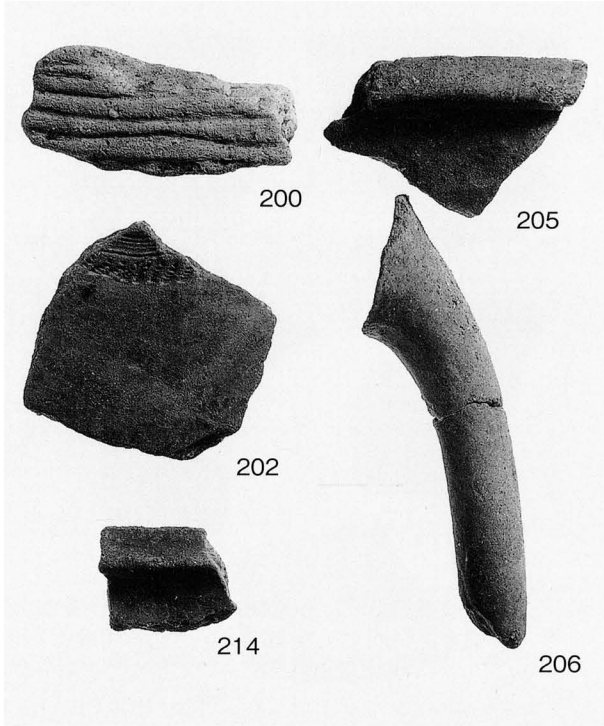


1．出土遺物（SB3 ②：28・鉄 A・30 ～ 120、SB2：122 ～ 124・131・132・135 ～ 137・鉄 B・138 ～ 146、SB1 ①：148・149・151・156・157・159）









1．出土遺物（SB1 ②：164 ～ 166、SK9：167・175・176、SP088：194、SP105：196、SP187：197、第Ⅵ層：200・202・205・206、地点不明：214）

報　告　書　抄　録

ふりがな	たるみたかぎいせき　　たるみたかぎいせき
書名	樽味高木遺跡12次・樽味高木遺跡13次
副書名	平成17・18年度国庫補助市内遺跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第131集
編著者名	宮内慎一・河野史知・大西朋子・㈱古環境研究所
編集機関	松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
所在地	市教委：〒790-0003　愛媛県松山市三番町六丁目6番地1　TEL 089-948-6605 埋　文：〒791-8032　愛媛県松山市南斎院町乙67番地6　TEL 089-923-6363
発行年月日	西暦2009（平成21）年1月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
たるみたかぎいせき 樽味高木遺跡12次	たるみ 樽味4丁目247番	38201	446	33°50′21″	132°47′17″	20050601 ～ 20050902	517	個人開発
たるみたかぎいせき 樽味高木遺跡13次	たるみ 樽味4丁目238番1	38201	465	33°50′19″	132°47′19″	20060417 ～ 20060630	217	重要遺跡 確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
樽味高木遺跡12次	集落	弥生	竪穴・周溝・土坑	弥生土器・石器・鉄器・ガラス小玉・土玉	継続的な集落経営
		古墳	竪穴・掘立・土坑	土師器・須恵器・鉄器・ガラス小玉	
		古代	性格不明遺構	土師器・須恵器	
		中世	掘立・土坑	土師器	
		近世	溝・土坑	磁器・銭貨・鉄釘・鎹	
樽味高木遺跡13次	集落	弥生	土坑	弥生土器・石器	住居廃絶に伴う祭祀行為の可能性
		古墳	竪穴・土坑	土師器・須恵器・鉄器・臼玉	
		中世	掘立・溝・土坑	土師器・須恵器・瓦質土器	

要約

調査では、弥生時代から近世までの遺構や遺物を確認した。弥生時代では、竪穴住居・周溝や土坑、古墳時代では、竪穴住居・掘立柱建物や土坑など、主に集落関連遺構を検出した。一方、古代から中世では、性格不明遺構・掘立柱建物・溝や土坑、近世では、溝や土坑などの生産遺構を検出した。今回の調査により、松山平野東部の樽味における遺跡様相を解明する資料を得ることができたことは、貴重な調査成果である。

松山市文化財調査報告書　第131集

樽味高木遺跡

－12次・13次調査－

平成17・18年度国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

平成21年1月31日　発行

編集・発行　松山市教育委員会
〒790-0003　松山市三番町六丁目6番地1
TEL（089）948-6605

財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032　松山市南斎院町乙67番地6
TEL（089）923-6363

印刷　セキ株式会社
〒790-8686　松山市湊町七丁目7番地1
TEL（089）945-0111